BXjscls パッケージ (BXJS 文書クラス集) ソースコード説明書

八登崇之(Takayuki YATO; aka. "ZR" v2.2c [2020/10/04]

この文書はソースコード説明書です。一般の文書作成者向けの解説については、ユーザマニュアル bxjscls-manual.pdf を参照してください。

目次

1	はじめに	3
2	オプション	10
3	和文フォントの変更	39
4	フォントサイズ	40
5 5.1	レイアウト ページレイアウト	46 47
6	改ページ(日本語 T _E X 開発コミュニティ版のみ)	61
7	ページスタイル	62
8 8.1 8.2 8.3 8.4 8.5 8.6	文書のマークアップ 表題 章・節 リスト環境 パラメータの設定 フロート キャプション	65 65 71 83 90 92 93
Q	フォントコマンド	94

10	相互参照	97
10.1	目次の類	97
10.2	参考文献	102
10.3	索引	104
10.4	脚注	105
11	段落の頭へのグルー挿入禁止	108
12	いろいろなロゴ	112
13	amsmath との衝突の回避	112
14	初期設定	113
付録 A	和文ドライバの仕様 轡	117
付録 B	和文ドライバ:minimal ⑧	118
B.1	補助マクロ	118
B.2	(u)pT _E X 用の設定	120
B.3	pdfT _E X 用の処理	125
B.4	X _H T _E X 用の処理	126
B.5	後処理(エンジン共通)	126
付録 C	和文ドライバ:standard 圏	129
C.1	準備	130
C.2	和文ドライバパラメタ	130
C.3	共通処理 (1)	131
C.4	pT _F X 用設定	138
C.5	pdfTFX 用設定:CJK + bxcjkjatype	142
C.6	XATEX 用設定:xeCJK + zxjatype	144
C.7	LuaT _E X 用設定:LuaT _E X-ja	146
C.8	共通処理 (2)	150
付録 D	和文ドライバ:modern 圏	151
D.1	フォント設定	151
D.2	fixltx2e 読込	151
D.3	和文カテゴリコード	152
D.4	完了	152
付録 E	和文ドライバ:pandoc 圏	152
E.1	準備	152
E.2	和文ドライバパラメタ	152
E.3	dupload システム	153

E.4	lang 変数	154
E.5	geometry 変数	157
E.6	CJKmainfont 変数	157
E.7	Option clash 対策	157
E.8	paragraph のマーク	157
E.9	全角空白文字	158
E.10	hyperref 対策	158
E.11	Pandoc 要素に対する和文用の補正	159
E.12	完了	160
付録F	補助パッケージー覧 鬱	160
付録 G	補助パッケージ:bxjscompat 🕾	160
G.1	準備	160
G.2	X _H T _E X 部分	161
G.3	LuaT _E X 部分	161
G.4	完了	163
付録 H	補助パッケージ:bxjscjkcat 響	163
H.1	準備	163
H.2	和文カテゴリコードの設定	164
H.3	ギリシャ・キリル文字の扱い	165
H.4	初期設定	172
H.5	完了	172
付録 I	補助パッケージ:bxjspandoc 鬱	172
I.1		172
I.2		173
I.3		173
I.4		173
I.5		174
I.6	microtype パッケージ	174
I.7		174
I.8		175
I.9		175

1 はじめに

この文書は「BXJS ドキュメントクラス」の DocStrip 形式のソースである。インストール時のモジュール指定は以下のようである。

```
\langle article \rangle bxjsarticle.cls 短いレポート (章なし)
```

〈report〉 bxjsreport.cls 長いレポート (章あり)

⟨book⟩ bxjsbook.cls 書籍用

⟨slide⟩ bxjsslide.cls スライド用

本ドキュメントクラスは奥村晴彦氏および日本語 TeX 開発コミュニティによる 「pIATeX 2_{ϵ} 新ドキュメントクラス」に改変を加えたものである。本ドキュメントクラス に関する説明は全てこの形式の枠の中に記す。枠の外にあるものは原版著者による原版に対する解説である。

これは $\LaTeXX3$ Project の classes.dtx と株式会社アスキーの jclasses.dtx に基づい てもともと奥村晴彦により作成されたものです。現在は日本語 \TeXX 開発コミュニティにより \SX GitHub で管理されています。

https://github.com/texjporg/jsclasses

[2002-12-19] いろいろなものに収録していただく際にライセンスを明確にする必要が生じてきました。アスキーのものが最近は modified BSD ライセンスになっていますので、私のものもそれに準じて modified BSD とすることにします。

[2016-07-13] 日本語 TFX 開発コミュニティによる管理に移行しました。

[2009-02-22] 田中琢爾氏による upIATFX 対応パッチを取り込みました。

ここでは次のドキュメントクラス (スタイルファイル) を作ります。

[2017-02-13] forum:2121 の議論を機に、jsreport クラスを新設しました。従来のjsbookの report オプションと比べると、abstract 環境の使い方および挙動がアスキーのjreport に近づきました。

〈article〉 jsarticle.cls 論文・レポート用

〈book〉 jsbook.cls 書籍用

⟨report⟩ jsreport.cls レポート用

〈jspf〉 jspf.cls 某学会誌用

(kiyou) kiyou.cls 某紀要用

以下では実際のコードに即して説明します。

- 1 %<*cls>
- 2 %% このファイルは日本語文字を含みます.

\bxjs@clsname

文書クラスの名前です。エラーメッセージ表示などで使われます。

- 3 %<article>\def\bxjs@clsname{bxjsarticle}
- 4 %<book>\def\bxjs@clsname{bxjsbook}
- 5 %<report>\def\bxjs@clsname{bxjsreport}
- 6 %<slide>\def\bxjs@clsname{bxjsslide}

\ifjsc@needsp@tch

[2016-08-22] 従来 jsclasses では、pI $\stackrel{\text{PLTE}}{\text{EX}}$ や I $\stackrel{\text{PLTE}}{\text{EX}}$ の不都合な点に対して、クラスファイル内で独自に対策を施していました。しかし、2016 年以降、コミュニティ版 pI $\stackrel{\text{PLTE}}{\text{EX}}$ が次第に対策コードをカーネル内に取り込むようになりました。そこで、新しい pI $\stackrel{\text{PLTE}}{\text{EX}}$ カーネ

ルと衝突しないように、日付が古い場合だけパッチをあてる場合があります。この処理に使 用するフラグを定義します。

- 7 \newif\ifjsc@needsp@tch
- 8 \jsc@needsp@tchfalse

■BXJS クラス特有の設定 彎

長さ値の指定で式を利用可能にするため calc を読み込む。

9 \RequirePackage{calc}

クラスオプションで key-value 形式を使用するため keyval を読み込む。

10 \RequirePackage{keyval}

クラスの本体ではこの他に geometry パッケージが読み込まれる。

TODO: 依存パッケージの情報。

互換性のための補助パッケージを読み込む。

- 11 \IfFileExists{bxjscompat.sty}{%
- 12 \let\jsAtEndOfClass\@gobble
- 13 \RequirePackage{bxjscompat}%
- 14 }{}

\jsDocClass [トークン] 文書クラスの種別。以下の定値トークンの何れかと同等: \jsArticle=bxjsarticle, \jsBook=bxjsbook, \jsReport=bxjsreport, \jsSlide=bxjsslide.

- 15 \let\jsArticle=a
- $16 \neq jsBook=b$
- $17 \leq jsReport=r$
- 18 \let\jsSlide=s
- 19 %<article>\let\jsDocClass\jsArticle
- 20 %<book>\let\jsDocClass\jsBook
- 21 %<report>\let\jsDocClass\jsReport
- 22 %<slide>\let\jsDocClass\jsSlide

\jsEngine [暗黙文字トークン] エンジン (TrX の種類) の種別: j = pTrX 系、x = XrTrX、p = pdfTfX(含 DVI モード)、1 = LuaTfX、J = NTT jTfX、0 = Omega 系、n =以上の何 れでもない。

- $23 \le 5$
- 24 \def\bxjs@test@engine#1#2{%
- \edef\bxjs@tmpa{\string#1}%
- 26 \edef\bxjs@tmpb{\meaning#1}%
- \ifx\bxjs@tmpa\bxjs@tmpb #2\fi}
- 28 \bxjs@test@engine\kanjiskip{\let\jsEngine=j}
- 29 \bxjs@test@engine\jintercharskip{\let\jsEngine=J}
- 30 \bxjs@test@engine\Omegaversion{\let\jsEngine=0}
- 31 \bxjs@test@engine\XeTeXversion{\let\jsEngine=x}
- 32 \bxjs@test@engine\pdftexversion{\let\jsEngine=p}
- 33 \bxjs@test@engine\luatexversion{\let\jsEngine=1}

```
\ifjsWithupTeX [スイッチ] エンジンが (内部漢字コードが Unicode の) upT<sub>F</sub>X であるか。
                34 \newif\ifjsWithupTeX
                35 \ifx\ucs\@undefined\else \ifnum\ucs"3000="3000
                36 \jsWithupTeXtrue
                37 \fi\fi
                38 \let\if@jsc@uplatex\ifjsWithupTeX
\ifjsWithpTeXng 〔スイッチ〕エンジンが pTFX-ng であるか。
                39 \newif\ifjsWithpTeXng
                40 \bxjs@test@engine\ngbanner{\jsWithpTeXngtrue}
  \ifjsWitheTeX 〔スイッチ〕エンジンが\varepsilon-TpX 拡張をもつか。
                41 \neq 1 
                42 \bxjs@test@engine\eTeXversion{\jsWitheTeXtrue}
                  非サポートのエンジンの場合は強制終了させる。
                ※NTT jTFX と Omega 系。
                43 \let\bxjs@tmpa\relax
                44 \ifx J\jsEngine \def\bxjs@tmpa{NTT-jTeX}\fi
                45 \ifx O\jsEngine \def\bxjs@tmpa{Omega}\fi
                46 \ifx\bxjs@tmpa\relax \expandafter\@gobble
                47 \else
                48 \ClassError\bxjs@clsname
                    {The engine in use (\bxjs@tmpa) is not supported}
                    {It's a fatal error. I'll quit right now.}
                51 \expandafter\@firstofone
                52 \fi{\endinput\@@end}
                  LuaT<sub>F</sub>X の場合、本クラス用の Lua モジュールを用意する。
                53 \ifx 1\jsEngine
                54 \directlua{ bxjs = {} }
                55 \fi
\bxjs@protected \varepsilon-TFX 拡張が有効な場合にのみ \protected の効果をもつ。
                56 \ifjsWitheTeX \let\bxjs@protected\protected
                57 \else \let\bxjs@protected\@empty
                58 \fi
\bxjs@robust@def 無引数の頑強な命令を定義する。
                59 \ifjsWitheTeX
                60 \def\bxjs@robust@def{\protected\def}
                62 \def\bxjs@robust@def{\DeclareRobustCommand*}
                63 \fi
 \ifjsInPdfMode 〔スイッチ〕pdfTrX / LuaTrX が PDF モードで動作しているか。
                ※ LuaT<sub>F</sub>X 0.8x 版でのプリミティブ名変更に対応。
                64 \newif\ifjsInPdfMode
```

65 \@nameuse{ImposeOldLuaTeXBehavior}

- 66 \let\bxjs@tmpa\PackageWarningNoLine
- 67 \let\PackageWarningNoLine\PackageInfo % suppress warning
- 68 \RequirePackage{ifpdf}
- 69 \let\PackageWarningNoLine\bxjs@tmpa
- 70 \@nameuse{RevokeOldLuaTeXBehavior}
- 71 \let\ifjsInPdfMode\ifpdf

\ifbxjs@TUenc 〔スイッチ〕LATFX の既定のフォントエンコーディングが TU であるか。

※ 2017 年 1 月以降の LATEX カーネルにおいて「Unicode を表す LATEX 公式のフォントエンコーディング」である "TU" が導入され、これ以降の LATEX を XETEX または LuaTeX で動かしている場合は、既定のエンコーディングが TU になる。それ以外の場合は、既定のエンコーディングは OT1 である。

- 72 \newif\ifbxjs@TUenc
- 73 \def\bxjs@tmpa{TU}\edef\bxjs@tmpb{\f@encoding}
- 74 \ifx\bxjs@tmpa\bxjs@tmpb
- 75 \bxjs@TUenctrue
- 76 \fi

\ifbxjs@old@hook@system

〔スイッチ〕LATFX の新しいフック管理システムが未導入であるか。

※カーネルの 2020/10/01 版で導入された。

- 77 \newif\ifbxjs@old@hook@system
- $78 \ensuremath{\mbox{\cold@hook@systemtrue}} \ensuremath{\mbox{\cold@h$

\bxjs@cond \bxjs@cond\ifXXX……\fi $\{\langle \ddot{a} \rangle\}$ { $\langle \ddot{a} \rangle$ }

TFX の if-文 (\if XXX……(真)\else(偽)\fi) を末尾呼出形式に変換するためのマクロ。

- 79 \@gobbletwo\if\if \def\bxjs@cond#1\fi{%
- 80 #1\expandafter\@firstoftwo
- 81 \else\expandafter\@secondoftwo
- 82 \fi}

\bxjs@cslet \bxjs@cslet{ \langle 名前 1 \rangle }\制御綴:

- 83 \def\bxjs@cslet#1{%
- $84 \quad \texttt{\expandafter\let\csname#1\endcsname} \\$

\bxjs@csletcs \bxjs@csletcs{ \langle 4前 1 \rangle }{ \langle 4前 2 \rangle }:

- 85 \def\bxjs@csletcs#1#2{%
- $86 \quad \texttt{\expandafter\endcsname} \\ 2\endcsname \\ \\ 2\endcsname \\ \\$

\bxjs@catopt \bxjs@catopt{ \langle 文字列 $1\rangle$ }{ \langle 文字列 $2\rangle$ } : 2 つの文字列を ,で繋いだ文字列。ただし片方が空の場合は ,を入れない。完全展開可能。

- 87 \def\bxjs@catopt#1#2{%
- 88 #1\if\relax#1\relax\else\if\relax#2\relax\else,\fi\fi#2}

\bxjs@ifplus \@ifstar O + 版。

89 \def\bxjs@ifplus#1{\@ifnextchar+{\@firstoftwo{#1}}}

\bxjs@gset@tempcnta calc の整数式を用いて \@tempcnta の値を設定する。

```
90 \let\c@bxjs@tempcnta\@tempcnta
                                 91 \def\bxjs@gset@tempcnta{\setcounter{bxjs@tempcnta}}
\jsSetQHLength
                                 \jsSetQHLength\CS{〈長さ式〉}: \setlength の変種で、通常の calc の長さ式の代わ
                                  りに、「Q/H/trueQ/trueH/zw/zh の単位付きの実数」が記述できる(この場合は式は使え
                                  ない)。
                                 92 \def\jsSetQHLength#1#2{%
                                 93
                                          \begingroup
                                               \bxjs@parse@qh{#2}%
                                 94
                                               \ifx\bxjs@tmpb\relax
                                 95
                                                   \setlength\@tempdima{#2}%
                                                   \xdef\bxjs@g@tmpa{\the\@tempdima}%
                                 97
                                               \else \global\let\bxjs@g@tmpa\bxjs@tmpb
                                 98
                                               \fi
                                 99
                                           \endgroup
                                100
                                           #1=\bxjs@g@tmpa\relax}
                                #1がQ/H/trueQ/trueH/zw/zhで終わる場合、単位用の寸法値マクロ \bxjs@unit@XXX が
\bxjs@parse@qh
                                 定義済なら、\bxjs@tmpb に #1 に等しい寸法の表現を返し、そうでないならエラーを出す。
                                  それ以外では、\bxjs@tmpb は \relax になる。
                                  ※(u)pIATrX の場合はこれらの和文単位はエンジンでサポートされる。しかし和文フォント
                                  の設定が完了するまでは zw/zh の値は正しくない。
                                102 \if j\jsEngine \def\bxjs@parse@qh@units{zw,zh}
                                103 \else \def\bxjs@parse@qh@units{trueQ,trueH,Q,H,zw,zh}
                                104\fi
                                105 \def\bxjs@parse@qh#1{%
                                           \let\bxjs@tmpb\relax
                                106
                                          \@for\bxjs@tmpa:=\bxjs@parse@qh@units\do{%
                                107
                                               \ifx\bxjs@tmpb\relax
                                108
                                                   \edef\bxjs@next{{\bxjs@tmpa}{#1}}%
                                109
                                                   \verb|\expandafter| bxjs@parse@qh@a| csname bxjs@unit@| bxjs@tmpa| expandafter| | bxjs@unit@| bxjs@tmpa| expandafter| | bxjs@unit@| bxjs@tmpa| | bxjs@unit@| bxjs@tmpa| | bxjs@unit@| bxjs@tmpa| | bxjs@tmpa| | bxjs@unit@| bxjs@tmpa| | bxjs@tmp
                                110
                                                            \endcsname\bxjs@next
                                111
                                               fi}
                                112
                                113 \def\bxjs@parse@qh@a#1#2#3{%
                                           \bxjs@next#3\\@nil#2\\@nil\\@nnil\}
                                115
                                116 \def\bxjs@parse@qh@b#1#2#3{%
                                          \ifx\@nnil#2\@nnil\else
                                               \ifx#3\relax
                                118
                                                   \ClassError\bxjs@clsname
                                119
                                                      {You cannot use '\bxjs@tmpa' here}{\@ehc}%
                                120
                                121
                                                   \def\bxjs@tmpb{0pt}%
                                122
                                               \else
                                                   \@tempdimb#3\relax \@tempdimb#1\@tempdimb
                                123
                                                   \edef\bxjs@tmpb{\the\@tempdimb}%
                                124
                                               \fi
                                125
```

\fi}

126

今の段階では Q/H だけが使用可能。

\def\bxjs@unit@Q{0.25mm}\let\bxjs@unit@H\bxjs@unit@Q

\bxjs@begin@document@hook BXJS クラス用の文書本体開始時フック。

128 \Conlypreamble\bxjsCbeginCdocumentChook

129 \let\bxjs@begin@document@hook\@empty

130 \AtBeginDocument{\bxjs@begin@document@hook}

\bxjs@post@option@hook \ProcessOptions 直後に実行されるフック。

131 \@onlypreamble\bxjs@post@option@hook

132 \let\bxjs@post@option@hook\@empty

\bxjs@pre@jadriver@hook 和文ドライバ読込直前に実行されるフック。

133 \@onlypreamble\bxjs@pre@jadriver@hook

134 \let\bxjs@pre@jadriver@hook\@empty

\jsAtEndOfClass このクラスの読込終了時に対するフック。(補助パッケージ中で用いられる。)

135 \def\jsAtEndOfClass{%

\expandafter\g@addto@macro\csname\bxjs@clsname.cls-h@@k\endcsname}

一時的な手続き用の制御綴。

137 \@onlypreamble\bxjs@tmpdo

138 \@onlypreamble\bxjs@tmpdo@a

139 \@onlypreamble\bxjs@tmpdo@b

140 \@onlypreamble\bxjs@tmpdo@c

141 $\color{only}{conl$

LuaT_FX の場合、原版のコード中のコントロールワード中に現れる日本語文字のカテゴリ コードを一時的に11に変更する。クラス読込終了時点で元に戻される。

※現在の LualATrX では、漢字のカテゴリコードは最初から 11 になっているので、この処 理は特段の意味を持たない。しかし、昔は12になっていて、この場合、日本語文字のコン トロールワードの命令を使用するには、カテゴリコードを11に変更する必要がある。

 $142 \inf 1 \sin Engine$

143 \def\bxjs@tmpdo#1{%

\xdef\bxjs@pre@jadriver@hook{%

145 \bxjs@pre@jadriver@hook

146 \catcode`#1=\the\catcode`#1\relax}%

147 \catcode`#1=11\relax}

148 \@tfor\bxjs@tmpa:=和西暦\do

{\expandafter\bxjs@tmpdo\bxjs@tmpa} 149

150 \fi

\jsInhibitGlue は \inhibitglue が定義されていればそれを実行し、未定義ならば何 もしない。

151 \bxjs@robust@def\jsInhibitGlue{%

152 \ifx\inhibitglue\@undefined\else \inhibitglue \fi}

万が一「2.09 互換モード」になっていた場合は、これ以上進むと危険なので強制終了さ せる。

- 153 \if@compatibility
- 154 \ClassError\bxjs@clsname
- 155 {Something went chaotic!\MessageBreak
- 156 (How come '\string\documentstyle' is there?)\MessageBreak
- 157 I cannot go a single step further...}
- $158 \qquad \hbox{\{If the chant of '\string\documentstyle' was just a blunder of yours,\MessageBreak}}$
- then there'll still be hope....}
- 160 \expandafter\@firstofone
- 161 \else \expandafter\@gobble
- 162 \fi{\typeout{Farewell!}\endinput\@@end}

2 オプション

これらのクラスは \documentclass{jsarticle} あるいは \documentclass[オプション]{jsarticle} のように呼び出します。

まず、オプションに関連するいくつかのコマンドやスイッチ(論理変数)を定義します。

\if @restonecol 段組のときに真になる論理変数です。

163 \newif\if@restonecol

\if@titlepage これを真にすると表題、概要を独立したページに出力します。

164 \newif\if@titlepage

\ifCopenright \chapter, \part を右ページ起こしにするかどうかです。横組の書籍では真が標準で、要するに片起こし、奇数ページ起こしになります。

165 %<book|report>\newif\if@openright

\if@openleft [2017-02-24] \chapter, \part を左ページ起こしにするかどうかです。

 $166 \ \% \verb|\local| report>\\ \verb|\local| newif \verb|\local| if @openleft \\$

\if@mainmatter 真なら本文、偽なら前付け・後付けです。偽なら \chapter で章番号が出ません。

BXJS では report 系でも定義されることに注意。

167 % <book | report > \newif \if@mainmatter \@mainmattertrue

\if@enablejfam 和文フォントを数式フォントとして登録するかどうかを示すスイッチです。

JS クラスと異なり、初期値は偽とする。

 $168 \verb|\newif\if\@enablejfam| \verb|\@enablejfamfalse|$

以下で各オプションを宣言します。

■用紙サイズ JIS や ISO の A0 判は面積 $1 \, \mathrm{m}^2$,縦横比 $1:\sqrt{2}$ の長方形の辺の長さを mm 単位に切り捨てたものです。これを基準として順に半截しては mm 単位に切り捨てたものが A1,A2,…です。

B 判は JIS と ISO で定義が異なります。JIS では B0 判の面積が $1.5\,\mathrm{m}^2$ ですが,ISO では B1 判の辺の長さが A0 判と A1 判の辺の長さの幾何平均です。したがって ISO の B0 判は $1000\,\mathrm{mm} \times 1414\,\mathrm{mm}$ です。このため,I Δ TEX 2_{ε} の b5paper は $250\,\mathrm{mm} \times 176\,\mathrm{mm}$ ですが,pI Δ TEX 2_{ε} の b5paper は $257\,\mathrm{mm} \times 182\,\mathrm{mm}$ になっています。ここでは pI Δ TEX 2_{ε} に ならって JIS に従いました。

デフォルトは a4paper です。

b5var (B5 変形, 182mm×230mm), a4var (A4 変形, 210mm×283mm) を追加しました。

BXJS クラスではページレイアウト設定に geometry パッケージを用いる。用紙サイズ設定は geometry に渡すオプションの指定と扱われる。

```
169 \@onlypreamble\bxjs@setpaper
170 \def\bxjs@setpaper#1{\def\bxjs@param@paper{#1}}
171 \DeclareOption{a3paper}{\bxjs@setpaper{a3paper}}
172 \DeclareOption{a4paper}{\bxjs@setpaper{a4paper}}
173 \DeclareOption{a5paper}{\bxjs@setpaper{a5paper}}
174 \DeclareOption{a6paper}{\bxjs@setpaper{a6paper}}
175 \DeclareOption{b4paper}{\bxjs@setpaper{b4j}}
176 \DeclareOption{b5paper}{\bxjs@setpaper{b5j}}
177 \DeclareOption{b6paper}{\bxjs@setpaper{b6j}}
178 \DeclareOption{a4j}{\bxjs@setpaper{a4paper}}
179 \DeclareOption{a5j}{\bxjs@setpaper{a5paper}}
180 \DeclareOption{b4j}{\bxjs@setpaper{b4j}}
181 \DeclareOption{b5j}{\bxjs@setpaper{b5j}}
182 \DeclareOption{a4var}{\bxjs@setpaper{{210truemm}}{283truemm}}}
183 \DeclareOption{b5var}{\bxjs@setpaper{{182truemm}{230truemm}}}
184 \DeclareOption{letterpaper}{\bxjs@setpaper{letterpaper}}
185 \DeclareOption{legalpaper}{\bxjs@setpaper{legalpaper}}
186 \verb|\DeclareOption{executive paper}{\bxjs@setpaper{executive paper}}|
geometry の用紙サイズのオプション名を全てサポートする。
187 \def\bxjs@tmpb#1#2{\DeclareOption{#1}{\bxjs@setpaper{#2}}}
188 \@for\bxjs@tmpa:={%
     a0,a1,a2,c0,c1,c2,c3,c4,c5,c6,ansia,ansib,ansic,ansid,ansie%
190 }\do{\edef\bxjs@next{%
     \noexpand\bxjs@tmpb{\bxjs@tmpa paper}{\bxjs@tmpa paper}%
192 }\bxjs@next}
193 \bxjs@tmpb{screen}{screen}
ただし b?paper は JIS の B 列に従う。
194 \@for\bxjs@tmpa:=\{0,1,2,3\}\do\{\edef\bxjs@next{\%}
    \noexpand\bxjs@tmpb{b\bxjs@tmpa paper}{b\bxjs@tmpa j}%
196 }\bxjs@next}
```

B?paper で ISO の B 列を指定できるようにする。

- 197 \@for\bxjs@tmpa:={0,1,2,3,4,5,6}\do{\edef\bxjs@next{%
- 198 \noexpand\bxjs@tmpb{A\bxjs@tmpa paper}{a\bxjs@tmpa paper}%
- 199 \noexpand\bxjs@tmpb{B\bxjs@tmpa paper}{b\bxjs@tmpa paper}%

200 }\bxjs@next}

Pandoc では用紙サイズ指定について「後ろに paper を付けた名前のオプション」を指定する。これに対処するため、後ろに paper をつけた形を用意する。さらに、「用紙サイズをcustom とすると何も設定しない」ようにするため custompaper というオプションを用意する。

- 201 \DeclareOption{a4varpaper}{\bxjs@setpaper{{210truemm}}{283truemm}}}
- 202 \DeclareOption{b5varpaper}{\bxjs@setpaper{{182truemm}}{230truemm}}}
- 203 \DeclareOption{screenpaper}{\bxjs@setpaper{screen}}
- 204 \DeclareOption{custompaper}{}

■横置き 用紙の縦と横の長さを入れ換えます。

- 205 \newif\if@landscape
- 206 \@landscapefalse
- 207 \DeclareOption{landscape}{\@landscapetrue}
- ■slide オプション slide を新設しました。

[2016-10-08] slide オプションは article 以外では使い物にならなかったので、簡単のため article のみで使えるオプションとしました。

208 \newif\if@slide

BXJSではスライド用のクラス bxjsslide を用意しているので、本来はこのスイッチは不要なはずである。しかし、JS クラスの一部のコードをそのまま使うために保持している。 ※この \if@slide という制御綴は、ユニークでないにも関わらず、衝突した場合に正常動作が保たれない、という問題を抱えている。

209 %<!slide>\@slidefalse

210 %<slide>\@slidetrue

■サイズオプション 10pt, 11pt, 12pt のほかに, 8pt, 9pt, 14pt, 17pt, 21pt, 25pt, 30pt, 36pt, 43pt を追加しました。これは等比数列になるように選んだものです(従来の20pt も残しました)。\@ptsize の定義が変だったのでご迷惑をおかけしましたが、標準的なドキュメントクラスと同様にポイント数から 10 を引いたものに直しました。

[2003-03-22] 14Q オプションを追加しました。

[2003-04-18] 12Q オプションを追加しました。

[2016-07-08] \mag を使わずに各種寸法をスケールさせるためのオプション nomag を新設しました。usemag オプションの指定で従来通りの動作となります。デフォルトは usemag です。

[2016-07-24] オプティカルサイズを調整するために NFSS ヘパッチを当てるオプション nomag* を新設しました。

\Optsize は 10pt, 11pt, 12pt が指定された時のみ従来と同じ値とし、それ以外は \jsUnusualPtSize (=-20) k \neq δ .

- 211 \newcommand{\@ptsize}{0}
- 212 \def\bxjs@param@basefontsize{10pt}
- 213 \def\jsUnusualPtSize{-20}

\bxjs@setbasefontsize 基底フォントサイズを実際に変更する。

- 214 \def\bxjs@setbasefontsize#1{%
- Q単位の長さ指定をサポートするため \jsSetQHLength を使う。
- ※クラスオプションのトークン列の中に展開可能なトークンがある場合、LATeX はクラス ファイルの読込の前にそれを展開しようとする。このため、この位置で \iQ をサポートする ことは原理的に不可能である。
- \jsSetQHLength\@tempdima{#1}% 215
- 216 \edef\bxjs@param@basefontsize{\the\@tempdima}%
- \ifdim\@tempdima=10pt \long\def\@ptsize{0}%
- \else\ifdim\@tempdima=10.95pt \long\def\@ptsize{1}% 218
- \else\ifdim\@tempdima=12pt \long\def\@ptsize{2}%
- \else \long\edef\@ptsize{\jsUnusualPtSize}\fi\fi\fi}

TODO: 恐らく 14pt と base=14.4pt 等の関係も全く等価であるべき。

- 221 \def\bxjs@setjbasefontsize#1{%
- \setkeys{bxjs}{jbase=#1}}

\ifjsc@mag は「\mag を使うか」を表すスイッチ。

\ifjsc@mag@xreal は「NFSS にパッチを当てるか」を表すスイッチ。

- 223 \newif\ifjsc@mag
- 224 \newif\ifjsc@mag@xreal
- 225 %\let\jsc@magscale\@undefined
- 226 \DeclareOption{8pt}{\bxjs@setbasefontsize{8pt}}
- 227 \DeclareOption{9pt}{\bxjs@setbasefontsize{9pt}}
- 228 \DeclareOption{10pt}{\bxjs@setbasefontsize{10pt}}
- 229 \DeclareOption{11pt}{\bxjs@setbasefontsize{10.95pt}}
- 230 \DeclareOption{12pt}{\bxjs@setbasefontsize{12pt}}
- 231 \DeclareOption{14pt}{\bxjs@setbasefontsize{14.4pt}}
- 232 \DeclareOption{17pt}{\bxjs@setbasefontsize{17.28pt}}
- 234 \DeclareOption{21pt}{\bxjs@setbasefontsize{20.74pt}}
- 235 \DeclareOption{25pt}{\bxjs@setbasefontsize{24.88pt}}
- 236 \DeclareOption{30pt}{\bxjs@setbasefontsize{29.86pt}}
- 237 \DeclareOption{36pt}{\bxjs@setbasefontsize{35.83pt}}
- 238 \DeclareOption{43pt}{\bxjs@setbasefontsize{43pt}}
- 239 \DeclareOption{12Q}{\bxjs@setjbasefontsize{3mm}}
- 240 \DeclareOption{14Q}{\bxjs@setjbasefontsize{3.5mm}}

```
241 \DeclareOption{10ptj}{\bxjs@setjbasefontsize{10pt}}
242 \DeclareOption{10.5ptj}{\bxjs@setjbasefontsize{10.5pt}}
243 \DeclareOption{11ptj}{\bxjs@setjbasefontsize{11pt}}
244 \DeclareOption{12ptj}{\bxjs@setjbasefontsize{12pt}}

JS クラス互換の magstyle 設定オプション。
245 \DeclareOption{usemag}{\let\bxjs@magstyle\bxjs@magstyle@usemag}
246 \DeclareOption{nomag}{\let\bxjs@magstyle\bxjs@magstyle@nomag}
247 \DeclareOption{nomag*}{\let\bxjs@magstyle\bxjs@magstyle@xreal}
```

■トンボオプション トンボ (crop marks) を出力します。実際の処理は pIFTEX 2_{ε} 本体 で行います (plcore.dtx 参照)。オプション tombow で日付付きのトンボ, オプション tombo で日付なしのトンボを出力します。これらはアスキー版のままです。カウンタ \hour, \minute は pIFTEX 2_{ε} 本体で宣言されています。

取りあえず、 pT_EX 系の場合に限り、JS クラスのトンボ関連のコードをそのまま活かしておく。正常に動作する保証はない。

```
248 \if j\jsEngine
249 \rightarrow \frac{1}{249} \rightarrow \frac{1}{249}
250 \@tempcnta\hour \multiply\@tempcnta 60\relax
251 \minute\time \advance\minute-\@tempcnta
252 \DeclareOption{tombow}{%
     \tombowtrue \tombowdatetrue
     \setlength{\@tombowwidth}{.1\p@}%
254
     \@bannertoken{%
255
256
        \jobname\space(\number\year-\two@digits\month-\two@digits\day
257
        \space\two@digits\hour:\two@digits\minute)}%
     \maketombowbox}
259 \DeclareOption{tombo}{%
    \tombowtrue \tombowdatefalse
260
     \setlength{\@tombowwidth}{.1\p@}%
     \maketombowbox}
262
263 \fi
```

■面付け オプション mentuke で幅ゼロのトンボを出力します。面付けに便利です。これ もアスキー版のままです。

```
264 \if j\jsEngine
265 \DeclareOption{mentuke}{%
266 \tombowtrue \tombowdatefalse
267 \setlength{\@tombowwidth}{\z@}%
268 \maketombowbox}
269 \fi
```

■両面, 片面オプション twoside で奇数ページ・偶数ページのレイアウトが変わります。

```
[2003-04-29] vartwoside でどちらのページも傍注が右側になります。 270 \DeclareOption{oneside}{\@twosidefalse \@mparswitchfalse} 271 \DeclareOption{twoside}{\@twosidetrue \@mparswitchtrue}
```

 $272 \verb|\DeclareOption{vartwoside}{\Qtwosidetrue \Qmparswitchfalse}|$

■二段組 twocolumn で二段組になります。

273 \DeclareOption{onecolumn}{\@twocolumnfalse} 274 \DeclareOption{twocolumn}{\@twocolumntrue}

■表題ページ titlepage で表題・概要を独立したページに出力します。

```
275 \DeclareOption{titlepage}{\@titlepagetrue}
276 \DeclareOption{notitlepage}{\@titlepagefalse}
```

■右左起こし 書籍では章は通常は奇数ページ起こしになりますが、横組ではこれを openright と表すことにしてあります。 openany で偶数ページからでも始まるようになります。

[2017-02-24] openright は横組では奇数ページ起こし、縦組では偶数ページ起こしを表します。ややこしいですが、これは IATEX の標準クラスが西欧の横組事情しか考慮せずに、奇数ページ起こしと右起こしを一緒にしてしまったせいです。縦組での奇数ページ起こしと横組での偶数ページ起こしも表現したいので、jsclasses では新たに openleft も追加しました。

```
277 %<book|report>\DeclareOption{openright}{\@openrighttrue\@openleftfalse} 278 %<book|report>\DeclareOption{openleft}{\@openlefttrue\@openrightfalse} 279 %<book|report>\DeclareOption{openany}{\@openrightfalse\@openleftfalse}
```

■eqnarray 環境と数式の位置 森本さんのご教示にしたがって前に移動しました。

eqnarray IATEX の eqnarray 環境では & でできるアキが大きすぎるようですので,少し小さくします。また,中央の要素も \displaystyle にします。

```
280 \def\eqnarray{%
281
      \stepcounter{equation}%
      \def\@currentlabel{\p@equation\theequation}%
282
283
      \global\@eqnswtrue
      \m@th
284
285
      \global\@eqcnt\z@
      \tabskip\@centering
286
      \let\\\@eqncr
287
      $$\everycr{}\halign to\displaywidth\bgroup
288
289
          \hskip\@centering$\displaystyle\tabskip\z@skip{##}$\@eqnsel
290
         &\global\@eqcnt\@ne \hfil$\displaystyle{{}##{}}$\hfil
         &\global\@eqcnt\tw@ $\displaystyle{##}$\hfil\tabskip\@centering
291
292
         &\global\@eqcnt\thr@@ \hb@xt@\z@\bgroup\hss##\egroup
            \tabskip\z@skip
293
294
         \cr}
```

leqno で数式番号が左側になります。fleqn で数式が本文左端から一定距離のところに出

```
力されます。森本さんにしたがって訂正しました。
295 \DeclareOption{leqno}{\input{leqno.clo}}
296 \DeclareOption{fleqn}{\input{fleqn.clo}%
297 % fleqn 用の eqnarray 環境の再定義
     \def\eqnarray{%
299
       \stepcounter{equation}%
300
       \def\@currentlabel{\p@equation\theequation}%
301
       \global\@eqnswtrue\m@th
302
       \global\@eqcnt\z@
       \tabskip\mathindent
303
       \let\\=\@eqncr
304
       \setlength\abovedisplayskip{\topsep}%
305
306
       \ifvmode
         \addtolength\abovedisplayskip{\partopsep}%
307
308
       \addtolength\abovedisplayskip{\parskip}%
309
       \setlength\belowdisplayskip{\abovedisplayskip}%
310
       \setlength\belowdisplayshortskip{\abovedisplayskip}%
311
       \setlength\abovedisplayshortskip{\abovedisplayskip}%
312
313
       $$\everycr{}\halign to\linewidth% $$
314
       \bgroup
315
         \hskip\@centering$\displaystyle\tabskip\z@skip{##}$\@eqnsel
         &\global\@eqcnt\@ne \hfil$\displaystyle{{}##{}}$\hfil
316
317
         &\global\@eqcnt\tw@
318
           $\displaystyle{##}$\hfil \tabskip\@centering
319
         &\global\@eqcnt\thr@@ \hb@xt@\z@\bgroup\hss##\egroup
       \tabskip\z@skip\cr
320
321
       }}
```

■文献リスト 文献リストを open 形式(著者名や書名の後に改行が入る)で出力します。 これは使われることはないのでコメントアウトしてあります。

```
322 % \DeclareOption{openbib}{%
323 % \AtEndOfPackage{%
324 % \renewcommand\@openbib@code{%
325 % \advance\leftmargin\bibindent
326 % \itemindent -\bibindent
327 % \listparindent \itemindent
328 % \parsep \z@}%
329 % \renewcommand\newblock{\par}}}
```

■数式フォントとして和文フォントを登録しないオプション 数式中では 16 通りのフォントしか使えません。AMSFonts や mathptmx パッケージを使って数式フォントをたくさん使うと "Too many math alphabets …" というエラーが起こってしまいます。disablejfamオプションを付ければ、明朝・ゴシックを数式用フォントとして登録するのをやめますので、数式用フォントが二つ節約できます。いずれにしても \textmc や \mbox や amsmath パッケージの \text を使えば数式中で和文フォントが使えますので、この新ドキュメントクラスでは標準で和文フォントを数式用に登録しないことにしていたのですが、従来のドキュメ

\bxjs@enablejfam 〔暗黙文字トークン〕enablejfam オプションの状態:

330 %\let\bxjs@enablejfam\@undefined

enablejfam オプションの処理。

- 331 \def\bxjs@kv@enablejfam@true{\let\bxjs@enablejfam=t}
- 332 \def\bxjs@kv@enablejfam@false{\let\bxjs@enablejfam=f}
- 333 \def\bxjs@kv@enablejfam@default{\let\bxjs@enablejfam\@undefined}
- 334 \define@key{bxjs}{enablejfam}[true]{%
- 335 \bxjs@set@keyval{enablejfam}{#1}{}}

JS クラスとの互換のため disablejfam オプションを定義する。

336 \DeclareOption{disablejfam}{\let\bxjs@enablejfam=f}

※実際に何らかの設定を行うのは和文ドライバである。和文ドライバとエンジンの組合せにより、enablejfam が default である場合に「数式和文ファミリ」が有効と無効の選択は異なるし、またそもそも有効と無効の一方しか選択できない場合もある。

■ドラフト draft で overfull box の起きた行末に 5pt の罫線を引きます。 [2016-07-13] \ifdraft を定義するのをやめました。

\ifjsDraft draft オプションが指定されているか。

※ JS クラスの \ifdraft が廃止されたので、BXJS クラスでも \ifdraft を 2.0 版で廃止 した。

- $337 \neq 337$
- 338 \DeclareOption{draft}{\jsDrafttrue \overfullrule=5pt }
- 339 \DeclareOption{final}{\jsDraftfalse \overfullrule=0pt }

■和文フォントメトリックの選択 このクラスファイルでは、和文 TFM として東京書籍印刷の小林肇さんの作られた JIS フォントメトリック(jis, jisg)を標準で使うことにしますが、従来の min10、goth10 などを使いたいときは mingoth というオプションを指定します。また、winjis オプションで winjis メトリック(OTF パッケージと同じ psitau さん作;ソースに書かれた Windows の機種依存文字が dvips、dvipdfmx などで出力出来るようになる)が使えます。

[2018-02-04] winjis オプションはコッソリ削除しました。代替として、同等なものをパッケージ化 (winjis.sty) して、GitHub にはコッソリ置いておきます。

BXJS クラスではここは和文ドライバの管轄。

■papersize スペシャルの利用 dvips や dviout で用紙設定を自動化するにはオプション papersize を与えます。

BXJS クラスでは geometry パッケージがこの処理を行う。

\ifbxjs@papersize

[スイッチ] papersize スペシャルを出力するか。既定で有効であるが、nopapersize オプションで無効にできる。

- ※ JS クラスでは \ifpapersize という制御綴だが、これは採用しない。
- 340 \newif\ifbxjs@papersize
- $341 \bxjs@papersizetrue$
- 342 \DeclareOption{nopapersize}{\bxjs@papersizefalse}
- 343 \DeclareOption{papersize}{\bxjs@papersizetrue}
- ■英語化 オプション english を新設しました。
- ※\if@english は非ユニークで衝突耐性がない。
- $344 \neq \frac{1}{2}$
- 345 \@englishfalse
- 346 \DeclareOption{english}{\@englishtrue}
- ■jsbook を jsreport もどきに オプション report を新設しました。

[2017-02-13] 従来は「jsreport 相当」を jsbook の report オプションで提供していましたが、新しく jsreport クラスも作りました。どちらでもお好きな方を使ってください。

BXJS では当初から bxjsreport クラスが用意されている。

■jslogo パッケージの読み込み IATEX 関連のロゴを再定義する jslogo パッケージを読み込まないオプション nojslogo を新設しました。jslogo オプションの指定で従来どおりの動作となります。デフォルトは jslogo で、すなわちパッケージを読み込みます。

BXJS クラスでは、nojslogo を既定とする。

- $347 \newif\if@jslogo \Qjslogofalse$
- $348 \verb|\DeclareOption{jslogo}{\Qjslogotrue}|$
- 349 \DeclareOption{nojslogo}{\@jslogofalse}
- ■複合設定オプション 湾

TODO: \bxjs@invscale を書く場所を決める。(JS クラスと同じにはできなそう。)

\bxjs@invscale \bxjs@invscale は TFX における「長さのスケール」の逆関数を求めるもの。例えば

\bxjs@invscale\dimX{1.3} は \dimX=1.3\dimX の逆の演算を行う。

※局所化の \begingroup ~ \endgroup について、以前は \group ~ \egroup を使っていたが、これだと数式モード中では空のサブ数式を生み出してしまうため修正した。

※元の長さが128 pt 以上の場合でも動作するように修正した。

```
350 \mathchardef\bxjs@isc@ll=128
351 \mathchardef\bxjs@isc@sl=259
352 \ensuremath{\mbox{def}\mbox{bxjs@isc@sl@h{65539}}}
353 \def\bxjs@invscale#1#2{%
     \begingroup \@tempdima=#1\relax \@tempdimb#2\p@\relax
355
       \ifdim\@tempdima<\bxjs@isc@ll\p@
         \@tempcnta\@tempdima \multiply\@tempcnta\@cclvi
356
357
         \divide\@tempcnta\@tempdimb \multiply\@tempcnta\@cclvi
       \else
358
         \@tempcnta\@tempdima \divide\@tempcnta\@tempdimb
         \multiply\@tempcnta\p@ \let\bxjs@isc@sl\bxjs@isc@sl@h
360
361
       \@tempcntb\p@ \divide\@tempcntb\@tempdimb
362
       \advance\@tempcnta-\@tempcntb \advance\@tempcnta-\tw@
363
       \@tempdimb\@tempcnta\@ne
364
       \advance\@tempcnta\@tempcntb \advance\@tempcnta\@tempcntb
365
366
       \advance\@tempcnta\bxjs@isc@sl \@tempdimc\@tempcnta\@ne
       \@whiledim\@tempdimb<\@tempdimc\do{%
367
         \@tempcntb\@tempdimb \advance\@tempcntb\@tempdimc
368
         \advance\@tempcntb\@ne \divide\@tempcntb\tw@
369
370
         \ifdim #2\@tempcntb>\@tempdima
371
            \advance\@tempcntb\m@ne \@tempdimc=\@tempcntb\@ne
372
         \else \@tempdimb=\@tempcntb\@ne \fi}%
       \xdef\bxjs@gtmpa{\the\@tempdimb}%
373
```

複合設定オプションとは、「エンジンやドライバや和文ドライバの設定を含む、複数の設定を一度に行うオプション」のことである。ある特定の設定を短く書く必要性が高いと判断される場合に用意される。

pandoc オプションは、Pandoc で I Pandoc Pandoc

375 \DeclareOption{pandoc}{%

374

和文ドライバを pandoc に、エンジン指定を autodetect-engine に変更する。

※実際の和文ドライバ・エンジン設定より優先される。

```
376 \g@addto@macro\bxjs@post@option@hook{%
```

\endgroup #1=\bxjs@gtmpa\relax}

 $\tt 377 \qquad \verb|\bxjs@oldfontcommandstrue|$

378 \setkeys{bxjs}{ja=pandoc}%

 ${\tt 379} \qquad {\tt \let\bxjs@engine@given=*}\%$

ドライバオプションを dvi=dvipdfmx 相当に変更する。

※これは実際のドライバ設定で上書きできる(オプション宣言順に注意)。

TODO: できない気がする…。

- 380 \def\bxjs@driver@opt{dvipdfmx}%
- 381 \bxjs@dvi@opttrue}

■エンジン・ドライバオプション 湾

\bxjs@engine@given オプションで明示されたエンジンの種別。

382 %\let\bxjs@engine@given\@undefined

\bxjs@engine@opt 明示されたエンジンのオプション名。

383 %\let\bxjs@engine@opt\@undefined

エンジン明示指定のオプションの処理。

- %0.9pre 版の暫定仕様と異なり、エンジン名は ...latex に限定する。xetex や pdftex は一般的な IATeX の慣習に従って「ドライバの指定」とみなすべきだから。
- 384 \DeclareOption{autodetect-engine}{\%}
- 385 \let\bxjs@engine@given=*}
- 386 \DeclareOption{latex}{%
- 387 \def\bxjs@engine@opt{latex}%
- 388 \let\bxjs@engine@given=n}
- 389 \DeclareOption{platex}{%
- 390 \def\bxjs@engine@opt{platex}%
- 391 \let\bxjs@engine@given=j}
- $392 \verb|\DeclareOption{uplatex}{{\%}}$
- 393 \def\bxjs@engine@opt{uplatex}%
- 394 \let\bxjs@engine@given=u}
- 395 \DeclareOption{xelatex}{%
- 396 \def\bxjs@engine@opt{xelatex}%
- 397 \let\bxjs@engine@given=x}
- 398 \DeclareOption{pdflatex}{%
- 399 \def\bxjs@engine@opt{pdflatex}%
- 400 \let\bxjs@engine@given=p}
- 401 \DeclareOption{lualatex}{%
- 402 \def\bxjs@engine@opt{lualatex}%
- 403 \let\bxjs@engine@given=1}
- 404 \DeclareOption{platex-ng}{%
- 405 \def\bxjs@engine@opt{platex-ng}%
- 406 \let\bxjs@engine@given=g}
- 407 \DeclareOption{platex-ng*}{%
- 408 \def\bxjs@engine@opt{platex-ng*}%
- 409 \let\bxjs@platexng@nodrv=t\%
- 410 \let\bxjs@engine@given=g}

\bxjs@driver@given オプションで明示されたドライバの種別。

- 411 %\let\bxjs@driver@given\@undefined
- 412 \let\bxjs@driver@@dvimode=0

```
413 \let\bxjs@driver@@dvipdfmx=1
                414 \let\bxjs@driver@@pdfmode=2
                415 \let\bxjs@driver@@xetex=3
                416 \let\bxjs@driver@@dvips=4
                417 \let\bxjs@driver@@none=5
\bxjs@driver@opt 明示された「ドライバ指定」のオプション名。
                418 %\let\bxjs@driver@opt\@undefined
                419 \DeclareOption{dvips}{%
                     \def\bxjs@driver@opt{dvips}%
                420
                421
                      \let\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@dvips}
                422 \DeclareOption{dviout}{%
                     \def\bxjs@driver@opt{dviout}%
                423
                      \let\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@dvimode}
                425 \DeclareOption{xdvi}{%
                     \def\bxjs@driver@opt{xdvi}%
                     \let\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@dvimode}
                428 \DeclareOption{dvipdfmx}{%
                      \def\bxjs@driver@opt{dvipdfmx}%
                429
                     \let\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@dvipdfmx}
                431 \DeclareOption{nodvidriver}{%
                     \def\bxjs@driver@opt{nodvidriver}%
                     \let\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@none}
                433
                434 \DeclareOption{pdftex}{%
                     \def\bxjs@driver@opt{pdftex}%
                      \let\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@pdfmode}
                436
                437 \DeclareOption{luatex}{%
                     \def\bxjs@driver@opt{luatex}%
                     \let\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@pdfmode}
                440 \DeclareOption{xetex}{%
                     \def\bxjs@driver@opt{xetex}%
                441
                     \let\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@xetex}
                   dvipdfmx-if-dvi は互換性のためのオプションで、dvi=dvipdfmx と同値である。
                 ※ 2.0 版より dvipdfmx-if-dvi は非推奨となった。
                443 \DeclareOption{dvipdfmx-if-dvi}{%
                     \ClassWarningNoLine\bxjs@clsname
                      {The old option 'dvipdfmx-if-dvi' is DEPRECATED\MessageBreak
                445
                       and may be abolished in future!\MessageBreak
                446
                       You should write 'dvi=dvipdfmx' instead}%
                447
                      \setkeys{bxjs}{dvi=dvipdfmx}}
                448
                449
```

■その他の BXJS 独自オプション 彎

TODO: 互換用オプションを分離する(2.0版で?)。

\ifbxjs@bigcode

upT_FX で有効化する ToUnicode CMap として「UTF8-UCS2」の代わりに「UTF8-UTF16」 を使うか。BMP 外の文字に対応できる「UTF8-UTF16」の方が望ましいのであるが、この ファイルが利用可能かの確実な判定が困難であるため、既定を真とした上で、オプションで 指定することとする。

※ 2.0 版より、既定値を常に真とする。

450 \newif\ifbxjs@bigcode \bxjs@bigcodetrue

nobigcode /bigcode オプションの定義。

- 451 \DeclareOption{nobigcode}{%
- \bxjs@bigcodefalse}
- 453 \DeclareOption{bigcode}{%
- \bxjs@bigcodetrue}

\ifbxjs@oldfontcommands \allowoldfontcommands を既定で有効にするか。

 $455 \neq 55 \pmod{ifbxjs@oldfontcommands}$

nooldfontcommands、oldfontcommands オプションの定義。

- ※oldfontcommands オプションの名前は memoir クラスに倣った。ちなみに KOMA-Script では enabledeprecatedfontcommands であるがこれはチョットアレなので避けた。
- 456 \DeclareOption{nooldfontcommands}{%
- \bxjs@oldfontcommandsfalse}
- 458 \DeclareOption{oldfontcommands}{%
- \bxjs@oldfontcommandstrue}

■JS クラスのオプションで無効なもの 營 ltjsclasses に倣って警告を出す。

```
460 \DeclareOption{winjis}{\%
```

- \ClassWarningNoLine\bxjs@clsname
- 462 {This class does not support `winjis' option}%

463 }

464 \DeclareOption{mingoth}{%

- \ClassWarningNoLine\bxjs@clsname
- {This class does not support `mingoth' option}% 466

467 }

- 468 \DeclareOption{jis}{%
- \ClassWarningNoLine\bxjs@clsname
- {This class does not support `jis' option}% 470

471 }

■keyval 型のオプション 彎

その他のオプションは keyval の機構を用いて処理する。

- 472 \DeclareOption*{%
- \def\bxjs@next{\bxjs@safe@setkeys{bxjs}}%
- \expandafter\bxjs@next\expandafter{\CurrentOption}}

```
\bxjs@safe@setkeys 未知のキーに対してエラー無しで無視する \setkeys。
                         ※ネスト不可。
                        475 \def\bxjs@safe@setkeys#1#2{%
                            \let\bxjs@save@KV@errx\KV@errx \let\KV@errx\@gobble
                             \setkeys{#1}{#2}%
                            \let\KV@errx\bxjs@save@KV@errx}
                        478
                        \bxjs@declare@enum@option{\オプション名\}{\enum 名\}
\bxjs@declare@enum@option
                           "〈オプション名〉=〈値〉"のオプション指定に対して、\[bx js@〈enum 名〉] を \[bx js@〈enum
                         名〉00(値)] に等値する (後者の制御綴が未定義の場合はエラー)、という動作を規定する。
                        479 \Conlypreamble\bxjs@declareCenumCoption
                        480 \def\bxjs@declare@enum@option#1#2{%
                        481
                             \define@key{bxjs}{#1}{%
                               \expandafter\ifx\csname bxjs@#2@@##1\endcsname\relax
                        482
                                \bxjs@error@keyval{#1}{##1}%
                        483
                               \else \bxjs@csletcs{bxjs@#2}{bxjs@#2@@##1}%
                        484
                              fi}
                        485
                         \bxjs@declare@bool@option{(オプション名)}{(スイッチ名)}
\bxjs@declare@bool@option
                           "(オプション名)=(真偽値)"のオプション指定に対して、\if[bxjs@(スイッチ名)]を設定
                         する、という動作を規定する。
                        486 \@onlypreamble\bxjs@declare@bool@option
                        487 \def\bxjs@declare@bool@option#1#2{%
                             \define@key{bxjs}{#1}[true]{%
                               \expandafter\ifx\csname bxjs@#2##1\endcsname\relax
                        489
                        490
                                \bxjs@error@keyval{#1}{##1}%
                               \else \@nameuse{bxjs@#2##1}%
                        491
                              fi}
                        492
        \verb|\bxjs@set@keyval| {$\langle key \rangle$} {$\langle value \rangle$} {$\langle error \rangle$}
                           \bxjs@kv@\key\@\value\ が定義済ならそれを実行し、未定義ならエラーを出す。
                        493 \def\bxjs@set@keyval#1#2#3{%
                             \expandafter\let\expandafter\bxjs@next\csname bxjs@kv@#1@#2\endcsname
                             \ifx\bxjs@next\relax
                        495
                              \bxjs@error@keyval{#1}{#2}%
                        496
                        497
                              #3%
                            \else \bxjs@next
                        498
                        499
                        500 \@onlypreamble\bxjs@error@keyval
                        501 \def\bxjs@error@keyval#1#2{%
                             \ClassError\bxjs@clsname
                              {Invalid value '#2' for option #1}\@ehc}
                \isScale 〔実数値マクロ〕和文スケール値。
                        504 \def\jsScale{0.924715}
          \bxjs@base@opt 明示された base オプションの値。
```

505 %\let\bxjs@base@opt\@undefined

```
base オプションの処理。
              506 \define@key{bxjs}{base}{%
              507 \edef\bxjs@base@opt{#1}%
                   \bxjs@setbasefontsize{#1}}
              508
               509 \define@key{bxjs}{fontsize}{\setkeys{bxjs}{base=#1}}
\bxjs@jbase@opt 明示された jbase オプションの値。
              510 %\let\bxjs@jbase@opt\@undefined
                 jbase オプションの処理。
              511 \define@key{bxjs}{jbase}{\edef\bxjs@jbase@opt{#1}}
              512 \end{fine@keybxjs} {jafontsize} {\end{fine@keybxjs} {jbase=\#1}}
\bxjs@scale@opt 明示された scale オプションの値。
              513 %\let\bxjs@scale@opt\@undefined
                 scale オプションの処理。
              514 \define@key{bxjs}{scale}{%
              515 \edef\bxjs@scale@opt{#1}%
              516 \let\jsScale\bxjs@scale@opt}
              517 \define@key{bxjs}{jafontscale}{\setkeys{bxjs}{scale=#1}}
                 noscale オプションの処理。
              518 \DeclareOption{noscale}{\setkeys{bxjs}{scale=1}}
\bxjs@param@mag mag オプションの値。
              519 \left( \frac{519}{\text{cmag}}\right)
                 mag オプションの処理。
               520 \define@key{bxjs}{mag}{\edef\bxjs@param@mag{#1}}
                 paper オプションの処理。
              521 \define@key{bxjs}{paper}{\edef\bxjs@param@paper{#1}}
\bxjs@jadriver 和文ドライバの名前。
              522 \let\bxjs@jadriver\relax
               523 %\let\bxjs@jadriver@opt\@undefined
                 ja オプションの処理。
               ※jadriver は 0.9 版で用いられた旧称。
               ※単なる ja という指定は無視される (Pandoc 対策)。
               524 \define@key{bxjs}{jadriver}{\edef\bxjs@jadriver@opt{#1}}
               525 \define@key{bxjs}{ja}[\relax]{%
              526 \ifx\relax#1\else\edef\bxjs@jadriver@opt{#1}\fi}
     \jsJaFont 和文フォント設定の名前。
              527 \let\jsJaFont\@empty
                 jafont オプションの処理。
```

528 \define@key{bxjs}{jafont}{\edef\jsJaFont{#1}}

```
\jsJaParam 和文ドライバパラメタの文字列。
              529 \let\jsJaParam\@empty
                 japaram オプションの処理。
              530 \define@key{bxjs}{japaram}{\edef\jsJaParam{#1}}
\bxjs@magstyle magstyle 設定値。(古いイマイチな名前。)
              531 \let\bxjs@magstyle@mag=m
              532 \let\bxjs@magstyle@real=r
              533 \let\bxjs@magstyle@xreal=x
               (新しい素敵な名前。)
               ※ただし制御綴としては、*付の名前は扱い難いので、\bxjs@magstyle@xreal の方を優先
               させる。
              534 \ensuremath{\mbox{let}\mbox{bxjs@magstyle@mag}}\
              535 \verb|\let\bxjs@magstyle@nomag\bxjs@magstyle@real|
              536 \expandafter\let\csname bxjs@magstyle@nomag*\endcsname\bxjs@magstyle@xreal
               \bxjs@magstyle@default は既定の値を表す。
              537 \let\bxjs@magstyle@default\bxjs@magstyle@usemag
              538 \ifx 1\jsEngine \ifnum\luatexversion>86
              539 \let\bxjs@magstyle@default\bxjs@magstyle@xreal
              540 \fi\fi
              541 \ifjsWithpTeXng
              542 \let\bxjs@magstyle@default\bxjs@magstyle@xreal
              544 \ \text{bxjs@magstyle\bxjs@magstyle@default}
                 magstyle オプションの処理。
              545 \define@key{bxjs}{magstyle}{%
                   \expandafter\let\expandafter\bxjs@magstyle\csname
              546
              547
                    bxjs@magstyle@#1\endcsname
                   \ifx\bxjs@magstyle\relax
              548
              549
                     \ClassError\bxjs@clsname
                      {Invalid value '#1' for option magstyle}\@ehc
              550
                     \let\bxjs@magstyle\bxjs@magstyle@default
              551
              552
                   \fi}
\bxjs@geometry geometry オプションの値。
              553 \let\bxjs@geometry@class=c
              554 \let\bxjs@geometry@user=u
              555 \let\bxjs@geometry\bxjs@geometry@class
                 geometry オプションの処理。
              556 \define@key{bxjs}{geometry}{%
                   \verb|\expandafter\expandafter\bxjs@geometry\csname| \\
                    bxjs@geometry@#1\endcsname
                   \ifx\bxjs@geometry\relax
              559
```

\ClassError\bxjs@clsname

560

```
{Invalid value '#1' for option geometry}\@ehc
                           561
                           562
                                  \let\bxjs@geometry\bxjs@geometry@class
                           563
           \ifbxjs@fancyhdr 〔スイッチ〕fancyhdr パッケージに対する調整を行うか。
                           564 \newif\ifbxjs@fancyhdr \bxjs@fancyhdrtrue
                              fancyhdr オプションの処理。
                           565 \let\bxjs@kv@fancyhdr@true\bxjs@fancyhdrtrue
                           566 \let\bxjs@kv@fancyhdr@false\bxjs@fancyhdrfalse
                           567 \define@key{bxjs}{fancyhdr}[true]{%
                               \bxjs@set@keyval{fancyhdr}{#1}{}}
            \ifbxjs@dvi@opt dvi オプションが指定されたか。
                           569 \newif\ifbxjs@dvi@opt
                              DVIモードのドライバとドライバ種別との対応。
                           570 \let\bxjs@dvidriver@@dvipdfmx=\bxjs@driver@@dvipdfmx
                           571 \let\bxjs@dvidriver@@dvips=\bxjs@driver@@dvips
                           572 \let\bxjs@dvidriver@@dviout=\bxjs@driver@@dvimode
                           573 \let\bxjs@dvidriver@@xdvi=\bxjs@driver@@dvimode
                           574 \verb|\let\bxjs@dvidriver@@nodvidriver=\bxjs@driver@@none|
                              dvi オプションの処理。
                           575 \define@key{bxjs}{dvi}{%
                           576
                                \expandafter\let\expandafter\bxjs@tmpa\csname
                           577
                                 bxjs@dvidriver@@#1\endcsname
                           578
                                \ifx\bxjs@tmpa\relax
                                  \ClassError\bxjs@clsname
                           579
                           580
                                   {Invalid value '#1' for option dvi}\@ehc
                           581
                            \bxjs@driver@given を未定義にしていることに注意。
                                  \def\bxjs@driver@opt{#1}%
                           582
                                  \let\bxjs@driver@given\@undefined
                           583
                                  \bxjs@dvi@opttrue
                           584
                           585
                                \fi}
 \ifbxjs@layout@buggyhmargin [スイッチ] bxjsbook の左右マージンがアレか。
                            ※layout が v1 の場合はアレになる。
                           586 \newif\ifbxjs@layout@buggyhmargin
                           〔スイッチ〕abstract 環境を chapterabstract にするか。
\ifbxjs@force@chapterabstract
                            %bxjsbook では常に真。bxjsreport では layout が v1 の場合に真になる。
                           587 \newif\ifbxjs@force@chapterabstract
                           588 % <book > \bxjs@force@chapterabstracttrue
                              layout オプションの処理。
```

589 \@namedef{bxjs@kv@layout@v1}{%

```
590 % book > \bxjs@layout@buggyhmargintrue
                                                                                                    591 %<report>\bxjs@force@chapterabstracttrue
                                                                                                    592 }
                                                                                                    593 \@namedef{bxjs@kv@layout@v2}{%
                                                                                                    594 \ \cok>\bxjs@layout@buggyhmarginfalse
                                                                                                    595 %<report>\bxjs@force@chapterabstractfalse
                                                                                                    596 }
                                                                                                    597 \define@key{bxjs}{layout}{%
                                                                                                                       \bxjs@set@keyval{layout}{#1}{}}
               \bxjs@textwidth@limit textwidth-limit の指定値。
                                                                                                    599 %\let\bxjs@textwidth@limit@opt\@undefined
                                                                                                    600 \define@key{bxjs}{textwidth-limit}{%
                                                                                                                       \edef\bxjs@textwidth@limit@opt{#1}}
                       \bxjs@textwidth@opt textwidth の指定値。
                                                                                                    602 %\let\bxjs@textwidth@opt\@undefined
                                                                                                    603 \define@key{bxjs}{textwidth}{\edef\bxjs@textwidth@opt{#1}}
                                                                                                    604 \end{fine@keybxjs} {\end{fine} width=\#1} } \label{fine} $$ \end{fine} $$$ \end{fine} $$ \end{fine} $$ \end{fine} $$$ \end{
\bxjs@number@of@lines@opt number-of-lines の指定値。
                                                                                                    605 %\let\bxjs@number@of@lines@opt\@undefined
                                                                                                    606 \define@key{bxjs}{number-of-lines}{\edef\bxjs@number@of@lines@opt{#1}}
                                                                                                    \bxjs@paragraph@mark paragraph-mark の指定値。パラグラフのマーク。
                                                                                                    608 %\let\bxjs@paragraph@mark\@undefined
                                                                                                    609 \define@key{bxjs}{paragraph-mark}{%
                                                                                                    610 \edef\bxjs@paragraph@mark{#1}}
           \ifbxjs@whole@zw@lines 〔スイッチ〕whole-zw-lines の指定値。
                                                                                                    611 \newif\ifbxjs@whole@zw@lines \bxjs@whole@zw@linestrue
                                                                                                    612 \let\bxjs@kv@wholezwlines@true\bxjs@whole@zw@linestrue
                                                                                                    613 \let\bxjs@kv@wholezwlines@false\bxjs@whole@zw@linesfalse
                                                                                                    614 \enskip \fine \fin
                       \ifbxjs@jaspace@cmd 〔スイッチ〕jaspace-cmd の指定値。
                                                                                                    615 \newif\ifbxjs@jaspace@cmd \bxjs@jaspace@cmdtrue
                                                                                                    616 \let\bxjs@kv@jaspacecmd@true\bxjs@jaspace@cmdtrue
                                                                                                    617 \verb|\label{lem:cond}| bxjs@kv@jaspacecmd@false\bxjs@jaspace@cmdfalse | bxjs@jaspace@cmdfalse | bxj
                                                                                                    618 \define@key{bxjs}{jaspace-cmd}[true]{\bxjs@set@keyval{jaspacecmd}{#1}{}}
                                                                                                    619 \define@key{bxjs}{xkanjiskip-cmd}[true]{\bxjs@set@keyval{jaspacecmd}{#1}{}}
                          \ifbxjs@fix@at@cmd 〔スイッチ〕fix-at-cmd の指定値。
                                                                                                    620 \newif\ifbxjs@fix@at@cmd \bxjs@fix@at@cmdtrue
                                                                                                    621 \let\bxjs@kv@fixatcmd@true\bxjs@fix@at@cmdtrue
                                                                                                    622 \let\bxjs@kv@fixatcmd@false\bxjs@fix@at@cmdfalse
```

```
\ifbxjs@hyperref@enc [スイッチ] hyperref-enc の指定値。
                                        624 \newif\ifbxjs@hyperref@enc \bxjs@hyperref@enctrue
                                        625 \let\bxjs@kv@hyperrefenc@true\bxjs@hyperref@enctrue
                                         626 \let\bxjs@kv@hyperrefenc@false\bxjs@hyperref@encfalse
                                         627 \define@key{bxjs}{hyperref-enc}[true]{\bxjs@set@keyval{hyperrefenc}{#1}{}}
     \bxjs@everyparhook everyparhook の指定値。
                                        628 \chardef\bxjs@everyparhook@none=0
                                         629 \chardef\bxjs@everyparhook@compat=1
                                         630 \chardef\bxjs@everyparhook@modern=2
                                        631 \if j\jsEngine
                                        632 \let\bxjs@everyparhook\bxjs@everyparhook@compat
                                        633 \else
                                        634 \let\bxjs@everyparhook\bxjs@everyparhook@modern
                                        635 \fi
                                        636 \def\bxjs@kv@everyparhook@none{\let\bxjs@everyparhook\bxjs@everyparhook@none}
                                         637 \def\bxjs@kv@everyparhook@compat{\let\bxjs@everyparhook\bxjs@everyparhook@compat}
                                        638 \def\bxjs@kv@everyparhook@modern{\let\bxjs@everyparhook\bxjs@everyparhook@modern}
                                         639 \define@key{bxjs}{everyparhook}{\bxjs@set@keyval{everyparhook}{#1}{}}
   \bxjs@label@section label-section の指定値。
                                        640 \chardef\bxjs@label@section@none=0
                                        641 \chardef\bxjs@label@section@compat=1
                                        642 \chardef\bxjs@label@section@modern=2
                                        643 \let\bxjs@label@section\bxjs@label@section@compat
                                        644 \def\bxjs@kv@labelsection@none{\let\bxjs@label@section\bxjs@label@section@none}
                                        645 \def\bxjs@kv@labelsection@compat{\let\bxjs@label@section\bxjs@label@section@compat}
                                         646 \def\bxjs@kv@labelsection@modern{\let\bxjs@label@section\bxjs@label@section@modern}
                                        647 \end{fine} \label-section} \hbegin{constraint} \hbegin{const
               \ifbxjs@usezw 〔スイッチ〕use-zw の指定値。
                                        648 \newif\ifbxjs@usezw \bxjs@usezwtrue
                                        649 \bxjs@declare@bool@option{use-zw}{usezw}
                                        650 \DeclareOption{nozw}{\setkeys{bxjs}{use-zw=false}}
                                         651 \DeclareOption{zw}{\setkeys{bxjs}{use-zw=true}}
   \ifbxjs@disguise@js 〔スイッチ〕disguise-js の指定値。
                                        652 \newif\ifbxjs@disguise@js \bxjs@disguise@jstrue
                                        653 \bxjs@declare@bool@option{disguise-js}{disguise@js}
                                        654 \DeclareOption{nojs}{\setkeys{bxjs}{disguise-js=false}}
                                        655 \DeclareOption{js}{\setkeys{bxjs}{disguise-js=true}}
   \ifbxjs@precisetext 〔スイッチ〕precise-text の指定値。
                                        656 \newif\ifbxjs@precisetext
                                        657 \bxjs@declare@bool@option{precise-text}{precisetext}
                                         658 \DeclareOption{noprecisetext}{\setkeys{bxjs}{precise-text=false}}
                                        659 \DeclareOption{precisetext}{\setkeys{bxjs}{precise-text=true}}
\ifbxjs@simplejasetup [スイッチ] simple-ja-setup の指定値。
```

```
660 \newif\ifbxjs@simplejasetup \bxjs@simplejasetuptrue
661 \bxjs@declare@bool@option{simple-ja-setup}{simplejasetup}
662 \DeclareOption{nosimplejasetup}{\setkeys{bxjs}{simple-ja-setup=false}}
663 \DeclareOption{simplejasetup}{\setkeys{bxjs}{simple-ja-setup=true}}
```

■オプションの実行

\fi}

669

682 \s

IATEX の実装では、クラスやパッケージのオプションのトークン列の中に { } が含まれると正常に処理ができない。これに対処する為 \@removeelement の実装に少し手を加える (仕様は変わらない)。

※クラスに \DeclareOption* がある場合は \@unusedoptions は常に空のままであることを利用している。

```
664 \let\bxjs@org@removeelement\@removeelement
665 \def\@removeelement#1#2#3{%
666 \def\reserved@a{#2}%
667 \ifx\reserved@a\@empty \let#3\@empty
668 \else \bxjs@org@removeelement{#1}{#2}{#3}%
```

デフォルトのオプションを実行します。multicols や url を \RequirePackage するのはやめました。

■グローバルオプションの整理 彎

\setlength\paperwidth {\@tempdima}

グローバルオプションのトークン列に { } が含まれていると、やはり後のパッケージの読込処理で不具合を起こすようである(\ProcessOptions*がエラーになる)。従って、このようなオプションは除外することにする。

684 \def\bxjs@tmpdo{%

- 685 \def\bxjs@tmpa{\@gobble}% 686 \expandafter\bxjs@tmpdo@a\@classoptionslist,\@nil,% \let\@classoptionslist\bxjs@tmpa} 688 \def\bxjs@tmpdo@a#1,{% \ifx\@nil#1\relax\else 689 690 \bxjs@tmpdo@b#1{}\@nil 691 \if@tempswa \edef\bxjs@tmpa{\bxjs@tmpa,#1}\fi 692 \expandafter\bxjs@tmpdo@a \fi} 693 694 \def\bxjs@tmpdo@b#1#{\bxjs@tmpdo@c}
- 695 \def\bxjs@tmpdo@c#1\@nil{%
- \ifx\@nil#1\@nil \@tempswatrue \else \@tempswafalse \fi}
- 697 \bxjs@tmpdo

papersize、10pt、noscale の各オプションは他のパッケージと衝突を起こす可能性が あるため、グローバルオプションから外す。

- 698 \@expandtwoargs\@removeelement
- {papersize}\@classoptionslist\@classoptionslist
- 700 \@expandtwoargs\@removeelement
- {10pt}\@classoptionslist\@classoptionslist
- 702 \@expandtwoargs\@removeelement
- {noscale}\@classoptionslist\@classoptionslist

■使用エンジンの検査・自動判定 ユーザが uplatex オプションの有無により指定したエ ンジンが、実際に使われているものと一致しているかを検査し、一致しない場合はエラー メッセージを表示します。

[2016-11-09] pLATFX/ upLATFX を自動判別するオプション autodetect-engine を新設 しました。upIATeX の場合は、グローバルオプションに uplatex を追加することで、自動 判定に応じて otf パッケージにも uplatex オプションが渡るようにします。

ここのコードを削除。

[2016-11-11] pIATeX の場合は、オプション uplatex が指定されていれば必ずエラーを出 します。autodetect-engine が有効になっていてもエラーを出しますが, これは otf パッ ケージにuplatex オプションが渡ってしまうのを防ぐためです。

正規化前の和文ドライバの値を \bxjs@jadriver に設定する。

- 704 \ifx\bxjs@jadriver@opt\@undefined\else
- 705 \let\bxjs@jadriver\bxjs@jadriver@opt
- 706 \fi

エンジン明示指定のオプションが与えられた場合は、それが実際のエンジンと一致するか を検査する。

- 707 \let\bxjs@tmpb\jsEngine
- 708 \ifx j\bxjs@tmpb\ifjsWithpTeXng

```
709 \let\bxjs@tmpb=g
710 \fi\fi
711 \ifx j\bxjs@tmpb\ifjsWithupTeX
712 \let\bxjs@tmpb=u
713 \fi\fi
714 \ifx p\bxjs@tmpb\ifjsInPdfMode\else
715 \let\bxjs@tmpb=n
716 \fi\fi
(この時点で \bxjs@tmpb は \bxjs@engine@given と同じ規則で分類したコードをもって
いる。)
717 \ifx *\bxjs@engine@given
718 \let\bxjs@engine@given\bxjs@tmpb
エンジン指定が autodetect-engine であり、かつ実際のエンジンが (u)pIATpX だった場
合は、本来のエンジンオプションをグローバルオプションに加える。
   \ifx j\bxjs@engine@given
720
      \g@addto@macro\@classoptionslist{,platex}
721
    \else\ifx u\bxjs@engine@given
      \g@addto@macro\@classoptionslist{,uplatex}
   \fi\fi
724\fi
725 \ifx\bxjs@engine@given\@undefined\else
    \ifx\bxjs@engine@given\bxjs@tmpb\else
727
      \ClassError\bxjs@clsname
       {Option '\bxjs@engine@opt' used on wrong engine}\@ehc
728
729
   \fi
730 \fi
  エンジンが pTrX-ng の場合、グローバルオプションに uplatex を追加する。
731 \ifjsWithpTeXng
732 \g@addto@macro\@classoptionslist{,uplatex}
733 \fi
■ドライバ指定 灣 ドライバ指定のオプションが与えられた場合は、それがエンジンと整合
するかを検査する。
734 \@tempswatrue
735 \ifx \bxjs@driver@given\@undefined\else
    \ifjsInPdfMode
      \ifx\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@pdfmode\else
737
738
        \@tempswafalse
739
      \fi
    \else\ifx x\jsEngine
740
      \ifx\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@xetex\else
741
742
        \@tempswafalse
      \fi
743
744
      \ifx\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@pdfmode
745
        \@tempswafalse
746
```

```
747
      \else\ifx\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@xetex
748
        \@tempswafalse
749
      \fi\fi
      \ifjsWithpTeXng\ifx\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@dvipdfmx\else
750
        \@tempswafalse
751
      \fi\fi
752
    \fi\fi
753
754 \fi
755 \if@tempswa\else
   \ClassError\bxjs@clsname
     {Option '\bxjs@driver@opt' used on wrong engine}\@ehc
757
758\fi
  DVI 出力のエンジンである場合の追加処理。
759 \ifjsInPdfMode \@tempswafalse
760 \else\ifx x\jsEngine \@tempswafalse
761 \else\ifjsWithpTeXng \@tempswafalse
762 \else \@tempswatrue
763 \fi\fi\fi
764 \if@tempswa
 ドライバオプションがない場合は警告を出す。
※ただし ja 非指定の場合はスキップする(0.3 版との互換性のため)。
    \ifx\bxjs@driver@opt\@undefined \ifx\bxjs@jadriver@opt\@undefined\else
      \ClassWarningNoLine\bxjs@clsname
766
767
      {No driver option is given}
    \fi\fi
dvi=XXX が指定されていた場合は、XXX が指定された時と同じ動作にする。(グローバルオ
 プションに XXX を追加する。)
    \ifbxjs@dvi@opt
      \edef\bxjs@next{%
770
        \let\noexpand\bxjs@driver@given
771
         \csname bxjs@dvidriver@@\bxjs@driver@opt\endcsname
772
        \noexpand\g@addto@macro\noexpand\@classoptionslist
773
         {,\bxjs@driver@opt}%
774
775
      }\bxjs@next
776
777 \fi
  エンジンが pT_FX-ng の場合、グローバルオプションに dvipdfmx を追加する。ただし、
 エンジンオプションが platex-ng*(*付)の場合、および既に dvipdfmx が指定されてい
 る場合を除く。
778 \ifjsWithpTeXng
    \ifx\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@dvipdfmx
779
      \let\bxjs@platexng@nodrv\@undefined
    \else\ifx t\bxjs@platexng@nodrv\else
781
782
      \g@addto@macro\@classoptionslist{,dvipdfmx}
   \fi\fi
783
```

784\fi ドライバが nodvidriver であった場合の処理。DVI ウェア依存の処理を全て無効化する。 785 \ifx\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@none 786 \bxjs@papersizefalse 787\fi ■その他の BXJS 特有の後処理 圏 \bxjs@jadriver の正規化。値が未指定の場合は minimal に変える。ただしエンジンが (u)pT_FX である場合は standard に変える。 $%(u)pT_FX$ 以外で ja を省略するのは 2.0 版より非推奨となった。 788 \def\bxjs@@minimal{minimal} 789 \ifx\bxjs@jadriver\relax \ifx j\jsEngine \def\bxjs@jadriver{standard} 791 792 \else \ClassWarningNoLine\bxjs@clsname 793 {The option 'ja' is MISSING!!\MessageBreak 794 So 'ja=minimal' is assumed as fallback, but\MessageBreak 795 such implicit setting is now DEPRECATED!\MessageBreak 796 You should write 'ja=minimal' explicitly,\MessageBreak 797 if it is intended} 799 \let\bxjs@jadriver\bxjs@@minimal \fi 800 801 \fi エンジンオプションがない場合はエラーを出す。 ※ただし ja 非指定の場合はスキップする。 802 \ifx\bxjs@jadriver@opt\@undefined\else \ifx\bxjs@engine@given\@undefined \ClassError\bxjs@clsname 804 805 {An engine option must be explicitly given}% 806 {When you use a Japanese-driver you must specify a correct\MessageBreak engine option.\MessageBreak\@ehc} 807 808 \fi\fi 新しい LuaT_FX(0.87版以降)では mag がアレなので、magstyle=usemag が指定されて いた場合はエラーを出す。(この場合の既定値は nomag* であり、エラーの場合は既定値に 置き換えられる。) $809 \ \texttt{ifx} \texttt{bxjs@magstyle@default\bxjs@magstyle@mag\else}$ \ifx\bxjs@magstyle\bxjs@magstyle@mag 811 \let\bxjs@magstyle\bxjs@magstyle@default 812 \ClassError\bxjs@clsname {The engine does not support 'magstyle=usemag'}% 813 {LuaTeX v0.87 or later no longer supports the "mag" feature of TeX.\MessageBreak

base、jbase、scale の値を用いて和文スケール値を解決する。

814

815 816 \fi 817\fi

The default value 'nomag*' is used instead.\MessageBreak \@ehc}

※\bxjs@param@basefontsize と \jsScale へのオプション値の反映は既に実施されていることに注意。jbase 非指定の場合はこのままでよい。

818 \ifx\bxjs@jbase@opt\@undefined\else

819 \ifx\bxjs@base@opt\@undefined

jbase 指定済で base 未指定の場合は、\jsScale の値を採用して和文基底サイズを決定する。

- 821 \bxjs@invscale\@tempdima\jsScale
- 822 \bxjs@setbasefontsize{\@tempdima}%
- 823 \else

jbase と base がともに指定済の場合は、それらの値から和文スケール値を決定する。

- 824 \ifx\bxjs@scale@opt\@undefined\else
- 825 \ClassWarningNoLine\bxjs@clsname
- 826 {Redundant 'scale' option is ignored}%
- 827 \fi
- $\label{lem:lempdima} $$ \space{2.20} \space{2.20} $$ \space{2.20} \space{2.20} $$ \space{2.20} \space{2.20}$
- 829 \@tempdimb=\bxjs@param@basefontsize\relax
- 830 \edef\jsScale{\strip@pt\@tempdimb}%
- 831 \bxjs@invscale\@tempdima\jsScale
- 832 \edef\jsScale{\strip@pt\@tempdima}%
- 833 \fi
- 834 \fi

\Cjascale 和文クラス共通仕様(※ただし ZR 氏提唱)における、和文スケール値の変数。

835 \let\Cjascale\jsScale

8bit 欧文 T_{EX} の場合は、高位バイトをアクティブ化しておく。(和文を含むマクロ定義を通用させるため。)

```
836 \if \if p\jsEngine T\else\if n\jsEngine T\else F\fi\fi T
```

- 837 \@tempcnta="80 \loop \ifnum\@tempcnta<"100
- 838 \catcode\@tempcnta\active
- 839 \advance\@tempcnta\@ne
- 840 \repeat
- 841 **\fi**

js オプション指定時は、jsarticle (または jsbook) クラスを読込済のように振舞う。

- %「2 つのクラスを読み込んだ状態」は \LoadClass を使用した場合に出現するので、別に 異常ではない。
- $842 \ifbxjs@disguise@js$
- 843 % <book | report > \def \bxjs@js@clsname{jsbook}
- 844 %<!book&!report>\def\bxjs@js@clsname{jsarticle}
- 845 \@namedef{ver@\bxjs@js@clsname.cls}{2001/01/01 (bxjs)}
- 846 \fi

color/graphics パッケージが持つ出力用紙サイズ設定の機能は、BXJS クラスでは余計なので無効にしておく。このため、グローバルで nosetpagesize を設定しておく。

847 \g@addto@macro\@classoptionslist{,nosetpagesize}

oldfontcommands オプション指定時は \allowoldfontcommands 命令を実行する。

- 848 \ifbxjs@oldfontcommands
- 849 \AtEndOfClass{\allowoldfontcommands}
- 850 \fi

■papersize スペシャルの出力 dvi ファイルの先頭に dvips の papersize special を書き込むことで、出力用紙サイズを設定します。これは dvipdfmx や最近の dviout にも有効です。 どうやら papersize special には true 付の単位は許されず、かつ単位は常に true なものと扱われるようです。そこで、後で出てくる(☆)の部分、「\mag にあわせてスケール」よりも手前で実行しておくことになります。

トンボの付いたときの用紙サイズは無意味ですが、いわゆる「ノビ」サイズという縦横 1 インチずつ長い用紙に出力することを考えて、1 インチずつ加えました。ところが pIATeX 2ε はトンボ出力幅を両側に 1 インチとっていますので、1 dvips 使用時に

-0.5in, -0.5in

というオプションを与えて両側0.5インチのトンボにするといいでしょう。

[2003-05-17] トンボをプレビューに使うことを考えて1インチを2インチにしました。

[2016-07-11] memoir クラスのマニュアルによると、トンボを含めた用紙の寸法は\stockwidth、\stockheightと呼ぶようですので、これを使うことにしました。

[2017-01-11] トンボオプションが指定されているとき「だけ」\stockwidth,\stockheight を定義するようにしました。

BXJS では出力用紙サイズ記録は geometry パッケージが行う。

また、JS クラスと異なり、\stockwidth、\stockheight は常に定義される。

- 851 \newdimen\stockwidth \newdimen\stockheight
- 852 \begingroup\expandafter\expandafter\expandafter\endgroup
- 853 \expandafter\ifx\csname iftombow\expandafter\endcsname\csname iftrue\endcsname
- $854\,\%$ \newdimen\stockwidth \newdimen\stockheight
- 855 \setlength{\stockwidth}{\paperwidth}
- $\$56 \quad \texttt{\stlength{\stockheight}{\paperheight}} \\$
- 857 \advance \stockwidth 2in
- 858 \advance \stockheight 2in
- 859 \fi

■基準となる行送り

\n@baseline 基準となる行送りをポイント単位で表したものです。

860 %<slide>\def\n@baseline{13}%

 $861 \%<!slide>\ifdim\bxjs@param@basefontsize<10pt \def\n@baseline{15}% <math display="inline">862 \%<!slide>\else \def\n@baseline{16}\fi$

■拡大率の設定

\bxjs@magstyle の値に応じてスイッチ jsc@mag と jsc@mag@xreal を設定する。

- 863 \ifx\bxjs@magstyle\bxjs@magstyle@mag
- 864 \jsc@magtrue
- 865 \else\ifx\bxjs@magstyle\bxjs@magstyle@xreal
- 866 \jsc@mag@xrealtrue
- 867 \fi\fi

サイズの変更は T_{EX} のプリミティブ \mbox{mag} を使って行います。9 ポイントについては行送 9 も若干縮めました。サイズについては全面的に見直しました。

[2008-12-26] 1000 / \mag に相当する \inv@mag を定義しました。truein を使っていたところを \inv@mag in に直しましたので,geometry パッケージと共存できると思います。なお,新ドキュメントクラス側で 10pt 以外にする場合の注意:

- geometry 側でオプション truedimen を指定してください。
- geometry 側でオプション mag は使えません。

- $868 \ \texttt{ifx} \texttt{bxjs@param@mag} \texttt{relax}$
- ${\tt 869} \qquad \verb|\dtempdima=\bxjs@param@basefontsize|\\$
- 870 \advance\@tempdima.001pt \multiply\@tempdima25
- 871 \divide\@tempdima16384\relax \@tempcnta\@tempdima\relax
- 872 \edef\bxjs@param@mag{\the\@tempcnta}
- 873 \else
- 874 % mag 値が直接指定された場合
- 875 \bxjs@gset@tempcnta{\bxjs@param@mag}
- 876 \ifnum\@tempcnta<\z@ \@tempcnta=\z@ \fi
- 877 % 有効な mag 値の範囲は 1--32768
- 878 \edef\bxjs@param@mag{\the\@tempcnta}
- 879 \advance\@tempcnta100000
- 880 \def\bxjs@tmpa#1#2#3#4#5\@nil{\@tempdima=#2#3#4.#5\p@}
- 881 \expandafter\bxjs@tmpa\the\@tempcnta\@nil
- 882 \edef\bxjs@param@basefontsize{\the\@tempdima}
- 883 \fi
- $884\$ \@tempcnta\bxjs@param@mag \advance\@tempcnta100000
- 885 \def\bxjs@tmpa#1#2#3#4\@nil{\@tempdima=#2#3.#4\p@}
- $887 \edg{\colored} scale{\colored} as a colored in the colored colored in the colored colore$
- $888 \verb| let | jsBaseFontSize | bxjs@param@basefontsize | bxjs@param@b$

[2016-07-08] \jsc@mpt および \jsc@mmm に, それぞれ 1pt および 1mm を拡大させた値を格納します。以降のレイアウト指定ではこちらを使います。

\mag する場合 (現状はこれが既定) にコードの変更を低減するために、以下では必要に応じて、\jsc@mpt を \p@? と書く。その上で、\mag する場合は? を無視して \p@ と解釈させ、\mag しない場合は? を英字扱いにして \p@? という制御綴を\jsc@mpt と同値にする。※ (多分 2.0 版あたりで) JS クラスに合わせるため \p@? 表記を止める予定。

```
889 \newdimen\jsc@mpt
```

- 890 \newdimen\jsc@mmm
- 891 \ifjsc@mag
- $892 \ \jsc@mpt=1\p@$
- 893 \jsc@mmm=1mm
- 894 \catcode`\?=9 % \p@? read as \p@
- 895 \else
- 896 \jsc@mpt=\jsc@magscale\p@
- 897 \jsc@mmm=\jsc@magscale mm
- 898 \catcode`\?=11 \let\p@?\jsc@mpt
- 899 \fi
- 900 \chardef\bxjs@qmcc=\catcode`\?\relax
- $901 \g@addto@macro\bxjs@pre@jadriver@hook{\catcode`\?=12\relax}$

ここで pT_{EX} の zw に相当する単位として用いる長さ変数 \jsZw を作成する。約束により、これは $\jsScale \times ($ 指定フォントサイズ) に等しい。

nozw 非指定時は \zw を \jsZw と同義にする。

- 902 \newdimen\jsZw
- 903 \jsZw=10\jsc@mpt \jsZw=\jsScale\jsZw
- 904 \ifbxjs@usezw
- 905 \providecommand*\zw{\jsZw}
- 906\fi

\zwspace 全角幅の水平空き。

907 $\def\zwspace{\hskip\jsZw\relax}$

そして、magstyle が nomag* の場合は、NFSS にパッチを当てる。

- 908 \ifjsc@mag@xreal
- 909 \RequirePackage{type1cm}
- 910 \let\jsc@invscale\bxjs@invscale

ムニャムニャムニャ……。

- 911 \ifbxjs@TUenc
- 912 \expandafter\let\csname TU/lmr/m/n/10\endcsname\relax
- 913 \else
- 914 \expandafter\let\csname OT1/cmr/m/n/10\endcsname\relax
- 915 \fi
- 916 \expandafter\let\csname $OMX/cmex/m/n/10\endcsname\relax$

```
\jsc@preadjust@extract@font
                    919
                           \jsc@get@external@font}
                    920
                    921
                         \def\jsc@fstrunc#1{%
                    922
                           \edef\jsc@tmpa{\strip@pt#1}%
                    923
                           \expandafter\jsc@fstrunc@a\jsc@tmpa.****\@nil}
                    924
                         \def\jsc@fstrunc@a#1.#2#3#4#5#6\@nil{%
                           \f $
                    925
                    926
                             \edef\jsc@tmpa{#1%
                             927
                    928
                         \def\jsc@preadjust@extract@font{%
                    929
                    930
                           \let\jsc@req@size\f@size
                           \dimen@\f@size\p@ \jsc@invscale\dimen@\jsc@magscale
                    931
                           \advance\dimen@.005pt\relax \jsc@fstrunc\dimen@
                    932
                           \let\jsc@ref@size\jsc@tmpa
                    933
                    934
                           \let\f@size\jsc@ref@size}
                    935
                         \def\execute@size@function#1{%
                           \let\jsc@cref@size\f@size
                    936
                    937
                           \let\f@size\jsc@req@size
                           \csname s@fct@#1\endcsname}
                    938
                    939
                         \let\jsc@DeclareErrorFont\DeclareErrorFont
                         \def\DeclareErrorFont#1#2#3#4#5{%
                    940
                           \@tempdimc#5\p@ \@tempdimc\jsc@magscale\@tempdimc
                    941
                           \edef\jsc@tmpa{{#1}{#2}{#3}{#4}{\strip@pt\@tempdimc}}
                    942
                           \expandafter\jsc@DeclareErrorFont\jsc@tmpa}
                    943
                         \def\gen@sfcnt{%
                    944
                           \edef\mandatory@arg{\mandatory@arg\jsc@cref@size}%
                    945
                           \empty@sfcnt}
                    946
                    947
                         \def\genb@sfcnt{%
                    948
                           \edef\mandatory@arg{%
                             \mandatory@arg\expandafter\genb@x\jsc@cref@size..\@@}%
                    949
                    950
                           \empty@sfcnt}
                         \ifbxjs@TUenc\else
                    951
                           \DeclareErrorFont{OT1}{cmr}{m}{n}{10}
                    952
                    953
                         \fi
                    954\fi
                       [2016-11-16] latex.ltx (ltspace.dtx) で定義されている \smallskip の, 単位 pt を
                     \jsc@mpt に置き換えた \jsc@smallskip を定義します。これは \maketitle で用い
                     られます。\jsc@medskip と \jsc@bigskip は必要ないのでコメントアウトしています。
     \jsc@smallskip
       \jsc@medskip 955 \def\jsc@smallskip{\vspace\jsc@smallskipamount}
                    956 \def\jsc@medskip{\vspace\jsc@medskipamount}
       \jsc@bigskip
                    957 %\def\jsc@bigskip{\vspace\jsc@bigskipamount}
\jsc@smallskipamount
  \jsc@medskipamount
  \jsc@bigskipamount
                                                           38
```

\let\jsc@get@external@font\get@external@font

\def\get@external@font{%

917

918

- 958 \newskip\jsc@smallskipamount
- 959 \jsc@smallskipamount=3\jsc@mpt plus 1\jsc@mpt minus 1\jsc@mpt
- 960 %\newskip\jsc@medskipamount
- 961 %\jsc@medskipamount =6\jsc@mpt plus 2\jsc@mpt minus 2\jsc@mpt
- 962 %\newskip\jsc@bigskipamount
- 963 %\jsc@bigskipamoun =12\jsc@mpt plus 4\jsc@mpt minus 4\jsc@mpt

\paperwidth, \paperheight を\mag にあわせてスケールしておきます (☆)。
[2016-07-11] 新しく追加した\stockwidth \stockwidth \stockwidth \range にあわせてスケ

[2016-07-11] 新しく追加した\stockwidth, \stockheight も\mag にあわせてスケールします。

[2017-01-11] トンボオプションが指定されているとき「だけ」\stockwidth, \stockheight が定義されています。

■pagesize スペシャルの出力 [2003-05-17] dvipdfm(x) の pagesize スペシャルを出力します。

[2004-08-08] 今の dvipdfmx は dvips 用スペシャルを理解するようなので外しました。

- 964 % \ifpapersize
- 965 % \setlength{\@tempdima}{\paperwidth}
- 966 % \setlength{\@tempdimb}{\paperheight}
- 967 % \iftombow
- 968 % \advance \@tempdima 2truein
- 969 % \advance \@tempdimb 2truein
- 970 % \fi
- 971 % \AtBeginDvi{\special{pdf: pagesize width \the\@tempdima\space height \the\@tempdimb}}
- 972 % \fi

3 和文フォントの変更

和文フォントの設定は和文ドライバの管轄。

\@ 欧文といえば、IFTEX の \def\@{\spacefactor\@m} という定義 (\@m は 1000) では I watch TV\@. と書くと V とピリオドのペアカーニングが効かなくなります。そこで、次 のような定義に直し、I watch TV.\@ と書くことにします。

[2016-07-14] 2015-01-01 の I Δ T_EX で、auxiliary files に書き出されたときにスペースが食われないようにする修正が入りました。これに合わせて {} を補いました。

BXJS クラスでの変更点:

- fix-at-cmd オプションが偽の場合は再定義しない。
- 固定の 3000 でなく実際のピリオドの sfcode 値を使う。
- •「防御的な \@」での不具合を防ぐため、大文字直後の \@ は標準と同等の動作にする。

```
973 \chardef\bxjs@periodchar=`\.
974 \bxjs@protected\def\bxjs@SE{%
975 \ifnum\spacefactor<\@m \spacefactor\@m
976 \else \spacefactor\sfcode\bxjs@periodchar
977 \fi}
978 \ifbxjs@fix@at@cmd
979 \def\@{\bxjs@SE{}}
980 \fi
```

4 フォントサイズ

フォントサイズを変える命令(\normalsize, \small など)の実際の挙動の設定は、三つの引数をとる命令 \@setfontsize を使って、たとえば

\@setfontsize{\normalsize}{10}{16}

のようにして行います。これは

\normalsize は 10 ポイントのフォントを使い、行送りは 16 ポイントである

という意味です。ただし、処理を速くするため、以下では 10 と同義の I ATEX の内部命令 ATEX を使っています。この ATEX の類は次のものがあり、ATEX 本体で定義されています。

\@vpt	5	\@vipt	6	\@viipt	7
\@viiipt	8	\@ixpt	9	\@xpt	10
\@xipt	10.95	\@xiipt	12	\@xivpt	14.4

ここでは \@setfontsize の定義を少々変更して、段落の字下げ \parindent, 和文文字間のスペース \kanjiskip, 和文・欧文間のスペース \xkanjiskip を変更しています。

\kanjiskip は pIATeX 2ε で Opt plus .4pt minus .5pt に設定していますが,これは そもそも文字サイズの変更に応じて変わるべきものです。それに,プラスになったりマイナスになったりするのは,追い出しと追い込みの混在が生じ,統一性を欠きます。なるべく追い出しになるようにプラスの値だけにしたいところですが,ごくわずかなマイナスは許すことにしました。

\xkanjiskip については、四分つまり全角の 1/4 を標準として、追い出すために三分あるいは二分まで延ばすのが一般的ですが、ここでは Times や Palatino のスペースがほぼ四分であることに着目して、これに一致させています。これなら書くときにスペースを空けても空けなくても同じ出力になります。

\parindent については、0 (以下) でなければ全角幅 (1zw) に直します。 [2008-02-18] english オプションで \parindent を 1em にしました。

\set@fontsize \fontsize 命令(\large 等でなく)でフォントサイズ変更した場合にもフックが実行されるように、\@setfontsize ではなく \set@fontsize に対してパッチを当てるように変更。

```
981 \def\bxjs@tmpa{\def\set@fontsize##1##2##3}
                982 \expandafter\bxjs@tmpa\expandafter{%
                   \set@fontsize{#1}{#2}{#3}%
                984% 末尾にコードを追加
                    \expandafter\def\expandafter\size@update\expandafter{%
                985
                      \size@update
                986
                      \jsFontSizeChanged}%
                987
                988 }
\jsFontSizeChanged フォントサイズ変更時に呼ばれるフック。\jsZw を再設定している。その後でユーザ定義用
                 のフック \jsResetDimen を実行する。
                990
                    \jsZw=\f@size\p@
                    \jsZw=\jsScale \jsZw
                991
                992
                    \ifdim\parindent>\z@
                      \if@english \parindent=1em
                      \else
                                \parindent=1\jsZw
                994
                      \fi
                995
                    \fi\relax
                996
                    \jsResetDimen}
                997
    \jsResetDimen ユーザ定義用のフック。
                998 \newcommand*\jsResetDimen{}
 \jsc@setfontsize クラスファイルの内部では、拡大率も考慮した \jsc@setfontsize を\@setfontsize の
                 変わりに用いることにします。
                999 \ifjsc@mag
                   \let\jsc@setfontsize\@setfontsize
               1000
               1001 \else
               1002
                    \def\jsc@setfontsize#1#2#3{%
                      \c tfontsize #1{#2\jsc@mpt}{#3\jsc@mpt}}
               1003
               1004 % microtype 対策
                    \ifjsWitheTeX\if j\jsEngine\else
               1005
                      \def\jsc@setfontsize#1#2#3{%
               1006
               1007
                        \edef\bxjs@sfs@next{%
                          \unexpanded{\@setfontsize#1}%
               1008
                            1009
                        }\bxjs@sfs@next}
               1010
               1011 \fi\fi
               1012 \fi
```

これはフォントサイズ非依存なので \Cwd で書くのが適当だが、\Cwd はまだ定義されていない。

ます。

これらのグルーをもってしても行分割ができない場合は、\emergencystretch に訴え

1013 \emergencystretch 3\jsZw

\ifnarrowbaselines

欧文用に行間を狭くする論理変数と、それを真・偽にするためのコマンドです。

\narrowbaselines

\widebaselines

[2003-06-30] 数式に入るところで \narrowbaselines を実行しているので \abovedisplayskip 等が初期化されてしまうという shintok さんのご指摘に対して、しっぽ愛好家さんが次の修正を教えてくださいました。

[2008-02-18] english オプションで最初の段落のインデントをしないようにしました。 TODO: Hasumi さん [qa:54539] のご指摘は考慮中です。

別行立て数式に入るときに \narrowbaselines が呼ばれるが、このコードでは「数式中で \normalsize などのサイズ命令(\@currsize の実体)が呼ばれた」ことになり警告が出る。JS クラスでは、\@setfontsize 中の \@nomath 実行を消して「そもそもサイズ命令で警告が出ない」ようにしている。警告が常に出ないのも望ましくないので、BXJS クラスの実装では、\narrowbaselines の時だけ警告が出ないようにする。

- 1014 \newif\ifnarrowbaselines
- 1015 \if@english
- 1016 \narrowbaselinestrue
- 1017 \fi
- 1018 \def\narrowbaselines{%
- $1019 \quad \verb|\narrowbaselinestrue|$
- 1020 \skip0=\abovedisplayskip
- $1021 \quad \verb"\skip2=\abovedisplayshortskip"$
- $1022 \quad \verb|\skip4=\belowdisplayskip| \\$
- $1023 \quad \verb|\skip6=\belowdisplayshortskip| \\$
- 1024% 一時的に警告を無効化する
- 1025 \let\bxjs@save@nomath\@nomath
- 1026 \let\@nomath\@gobble
- 1027 \@currsize\selectfont
- 1028 \let\@nomath\bxjs@save@nomath
- 1029 \abovedisplayskip=\skip0
- 1030 \abovedisplayshortskip=\skip2
- 1031 \belowdisplayskip=\skip4
- 1032 \belowdisplayshortskip=\skip6\relax}
- 1033 \def\widebaselines{\narrowbaselinesfalse\@currsize\selectfont}

microtype パッケージを読み込んだ場合、\normalsize 等のフォントサイズ変更命令の 定義の中に if 文が使われていると、不可解なエラーが発生する。これは microtype が邪悪 なトリックを使用しているせいなのだが、一応こちら側で対策をとることにする。

- 1034 \def\bxjs@if@narrowbaselines{%
- 1035 \ifnarrowbaselines\expandafter\@firstoftwo
- 1036 \else \expandafter\@secondoftwo
- 1037 \fi

\normalsize 標準のフォントサイズと行送りを選ぶコマンドです。

本文 10 ポイントのときの行送りは、欧文の標準クラスファイルでは 12 ポイント、アス キーの和文クラスファイルでは 15 ポイントになっていますが、ここでは 16 ポイントにしま した。ただし \narrowbaselines で欧文用の 12 ポイントになります。

公称 10 ポイントの和文フォントが約 9.25 ポイント (アスキーのものの 0.961 倍) である こともあり,行送りがかなりゆったりとしたと思います。実際,16/9.25pprox1.73 であり,和 文の推奨値の一つ「二分四分」(1.75)に近づきました。

microtype 対策のため if 文を避ける。

1039 \renewcommand{\normalsize}{%

1040 \bxjs@if@narrowbaselines{%

\jsc@setfontsize\normalsize\@xpt\@xiipt 1041

1042 }{%else

\jsc@setfontsize\normalsize\@xpt{\n@baseline}% 1043

1044 }%

数式の上のアキ(\abovedisplayskip),短い数式の上のアキ(\abovedisplayshortskip), 数式の下のアキ (\belowdisplayshortskip) の設定です。

[2003-02-16] ちょっと変えました。

[2009-08-26] T_FX Q&A 52569 から始まる議論について逡巡していましたが、結局、微調 節してみることにしました。

\abovedisplayskip 11\p0? \@plus3\p0? \@minus4\p0? 1045

\abovedisplayshortskip \z@ \@plus3\p@? 1046

1047\belowdisplayskip 9\p0? \@plus3\p0? \@minus4\p0?

\belowdisplayshortskip \belowdisplayskip 1048

最後に, リスト環境のトップレベルのパラメータ \@listI を, \@listi にコピーしてお きます。\@listIの設定は後で出てきます。

1049 \let\@listi\@listI}

ここで実際に標準フォントサイズで初期化します。

1050 \normalsize

\Cht 基準となる長さの設定をします。pI $st T_{
m FX} \, 2_{arepsilon}$ カーネル(plfonts.dtx)で宣言されているパ

ラメータに実際の値を設定します。たとえば \Cwd は \normalfont の全角幅(1zw)です。 \Cdp

[2017-08-31] 基準とする文字を「全角空白」(EUC コード 0xA1A1) から「漢」(JIS コー \Cwd

ド 0x3441) へ変更しました。 \Cvs

\Chs

\Cwd 等の変数は pTFX 系以外では未定義なのでここで定義する。

1051 \ifx\Cht\@undefined \newdimen\Cht \fi

 $1052 \ifx\Cdp\Qundefined \newdimen\Cdp \fi$

規約上、現在の \jsZw の値が \Cwd である。BXJS では \Cht と \Cdp は単純に \Cwd の 88% と 12% の値とする。

```
1056 \setlength\Cht{0.88\jsZw}
1057 \setlength\Cdp{0.12\jsZw}
1058 \setlength\Cwd{1\jsZw}
1059 \setlength\Cvs{\baselineskip}
1060 \setlength\Chs{1\jsZw}
```

\small \small も \normalsize と同様に設定します。行送りは,\normalsize が 16 ポイントなら,割合からすれば $16 \times 0.9 = 14.4$ ポイントになりますが,\small の使われ方を考えて,ここでは和文 13 ポイント,欧文 11 ポイントとします。また,\topsep と \parsep は,元はそれぞれ 4 ± 2 , 2 ± 1 ポイントでしたが,ここではゼロ(\ze)にしました。

microtype 対策のため if 文を避ける。後の \footnotesize も同様。

```
1061 \newcommand{\small}{%
1062 \bxjs@if@narrowbaselines{%
1063 %<!kiyou>
               \jsc@setfontsize\small\@ixpt{11}%
1064 %<kiyou>
               \jsc@setfontsize\small{8.8888}{11}%
1065 }{%else
1066 %<!kiyou>
                \jsc@setfontsize\small\@ixpt{13}%
1067 %<kiyou>
               1068
1069
     \abovedisplayskip 9\p0? \@plus3\p0? \@minus4\p0?
     \abovedisplayshortskip \z@ \@plus3\p@?
1070
     \belowdisplayskip \abovedisplayskip
1071
     \belowdisplayshortskip \belowdisplayskip
1072
     \def\@listi{\leftmargin\leftmargini
1073
                 \topsep \z@
1074
                 \parsep \z@
1075
1076
                 \itemsep \parsep}}
```

\footnotesize \footnotesize も同様です。\topsep と \parsep は、元はそれぞれ 3 ± 1 , 2 ± 1 ポイントでしたが、ここではゼロ(\z0)にしました。

```
1077 \newcommand{\footnotesize}{%
1078 \bxjs@if@narrowbaselines{%
1079 %<!kiyou> \jsc@setfontsize\footnotesize\@viiipt{9.5}%
1080 %<kiyou> \jsc@setfontsize\footnotesize{8.8888}{11}%
1081 }{%else
1082 %<!kiyou> \jsc@setfontsize\footnotesize\@viiipt{11}%
1083 %<kiyou> \jsc@setfontsize\footnotesize{8.8888}{13.2418}%
1084 }%
```

```
\abovedisplayskip 6\p0? \@plus2\p0? \@minus3\p0?
                                         1085
                                         1086
                                                                \abovedisplayshortskip \z@ \@plus2\p@?
                                                                \belowdisplayskip \abovedisplayskip
                                                                \belowdisplayshortskip \belowdisplayskip
                                         1088
                                                                \def\@listi{\leftmargin\leftmargini
                                         1089
                                         1090
                                                                                                            \topsep \z@
                                                                                                             \parsep \z@
                                         1091
                                          1092
                                                                                                             \itemsep \parsep}}
\scriptsize それ以外のサイズは、本文に使うことがないので、単にフォントサイズと行送りだけ変更し
                      \tiny ます。特に注意すべきは \large で、これは二段組のときに節見出しのフォントとして使い、
                                            行送りを \normalsize と同じにすることによって, 節見出しが複数行にわたっても段間で
                  \large
                                               行が揃うようにします。
                  \Large
                                                      [2004-11-03] \HUGE を追加。
                  \LARGE
                      \label{log:logs} $$ 1093 \end{\scriptstyle \criptsize}_{\jsc@setfontsize\scriptsize}_{\criptsize}_{\criptsize\scriptsize}_{\criptsize\scriptsize}_{\criptsize\scriptsize}_{\criptsize\scriptsize}_{\criptsize\scriptsize}_{\criptsize\scriptsize}_{\criptsize\scriptsize}_{\criptsize\scriptsize}_{\criptsize\scriptsize}_{\criptsize\scriptsize}_{\criptsize\scriptsize}_{\criptsize\scriptsize}_{\criptsize\scriptsize}_{\criptsize\scriptsize}_{\criptsize\scriptsize\scriptsize}_{\criptsize\scriptsize}_{\criptsize\scriptsize}_{\criptsize\scriptsize}_{\criptsize\scriptsize}_{\criptsize\scriptsize}_{\criptsize\scriptsize\scriptsize}_{\criptsize\scriptsize}_{\criptsize\scriptsize\scriptsize}_{\criptsize\scriptsize\scriptsize}_{\criptsize\scriptsize\scriptsize}_{\criptsize\scriptsize\scriptsize}_{\criptsize\scriptsize\scriptsize\scriptsize}_{\criptsize\scriptsize\scriptsize\scriptsize}_{\criptsize\scriptsize\scriptsize\scriptsize}_{\criptsize\scriptsize\scriptsize\scriptsize}_{\criptsize\scriptsize\scriptsize\scriptsize}_{\criptsize\scriptsize\scriptsize\scriptsize\scriptsize}_{\criptsize\scriptsize\scriptsize\scriptsize}_{\criptsize\scriptsize\scriptsize\scriptsize}_{\criptsize\scriptsize\scriptsize\scriptsize}_{\criptsize\scriptsize\scriptsize\scriptsize}_{\criptsize\scriptsize\scriptsize\scriptsize}_{\criptsize\scriptsize\scriptsize\scriptsize}_{\criptsize\scriptsize\scriptsize\scriptsize}_{\criptsize\scriptsize\scriptsize\scriptsize}_{\criptsize\scriptsize\scriptsize\scriptsize}_{\criptsize\scriptsize\scriptsize\scriptsize}_{\criptsize\scriptsize\scriptsize\scriptsize}_{\criptsize\scriptsize\scriptsize\scriptsize}_{\criptsize\scriptsize\scriptsize\scriptsize}_{\criptsize\scriptsize\scriptsize\scriptsize}_{\criptsize\scriptsize\scriptsize\scriptsize}_{\criptsize\scriptsize\scriptsize}_{\criptsize\scriptsize\scriptsize\scriptsize}_{\criptsize\scriptsize\scriptsize\scriptsize}_{\criptsize\scriptsize\scriptsize\scriptsize}_{\criptsize\scriptsize\scriptsize\scriptsize}_{\criptsize\scriptsize\scriptsize\scriptsize}_{\criptsize\scriptsize\sc
                                         1094 \newcommand{\tiny}{\jsc@setfontsize\tiny\@vpt\@vipt}
                      \Huge _{1095} \if@twocolumn
                      \HUGE 1096 %<!kiyou> \newcommand{\large}{\jsc@setfontsize\large\@xiipt{\n@baseline}}
                                         \label{large} $$1097 \end{\arge} ine \newcommand{\arge}{\belower11.111}{\n@baseline}$$
                                         1098 \else
                                         1099 % <! kiyou \ \newcommand \\large \\ \| \jsc@setfontsize \\large \\@xiipt \\ 17}\\
                                         1100 % \kiyou> \newcommand{\large}{\jsc@setfontsize\large{11.111}{17}}
                                         1102 \ensuremath{\large}{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\large}\cline{\la
                                         1103 %<kiyou>\newcommand{\Large}{\jsc@setfontsize\Large{12.222}{21}}
                                         1104 \newcommand{\LARGE}{\jsc@setfontsize\LARGE\@xviipt{25}}
                                         1105 \newcommand{\huge}{\jsc@setfontsize\huge\@xxpt{28}}
                                         1106 \newcommand{\Huge}{\jsc@setfontsize\Huge\@xxvpt{33}}
                                         1107 \newcommand{\HUGE}{\jsc0setfontsize\HUGE{30}{40}}
```

別行立て数式の中では \narrowbaselines にします。和文の行送りのままでは、行列や場合分けの行送り、連分数の高さなどが不釣合いに大きくなるためです。

本文中の数式の中では \narrowbaselines にしていません。本文中ではなるべく行送りが変わるような大きいものを使わず、行列は amsmath の smallmatrix 環境を使うのがいいでしょう。

1108 \everydisplay=\expandafter{\the\everydisplay \narrowbaselines}

しかし、このおかげで別行数式の上下のスペースが少し違ってしまいました。とりあえず amsmath の equation 関係は okumacro のほうで逃げていますが、もっとうまい逃げ道が あればお教えください。

見出し用のフォントは \bfseries 固定ではなく、\headfont という命令で定めることにします。これは太ゴシックが使えるときは \sffamily \bfseries でいいと思いますが、通常の中ゴシックでは単に \sffamily だけのほうがよさそうです。 $\mathbb{P}^{I} \times \mathbb{P}^{X} \times \mathbb{P$

1109 % \newcommand{\headfont}{\bfseries}

1110 \newcommand{\headfont}{\sffamily}

1111 % \newcommand{\headfont}{\sffamily\fontseries{sbc}\selectfont}

5 レイアウト

■二段組

\columnsep \columnsep は二段組のときの左右の段間の幅です。元は 10pt でしたが、2zw にしました。 \columnseprule このスペースの中央に \columnseprule の幅の罫線が引かれます。

- 1112 %<!kiyou>\setlength\columnsep{2\Cwd}
- 1113 %<kiyou>\setlength\columnsep{28truebp}
- 1114 \setlength\columnseprule{\z0}

■段落

\lineskip 上下の行の文字が \lineskiplimit より接近したら, \lineskip より近づかないようにし \normallineskip ます。元は Opt でしたが 1pt に変更しました。normal... の付いた方は保存用です。

 $\verb|\lineskiplimit| 1115 \verb|\setlength| lineskip{1 | jsc@mpt}|$

 $\label{lineskiplimit} $$\operatorname{lineskiplimit}^{1116}\left(\frac{1}{jsc@mpt}\right)^{1117}\left(\frac{1}{jsc@mpt}\right)^{1117}$

1118 \setlength\normallineskiplimit{1\jsc@mpt}

\baselinestretch 実際の行送りが \baselineskip の何倍かを表すマクロです。たとえば

\renewcommand{\baselinestretch}{2}

とすると、行送りが通常の2倍になります。ただし、これを設定すると、たとえ \baselineskip が伸縮するように設定しても、行送りの伸縮ができなくなります。行 送りの伸縮はしないのが一般的です。

1119 \renewcommand{\baselinestretch}{}

\parskip \parskip は段落間の追加スペースです。元は 0pt plus 1pt になっていましたが、ここでは \parindent ゼロにしました。\parindent は段落の先頭の字下げ幅です。

1120 \setlength\parskip{\z0}

1121 \if@slide

1122 \setlength\parindent{0\p0}

1123 \else

1124 \setlength\parindent{1\Cwd}

1125 \fi

↑@lowpenalty \nopagebreak, \nolinebreak は引数に応じて次のペナルティ値のうちどれかを選ぶよう \@medpenalty になっています。ここはオリジナル通りです。

 \Chighpenalty 1126 \Clowpenalty

1127 \@medpenalty 151

1128 \@highpenalty 301

\interlinepenalty 段落中の改ページのペナルティです。デフォルトは 0 です。

1129 % \interlinepenalty 0

\brokenpenalty ページの最後の行がハイフンで終わる際のペナルティです。デフォルトは 100 です。
1130 % \brokenpenalty 100

5.1 ページレイアウト

BXJS ではページレイアウトの処理は geometry パッケージが担当している。

■準備 灣

\bxjs@bd@pre@geometry@hook begin-document フックのコード内で、geometry パッケージが挿入するコードの直前で実行されるフック。

1131 \@onlypreamble\bxjs@bd@pre@geometry@hook

1132 \let\bxjs@bd@pre@geometry@hook\@empty

現状ではここで \mag を設定している。 \topskip も指定する。

1133 \ifjsc@mag

1134 \mag=\bxjs@param@mag

1135 \fi

1136 \setlength{\topskip}{10\p@?}

\jsSetQHLength のための和文単位の定義。

 $1137 \ \texttt{def} \ \texttt{bxjsQunitQtrueQ} \{ \texttt{0.25truemm} \} \\ \texttt{let} \ \texttt{bxjsQunitQtrueH} \\ \texttt{bxjsQunitQtrueQ} \} \\ \texttt{0.25truemm} \} \\ \texttt{0.25true$

1138 \def\bxjs@unit@zw{\jsZw}\let\bxjs@unit@zh\bxjs@unit@zw

\bxjs@param@paper が長さ指定({W}{H})の場合、geometry の形式(papersize={W,H}) に変換する。

1139 \def\bxjs@tmpdo{\futurelet\bxjs@tmpa\bxjs@tmpdo@a}

1140 $\def\bxjs@tmpdo@a{%}$

1141 \ifx\bxjs@tmpa\bgroup \expandafter\bxjs@tmpdo@b

1142 \else \expandafter\bxjs@tmpdo@c \fi}

 $1143 \ef\bxjs@tmpdo@b#1#2#3\@nil{\edef\bxjs@param@paper{papersize={\#1,\#2}}} \\$

 $1144 \end{area} $$1144 \end{$

 $1145 \ensuremath{\mbox{\mbox{1}}} 185 \ensuremath{\mbox{\mbox{4}}} 1900\ensuremath{\mbox{4}} 1900\ensurema$

1146 \ifx\@nil#3\@nil\else \edef\bxjs@param@paper{papersize={#1,#2}}\fi}

\bxjs@layout@paper geometry の用紙設定のオプション。

1149 \ifjsc@mag truedimen,\fi

1150 \if@landscape landscape,\fi

1151 \bxjs@param@paper}

\bxjs@layout geometry のページレイアウトのオプション列。文書クラス毎に異なる。

```
1152 %<*article|report>
1153 \def\bxjs@layout@base{%
     headheight=\topskip,footskip=0.03367\paperheight,%
     headsep=\footskip-\topskip,includeheadfoot,%
1155
1156 }
1157 \edef\bxjs@layout{\bxjs@layout@base
     hscale=0.76,hmarginratio=1:1,%
     vscale=0.83,vmarginratio=1:1,%
1160 }
1161 %</article|report>
1162 %<*book>
1163 \def\bxjs@layout@base{%
    headheight=\topskip,headsep=6\jsc@mmm,nofoot,includeheadfoot,%
1165 }
1166 \ifbxjs@layout@buggyhmargin
1167% アレ
hmargin=36\jsc@mmm,hmarginratio=1:1,%
vscale=0.83,vmarginratio=1:1,%
1171 }
1172 \else
                                   %---
1173 % 非アレ
1174 \edef\bxjs@layout{\bxjs@layout@base
1175 hmargin=18\jsc@mmm,%
vscale=0.83, vmarginratio=1:1,%
1177 }
1178 \fi
                                   %---
1179 %</book>
1180 %<*slide>
1181 \def\bxjs@layout@base{%
noheadfoot,%
1183 }
1184 \edef\bxjs@layout{\bxjs@layout@base
1185 hscale=0.9,hmarginratio=1:1,%
     vscale=0.944,vmarginratio=1:1,%
1186
1187 }
1188 %</slide>
   textwidth オプションの設定を反映する。
1189 %<*!book>
1190 \ifx\bxjs@textwidth@opt\@undefined\else
     \jsSetQHLength\@tempdima{\bxjs@textwidth@opt}
     \edef\bxjs@layout{\bxjs@layout width=\the\@tempdima,}
1192
1193 \fi
1194 %</!book>
1195 \ifx\bxjs@number@of@lines@opt\@undefined\else
     \bxjs@gset@tempcnta{\bxjs@number@of@lines@opt}
     \edef\bxjs@layout{\bxjs@layout lines=\the\@tempcnta,}
1197
1198 \fi
```

\fullwidth 〔寸法レジスタ〕ヘッダ・フッタ領域の横幅。

1199 \newdimen\fullwidth

\bxjs@textwidth@limit 〔寸法値マクロ〕bxjsbook における、\textwidth 上限の値。

\jsTextWidthLimit 〔実数値マクロ〕\bxjs@textwidth@limit の全角(\Cwd)単位での値。

1200 %<*book>

1201 \newcommand\jsTextWidthLimit{40}

1202 \@tempdima=\jsTextWidthLimit\Cwd

 $1203 \verb|\fx\bx|| s@textwidth@limit@opt\@undefined\else$

1204 \bxjs@gset@tempcnta{\bxjs@textwidth@limit@opt}

1205 \@tempdima=\@tempcnta\Cwd

1206 \fi

1207 \ifx\bxjs@textwidth@opt\@undefined\else

1208 \jsSetQHLength\@tempdima{\bxjs@textwidth@opt}

1209 \fi

1210 \edef\bxjs@textwidth@limit{\the\@tempdima}

 $1211 \verb|\dim\\@tempdima=\\jsTextWidthLimit\\Cwd\\else$

1212 \bxjs@invscale\@tempdima{\strip@pt\Cwd}

1213 \long\edef\jsTextWidthLimit{\strip@pt\@tempdima}

1214 \fi

1215 %</book>

\bxjs@preproc@layout geometry の前処理。

geometry は \topskip が標準の行高(\ht\strutbox) より小さくならないようにする 自動調整を行うが、これをどうするかは未検討。今のところ、単純に回避(無効化)して いる。

1216 \def\bxjs@preproc@layout{%

1217 \edef\bxjs@save@ht@strutbox{\the\ht\strutbox}\ht\strutbox=10\jsc@mpt}

\bxjs@postproc@layout geometry の後処理。

1218 \def\bxjs@postproc@layout{%

geometry のドライバを再設定する。

1219 \ifx\bxjs@geometry@driver\relax\else

1220 \let\Gm@driver\bxjs@geometry@driver

1221 \fi

\ht\strutbox の値を元に戻す。

1222 \ht\strutbox=\bxjs@save@ht@strutbox\relax

\textwidth の値を補正する。

1223 \ifbxjs@whole@zw@lines

1224 \@tempdimb=\textwidth

1226 \advance\textwidth.005pt\relax

1227 \divide\textwidth\@tempdima \multiply\textwidth\@tempdima

1228 \advance\@tempdimb-\textwidth

1229 \advance\oddsidemargin 0.5\@tempdimb

```
bxjsbook の場合は、geometry が設定した \textwidth は \fullwidth として扱い、その
                                                     値から実際の \textwidth を導出する。
                                                 1233 %<*book>
                                                                \@tempdima=\bxjs@textwidth@limit\relax
                                                 1234
                                                1235
                                                                \ifbxjs@whole@zw@lines
                                                                      \advance\@tempdima.005pt\relax
                                                1236
                                                1237
                                                                      \divide\@tempdima\Cwd \multiply\@tempdima\Cwd
                                                 1238
                                                 1239
                                                                \ifdim\textwidth>\@tempdima
                                                                      \textwidth=\@tempdima
                                                1240
                                                                      \addtolength\evensidemargin{\fullwidth-\textwidth}
                                                                \fi
                                                1242
                                                1243 %</book>
                                                     \textheight 関連の調整。
                                                                 \@tempdimb=\textheight
                                                1244
                                                1245
                                                                 \advance\textheight-\topskip
                                                1246
                                                                 \advance\textheight.005pt\relax
                                                                 \divide\textheight\baselineskip \multiply\textheight\baselineskip
                                                1247
                                                 1248
                                                                 \advance\textheight\topskip
                                                                 \advance\@tempdimb-\textheight
                                                 1249
                                                1250
                                                                 \advance\topmargin0.5\@tempdimb
                                                     \headheight 関連の調整。
                                                                 \@tempdima=\topskip
                                                1251
                                                1252
                                                                 \advance\headheight\@tempdima
                                                 1253
                                                                 \advance\topmargin-\@tempdima
                                                     marginpar 関連の調整。
                                                                 \setlength\marginparsep{\columnsep}
                                                1254
                                                                 \setlength\marginparpush{\baselineskip}
                                                                 \verb|\colored| \end{|\colored| \colored| \c
                                                1256
                                                                           -\textwidth-10\jsc@mmm-\marginparsep}
                                                 1257
                                                                 \ifbxjs@whole@zw@lines
                                                 1258
                                                                      \divide\marginparwidth\Cwd \multiply\marginparwidth\Cwd
                                                1259
                                                 1260
                                                                \fi
                                                     連動する変数。
                                                1261
                                                                 \maxdepth=.5\topskip
                                                                 \stockwidth=\paperwidth
                                                 1262
                                                                 \stockheight=\paperheight
                                                 1263
                                                 1264 }
\jsGeometryOptions geometry パッケージに渡すオプションのリスト。
                                                      ※geometry=user 指定時にユーザが利用することを想定している。
                                                 1265 \edef\jsGeometryOptions{%
```

\advance\evensidemargin 0.5\@tempdimb

\fullwidth=\textwidth

1230

1231 1232

■geometry パッケージを読み込む 彎

```
ムニャムニャ。
```

1267 \def\bxjs@geometry@name{geometry}

1268 \ifbxjs@old@hook@system

1269 \let\bxjs@apply@bd@pre@geometry@hook\AtBeginDocument

1270 \else

1271 \def\bxjs@apply@bd@pre@geometry@hook{%

1272 \AddToHook{begindocument}[\bxjs@geometry@name]}

1273 \fi

geoemtry=class の場合に、実際に geometry パッケージを読みこむ。

 $1274 \ \texttt{ifx} \ \texttt{bxjs@geometry} \ \texttt{bxjs@geometry@class}$

geometry のドライバオプション指定。nopapersize 指定時は、special 命令出力を抑止するためにドライバを none にする。そうでない場合は、クラスで指定したドライバオプションが引き継がれるので何もしなくてよいが、例外として、ドライバが dvipdfmx の時は、現状の geometry は dvipdfm を指定する必要がある。

1275 \ifbxjs@papersize

1276 \ifx\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@dvipdfmx

1277 \PassOptionsToPackage{dvipdfm}{geometry}

1278 \else\ifx\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@dvimode

1279 \PassOptionsToPackage{dvipdfm}{geometry}

1280 \fi\fi

1281 \let\bxPapersizeSpecialDone=t

1282 \else

1283 \PassOptionsToPackage{driver=none}{geometry}

1284 \fi

ここで geometry を読み込む。

※geometry の begin-document フックにおいて、LuaTrX の旧版互換を有効にする。

1285 \bxjs@apply@bd@pre@geometry@hook

1286 \bxjs@apply@bd@pre@geometry@hook{\bxjs@bd@pre@geometry@hook}

 $1287 \verb|\bxjs@apply@bd@pre@geometry@hook{\ImposeOldLuaTeXBehavior}|$

1288 \bxjs@preproc@layout

1289 \edef\bxjs@next{%

1290 \noexpand\RequirePackage[\bxjs@layout@paper,\bxjs@layout]{geometry}%

1291 }\bxjs@next

1292 \bxjs@apply@bd@pre@geometry@hook{\RevokeOldLuaTeXBehavior}

\bxjs@geometry@driver geometry が用いるドライバの名前。

※この値は一度決めた後は変わってほしくないので、\bxjs@postproc@layout において書き戻す処理を入れている。

1293 \let\bxjs@geometry@driver\Gm@driver

```
geometry のドライバ自動判別に対する前処理。
                                         1295 \g@addto@macro\bxjs@bd@pre@geometry@hook{%
                                              BXJS2.0 版より、geometry の 4.x 版のサポートは廃止された。
                                                                 \@ifpackagelater{geometry}{2010/02/12}{}{%else
                                          1296
                                                                       \PackageError\bxjs@clsname
                                         1297
                                                                          {Your 'geometry' package is too old (< v5.0)}%
                                          1298
                                                                          {\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\en
                                         1299
                                         1300
                                                                       \let\Gm@driver\relax}%
                                               エンジンが platex-ng の時は geometry のドライバを pdftex にする。
                                                                 \if jsWithpTeXng
                                         1301
                                         1302
                                                                       \ifx\Gm@driver\@empty
                                                                             \def\Gm@driver{pdftex}%
                                          1303
                                                                       \fi
                                         1304
                                                                 \fi}
                                         1305
\setpagelayout ページレイアウト設定のためのユーザ命令。
                                         1306 \def\setpagelayout{%
                                                           \bxjs@ifplus{\bxjs@setpagelayout@a\tw@}{%else
                                         1307
                                                                 \@ifstar{\bxjs@setpagelayout@a\@ne}{\bxjs@setpagelayout@a\z@}}}
                                         1308
                                          1309 \def\bxjs@setpagelayout@a#1#2{%
                                                          \ifcase#1% modify
                                         1310
                                         1311
                                                                 \def\bxjs@next{\ifjsc@mag truedimen,\fi #2}%
                                                         \or% reset(*)
                                         1312
                                                                \def\bxjs@next{reset,\bxjs@layout@paper,#2}%
                                         1313
                                         1314
                                                           \or% semireset(+)
                                                                \def\bxjs@next{reset,\bxjs@layout@paper,\bxjs@layout@base,#2}%
                                         1315
                                                          \fi
                                         1316
                                                           \bxjs@preproc@layout
                                         1317
                                                           \edef\bxjs@next{%
                                         1318
                                          1319
                                                                 \noexpand\geometry{\bxjs@next}%
                                         1320
                                                           }\bxjs@next
                                                           \bxjs@postproc@layout}
```

1294 \bxjs@postproc@layout

■geometry パッケージを読み込まない 彎

geometry=user の場合の処理。

 $1322 \verb|\else| ifx\bxjs@geometry\bxjs@geometry\curred{user}$

この場合はユーザが何らかの方法(例えば geometry を読み込む)でページレイアウトを設定する必要がある。もし、本体開始時に \textwidth がカーネル設定の値(.5\maxdimen)のままになっている場合はエラーを出す。

※\jsUseMinimalPageLayout は動作テスト用。

1323 \g@addto@macro\bxjs@begin@document@hook{%

```
\ifdim\textwidth=.5\maxdimen
1324
1325
        \ClassError\bxjs@clsname
         {Page layout is not properly set}%
1326
         {\del{dehd}}
1327
1328
1329 \def\jsUseMinimalPageLayout{%
      \setlength{\textwidth}{6.5in}%
1330
      \setlength{\textheight}{8in}}
   \setpagelayout はとりあえず無効にしておく。
1332 \let\bxjs@geometry@driver\relax
1333 \def\setpagelayout{%
      \bxjs@ifplus{\bxjs@pagelayout@a}{%else
1334
        \@ifstar{\bxjs@pagelayout@a}{\bxjs@pagelayout@a}}}
1335
1336 \def\bxjs@pagelayout@a#1{%
      \ClassError\bxjs@clsname
1337
1338
       {Command '\string\setpagelayout' is not supported,\MessageBreak
        because 'geometry' value is not 'class'}\@eha}
1339
1340 %
1341 \fi\fi
```

■JS クラスと共通処理の開始 彎

ここからのコードは以下の点を除いて JS クラスのものを踏襲する。

- zw の代わりに \jsZw を用いる。
- article/report/book/slide の切り分けの処理が異なる。

※ diff が崩壊するのを避けるためオリジナルのコードを無効化した状態で挿入しておく。

1342 %<*jsclasses>

■縦方向のスペース

\topskip

\headheight \topskip は本文領域上端と本文1行目のベースラインとの距離です。あまりぎりぎりの値 にすると、本文中に ∫ のような高い文字が入ったときに 1 行目のベースラインが他のペー ジより下がってしまいます。ここでは本文の公称フォントサイズ(10pt)にします。

> [2003-06-26] \headheight はヘッダの高さで,元は12pt でしたが,新ドキュメントクラ スでは \topskip と等しくしていました。ところが, fancyhdr パッケージで \headheight が小さいとおかしいことになるようですので、2倍に増やしました。代わりに、版面の上下 揃えの計算では \headheight ではなく \topskip を使うことにしました。

> [2016-08-17] 圏点やルビが一行目に来た場合に下がるのを防ぐため、\topskip を 10pt から 1.38zw に増やしました。\headheight は従来と同じ 20pt のままとします。

1343 \setlength\topskip{1.38zw}\% from 10\jsc@mpt (2016-08-17) 1344 \if@slide

```
\setlength\headheight{0\jsc@mpt}
        1346 \else
        1347
            \setlength\headheight{20\jsc@mpt}\% from 2\topskip (2016-08-17); from \topskip (2003-
           06-26)
        1348 \fi
\footskip \footskip は本文領域下端とフッタ下端との距離です。標準クラスファイルでは、book で
         0.35in (約8.89mm), book 以外で30pt (約10.54mm) となっていましたが,ここではA4
         判のときちょうど 1cm となるように、\paperheight の 0.03367 倍 (最小 \baselineskip)
          としました。書籍については、フッタは使わないことにして、ゼロにしました。
        1349 %<*article|kiyou>
        1350 \if@slide
             \setlength\footskip{0pt}
        1351
        1352 \else
             \setlength\footskip{0.03367\paperheight}
        1353
             \ifdim\footskip<\baselineskip
               \setlength\footskip{\baselineskip}
        1355
        1356 \fi
        1357 \fi
        1358 %</article|kiyou>
        1359 %<jspf>\setlength\footskip{9\jsc@mmm}
        1360 %<*book>
        1361 \if@report
             \setlength\footskip{0.03367\paperheight}
             \ifdim\footskip<\baselineskip
        1363
               \setlength\footskip{\baselineskip}
        1364
        1365
             \fi
        1366 \else
        1367
             \setlength\footskip{0pt}
        1368 \fi
        1369 %</book>
        1370 %<*report>
        1371 \setlength\footskip{0.03367\paperheight}
        1372 \ifdim\footskip<\baselineskip
        1373 \setlength\footskip{\baselineskip}
        1374\fi
        1375 %</report>
 \headsep \headsep はヘッダ下端と本文領域上端との距離です。元は book で 18pt (約 6.33mm), そ
         れ以外で 25pt (約8.79mm) になっていました。ここでは article は \footskip - \topskip
          としました。
           [2016-10-08] article の slide のとき、および book の非 report と kiyou のときに
         \headsep を減らしそこねていたのを修正しました(2016-08-17 での修正漏れ)。
        1376 %<*article>
        1377 \if@slide
             \setlength\headsep{0\jsc@mpt}
```

\addtolength\headsep{-\topskip}\% added (2016-10-08)

```
1380
      \addtolength\headsep{10\jsc@mpt}\% added (2016-10-08)
1381 \else
      \setlength\headsep{\footskip}
1382
1383
      \addtolength\headsep{-\topskip}
1385 %</article>
1386 %<*book>
1387 \if@report
      \setlength\headsep{\footskip}
      \addtolength\headsep{-\topskip}
1389
1390 \else
1391
      \setlength\headsep{6\jsc@mmm}
      \addtolength\headsep{-\topskip}\% added (2016-10-08)
      \addtolength\headsep{10\jsc@mpt}\% added (2016-10-08)
1393
1394\fi
1395 %</book>
1396 %<*report>
1397 \setlength\headsep{\footskip}
1398 \addtolength\headsep{-\topskip}
1399 %</report>
1400 %<*jspf>
1401 \setlength \endsep{9\jsc@mmm}
1402 \addtolength\headsep{-\topskip}
1403 %</jspf>
1404 %<*kiyou>
1405 \setlength\headheight{0\jsc@mpt}
1406 \setlength\headsep{0\jsc@mpt}
1407 \addtolength\headsep{-\topskip}\% added (2016-10-08)
1408 \addtolength\headsep{10\jsc@mpt}\% added (2016-10-08)
1409 %</kiyou>
```

\maxdepth \maxdepth は本文最下行の最大の深さで、plain T_EX や IAT_EX 2.09 では 4pt に固定でした。IAT_EX2e では \maxdepth + \topskip を本文フォントサイズの 1.5 倍にしたいのですが、\topskip は本文フォントサイズ(ここでは 10pt)に等しいので、結局 \maxdepth は \topskip の半分の値(具体的には 5pt)にします。

 $1410 \stlength\maxdepth{.5\topskip}$

■本文の幅と高さ

\fullwidth 本文の幅が全角 40 文字を超えると読みにくくなります。そこで、書籍の場合に限って、紙の幅が広いときは外側のマージンを余分にとって全角 40 文字に押え、ヘッダやフッタは本文領域より広く取ることにします。このときヘッダやフッタの幅を表す \fullwidth という長さを定義します。

1411 \newdimen\fullwidth

この \fullwidth は article では紙幅 \paperwidth の 0.76 倍を超えない全角幅の整数倍 (二段組では全角幅の偶数倍) にします。0.76 倍という数値は A4 縦置きの場合に紙幅から

約 2 インチを引いた値になるように選びました。book では紙幅から 36 ミリを引いた値にしました。

\textwidth 書籍以外では本文領域の幅 \textwidth は \fullwidth と等しくします。article では A4 縦置きで 49 文字となります。某学会誌スタイルでは 50zw(25 文字 $\times 2$ 段)+段間 8mm とします。

```
1412 %<*article>
1413 \if@slide
1414 \setlength\fullwidth{0.9\paperwidth}
1415 \else
1416 \setlength\fullwidth{0.76\paperwidth}
1417 \fi
1418 \if@twocolumn \@tempdima=2zw \else \@tempdima=1zw \fi
1419 \verb|\divide\fullwidth\@tempdima \ \verb|\multiply\fullwidth\@tempdima| \\
1420 \setlength\textwidth{\fullwidth}
1421 %</article>
1422 %<*book>
1423 \if@report
      \setlength\fullwidth{0.76\paperwidth}
1425 \else
      \setlength\fullwidth{\paperwidth}
      1427
1428 \fi
1429 \if@twocolumn \@tempdima=2zw \else \@tempdima=1zw \fi
1430 \verb|\divide\fullwidth\@tempdima \ \verb|\multiply\fullwidth\@tempdima| \\
1431 \setlength\textwidth{\fullwidth}
1432 \if@report \else
1433 \if@twocolumn \else
1434
        \ifdim \fullwidth>40zw
          \setlength\textwidth{40zw}
1435
        \fi
1436
1437 \fi
1438 \fi
1439 %</book>
1440 %<*report>
1441 \setlength\fullwidth{0.76\paperwidth}
1442 \if@twocolumn \@tempdima=2zw \else \@tempdima=1zw \fi
1443 \divide\fullwidth\@tempdima \multiply\fullwidth\@tempdima
1444 \setlength\textwidth{\fullwidth}
1445 %</report>
1446 %<*jspf>
1447 \setlength\fullwidth{50zw}
1448 \addtolength\fullwidth{8\jsc@mmm}
1449 \setlength\textwidth{\fullwidth}
1450 %</jspf>
1451 %<*kiyou>
1452 \setlength\fullwidth{48zw}
1453 \addtolength\fullwidth{\columnsep}
```

1454 \setlength\textwidth{\fullwidth} 1455 %</kiyou>

\textheight 紙の高さ \paperheight は、1 インチと \topmargin と \headheight と \headsep と \textheight と \footskip とページ下部の余白を加えたものです。

本文部分の高さ \textheight は,紙の高さ \paperheight の 0.83 倍から,ヘッダの高さ,ヘッダと本文の距離,本文とフッタ下端の距離,\topskip を引き,それを \baselineskip の倍数に切り捨て,最後に \topskip を加えます。念のため 0.1 ポイント余分に加えておきます。0.83 倍という数値は,A4 縦置きの場合に紙の高さから上下マージン各約 1 インチを引いた値になるように選びました。

某学会誌スタイルでは44行にします。

[2003-06-26] \headheight を \topskip に直しました。以前はこの二つは値が同じであったので、変化はないはずです。

[2016-08-26] \topskip を 10pt から 1.38zw に増やしましたので,その分 \textheight を増やします(2016-08-17 での修正漏れ)。

[2016-10-08] article の slide のときに \headheight はゼロなので、さらに修正しました (2016-08-17 での修正漏れ)。

1456 %<*article|book|report>

 $1457 \setminus if@slide$

1458 $\mathbf{0.95}$

1459 **\else**

1460 \setlength{\textheight}{0.83\paperheight}

1461 \fi

 $1462 \addtolength{\text{\textheight}}{-10\jsc@mpt}\% \ from -\topskip (2016-10-08); \ from -\topskip (2003-06-26)$

 $1463 \addtolength{\text{textheight}}{-\headsep}$

 $1464 \add to length {\texttt \textheight} {\texttt -\texttt \footskip} \\$

1465 \addtolength{\textheight}{-\topskip}

1466 \divide\textheight\baselineskip

 $1467 \mbox{ }\mbox{multiply}\mbox{textheight}\mbox{baselineskip}$

1468 %</article|book|report>

1469 %<jspf>\setlength{\textheight}{51\baselineskip}

1470 %<kiyou>\setlength{\textheight}{47\baselineskip}

1471 \addtolength{\textheight}{\topskip}

 $1472 \addtolength{\text{textheight}}{0.1\jsc@mpt}$

 $1473 \ensuremath{\texttt{\mathindent}} \{10\jsc@mmm\}$

\flushbottom [2016-07-18] \textheight に念のため 0.1 ポイント余裕を持たせているのと同様に, \flushbottom にも余裕を持たせます。元の $ext{IFEX}\,2_{arepsilon}$ での完全な \flushbottom の定義は

\def\flushbottom{%

\let\@textbottom\relax \let\@texttop\relax}

ですが,次のようにします。

1474 \def\flushbottom{%

- 1475 \def\@textbottom{\vskip \z@ \@plus.1\jsc@mpt}%
- 1476 \let\@texttop\relax}

\marginparsep \marginparsep は欄外の書き込みと本文との間隔です。\marginparpush は欄外の書き込 \marginparpush みどうしの最小の間隔です。

1477 \setlength\marginparsep{\columnsep}
1478 \setlength\marginparpush{\baselineskip}

\oddsidemargin それぞれ奇数ページ,偶数ページの左マージンから 1 インチ引いた値です。片面印刷では \evensidemargin が使われます。 T_EX は上・左マージンに 1truein を挿入しますが,トンボ関係のオプションが指定されると $pIAT_EX$ 2_{ε} (plcore.ltx) はトンボの内側に 1in のスペース(1truein ではなく)を挿入するので,場合分けしています。

- 1479 \setlength{\oddsidemargin}{\paperwidth}
- $1480 \addtolength{\oddsidemargin}{-\fullwidth}$
- $1481 \setlength{\oddsidemargin}{.5\oddsidemargin}$
- 1482 \iftombow
- 1483 \addtolength{\oddsidemargin}{-1in}
- 1484 \else
- 1485 \addtolength{\oddsidemargin}{-\inv@mag in}
- 1486 \fi
- 1487 \setlength{\evensidemargin}{\oddsidemargin}
- 1488 \if@mparswitch
- $1489 \quad \texttt{\addtolength{\evensidemargin}{\fullwidth}}$
- 1490 \addtolength{\evensidemargin}{-\textwidth}
- 1491 \fi

\marginparwidth \marginparwidth は欄外の書き込みの横幅です。外側マージンの幅(\evensidemargin + 1 インチ)から 1 センチを引き、さらに \marginparsep(欄外の書き込みと本文のアキ)を引いた値にしました。最後に 1 zw の整数倍に切り捨てます。

- 1492 \setlength\marginparwidth{\paperwidth}
- $1493 \verb| \addtolength\marginparwidth{--} oddsidemargin{|}$
- 1494 \addtolength\marginparwidth{-\inv@mag in}
- $1495 \verb| \addtolength\marginparwidth{-\textwidth}|$
- $1496 \verb| \addtolength\margin parwidth {-10\jsc@mmm}|$
- 1497 \addtolength\marginparwidth{-\marginparsep}
- 1498 \@tempdima=1zw
- 1499 \divide\marginparwidth\@tempdima
- 1500 \multiply\marginparwidth\@tempdima

\topmargin 上マージン(紙の上端とヘッダ上端の距離)から1インチ引いた値です。

[2003-06-26] \headheight を \topskip に直しました。以前はこの二つは値が同じであったので、変化はないはずです。

[2016-08-17] \topskip を 10pt から 1.38zw に直しましたが,\topmargin は従来の値から変わらないように調節しました。…のつもりでしたが,\textheight を増やし忘れていたので変わってしまっていました(2016-08-26 修正済み)。

1501 \setlength\topmargin{\paperheight}

```
1502 \addtolength\topmargin{-\textheight}
1503 \if@slide
1504 \addtolength\topmargin{-\headheight}
1505 \else
1506 \addtolength\topmargin{-10\jsc@mpt}\% from -\topskip (2016-10-08); from -
    \headheight (2003-06-26)
1507 \fi
1508 \addtolength \topmargin{-\headsep}
1509 \addtolength topmargin{-\footskip}
1510 \setlength\topmargin{0.5\topmargin}
1511 %<kiyou>\setlength\topmargin{81truebp}
1512 \setminus iftombow
1513 \addtolength\topmargin{-1in}
1514 \else
1515 \addtolength\topmargin{-\inv@mag in}
1516 \fi
```

■脚注

1517 %</jsclasses>

\footnotesep 各脚注の頭に入る支柱(strut)の高さです。脚注間に余分のアキが入らないように, **\footnotesize** の支柱の高さ(行送りの 0.7 倍)に等しくします。

ここは元々は

 ${\c tootnotesize\global\setlength\footnotesep{\baselineskip}}$

としていたが、そもそも \global\setlength~ は calc 使用時には有意義な動作をしない。 \global\footnotesep だと所望の値が得られるが、同時に \footnotesize のフォントを 固定させてしまうという副作用をもつ。なので、実際の設定値を直接使うことにする。

1518 \footnotesep=11\p0? \footnotesep=0.7\footnotesep

\footins \skip\footins は本文の最終行と最初の脚注との間の距離です。標準の 10 ポイントクラス では 9 plus 4 minus 2 ポイントになっていますが、和文の行送りを考えてもうちょっと大 きくします。

1519 \setlength{\skip\footins}{16\p0? \@plus 5\p0? \@minus 2\p0?}

■フロート関連 フロート(図,表)関連のパラメータは LATFX 2 本体で定義されています が、ここで設定変更します。本文ページ(本文とフロートが共存するページ)とフロートだ けのページで設定が異なります。ちなみに、カウンタは内部では \c@ を名前に冠したマクロ になっています。

\c@topnumber topnumber カウンタは本文ページ上部のフロートの最大数です。 [2003-08-23] ちょっと増やしました。

1520 \setcounter{topnumber}{9}

\topfraction 本文ページ上部のフロートが占有できる最大の割合です。フロートが入りやすいように、元 の値 0.7 を 0.8 [2003-08-23: 0.85] に変えてあります。

1521 \renewcommand{\topfraction}{.85}

\c@bottomnumber bottomnumber カウンタは本文ページ下部のフロートの最大数です。

[2003-08-23] ちょっと増やしました。

1522 \setcounter{bottomnumber}{9}

 $\$ \bottomfraction 本文ページ下部のフロートが占有できる最大の割合です。元は 0.3 でした。

1523 \renewcommand{\bottomfraction}{.8}

\c@totalnumber totalnumber カウンタは本文ページに入りうるフロートの最大数です。

[2003-08-23] ちょっと増やしました。

1524 \setcounter{totalnumber}{20}

\textfraction 本文ページに最低限入らなければならない本文の割合です。フロートが入りやすいように元の 0.2~e~0.1 に変えました。

1525 \renewcommand{\textfraction}{.1}

\floatpagefraction フロートだけのページでのフロートの最小割合です。これも 0.5 を 0.8 に変えてあります。 $1526 \text{menewcommand{floatpagefraction}{.8}}$

\c@dbltopnumber 二段組のとき本文ページ上部に出力できる段抜きフロートの最大数です。 [2003-08-23] ちょっと増やしました。

1527 \setcounter{dbltopnumber}{9}

\dbltopfraction 二段組のとき本文ページ上部に出力できる段抜きフロートが占めうる最大の割合です。0.7 を 0.8 に変えてあります。

1528 \renewcommand{\dbltopfraction}{.8}

\dblfloatpagefraction 二段組のときフロートだけのページに入るべき段抜きフロートの最小割合です。0.5 を 0.8 に変えてあります。

 $1529 \verb|\renewcommand{\dblfloatpagefraction}{\{.8\}}$

\floatsep \floatsep はページ上部・下部のフロート間の距離です。\textfloatsep はページ上部・\textfloatsep 下部のフロートと本文との距離です。\intextsep は本文の途中に出力されるフロートと本\intextsep 文との距離です。

1530 \setlength\floatsep {12\p0? \0plus 2\p0? \0minus 2\p0?} 1531 \setlength\textfloatsep{20\p0? \0plus 2\p0? \0minus 4\p0?}

1532 \setlength\intextsep $\{12\p0? \qn 2\p0? \qn 2\p0? \qn 2\p0?\}$

\dblfloatsep 二段組のときの段抜きのフロートについての値です。

 $\label{thm:continuous} $$ \dbltextfloatsep 1533 \etlength\dbltextfloatsep {20p@? \endows 2\p@? \endows 4\p@?} $$ \etlength\dbltextfloatsep {20p@? \endows 2\p@? \endows 4\p@?} $$$

\@fptop フロートだけのページに入るグルーです。\@fptop はページ上部, \@fpbot はページ下部,

\@fpsep \@fpsep はフロート間に入ります。

\@fpbot

```
1535 \setlength\@fptop{0\p@? \@plus 1fil}
1536 \setlength\@fpsep{8\p@? \@plus 2fil}
1537 \setlength\@fpbot{0\p@? \@plus 1fil}
\@dblfptop 段抜きフロートについての値です。
\@dblfpsep 1538 \setlength\@dblfptop{0\p@? \@plus 1fil}
\@dblfpbot 1539 \setlength\@dblfpsep{8\p@? \@plus 2fil}
1540 \setlength\@dblfpbot{0\p@? \@plus 1fil}
```

6 改ページ(日本語 TEX 開発コミュニティ版のみ)

\pltx@cleartorightpage \pltx@cleartoleftpage

[2017-02-24] コミュニティ版 pIATEX の標準クラス 2017/02/15 に合わせて,同じ命令を追加しました。

\pltx@cleartooddpage \pltx@cleartoevenpage

1. \pltx@cleartorightpage: 右ページになるまでページを繰る命令

2. \pltx@cleartoleftpage: 左ページになるまでページを繰る命令

3. \pltx@cleartooddpage: 奇数ページになるまでページを繰る命令

4. \pltx@cleartoevenpage: 偶数ページになるまでページを繰る命令

となっています。

```
1541 %\def\pltx@cleartorightpage{\clearpage\if@twoside
1542 % \ifodd\c@page
1543 %
         \iftdir
1544 %
           \hbox{}\thispagestyle{empty}\newpage
1545 %
           \if@twocolumn\hbox{}\newpage\fi
1546 %
         \fi
1547 % \else
1548 %
         \ifydir
           \hbox{}\thispagestyle{empty}\newpage
1549 %
1550 %
           \if@twocolumn\hbox{}\newpage\fi
1551 %
         \fi
1552 % \fi\fi}
1553 %\def\pltx@cleartoleftpage{\clearpage\if@twoside
1554 % \ifodd\c@page
1555 %
         \ifydir
           \hbox{}\thispagestyle{empty}\newpage
1556 %
           \if@twocolumn\hbox{}\newpage\fi
1557 %
         \fi
1558 %
1559 % \else
1560 %
         \iftdir
1561 %
           \hbox{}\thispagestyle{empty}\newpage
1562 %
           \if@twocolumn\hbox{}\newpage\fi
1563 %
         \fi
1564 % \fi\fi}
1565 \def\pltx@cleartooddpage{\clearpage\if@twoside
     \ifodd\c@page\else
1567
        \hbox{}\thispagestyle{empty}\newpage
```

```
1568 \if@twocolumn\hbox{}\newpage\fi
```

1569 \fi\fi}

1570 \def\pltx@cleartoevenpage{\clearpage\if@twoside

1571 \ifodd\c@page

1572 \hbox{}\thispagestyle{empty}\newpage

1573 \if@twocolumn\hbox{}\newpage\fi

1574 \fi\fi}

BXJS クラスでは \iftdir 等が使えないので、横組を仮定した定義を用いる。

1576 \let\pltx@cleartoleftpage\pltx@cleartoevenpage

\cleardoublepage [2017-02-24] コミュニティ版 pLTEX の標準クラス 2017/02/15 に合わせて, report と book クラスの場合に\cleardoublepage を再定義します。

1577 %<*book|report>

1578 \if@openleft

1579 \let\cleardoublepage\pltx@cleartoleftpage

1580 \else\if@openright

1581 \let\cleardoublepage\pltx@cleartorightpage

1582 \fi\fi

1583 %</book|report>

7 ページスタイル

アスキーのクラスファイルでは headnombre, footnombre, bothstyle, jpl@in が追加 されていますが,ここでは欧文標準のものだけにしました。

ページスタイルは \ps0... の形のマクロで定義されています。

\Cevenhead \Coddhead, \Coddfoot, \Cevenhead, \Cevenfoot は偶数・奇数ページの柱(ヘッダ,

\Coddhead フッタ)を出力する命令です。これらは \fullwidth 幅の \hbox の中で呼び出されます。

\@evenfoot \ps@... の中で定義しておきます。

\markboth{左}{右} 両方の柱を設定します。

\markright{右} 右の柱を設定します。

\leftmark 左の柱を出力します。

\rightmark 右の柱を出力します。

柱を設定する命令は、右の柱が左の柱の下位にある場合は十分まともに動作します。たとえば左マークを \chapter、右マークを \section で変更する場合がこれにあたります。しかし、同一ページに複数の \markboth があると、おかしな結果になることがあります。

\tableofcontents のような命令で使われる \@mkboth は, \ps@... コマンド中で \markboth か \@gobbletwo (何もしない) に \let されます。

```
1584 \% \left( \frac{ps@empty{\%}}{} \right)
```

- 1585 % \let\@mkboth\@gobbletwo
- 1586 % \let\@oddhead\@empty
- 1587 % \let\@oddfoot\@empty
- 1588 % \let\@evenhead\@empty
- 1589 % \let\@evenfoot\@empty}

\ps@plainhead plainhead はシンプルなヘッダだけのページスタイルです。

\ps@plainfoot plainfoot はシンプルなフッタだけのページスタイルです。

\ps@plain plain は book では plainhead, それ以外では plainfoot になります。

- 1590 \def\ps@plainfoot{%
- 1591 \let\@mkboth\@gobbletwo
- 1592 \let\@oddhead\@empty
- $1593 \qquad \texttt{\def\@oddfoot{\normalfont\hfil\thepage\hfil}\%}$
- 1594 \let\@evenhead\@empty
- 1595 \let\@evenfoot\@oddfoot}
- 1596 \def\ps@plainhead{%
- 1597 \let\@mkboth\@gobbletwo
- 1598 \let\@oddfoot\@empty
- 1599 \let\@evenfoot\@empty
- 1600 \def\@evenhead{%
- 1601 \if@mparswitch \hss \fi
- 1602 \hbox to \fullwidth{\textbf{\thepage}\hfil}%
- 1603 \if@mparswitch\else \hss \fi}%
- 1604 \def\@oddhead{%
- 1605 \hbox to \fullwidth{\hfil\textbf{\thepage}}\hss}}
- 1606 % <book > \let\ps@plain\ps@plainhead
- 1607 %<!book>\let\ps@plain\ps@plainfoot

\ps@headings headings スタイルはヘッダに見出しとページ番号を出力します。ここではヘッダにアン ダーラインを引くようにしてみました。

まず article の場合です。

- 1608 %<*article|slide>
- $1609 \footnotemark$ 1609 \if@twoside
- $1610 \quad \texttt{\def\ps@headings}\{\%$
- 1611 \let\@oddfoot\@empty
- 1612 \let\@evenfoot\@empty
- 1613 \def\@evenhead{\if@mparswitch \hss \fi
- 1614 \underline{\hbox to \fullwidth{\textbf{\thepage}\hfil\leftmark}}%

```
1615
         \if@mparswitch\else \hss \fi}%
1616
       \def\@oddhead{%
1617
         \underline{%
           \hbox to \fullwidth{{\rightmark}\hfil\textbf{\thepage}}}\hss}%
1618
1619
       \let\@mkboth\markboth
       \def\sectionmark##1{\markboth{%
1620
          1621
1622
          ##1}{}}%
       \def\subsectionmark##1{\markright{%
1623
          \ifnum \c@secnumdepth >\@ne \bxjs@label@sect{subsection}\hskip1\jsZw\fi
1624
          ##1}}%
1625
1626
1627 \else % if not twoside
     \def\ps@headings{%
1628
       \let\@oddfoot\@empty
1629
       \def\@oddhead{%
1630
         \underline{%
1631
           \hbox to \fullwidth{{\rightmark}\hfil\textbf{\thepage}}}\hss}%
1632
1633
       \let\@mkboth\markboth
       \def\sectionmark##1{\markright{%
1634
           \ifnum \c@secnumdepth >\z@ \bxjs@label@sect{section}\hskip1\jsZw\fi
1636
1637 \fi
1638 %</article|slide>
```

次は book および report の場合です。[2011-05-10] しっぽ愛好家さん [qa:6370] のパッチを取り込ませていただきました(北見さん [qa:55896] のご指摘ありがとうございます)。

\autoxspacing は未定義の可能性があるため、「\autoxspacing が定義済なら実行する」マクロ \bxjs@maybe@autoxspacing を代わりに用いる。

```
1639 %<*book|report>
1640 \def\bxjs@maybe@autoxspacing{%
      \ifx\autoxspacing\@undefined\else \autoxspacing \fi}
1642 \verb|\newif\if@omit@number|
1643 \def\ps@headings{%
      \let\@oddfoot\@empty
1644
      \let\@evenfoot\@empty
1645
      \def\@evenhead{%
        \if@mparswitch \hss \fi
1647
1648
        \underline{\hbox to \fullwidth{\bxjs@maybe@autoxspacing
1649
            \textbf{\thepage}\hfil\leftmark}}%
        \if@mparswitch\else \hss \fi}%
1650
      \def\@oddhead{\underline{\hbox to \fullwidth{\bxjs@maybe@autoxspacing
1652
            {\if@twoside\rightmark\else\leftmark\fi}\hfil\textbf{\thepage}}}\hss}%
      \let\@mkboth\markboth
1653
1654
      \def\chaptermark##1{\markboth{%
        \ifnum \c@secnumdepth >\m@ne
1655
```

```
\if@mainmatter
            1657
                      \if@omit@number\else
            1658
                        \@chapapp\thechapter\@chappos\hskip1\jsZw
                      \fi
            1659
                     \fi
            1660
                   \fi
            1661
                   ##1}{}}%
            1662
                 \def\sectionmark##1{\markright{%
                   1664
            1665
            1666 %</book|report>
               最後は学会誌の場合です。
            1667 %<*jspf>
            1668 \def\ps@headings{%}
                 \def\@oddfoot{\normalfont\hfil\thepage\hfil}
            1669
                 \def\@evenfoot{\normalfont\hfil\thepage\hfil}
                 \def\@oddhead{\normalfont\hfil \@title \hfil}
            1672 \def\@evenhead{\normalfont\hfil プラズマ・核融合学会誌\hfil}}
            1673 %</jspf>
\ps@myheadings myheadings ページスタイルではユーザが \markboth や \markright で柱を設定するた
             め,ここでの定義は非常に簡単です。
               [2004-01-17] 渡辺徹さんのパッチを適用しました。
            1674 \def\ps@myheadings{%
                 \let\@oddfoot\@empty\let\@evenfoot\@empty
                 \def\@evenhead{%
            1676
            1677
                   \if@mparswitch \hss \fi%
            1678
                   \hbox to \fullwidth{\thepage\hfil\leftmark}%
                   \if@mparswitch\else \hss \fi}%
            1679
            1680
                \def\@oddhead{%
                   1681
                 \let\@mkboth\@gobbletwo
            1683 % <book | report > \let\chaptermark \@gobble
                 \let\sectionmark\@gobble
            1685 %<!book&!report> \let\subsectionmark\@gobble
            1686 }
```

文書のマークアップ

8.1 表題

1656

\title これらは LATEX 本体で次のように定義されています。ここではコメントアウトした形で示し \author \$\footnote{\text{s}}\$.

```
\date 1687 % \newcommand*{\title}[1]{\gdef\@title{#1}}
     1688 % \newcommand*{\author}[1]{\gdef\@author{#1}}
     1689 % \newcommand*{\date}[1]{\gdef\@date{#1}}
```

```
\subtitle 副題を設定する。
                                                                                %プレアンブルにおいて \newcommand*{\subtitle}{...} が行われることへの対策とし
                                           \jsSubtitle
                                                                                   て、\subtitle の定義を \title の実行まで遅延させることにする。もしどうしても主題
                                                                                    より前に副題を設定したい場合は、\jsSubtitle 命令を直接用いればよい。
                                                                                         本体を \jsSubtitle として定義する。
                                                                              1691 \newcommand*{\jsSubtitle}[1]{\gdef\bxjs@subtitle{#1}}
                                                                              1692 %\let\bxjs@subtitle\@undefined
                                                                                         \title にフックを入れる。
                                                                             1693 \renewcommand*{\title}[1]{\bxjs@decl@subtitle\gdef\@title{#1}}
                                                                              1694 \verb|\gCaddtoCmacro\bxjsCbeginCdocumentChook{\bxjsCdeclCsubtitle}|
                                                                              1695 \def\bxjs@decl@subtitle{%
                                                                                               \global\let\bxjs@decl@subtitle\relax
                                                                                               \ifx\subtitle\@undefined
                                                                             1697
                                                                              1698
                                                                                                      \global\let\subtitle\jsSubtitle
                                                                              1699
\bxjs@annihilate@subtitle \subtitle 命令を無効化する。
                                                                                   ※独自の\subtitle が使われている場合は無効化しない。
                                                                             1700 \def\bxjs@annihilate@subtitle{%
                                                                                               \ifx\subtitle\jsSubtitle \global\let\subtitle\relax \fi
                                                                                               \global\let\jsSubtitle\relax}
                                                       \etitle 某学会誌スタイルで使う英語のタイトル,英語の著者名,キーワード,メールアドレスです。
                                                    \eauthor 1703 %<*jspf>
                                                 \label{eq:local_local_local_local_local} $$1704 \rightarrow {\text{local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local
                                                                              1705 \newcommand*{\eauthor}[1]{\gdef\@eauthor{#1}}
                                                                             1706 \ensuremath{\ensuremath{\mbox{\command*{\location{\command*{\location{\command*{\location{\command*{\location{\command*{\command*{\location{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*{\command*
                                                                             1707 \newcommand*{\email}[1]{\gdef\authors@mail{#1}}
                                                                             1708 \mbox{\tauthorsEmail}[1]{\def\authors@mail{author's e-mail:} $\#1}}
                                                                             1709 %</jspf>
                            \plainifnotempty 従来の標準クラスでは、文書全体のページスタイルを empty にしても表題のあるページだけ
                                                                                  plain になってしまうことがありました。これは \maketitle の定義中に \thispagestyle
                                                                                   {plain} が入っているためです。この問題を解決するために、「全体のページスタイルが
                                                                                   empty でないならこのページのスタイルを plain にする」という次の命令を作ることにし
                                                                                    ます。
                                                                             1710 \def\plainifnotempty{%
                                                                             1711 \ifx \@oddhead \@empty
                                                                                                     \ifx \@oddfoot \@empty
                                                                             1712
                                                                                                     \else
                                                                             1713
                                                                             1714
                                                                                                            \thispagestyle{plainfoot}%
```

```
1715 \fi
1716 \else
1717 \thispagestyle{plainhead}%
1718 \fi}
表類を出力します。薬老名を出力する
```

\maketitle 表題を出力します。著者名を出力する部分は、欧文の標準クラスファイルでは \large, 和 文のものでは \Large になっていましたが、ここでは \large にしました。

[2016-11-16] 新設された nomag および nomag* オプションの場合をデフォルト (usemag 相当) に合わせるため、\smallskip を\jsc@smallskip に置き換えました。\smallskip のままでは nomag(*) の場合にスケールしなくなり、レイアウトが変わってしまいます。

```
1719 %<*article|book|report|slide>
1720 \if@titlepage
1721
                    \newcommand{\maketitle}{%
1722
                            \begin{titlepage}%
                                  \let\footnotesize\small
1723
                                  \let\footnoterule\relax
1724
                                  1725
                                  \null\vfil
1726
1727
                                  \if@slide
                                          {\footnotesize \@date}%
1728
1729
                                          \begin{center}
1730
                                                \mathbb{T} \setminus \mathbb{T} 
1731
                                                \large
                                                {\maybeblue\hrule height0\p0? depth2\p0?\relax}\par
1732
1733
                                                \jsc@smallskip
                                                \@title
1734
1735
                                                \ifx\bxjs@subtitle\@undefined\else
                                                       \par\vskip\z@
1736
                                                       {\small \bxjs@subtitle\par}
1737
1738
                                                \jsc@smallskip
1739
1740
                                                {\maybeblue\hrule height0\p@? depth2\p@?\relax}\par
                                                \vfill
1741
1742
                                                {\small \@author}%
                                          \end{center}
1743
                                  \else
1744
                                  \wedge 60\p0?
1745
1746
                                  \begin{center}%
                                          {\LARGE \@title \par}%
1747
1748
                                          \ifx\bxjs@subtitle\@undefined\else
                                                \space{1mm} \spa
1749
                                                {\normalsize \bxjs@subtitle\par}
1750
                                          \fi
1751
                                          \vskip 3em%
1752
1753
                                          {\large
                                                \lineskip .75em
1754
                                                \begin{tabular}[t]{c}%
1755
                                                       \@author
1756
```

```
\end{tabular}\par}%
1757
1758
            \vskip 1.5em
1759
            {\large \@date \par}%
          \end{center}%
1760
1761
1762
          \par
          \@thanks\vfil\null
1763
1764
        \end{titlepage}%
        \setcounter{footnote}{0}%
1765
        \global\let\thanks\relax
1766
1767
        \global\let\maketitle\relax
        \global\let\@thanks\@empty
1768
        \global\let\@author\@empty
1769
        \global\let\@date\@empty
1770
        \global\let\@title\@empty
1771
1772
        \global\let\title\relax
        \global\let\author\relax
1773
        \global\let\date\relax
1774
        \verb|\global\let\and\relax| \\
1775
        \bxjs@annihilate@subtitle
1776
1777
      }%
1778 \else
1779
      \newcommand{\maketitle}{\par
1780
        \begingroup
          \renewcommand\thefootnote{\@fnsymbol\c@footnote}%
1781
1782
          \def\@makefnmark{\rlap{\@textsuperscript{\normalfont\@thefnmark}}}%
          \long\def\@makefntext##1{\advance\leftskip 3\jsZw
1783
1784
             \parindent 1\jsZw\noindent
1785
             \llap{\@textsuperscript{\normalfont\@thefnmark}\hskip0.3\jsZw}##1}%
          \if@twocolumn
1786
            \ifnum \col@number=\@ne
1787
1788
               \@maketitle
            \else
1789
1790
               \twocolumn[\@maketitle]%
            \fi
1791
1792
          \else
1793
             \global\@topnum\z@ % Prevents figures from going at top of page.
1794
            \@maketitle
1795
1796
1797
          \plainifnotempty
1798
          \@thanks
        \endgroup
1799
        \setcounter{footnote}{0}%
1800
1801
        \global\let\thanks\relax
1802
        \global\let\maketitle\relax
1803
        \global\let\@thanks\@empty
        \global\let\@author\@empty
1804
1805
        \global\let\@date\@empty
```

```
1806
                                                \global\let\@title\@empty
                            1807
                                                \global\let\title\relax
                            1808
                                                \global\let\author\relax
                                                \global\let\date\relax
                            1809
                                                \global\let\and\relax
                            1810
                                                \bxjs@annihilate@subtitle
                            1811
                            1812
\@maketitle 独立した表題ページを作らない場合の表題の出力形式です。
                                           \def\@maketitle{%
                            1814
                                                \newpage\null
                            1815
                                                \vskip 2em
                                                \begin{center}%
                            1816
                                                     \let\footnote\thanks
                            1817
                            1818
                                                     {\LARGE \@title \par}%
                            1819
                                                     \ifx\bxjs@subtitle\@undefined\else
                                                          \space{2.5cm} 
                            1820
                                                          {\normalsize \bxjs@subtitle\par}
                            1821
                            1822
                                                     \fi
                                                     \vskip 1.5em
                            1823
                            1824
                                                     {\large
                                                          \lineskip .5em
                            1825
                                                          \begin{tabular}[t]{c}{\%}
                            1826
                                                               \@author
                            1827
                                                          \end{tabular}\par}%
                            1828
                                                     \vskip 1em
                            1829
                                                     {\large \@date}%
                            1830
                            1831
                                                \end{center}%
                            1832
                                                \par\vskip 1.5em
                            1833 %<article|slide>
                                                                                        \ifvoid\@abstractbox\else\centerline{\box\@abstractbox}\vskip1.5em\fi
                            1834 }
                            1835 \fi
                            1836 %</article|book|report|slide>
                            1837 %<*jspf>
                            1839
                                          \begingroup
                                                \renewcommand\thefootnote{\@fnsymbol\c@footnote}%
                            1840
                                                1841
                            1842
                                                \long\def\@makefntext##1{\advance\leftskip 3\jsZw
                                                     \parindent 1\jsZw\noindent
                            1843
                            1844
                                                     \label{lap(0)} $$ \sim {\mathbb \mathbb{Z}_w}\#1}% $$
                            1845
                                                     \twocolumn[\@maketitle]%
                            1846
                                                \plainifnotempty
                                                \@thanks
                            1847
                            1848
                                           \endgroup
                                           \setcounter{footnote}{0}%
                            1849
                                           \global\let\thanks\relax
                                           \global\let\maketitle\relax
                            1851
                            1852
                                           \global\let\@thanks\@empty
```

```
1853
                           \global\let\@author\@empty
1854
                           \global\let\@date\@empty
1855 % \global\let\@title\@empty % \@title は柱に使う
                           \global\let\title\relax
1856
                           \global\let\author\relax
1857
                          \verb|\global| let \\| date \\| relax|
1858
                           \global\let\and\relax
1859
1860
                           \label{lem:condition} $$  \if x \ \ \end{\cond} \ \ \ \end{\cond} $$  \ \ \end{\cond} $$  \ \ \end{\cond} $$  \ \end{\cond} $$\ \end{\cond} $$\ \ \end{\cond} $\ \ \end{\cond} $$\ \ \end{\cond} $\ \ \end{\cond} $\ \ \end{\cond} $\ \ \end{\cond} 
                                   \def\@makefntext{\advance\leftskip 3\jsZw \parindent -3\jsZw}%
1861
                                   \footnotetext[0]{\itshape\authors@mail}%
1862
 1863
                           \global\let\authors@mail\@undefined}
1864
\newpage\null
1866
1867
                           \vskip 6em % used to be 2em
 1868
                           \begin{center}
                                   \let\footnote\thanks
1869
                                   \label{large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-lar
1870
1871
                                   \lineskip .5em
                                   \ifx\@author\@undefined\else
1872
1873
                                             \vskip 1em
                                             \begin{tabular}[t]{c}%
1874
1875
                                                      \@author
                                             \end{tabular}\par
1876
                                   \fi
1877
                                   \ifx\@etitle\@undefined\else
1878
                                             \vskip 1em
1879
1880
                                             {\large \@etitle \par}%
 1881
                                   \ifx\@eauthor\@undefined\else
1882
                                             \vskip 1em
1883
 1884
                                             \begin{tabular}[t]{c}%
                                                      \@eauthor
1885
1886
                                             \end{tabular}\par
                                   \fi
1887
1888
                                   \vskip 1em
                                   \@date
1889
                           \end{center}
1890
1891
                           \vskip 1.5em
                           \centerline{\box\@abstractbox}
1892
1893
                           \ifx\@keywords\@undefined\else
 1894
                                   \vskip 1.5em
                                   \centerline{\parbox{157\jsc@mmm}{\texttextsf{Keywords:}}\ \scite{Constraints}}
1895
                           \fi
1896
 1897
                          \vskip 1.5em}
1898 %</jspf>
```

ムニャムニャ……。

\bxjs@label@sect 節付 #1 の番号を出力する。節付 XXX に対して、\labelXXX が定義済ならそれが出力書式を表す。未定義ならばカウンタの出力書式 \theXXX が使われる。

1899 \def\bxjs@label@sect#1{%

1900 \expandafter\ifx\csname label#1\endcsname\relax

1901 \csname the#1\endcsname

1902 \else \csname label#1\endcsname

1903 \fi}

 $1904 \end{tabular} $$1904 \e$

\@secapp 節番号の接頭辞。

\@secpos 節番号の接尾辞。

 $1905 \verb|\finum\bxjs@label@section=\bxjs@label@section@compat\else| \\$

 $1906 \ensuremath{\verb| def @secapp{\presectionname|}}$

1907 \def\@secpos{\postsectionname}

1908 \fi

\labelsection 節番号の出力書式。

1909 \ifnum\bxjs@label@section=\bxjs@label@section@modern

1910 \def\labelsection{\@secapp\thesection\@secpos}

1911 \fi

■構成要素 \@startsection マクロは 6 個の必須引数と、オプションとして * と 1 個のオプション引数と 1 個の必須引数をとります。

\@startsection{名}{レベル}{字下げ}{前アキ}{後アキ}{スタイル} * [別見出し] {見出し}

それぞれの引数の意味は次の通りです。

名 ユーザレベルコマンドの名前です(例: section)。

レベル 見出しの深さを示す数値です (chapter=1, section=2, ...)。この数値が secnumdepth 以下のとき見出し番号を出力します。

字下げ 見出しの字下げ量です。

前アキ この値の絶対値が見出し上側の空きです。負の場合は、見出し直後の段落をインデントしません。

後アキ 正の場合は、見出しの下の空きです。負の場合は、絶対値が見出しの右の空きです (見出しと同じ行から本文を始めます)。

スタイル 見出しの文字スタイルの設定です。

* この * 印がないと,見出し番号を付け,見出し番号のカウンタに 1 を加算します。 別見出し 目次や柱に出力する見出しです。

見出し 見出しです。

見出しの命令は通常 \@startsection とその最初の 6 個の引数として定義されます。 次は \@startsection の定義です。情報処理学会論文誌スタイルファイル (ipsjcommon.sty) を参考にさせていただきましたが、完全に行送りが \baselineskip の整数倍にならなくてもいいから前の行と重ならないようにしました。

```
1912 \def\@startsection#1#2#3#4#5#6{%
     \if@noskipsec \leavevmode \fi
1914
     \par
1915 % 見出し上の空きを \@tempskipa にセットする
1916 \@tempskipa #4\relax
1917 % \@afterindent は見出し直後の段落を字下げするかどうかを表すスイッチ
    \if@english \@afterindentfalse \else \@afterindenttrue \fi
1919 % 見出し上の空きが負なら見出し直後の段落を字下げしない
    \ifdim \@tempskipa <\z@
       \@tempskipa -\@tempskipa \@afterindentfalse
1921
1922
     \if@nobreak
1923
       \everypar{\everyparhook}% これは間違い
1924 %
1925
       \everypar{}%
1926
     \else
       \addpenalty\@secpenalty
1927
1928%次の行は削除
      \addvspace\@tempskipa
1929 %
1930%次の \noindent まで追加
1931
       \ifdim \@tempskipa >\z@
         \if@slide\else
1932
1933
           \vspace*{-\baselineskip}%
1934
1935
         \vskip\@tempskipa
1936
1937
       \fi
1938
     \fi
1939
     \noindent
1940% 追加終わり
1941 \@ifstar
       {\c {\c 43}{\#4}{\#5}{\#6}}%
1942
1943
       {\d}^{\d}_{\d}^{\#4}_{\#5}_{\#6}}
```

\@sect と \@xsect は、前のアキがちょうどゼロの場合にもうまくいくように、多少変えてあります。\everyparhook も挿入しています。

\everyparhook の挿入は everyparhook=compat の時のみ行う。

\bxjs@if@ceph everyparhook=compat である場合にのみ直後のトークンを実行する。

```
1944 \ifnum\bxjs@everyparhook=\bxjs@everyparhook@compat
1945 \let\bxjs@if@ceph\@firstofone
1946 \else \let\bxjs@if@ceph\@gobble
1947 \fi
```

```
1948 \def\@sect#1#2#3#4#5#6[#7]#8{%
      \ifnum #2>\c@secnumdepth
        \let\@svsec\@empty
1950
1951
     \else
        \refstepcounter{#1}%
1952
        \protected@edef\@svsec{\@seccntformat{#1}\relax}%
1953
1954
1955 % 見出し後の空きを \@tempskipa にセット
      \@tempskipa #5\relax
1957 % 条件判断の順序を入れ換えました
     \ifdim \@tempskipa<\z@
1958
        \def\@svsechd{%
1959
          #6{\hskip #3\relax
1960
1961
          \@svsec #8}%
1962
          \csname #1mark\endcsname{#7}%
          \addcontentsline{toc}{#1}{%
1963
1964
            \ifnum #2>\c@secnumdepth \else
              \protect\numberline{\bxjs@label@sect{#1}}%
1965
1966
            \fi
            #7}}% 目次にフルネームを載せるなら #8
1967
1968
     \else
1969
        \begingroup
          \interlinepenalty \@M % 下から移動
1970
          #6{%
1971
1972
            \@hangfrom{\hskip #3\relax\@svsec}%
1973 %
            \interlinepenalty \@M % 上に移動
            #8\@@par}%
1974
1975
        \endgroup
        \csname #1mark\endcsname{#7}%
1976
1977
        \addcontentsline{toc}{#1}{%
          \ifnum #2>\c@secnumdepth \else
1978
1979
            \protect\numberline{\bxjs@label@sect{#1}}%
          #7}% 目次にフルネームを載せるならここは #8
1981
1982
      \fi
      \0xsect{#5}}
1983
```

二つ挿入した \everyparhook のうち後者が \paragraph 類の後で 2 回実行され、それ 以降は前者が実行されます。

[2016-07-28] slide オプションと twocolumn オプションを同時に指定した場合の罫線の位置を微調整しました。

```
1984 \def\@xsect#1{%
1985 % 見出しの後ろの空きを \@tempskipa にセット
```

```
1986
                         \@tempskipa #1\relax
                  1987 % 条件判断の順序を変えました
                         \ifdim \@tempskipa<\z@
                           \@nobreakfalse
                  1989
                           \global\@noskipsectrue
                  1990
                          \everypar{%
                  1991
                             \if@noskipsec
                  1992
                  1993
                               \global\@noskipsecfalse
                              {\setbox\z@\lastbox}%
                  1994
                               \clubpenalty\@M
                  1995
                               \begingroup \@svsechd \endgroup
                   1996
                               \unskip
                  1997
                               \@tempskipa #1\relax
                  1998
                               \hskip -\@tempskipa
                  1999
                  2000
                  2001
                               \clubpenalty \@clubpenalty
                               \everypar\expandafter{\bxjs@if@ceph\everyparhook}%
                  2002
                             \fi\bxjs@if@ceph\everyparhook}%
                  2003
                  2004
                         \else
                           \par \nobreak
                  2005
                  2006
                           \vskip \@tempskipa
                           \@afterheading
                  2007
                  2008
                        \fi
                         \if@slide
                  2009
                           {\vskip\if@twocolumn-5\jsc@mpt\else-6\jsc@mpt\fi
                  2010
                  2011
                            \maybeblue\hrule height0\jsc@mpt depth1\jsc@mpt
                            \vskip\if@twocolumn 4\jsc@mpt\else 7\jsc@mpt\fi\relax}%
                  2012
                  2013
                         \fi
                  2014
                         \par % 2000-12-18
                  2015
                         \ignorespaces}
                  2016 \def\@ssect#1#2#3#4#5{%
                  2017
                         \@tempskipa #3\relax
                         \ifdim \@tempskipa<\z@
                  2018
                  2019
                          \def\0svsechd{#4{\hskip #1\relax #5}}%
                  2020
                        \else
                  2021
                          \begingroup
                             #4{%
                  2022
                  2023
                               \@hangfrom{\hskip #1}%
                  2024
                                 \interlinepenalty \@M #5\@@par}%
                  2025
                          \endgroup
                  2026
                         \0xsect{#3}}
                  2027
                    ■柱関係の命令
      \chaptermark \...mark の形の命令を初期化します(第7節参照)。\chaptermark 以外は LATEX 本体で
      \sectionmark 定義済みです。
  \verb|\subsectionmark| 2028 \verb|\newcommand*\chaptermark[1]{}|
                  2029 % \newcommand*{\sectionmark}[1]{}
\subsubsectionmark
    \paragraphmark
                                                             74
\subparagraphmark
```

```
2031 % \newcommand*{\subsubsectionmark}[1]{}
                                  2032 % \newcommand*{\paragraphmark}[1]{}
                                  2033 % \newcommand*{\subparagraphmark}[1]{}
                                     ■カウンタの定義
     \c@secnumdepth secnumdepth は第何レベルの見出しまで番号を付けるかを決めるカウンタです。
                                  2034 %<!book&!report>\setcounter{secnumdepth}{3}
                                  2035 % <book | report > \setcounter { secnumdepth } {2}
             \c@chapter 見出し番号のカウンタです。\newcounter の第1引数が新たに作るカウンタです。これは
             \cosection 第2引数が増加するたびに0に戻されます。第2引数は定義済みのカウンタです。
        \c@subsection 2036 \newcounter{part}
  \c@subsubsection 2037 % \cook|report>\newcounter{chapter} \counter{section}[chapter]
         \verb|\c@paragraph|_{2039} % < !book&!report> \verb|\newcounter{section}| \\
    \c@subparagraph 2040 \newcounter{subsection} [section]
                                  2041 \newcounter{subsubsection} [subsection]
                                  2042 \newcounter{paragraph}[subsubsection]
                                  2043 \newcounter{subparagraph} [paragraph]
                 \thepart カウンタの値を出力する命令 \the 何々 を定義します。
                                         カウンタを出力するコマンドには次のものがあります。
           \thechapter
           \thesection
                                                 \arabic{COUNTER}
                                                                                         1, 2, 3, ...
     \thesubsection
                                                                                         i, ii, iii, ...
                                                 \roman{COUNTER}
\thesubsubsection
                                                 \Roman{COUNTER}
                                                                                          I, II, III, ...
        \theparagraph
                                                                                         a, b, c, ...
                                                 \alph{COUNTER}
  \thesubparagraph
                                                                                            A, B, C, ...
                                                 \Alph{COUNTER}
                                                                                         一, 二, 三, ...
                                                 \kansuji{COUNTER}
                                         以下ではスペース節約のため @ の付いた内部表現を多用しています。
                                  2044 \renewcommand{\thepart}{\@Roman\c@part}
                                  2045 %<*!book&!report>
                                  2046 \ifnum\bxjs@label@section=\bxjs@label@section@compat
                                  2047 \verb|\renewcommand{\thesection}] {\tt presectionname} (Carabic \verb|\color= carabic | Color= carabic | Color=
                                  2048 \renewcommand{\thesubsection}{\Qarabic\cQsection.\Qarabic\cQsubsection}
                                  2049 \else
                                  2050 \renewcommand{\thesection}{\@arabic\c@section}
                                  2052 \fi
                                  2053 %</!book&!report>
                                  2054 %<*book|report>
                                  2055 \renewcommand{\thechapter}{\@arabic\c@chapter}
                                  2056 \label{thesection} {\tt thesection} {\tt thechapter. \color= constraints} \\
                                  2057 \renewcommand{\the subsection} {\the section . \Qarabic \cQsubsection}
```

2030 % \newcommand*{\subsectionmark}[1]{}

```
2058 %</book|report>
                       2059 \renewcommand{\thesubsubsection}{%
                                     \thesubsection.\@arabic\c@subsubsection}
                       2061 \renewcommand{\theparagraph}{%
                                     \thesubsubsection.\@arabic\c@paragraph}
                       2063 \renewcommand{\thesubparagraph}{%
                                     \theparagraph.\@arabic\c@subparagraph}
                       2064
                          \@chapapp の初期値は \prechaptername (第) です。
     \@chapapp
                               \Ochappos の初期値は \postchaptername(章)です。
     \@chappos
                               \appendix は \@chapapp を \appendixname に, \@chappos を空に再定義します。
                               [2003-03-02] \@secapp は外しました。
                       2066 % \content = 1000 \cont
                           ■前付,本文,後付 本のうち章番号があるのが「本文」,それ以外が「前付」「後付」です。
\frontmatter ページ番号をローマ数字にし、章番号を付けないようにします。
                               [2017-03-05] \frontmatter と \mainmatter の 2 つの命令は、改丁または改ページした
                           後で \pagenumbering{...} でノンブルを1にリセットします。長い間 \pagenumbering
                          openany のときに単なる改ページとしていましたが、これではノンブルをリセットする際に
                          偶奇逆転が起こる場合がありました。openany かどうかに依らず奇数ページまで繰るように
                          修正することで、問題を解消しました。実は、IATFX の標準クラスでは 1998 年に修正され
                           ていた問題です(コミュニティ版 pIATeX の標準クラス 2017/03/05 も参照)。
                       2067 %<*book|report>
                       2068 \newcommand\frontmatter{%
                       2069
                                   \pltx@cleartooddpage
                       2070
                                   \@mainmatterfalse
                                   \pagenumbering{roman}}
 \mainmatter ページ番号を算用数字にし、章番号を付けるようにします。
                       2072 \newcommand\mainmatter{%
                                  \pltx@cleartooddpage
                                   \@mainmattertrue
                       2074
                                   \pagenumbering{arabic}}
 \backmatter 章番号を付けないようにします。ページ番号の付け方は変わりません。
                       2076 \newcommand\backmatter{%
                       2077
                                  \if@openleft
                       2078
                                      \cleardoublepage
                       2079
                                   \else\if@openright
                                      \cleardoublepage
                       2080
                       2081
                                  \else
                       2082
                                      \clearpage
                       2083
                                  \fi\fi
                                 \@mainmatterfalse}
                       2084
```

2085 %</book|report>

■部

\else

 $\null\vfil$

2112 %</book|report>

\fi

\@restonecolfalse

\secdef\@part\@spart}

2107 2108

2109

\part 新しい部を始めます。 \secdef を使って見出しを定義しています。このマクロは二つの引数をとります。 \secdef{星なし}{星あり} 星なし * のない形の定義です。 星あり * のある形の定義です。 \secdef は次のようにして使います。 \def\chapter { ... \secdef \CMDA \CMDB } [#1]#2{....} % \chapter[...]{...} の定義 \def\CMDA \def\CMDB % \chapter*{...} の定義 #1{....} まず book と report のクラス以外です。 2086 %<*!book&!report> 2087 \newcommand\part{% \if@noskipsec \leavevmode \fi 2089 \par 2090 \addvspace{4ex}% \if@english \@afterindentfalse \else \@afterindenttrue \fi \secdef\@part\@spart} 2093 %</!book&!report> book および report クラスの場合は、少し複雑です。 2094 %<*book|report> 2095 \newcommand\part{% \if@openleft 2096 \cleardoublepage 2097 \else\if@openright \cleardoublepage 2099 \else 2100 2101\clearpage \fi\fi 2102 \thispagestyle{empty}% 欧文用標準スタイルでは plain \if@twocolumn 2104 \onecolumn 2105 2106 \@restonecoltrue

\@part 部の見出しを出力します。\bfseries を \headfont に変えました。 book および report クラス以外では secnumdepth が -1 より大きいとき部番号を付け

```
ます。
2113 %<*!book&!report>
2114 \def\@part[#1]#2{%
     \ifnum \c@secnumdepth >\m@ne
2115
2116
        \refstepcounter{part}%
        \addcontentsline{toc}{part}{%
2117
2118
          \prepartname \the part \postpartname \hspace {1 jsZw} \#1} \%
2119
     \else
2120
        \addcontentsline{toc}{part}{#1}%
2121
      \markboth{}{}%
2122
2123
     {\parindent\z@
2124
        \raggedright
        \interlinepenalty \@M
2125
        \normalfont
2126
        \ifnum \c@secnumdepth >\m@ne
2127
2128
          \verb|\Large\headfont\prepartname\thepart\postpartname| \\
2129
          \par\nobreak
        \fi
2130
2131
        \huge \headfont #2%
        \markboth{}{}\par}%
2132
2133
      \nobreak
      \vskip 3ex
2135
     \@afterheading}
2136 %</!book&!report>
   book および report クラスでは secnumdepth が -2 より大きいとき部番号を付けます。
2137 %<*book|report>
2138 \def\@part[#1]#2{%
     \ifnum \c@secnumdepth >-2\relax
2139
2140
        \refstepcounter{part}%
        \addcontentsline{toc}{part}{%
2141
2142
          2143
     \else
        \addcontentsline{toc}{part}{#1}%
2144
2145
     \markboth{}{}%
2146
     {\centering
2147
        \interlinepenalty \@M
2148
2149
        \normalfont
2150
        \ifnum \c@secnumdepth >-2\relax
2151
          \huge\headfont \prepartname\thepart\postpartname
          \par\vskip20\p@?
2152
2153
        \Huge \headfont #2\par}%
2154
      \@endpart}
2156 %</book|report>
```

78

\@spart 番号を付けない部です。

```
2157 %<*!book&!report>
2158 \def\@spart#1{{%
        \parindent \z@ \raggedright
2160
        \interlinepenalty \@M
        \normalfont
2161
        \huge \headfont #1\par}%
2162
      \nobreak
2163
2164
      \vskip 3ex
      \@afterheading}
2165
2166 %</!book&!report>
2167 %<*book|report>
2168 \def\@spart#1{{%
        \centering
        \interlinepenalty \@M
2170
2171
        \normalfont
2172
        \Huge \headfont #1\par}%
2173 \@endpart}
2174 %</book|report>
```

\@endpart \@part と \@spart の最後で実行されるマクロです。両面印刷のときは白ページを追加します。二段組のときには、二段組に戻します。

[2016-12-13] openany のときには白ページが追加されるのは変なので、その場合は追加しないようにしました。このバグは \LaTeX では classes.dtx v1.4b (2000/05/19) で修正されています。

```
2175 %<*book|report>
2176 \def\@endpart{\vfil\newpage
2177
      \if@twoside
      \if@openleft %% added (2017/02/24)
2178
       \null\thispagestyle{empty}\newpage
2179
       \else\if@openright %% added (2016/12/13)
2180
       \null\thispagestyle{empty}\newpage
2181
2182
       \fi\fi \% added (2016/12/13, 2017/02/24)
2183
2184
      \if@restonecol
2185
        \twocolumn
     \fi}
2186
2187 %</book|report>
```

■章

\chapter 章の最初のページスタイルは、全体が empty でなければ plain にします。また、\@topnum を 0 にして、章見出しの上に図や表が来ないようにします。

```
2188 %<*book|report>
2189 \newcommand{\chapter}{%
2190 \if@openleft\cleardoublepage\else\clearpage\fi\fi
2191 \plainifnotempty % 元: \thispagestyle{plain}
```

```
2194
                       \if@english \@afterindentfalse \else \@afterindenttrue \fi
                 2195
                         {\@omit@numberfalse\@chapter}%
                 2196
                         {\@omit@numbertrue\@schapter}}
                 2197
       \@chapter 章見出しを出力します。secnumdepth が 0 以上かつ \@mainmatter が真のとき章番号を出
                  力します。
                 2198 \def\@chapter[#1]#2{%
                 2199
                       \ifnum \c@secnumdepth >\m@ne
                         \if@mainmatter
                 2200
                 2201
                           \refstepcounter{chapter}%
                           \typeout{\@chapapp\thechapter\@chappos}%
                 2202
                 2203
                           \addcontentsline{toc}{chapter}%
                             {\protect\numberline
                 2204
                             {\tilde \varphi}_{if@english\thechapter\else\@chapapp\thechapter\@chapaps\fi}\
                 2205 %
                 2206
                             {\@chapapp\thechapter\@chappos}%
                 2207
                             #1}%
                         \else\addcontentsline{toc}{chapter}{#1}\fi
                 2208
                 2209
                         \addcontentsline{toc}{chapter}{#1}%
                 2210
                 2211
                 2212
                       \chaptermark{#1}%
                       \addtocontents{lof}{\protect\addvspace{10\jsc@mpt}}%
                 2213
                       \addtocontents{lot}{\protect\addvspace{10\jsc@mpt}}%
                 2214
                 2215
                       \if@twocolumn
                         \@topnewpage[\@makechapterhead{#2}]%
                 2216
                 2217
                 2218
                         \mbox{\colored}
                         \@afterheading
                 2219
                 2220
                       fi
\@makechapterhead 実際に章見出しを組み立てます。\bfseries を \headfont に変えました。
                 2221 \def\@makechapterhead#1{%
                       \vspace*{2\Cvs}% 欧文は50pt
                       {\parindent \z@ \raggedright \normalfont
                 2223
                         \ifnum \c@secnumdepth >\m@ne
                 2224
                 2225
                           \if@mainmatter
                             \huge\headfont \@chapapp\thechapter\@chappos
                 2226
                             \par\nobreak
                 2227
                             \vskip \Cvs % 欧文は 20pt
                 2228
                 2229
                           \fi
                 2230
                         \fi
                         \interlinepenalty\@M
                 2231
                 2232
                         \Huge \headfont #1\par\nobreak
                         \vskip 3\Cvs}} % 欧文は 40pt
                 2233
      \@schapter \chapter*{...} コマンドの本体です。\chaptermark を補いました。
                 2234 \def\@schapter#1{%
```

2193

\global\@topnum\z@

```
\chaptermark{#1}%
                2235
                2236
                     \if@twocolumn
                2237
                       \@topnewpage[\@makeschapterhead{#1}]%
                2238
                     \else
                       \@makeschapterhead{#1}\@afterheading
                2239
                     fi
                2240
\@makeschapterhead 番号なしの章見出しです。
                2241 \def\@makeschapterhead#1{%
                     \vspace*{2\Cvs}% 欧文は50pt
                     {\parindent \z@ \raggedright
                2243
                2244
                       \normalfont
                2245
                       \interlinepenalty\@M
                       \Huge \headfont #1\par\nobreak
                2246
                2247
                       \vskip 3\Cvs}} % 欧文は 40pt
                2248 %</book|report>
                  ■下位レベルの見出し
         \section 欧文版では \@startsection の第4引数を負にして最初の段落の字下げを禁止しています
                  が、和文版では正にして字下げするようにしています。
                   段組のときはなるべく左右の段が狂わないように工夫しています。
                2249 \if@twocolumn
                2250 \newcommand{\section}{\%
                2251 %<jspf>\ifx\maketitle\relax\else\maketitle\fi
                       \@startsection{section}{1}{\z@}%
                2253 %<!kiyou>
                               \{0.6\Cvs\}\{0.4\Cvs\}\%
                2254 %<kiyou>
                              {\Cvs}{0.5\Cvs}%
                2255 %
                       {\normalfont\large\headfont\@secapp}}
                       {\normalfont\large\headfont\raggedright}}
                2256
                2257 \else
                2258
                     \newcommand{\section}{%
                2259
                       \if@slide\clearpage\fi
                2260
                       \@startsection{section}{1}{\z@}%
                2261
                       {\Cvs \@plus.5\Cdp \@minus.2\Cdp}% 前アキ
                       {.5\Cvs \@plus.3\Cdp}% 後アキ
                2262
                       {\normalfont\Large\headfont\@secapp}}
                2263 %
                2264
                       {\normalfont\Large\headfont\raggedright}}
                2265 \fi
      \subsection 同上です。
                2266 \if@twocolumn
                     2267
                       {\z0}{\ide .4\cvs \leq \z0 \fi}%
                2268
                       {\normalfont\normalsize\headfont}}
                2269
                2270 \else
```

{\Cvs \@plus.5\Cdp \@minus.2\Cdp}% 前アキ

2271

2272

```
2273 {.5\Cvs \@plus.3\Cdp}% 後アキ
2274 {\normalfont\large\headfont}}
2275 \fi
```

\subsubsection [2016-07-22] slide オプション指定時に \subsubsection の文字列と罫線が重なる問題に 対処しました (forum:1982)。

2276 \if@twocolumn

2277 \newcommand{\subsubsection}{\@startsection{subsubsection}{3}{\z@}%

2278 {\z0}{\if0slide .4\Cvs \else \z0 \fi}%

2279 {\normalfont\normalsize\headfont}}

2280 \else

 ${\tt 2281 } \verb| \newcommand{\subsubsection}{\cite{Command{\subsubsection}}} \$

2282 {\Cvs \@plus.5\Cdp \@minus.2\Cdp}%

2283 {\if@slide .5\Cvs \@plus.3\Cdp \else \z@ \fi}%

2284 {\normalfont\normalsize\headfont}}

2285 \fi

\paragraph 見出しの後ろで改行されません。

\jsParagraphMark

[2016-11-16] 従来は \paragraph の最初に出るマークを「■」に固定していましたが、このマークを変更可能にするため \jsParagraphMark というマクロに切り出しました。これで、たとえば

\renewcommand{\jsParagraphMark}{★}

とすれば「★」に変更できますし、マークを空にすることも容易です。なお、某学会クラスでは従来どおりマークは付きません。

※ BXJS クラスでは、1.1 版 [2016-02-14] から \jsParagraphMark をサポートしている。 段落のマーク (\blacksquare) が必ず和文フォントで出力されるようにする。

\jsJaChar は standard 和文ドライバが読み込まれた場合は \jachar と同義になるが、 それ以外は何もしない。

```
2286 \newcommand\jsParagraphMark{\relax\jsJaChar{■}}
2287 \let\bxjs@org@paragraph@mark\jsParagraphMark
2288 \ifx\bxjs@paragraph@mark\@empty
    \let\jsParagraphMark\@empty
2290 \else\ifx\bxjs@paragraph@mark\@undefined\else
    \long\edef\jsParagraphMark{\noexpand\jsJaChar{\bxjs@paragraph@mark}}
2292 \fi\fi
2293 \let\jsJaChar\@empty
2294 \if@twocolumn
     2295
      {\z@}{\if@slide .4\Cvs \else -1\jsZw\fi}% 改行せず 1\jsZw のアキ
2297 %<jspf>
            {\normalfont\normalsize\headfont}}
2298 %<!jspf>
             {\normalfont\normalsize\headfont\jsParagraphMark}}
2299 \else
```

```
{0.5\Cvs \qplus.5\Cdp \qminus.2\Cdp}%
                                2301
                                2302
                                                   {\if@slide .5\Cvs \@plus.3\Cdp \else -1\jsZw\fi}% 改行せず 1\jsZw のアキ
                                2303 %<jspf>
                                                                    {\normalfont\normalsize\headfont}}
                                2304 %<!jspf>
                                                                      {\normalfont\normalsize\headfont\jsParagraphMark}}
                                2305 \fi
  \subparagraph 見出しの後ろで改行されません。
                                2306 \if@twocolumn
                                              2307
                                                   \z0}{\left(x_0\right)_{\sc -1\jsZw\fi}}
                                2308
                                                   {\normalfont\normalsize\headfont}}
                                2309
                                2310 \else
                                              {\z0}{\ide .5\cvs \quare -1\jsZw\fi}%
                                2312
                                2313
                                                   {\normalfont\normalsize\headfont}}
                                2314 \fi
                                    8.3 リスト環境
                                         第 k レベルのリストの初期化をするのが \@listk です (k = i, ii, iii, iv)。 \@listk
                                    は \leftmargin を \leftmargink に設定します。
                                   二段組であるかないかに応じてそれぞれ 2em, 2.5em でしたが, ここでは全角幅の 2 倍にし
    \leftmargini
                                     ました。
                                         [2002-05-11] 3zw に変更しました。
                                         [2005-03-19] 二段組は 2zw に戻しました。
                                2315 \if@slide
                                2316 \setlength\leftmargini\{1\jsZw\}
                                2317 \ensuremath{\setminus} else
                                2318
                                             \if@twocolumn
                                                   \setlength\leftmargini{2\jsZw}
                                2319
                                2320
                                            \else
                                                   \setlength\leftmargini{3\jsZw}
                                2321
                                2322
                                2323 \fi
 \leftmarginii ii, iii, iv は \labelsep とそれぞれ '(m)', 'vii.', 'M.' の幅との和より大きくすること
\leftmarginiii になっています。ここでは全角幅の整数倍に丸めました。
 \verb|\label{leftmarginiv}| 2324 \verb|\label{leftm
   \begin{array}{c} \texttt{leftmarginv}^{\texttt{2326}} \\ 2326 \end{array}
                                             \setlength\leftmarginii {1\jsZw}
                                             \setlength\leftmarginiii{1\jsZw}
  \setlength\leftmarginiv {1\jsZw}
                                2328
                                            \setlength\leftmarginv {1\jsZw}
                                            \setlength\leftmarginvi {1\jsZw}
                                2329
                                2330 \else
                                            \setlength\leftmarginii {2\jsZw}
                                2331
```

\setlength\leftmarginiii{2\jsZw}

2332

```
\setlength\leftmarginiv {2\jsZw}
                                   2333
                                   2334
                                              \setlength\leftmarginv {1\jsZw}
                                   2335 \setlength\leftmarginvi {1\jsZw}
                                   2336 \fi
                \labelsep \labelsep はラベルと本文の間の距離です。\labelwidth はラベルの幅です。これは二分
            \labelwidth に変えました。
                                   2337 \setlength \labelsep {0.5\jsZw} % .5em
                                   2338 \setlength \labelwidth{\leftmargini}
                                   2339 \addtolength\labelwidth{-\labelsep}
              \partopsep リスト環境の前に空行がある場合, \parskip と \topsep に \partopsep を加えた値だけ
                                      縦方向の空白ができます。0 に改変しました。
                                   2340 \setlength\partopsep{\z0} % {2\p0 \@plus 1\p0 \@minus 1\p0}
\@beginparpenalty リストや段落環境の前後、リスト項目間に挿入されるペナルティです。
    \verb|\delta] \end{|c|} $$ \end{|c|} arpenalty $$ -\delta] $$ \end{|c|} $$ \end{|c|} arpenalty $$ -\delta] $$ \end{|c|} $$ \
        \label{eq:continuous} $$ \ensuremath{\operatorname{Qitempenalty}}$ $$ $$ 2342 \ensuremath{\operatorname{Qendparpenalty}}$ $$ -\ensuremath{\operatorname{Qlowpenalty}}$ $$
                                   2343 \@itempenalty
                                                                               -\@lowpenalty
                    \@listi \@listi は \leftmargin, \parsep, \topsep, \itemsep などのトップレベルの定義を
                    \@listI します。この定義は、フォントサイズコマンドによって変更されます(たとえば \small の
                                      中では小さい値に設定されます)。このため、\normalsize がすべてのパラメータを戻せる
                                       ように、\@listI で \@listi のコピーを保存します。元の値はかなり複雑ですが、ここで
                                      は簡素化してしまいました。特に最初と最後に行送りの半分の空きが入るようにしてありま
                                      す。アスキーの標準スタイルではトップレベルの itemize, enumerate 環境でだけ最初と
                                      最後に行送りの半分の空きが入るようになっていました。
                                           [2004-09-27] \topsep のグルー ^{+0.2}_{-0.1} \baselineskip を思い切って外しました。
                                   2344 \def\@listi{\leftmargin\leftmargini
                                             \parsep \z@
                                   2346 \topsep 0.5\baselineskip
                                             \itemsep \z@ \relax}
                                   2348 \left| \text{OlistI} \right|
                                           念のためパラメータを初期化します(実際には不要のようです)。
                                   2349 \@listi
                  \colone{1} \Clistii 第 2\sim6 レベルのリスト環境のパラメータの設定です。
                \@listiii 2350 \def\@listii{\leftmargin\leftmarginii
```

\labelwidth\leftmarginii \advance\labelwidth-\labelsep

2356 \labelwidth\leftmarginiii \advance\labelwidth-\labelsep

2355 \def\@listiii{\leftmargin\leftmarginiii

 $\verb|\climator| 2351$

2352 \topsep \z@

2357 \topsep \z@ 2358 \parsep \z@

 $\label{eq:continuous_series} $$ \end{array} $$\end{array} $$\end{array} $$\end{array} $$\end{a$

```
2359
      \itemsep\parsep}
2360 \def\@listiv {\leftmargin\leftmarginiv
                  \labelwidth\leftmarginiv
                   \advance\labelwidth-\labelsep}
2362
2363 \def\@listv {\leftmargin\leftmarginv
2364
                  \labelwidth\leftmarginv
                   \advance\labelwidth-\labelsep}
2365
2366 \def\@listvi {\leftmargin\leftmarginvi
                  \labelwidth\leftmarginvi
2367
2368
                   \advance\labelwidth-\labelsep}
```

■enumerate 環境 enumerate 環境はカウンタ enumi, enumii, enumii, enumiv を使います。n レベルの番号です。

\theenumi 出力する番号の書式を設定します。これらは LATEX 本体(ltlists.dtx 参照)で定義済み \theenumii ですが、ここでは表し方を変えています。\@arabic、\@alph、\@roman、\@Alph はそれぞ \theenumiii 和算用数字、小文字アルファベット、小文字ローマ数字、大文字アルファベットで番号を出 \theenumiv 力する命令です。

```
2369 \renewcommand{\theenumi}{\@arabic\c@enumi}
2370 \renewcommand{\theenumii}{\@alph\c@enumii}
2371 \renewcommand{\theenumiii}{\@roman\c@enumiii}
2372 \renewcommand{\theenumiv}{\@Alph\c@enumiv}
```

\labelenumi enumerate 環境の番号を出力する命令です。第2レベル以外は最後に欧文のピリオドが付 \labelenumii きますが、これは好みに応じて取り払ってください。第2レベルの番号のかっこは和文用に \labelenumiii 換え、その両側に入る余分なグルーを \inhibitglue で取り除いています。

\labelenumiv

和文の括弧で囲むための補助命令 \jsInJaParen を定義して \labelenumii でそれを用いている。

※現状の zxjatype の \inhibitglue の実装には「前後のグルーを消してしまう」という不備があって、そのため enumii の出力が異常になるという不具合があった。zxjatype を修正するまでの回避策として、サイズがゼロの罫(\bxjs@dust)でガードしておく。

```
2373 \def\bxjs@dust{\vrule\@width\z@\@height\z@\@depth\z@}
2374 \newcommand*{\jsInJaParen}[1]{%
2375 \bxjs@dust\jsInhibitGlue (#1) \jsInhibitGlue\bxjs@dust}
2376 \newcommand{\labelenumi}{\theenumi.}
2377 \newcommand{\labelenumii}{\jsInJaParen{\theenumii}}
2378 \newcommand{\labelenumiii}{\theenumiii.}
2379 \newcommand{\labelenumiv}{\theenumiv.}

\p@enumii \p@enumn は \ref コマンドで enumerate 環境の第 n レベルの項目が参照されるときの書
\p@enumii 式です。これも第 2 レベルは和文用かっこにしました。
\p@enumiv 2380 \renewcommand{\p@enumii}{\theenumi}
2381 \renewcommand{\p@enumii}{\theenumi\jsInhibitGlue (\theenumii )}
2382 \renewcommand{\p@enumiv}{\p@enumiii\theenumiii}
```

■itemize 環境

 \labelitemi itemize 環境の第 n レベルのラベルを作るコマンドです。

\labelitemii 2383 \newcommand\labelitemi{\textbullet}

 $\verb|\label| 1384 \verb|\label| 1486 | The minimum of th$

2385 \newcommand\labelitemiii{\textasteriskcentered}

 $\verb|\labelitemiv|_{2386} \\ \verb|\labelitemiv|_{1386} \\ \verb|\labelitemiv|_{13$

■description 環境

description 本来の description 環境では、項目名が短いと、説明部分の頭がそれに引きずられて左に 出てしまいます。これを解決した新しい description の実装です。

2387 \newenvironment{description}{%

2388 \list{}{%

2389 \labelwidth=\leftmargin

2390 \labelsep=1\jsZw

2391 \advance \labelwidth by -\labelsep

2392 \let \makelabel=\descriptionlabel\}\{\endlist}

\descriptionlabel description 環境のラベルを出力するコマンドです。好みに応じて #1 の前に適当な空き (たとえば \hspace{1\jsZw}) を入れるのもいいと思います。

2393 \newcommand*\descriptionlabel[1]{\normalfont\headfont $\#1\hfil$ }

■概要

abstract 概要(要旨, 梗概)を出力する環境です。book クラスでは各章の初めにちょっとしたことを 書くのに使います。titlepage オプション付きの article クラスでは, 独立したページに 出力されます。abstract 環境は元は quotation 環境で作られていましたが, quotation 環境の右マージンをゼロにしたので、list 環境で作り直しました。

JSPF スタイルでは実際の出力は \maketitle で行われます。

bxjsreport クラスの abstract 環境は:

- layout=v1 の場合は jsbook + report の動作を継承する。 つまり jsbook と同じに なる。
- layout=v2 の場合は新設の jsreport の動作を継承する。つまり jsarticle (+titlapage) と同じになる。

chapterabstract jsbook の abstract 環境 (「各章の初めにちょっとしたことを書く」ためのもの)を chapterabstract と呼ぶことにする。

2394 %<*book|report>

2395 \newenvironment{chapterabstract}{\%}

 $2396 \quad \texttt{\begin{list}{}}{\%}$

2397 $\label{listparindent=1} sZw$

2398 \itemindent=\listparindent

```
2399
        \rightmargin=0pt
        \leftmargin=5\jsZw}\item[]}{\end{list}\vspace{\baselineskip}}
2400
2401 %</book|report>
   "普通の" abstract 環境の定義。
2402 %<*article|report|slide>
2403 \newbox\@abstractbox
2404 \if@titlepage
     \newenvironment{abstract}{%
2405
        \titlepage
2406
2407
        \null\vfil
        \@beginparpenalty\@lowpenalty
2408
2409
        \begin{center}%
          \headfont \abstractname
2410
2411
          \@endparpenalty\@M
2412
        \end{center}%
 BXJS クラスでは、概要の最初の段落に段落下げが入るようにする。
2413
        \par}%
2414
      {\par\vfil\null\endtitlepage}
2415 \ensuremath{\setminus} else
     \newenvironment{abstract}{%
        \if@twocolumn
2417
          \ifx\maketitle\relax
2418
2419
            \section*{\abstractname}%
          \else
2420
            \global\setbox\@abstractbox\hbox\bgroup
2421
2422
            \begin{minipage}[b]{\textwidth}
              \small\parindent1\jsZw
2423
2424
              \begin{center}%
                {\mbox{\locality} {\mbox{\locality}}}%
2425
              \end{center}%
2426
2427
              \left\{ \right\} 
                \listparindent\parindent
2428
                \itemindent \listparindent
2429
                \rightmargin \leftmargin}%
2430
2431
              \item\relax
2432
          \fi
        \else
2433
2434
2435
          \begin{center}%
2436
            2437
          \end{center}%
          \left\{ \right\} 
2438
2439
            \listparindent\parindent
2440
            \itemindent \listparindent
2441
            \rightmargin \leftmargin}%
2442
          \item\relax
        \fi}{\if@twocolumn
2443
```

```
\ifx\maketitle\relax
       2444
       2445
       2446
                  \endlist\end{minipage}\egroup
       2447
                \fi
               \else
       2448
                \endlist
       2449
              \fi}
       2450
       2451 \fi
       2452 %</article|report|slide>
       2453 %<*jspf>
       2454 \newbox\@abstractbox
       2455 \newenvironment{abstract}{\%
             \global\setbox\@abstractbox\hbox\bgroup
             2457
       2458
              \if@english \parindent6\jsc@mmm \else \parindent1\jsZw \fi}%
       2459
       2460
            {\end{minipage}\egroup}
       2461 %</jspf>
          bxjs@force@chapterabstract が真の場合は、abstract 環境を chapterabstract 環境と
         等価にする。
       2462 %<*book|report>
       2463 \verb|\fiftxjs@force@chapterabstract| \\
            \let\abstract\chapterabstract
       2465
            \let\endabstract\endchapterabstract
       2466 \fi
       2467 %</book|report>
         ■キーワード
keywords キーワードを準備する環境です。実際の出力は \maketitle で行われます。
```

```
2468 %<*jspf>
2469 %\newbox\@keywordsbox
```

2470 %\newenvironment{keywords}{%

2471 % \global\setbox\@keywordsbox\hbox\bgroup

2472 % \begin{minipage}[b]{1570\jsc@mmm}{\sffamily Keywords:}\par

\small\parindent0\jsZw}% 2473 %

2474 % {\end{minipage}\egroup}

2475 %</jspf>

■verse 環境

verse 詩のための verse 環境です。

```
2476 \newenvironment{verse}{%
```

2477\let \\=\@centercr

 $\left\{ \right\}$ 2478

2479 \itemsep \z@

```
2480 \itemindent -2\jsZw % 元: -1.5em
```

2481 \listparindent\itemindent

2482 \rightmargin \z@

2483 \advance\leftmargin 2\jsZw}% 元: 1.5em

2484 \item\relax}{\endlist}

■quotation 環境

quotation 段落の頭の字下げ量を $1.5 \mathrm{em}$ から \parindent に変えました。また、右マージンを 0 にしました。

```
2485 \newenvironment{quotation}{\%}
```

2486 \list{}{%

2487 \listparindent\parindent

2488 \itemindent\listparindent

2489 \rightmargin \z0}%

 $2490 \left| \text{item}\right| {\class{condition}}$

■quote 環境

quote quote 環境は、段落がインデントされないことを除き、quotation 環境と同じです。

2491 \newenvironment{quote}%

2492 ${\left (\sum_{s=0}^{1} {\left (\sum_{s=0}^{s} \right)} \right)}$

■定理など ltthm.dtx 参照。たとえば次のように定義します。

\newtheorem{definition}{定義} \newtheorem{axiom}{公理} \newtheorem{theorem}{定理}

[2001-04-26] 定理の中はイタリック体になりましたが、これでは和文がゴシック体になってしまうので、\itshape を削除しました。

[2009-08-23] \bfseries を \headfont に直し、 \labelsep を 1 zw にし、括弧を全角にしました。

```
2493 \def\@begintheorem#1#2{\trivlist\labelsep=1\jsZw
```

 $2495 \verb|\def|@opargbegintheorem#1#2#3{\trivlist\labelsep=1\jsZw|} \\$

2496 \item[\hskip \labelsep{\headfont #1\ #2 (#3) }]}

titlepage タイトルを独立のページに出力するのに使われます。

[2017-02-24] コミュニティ版 pIATeX の標準クラス 2017/02/15 に合わせて,book クラス でタイトルを必ず奇数ページに送るようにしました。といっても,横組クラスしかありませんでしたので,従来の挙動は何も変わっていません。また,book 以外の場合のページ番号の リセットもコミュニティ版 pIATeX の標準クラス 2017/02/15 に合わせましたが,こちらも 片面印刷あるいは独立のタイトルページを作らないクラスばかりでしたので,従来の挙動は 何も変わらずに済みました。

2497 \newenvironment{titlepage}{%

```
2499
                 \if@twocolumn
         2500
                   \@restonecoltrue\onecolumn
         2501
                 \else
                   \@restonecolfalse\newpage
         2502
                 \fi
         2503
                 \thispagestyle{empty}%
         2504
         2505
                 \ifodd\c@page\setcounter{page}\@ne\else\setcounter{page}\z@\fi %% 2017-02-
             24
         2506
              }%
               {\if@restonecol\twocolumn \else \newpage \fi
         2507
         2508
                 \if@twoside\else
                   \setcounter{page}\@ne
         2509
                fi
         2510
          ■付録
\appendix 本文と付録を分離するコマンドです。
         2511 %<*!book&!report>
         2512 \mbox{ \newcommand{\appendix}{\par}}
         2513
              \setcounter{section}{0}%
              \setcounter{subsection}{0}%
         2514
         2515
              \ifnum\bxjs@label@section=\bxjs@label@section@compat
               \gdef\presectionname{\appendixname}%
              \gdef\postsectionname{}%
         2517
         2518 % \gdef\thesection{\@Alph\c@section}% [2003-03-02]
               \gdef\thesection{\presectionname\@Alph\c@section\postsectionname}%
              2520
         2521
               \gdef\@secapp{\appendixname}%
         2522
               \gdef\@secpos{}%
         2523
         2524
               \gdef\thesection{\@Alph\c@section}%
              \fi}
         2525
         2526 %</!book&!report>
         2527 %<*book|report>
         2528 \mbox{ \newcommand{\appendix}{\par}}
              \setcounter{chapter}{0}%
         2530
              \setcounter{section}{0}%
         2531
              \gdef\@chapapp{\appendixname}%
               \gdef\@chappos{}%
               \gdef\thechapter{\@Alph\c@chapter}}
         2534 %</book|report>
```

\pltx@cleartooddpage %% 2017-02-24

8.4 パラメータの設定

■array と tabular 環境

2498 %<book>

\arraycolsep array 環境の列間には \arraycolsep の 2 倍の幅の空きが入ります。

2535 \setlength\arraycolsep{5\p@?}

\tabcolsep tabular 環境の列間には \tabcolsep の 2 倍の幅の空きが入ります。
2536 \setlength\tabcolsep{6\p0?}

\arrayrulewidth array, tabular 環境内の罫線の幅です。

2537 \setlength\arrayrulewidth{.4\p0}

\doublerulesep array, tabular 環境での二重罫線間のアキです。 2538 \setlength\doublerulesep{2\p0}

■tabbing 環境

\tabbingsep \' コマンドで入るアキです。

2539 length labelsep

■minipage 環境

| Compfootins minipage 環境の脚注の \skip\Compfootins は通常のページの \skip\footins と同じ働きをします。

 $2540 \ship\mbox{@mpfootins} = \ship\mbox{footins}$

■framebox 環境

\fboxsep \fbox, \framebox で内側のテキストと枠との間の空きです。

\fboxrule \fbox, \framebox の罫線の幅です。

 $2541 \setlength\fboxsep{3\p0?} \\ 2542 \setlength\fboxrule{.4\p0}$

■equation と eqnarray 環境

\theequation 数式番号を出力するコマンドです。

2544 %<*book|report>

 $2545 \ensuremath{ \ensuremath{\texttt{Qaddtoreset}\{\texttt{equation}\}\{\texttt{chapter}\}}$

 $2546 \mbox{ \lower}$

2547 {\ifnum \c@chapter>\z@ \thechapter.\fi \@arabic\c@equation}

2548 % < /book|report>

\jot eqnarray の行間に余分に入るアキです。デフォルトの値をコメントアウトして示しておきます。

2549 % \setlength\jot{3pt}

\Ceqnnum 数式番号の形式です。デフォルトの値をコメントアウトして示しておきます。

\jsInhibitGlue (\theequation) \jsInhibitGlue のように和文かっこを使うことも可能です。

2550 % \def\@eqnnum{(\theequation)}

```
amsmath パッケージを使う場合は \tagform@ を次のように修正します。
2551 % \def\tagform@#1{\maketag@@@{(\ignorespaces#1\unskip\@@italiccorr)}}
```

8.5 フロート

タイプ TYPE のフロートオブジェクトを扱うには、次のマクロを定義します。

\fps@TYPE フロートを置く位置 (float placement specifier) です。

\ftype@TYPE フロートの番号です。2の累乗(1, 2, 4, ...) でなければなりません。

\ext@TYPE フロートの目次を出力するファイルの拡張子です。

\fnum@TYPE キャプション用の番号を生成するマクロです。

\@makecaption $\langle num \rangle \langle text \rangle$ キャプションを出力するマクロです。 $\langle num \rangle$ は \fnum@... の生成する番号, $\langle text \rangle$ はキャプションのテキストです。テキストは適当な幅の \parbox に入ります。

■figure 環境

```
\c@figure 図番号のカウンタです。
```

\thefigure 図番号を出力するコマンドです。

2552 %<*!book&!report>

2553 \newcounter{figure}

2554 \renewcommand \thefigure {\@arabic\c@figure}

2555 %</!book&!report>

2556 %<*book|report>

2557 \newcounter{figure}[chapter]

2558 \renewcommand \thefigure

2559 {\ifnum \c@chapter>\z@ \thechapter.\fi \@arabic\c@figure}

2560 %</book|report>

\fps@figure figure のパラメータです。\figurename の直後に ~ が入っていましたが、ここでは外し\ftype@figure ました。

\ext@figure 2561 \def\fps@figure{tbp}

 $\label{eq:continuous_continuous$

 $2563 \ensuremath{ \mbox{\mbox{def}\ext@figure{lof}} }$

 $2564 \ensure{\figurename\nobreak\thefigure}$

figure *形式は段抜きのフロートです。

figure * 2565 \newenvironment{figure}%

2566 {\@float{figure}}%

2567 {\end@float} 2568 \newenvironment{figure*}%

2569 {\@dblfloat{figure}}%

2570 {\end@dblfloat}

■table 環境

```
\c@table 表番号カウンタと表番号を出力するコマンドです。アスキー版では \thechapter. が \thetable \thechapter{}・になっていますが、ここではオリジナルのままにしています。
```

```
2571 %<*!book&!report>
2572 \newcounter{table}
2573 \renewcommand\thetable{\@arabic\c@table}
2574 %</!book&!report>
2575 %<*book|report>
2576 \newcounter{table}[chapter]
2577 \renewcommand \thetable
```

 $2578 \hspace{1cm} \label{liminum c@chapter} $$2578 \hspace{1cm} {\ \c@chapter>\z@ \ \thechapter.\fi \ \c@ctable}$$

2579 %</book|report>

\fps@table table のパラメータです。\tablename の直後に ~ が入っていましたが、ここでは外しま\ftype@table した。

table * は段抜きのフロートです。

```
table * 2584 \newenvironment{table}%
```

2585 {\@float{table}}%
2586 {\end@float}
2587 \newenvironment{table*}%
2588 {\@dblfloat{table}}%

2589 {\end@dblfloat}

8.6 キャプション

\@makecaption \caption コマンドにより呼び出され,実際にキャプションを出力するコマンドです。第 1 引数はフロートの番号,第 2 引数はテキストです。

\abovecaptionskip それぞれキャプションの前後に挿入されるスペースです。\belowcaptionskip が 0 になっ \belowcaptionskip ていましたので、キャプションを表の上につけた場合にキャプションと表がくっついてしま うのを直しました。

```
2590 \newlength\abovecaptionskip 2591 \newlength\belowcaptionskip 2592 \setlength\abovecaptionskip{5\p@?} % 元: 10\p@ 2593 \setlength\belowcaptionskip{5\p@?} % 元: 0\p@
```

実際のキャプションを出力します。オリジナルと異なり、文字サイズを \small にし、キャプションの幅を 2 cm 狭くしました。

[2003-11-05] ロジックを少し変えてみました。

```
2594 %<*!jspf>
```

2595 % \long\def\@makecaption#1#2{{\small}

2596 % \advance\leftskip10\jsc@mmm

```
\advance\rightskip10\jsc@mmm
2597 %
2598 %
                         \vskip\abovecaptionskip
2599 %
                         \sbox\@tempboxa{#1\hskip1\jsZw\relax #2}%
2600 %
                         \ifdim \wd\@tempboxa >\hsize
2601 %
                               #1\hskip1\jsZw\relax #2\par
                         \else
2602 %
                               \global \@minipagefalse
2603 %
2604 %
                               \hb@xt@\hsize{\hfil\box\@tempboxa\hfil}%
2605 %
                         \fi
                         \vskip\belowcaptionskip}}
2606 %
2607 \ensuremath{\verb|long|def|@makecaption||} 1 \# 2 \{ \{ \ensuremath{\verb|long|} \} \} = 1 \# 2 \{ \{ \ensuremath{\verb|long|} \} \} = 1 \# 2 \{ \{ \ensuremath{\verb|long|} \} \} = 1 \# 2 \{ \{ \ensuremath{\verb|long|} \} \} = 1 \# 2 \{ \{ \ensuremath{\verb|long|} \} \} = 1 \# 2 \{ \{ \ensuremath{\verb|long|} \} \} = 1 \# 2 \{ \{ \ensuremath{\verb|long|} \} \} = 1 \# 2 \{ \{ \ensuremath{\verb|long|} \} \} = 1 \# 2 \{ \{ \ensuremath{\verb|long|} \} \} = 1 \# 2 \{ \{ \ensuremath{\verb|long|} \} \} = 1 \# 2 \{ \{ \ensuremath{\verb|long|} \} \} = 1 \# 2 \{ \{ \ensuremath{\verb|long|} \} \} = 1 \# 2 \{ \{ \ensuremath{\verb|long|} \} \} = 1 \# 2 \{ \{ \ensuremath{\verb|long|} \} \} = 1 \# 2 \{ \{ \ensuremath{\verb|long|} \} \} = 1 \# 2 \{ \{ \ensuremath{\verb|long|} \} \} = 1 \# 2 \{ \{ \ensuremath{\verb|long|} \} \} = 1 \# 2 \{ \{ \ensuremath{\verb|long|} \} \} = 1 \# 2 \{ \{ \ensuremath{\ensuremath{long|} } \} = 1 \# 2 \{ \{ \ensuremath{\ensuremath{long|} } \} \} = 1 \# 2 \{ \{ \ensuremath{\ensuremath{long|} } \} = 1 \# 2 \{ \{ \ensuremath{\ensuremath{long|} } \} \} = 1 \# 2 \{ \{ \ensuremath{\ensuremath{long|} } \} = 1 \# 2 \{ \{ \ensuremath{\ensuremath{long|} } \} = 1 \# 2 \{ \{ \ensuremath{\ensuremath{long|} } \} \} = 1 \# 2 \{ \{ \ensuremath{\ensuremath{long|} } \} = 1 \# 2 \{ \{ \ensuremath{\ensuremath{long|} } \} \} = 1 \# 2 \{ \{ \ensuremath{\ensuremath{long|} } \} = 1 \# 2 \{ \{ \ensuremath{\ensuremath{long|} } \} \} = 1 \# 2 \{ \{ \ensuremath{\ensuremath{long|} } \} = 1 \# 2 \{ \{ \ensuremath{\ensuremath{long|} } \} = 1 \# 2 \{ \{ \ensuremath{\ensuremath{long|} } \} \} = 1 \# 2 \{ \{ \ensuremath{\ensuremath{long|} } \} = 1 \# 2 \{ \{ \ensuremath{\ensuremath{long|} } \} = 1 \# 2 \{ \{ \ensuremath{\ensuremath{long|} } \} = 1 \# 2 \{ \{ \ensuremath{\ensuremath{long|} } \} = 1 \# 2 \{ \{ \ensuremath{\ensuremath{long|} } \} = 1 \# 2 \{ \{ \ensuremath{\ensuremath{long|} } \} = 1 \# 2 \{ \{ \ensuremath{\ensuremath{long|} } \} = 1 \# 2 \{ \{ \ensuremath{\ensuremath{long|} } \} = 1 \# 2 \{ \{ \ensuremath{\ensuremath{long|} } \} = 1 \# 2 \{ \{ \ensuremath{\ensuremath{long|} } \} = 1 \# 2 \{ \{ \ensuremath{\ensuremath{long|} } \} = 1 \# 2 \{ \{ \ensuremath{\ensuremath{long|} } \} = 1 \# 2 \{ \{ \ensuremath{\ensuremath{long|} } \} = 1 \# 2 \{ \{ \ensuremath{\ensuremath{long|} } \} = 1 \# 2 
                  \advance\leftskip .0628\linewidth
2608
                  \advance\rightskip .0628\linewidth
2609
                  \vskip\abovecaptionskip
2610
2611
                  \sbox\@tempboxa{#1\zwspace#2}%
2612
                  \ifdim \wd\@tempboxa <\hsize \centering \fi
                  #1\zwspace#2\par
2613
                  \vskip\belowcaptionskip}}
2615 %</!jspf>
2616 %<*jspf>
2617 \long\def\@makecaption#1#2{%
                  \vskip\abovecaptionskip
                  \sbox\@tempboxa{\small\sffamily #1\quad #2}%
2619
                  \ifdim \wd\@tempboxa >\hsize
2620
                        {\small\sffamily
2621
2622
                               \list{#1}{%
                                      \renewcommand{\makelabel}[1]{##1\hfil}
2623
2624
                                      \itemsep
                                                                           \z0
2625
                                      \itemindent \z@
2626
                                      \labelsep
                                                                           \z@
                                      \labelwidth 11\jsc@mmm
2627
2628
                                      \listparindent\z0
                                      \leftmargin 11\jsc@mmm}\item\relax #2\endlist}
2629
2630
                  \else
                         \global \@minipagefalse
2631
                         \hb@xt@\hsize{\hfil\box\@tempboxa\hfil}%
2632
2633
                  \vskip\belowcaptionskip}
2634
2635 %</jspf>
```

9 フォントコマンド

ここでは IAT $_{\rm E}$ X 2.09 で使われていたコマンドを定義します。これらはテキストモードと数式モードのどちらでも動作します。これらは互換性のためのもので、できるだけ \text...と \math... を使ってください。

[2016-07-15] KOMA-Script 中の \scr@DeclareOldFontCommand に倣い、これらの命令を使うときには警告を発することにしました。

[2016-07-16] 警告を最初の一回だけ発することにしました。また、例外的に警告を出さないようにするスイッチも付けます。

```
\if@jsc@warnoldfontcmd
                             \if@jsc@warnoldfontcmd はBXJS クラスでは不使用。
f@jsc@warnoldfontcmdexception
                             \if@jsc@warnoldfontcmdexception は \allow/disallowoldfontcommands の状態
                            を表す。
                          2636 \newif\if@jsc@warnoldfontcmd
                          2637 \@jsc@warnoldfontcmdtrue
                          2638 \newif\if@jsc@warnoldfontcmdexception
                          {\tt 2639} \verb|\@jsc@warnoldfontcmdexceptionfalse|
  \jsc@DeclareOldFontCommand
                          2640 \newcommand*{\jsc@DeclareOldFontCommand}[3]{%
                                \g@addto@macro\bxjs@oldfontcmd@list{\do#1}%
                          2641
                          2642
                                \DeclareOldFontCommand{#1}{%
                          2643
                                 \bxjs@oldfontcmd{#1}#2%
                               }{%
                          2644
                          2645
                                 \bxjs@oldfontcmd{#1}#3%
                          2646
                               }%
                          2647 }
                          \ClassInfo\bxjs@clsname
                                {Old font command '\string#1' is used!!\MessageBreak
                          2650
                          2651
                                 The first occurrence is}%
                          2652 }
                            "二文字フォント命令"の使用を許可する(警告しない)。
      \allowoldfontcommands
                           "二文字フォント命令"の使用に対して警告を出す。
    \disallowoldfontcommands
                          2653 \newcommand*{\allowoldfontcommands}{%
                               \@jsc@warnoldfontcmdexceptiontrue}
                          2655 \newcommand*{\disallowoldfontcommands}{%
                                \@jsc@warnoldfontcmdexceptionfalse}
```

2657 \let\bxjs@oldfontcmd@list\@empty

 $\left| \frac{1}{t} \right|$

\if@jsc@warnoldfontcmdexception\else

\global\@jsc@warnoldfontcmdfalse

\jsc@warnoldfontcmd{#2}%

2658 \def\bxjs@oldfontcmd#1{%

 $\frak{1}\operatorname{n}$

\fi

\fi}

2661

2662 2663

2664

2666 2667

2660 \def\bxjs@oldfontcmd@a#1#2{%

\expandafter\bxjs@oldfontcmd@a\csname bxjs@ofc/\string#1\endcsname#1}

```
2668 \def\bxjs@warnoldfontcmd@final{%
   2669 % \par
        \global\let\bxjs@warnoldfontcmd@final\@empty
   2670
        \let\@tempa\@empty
   2671
        \def\do##1{%
   2672
          \expandafter\ifx\csname bxjs@ofc/\string##1\endcsname\relax\else
   2673
            \edef\@tempa{\@tempa \space\string##1}\fi}
   2674
   2675
        \bxjs@oldfontcmd@list
        \ifx\@tempa\@empty\else
   2676
   2677
          \ClassWarningNoLine\bxjs@clsname
   2678
           {Some old font commands were used in text:\MessageBreak
            \space\@tempa\MessageBreak
   2679
            You should note, that since 1994 LaTeX2e provides a\MessageBreak
   2680
            new font selection scheme called NFSS2 with several\MessageBreak
   2681
   2682
            new, combinable font commands. The
            class provides\MessageBreak
   2683
            the old font commands only for compatibility}
   2684
   2685
        fi
     単純に \AtEndDocument のフックの中で \bxjs@warnoldfontcmd@final を実行した場
     合、最終ページのヘッダ・フッタの中にある二文字フォント命令はそれより後に実行される
     ため捕捉できない。これに対処するため、\end{document} 中に実行される \clearpage の
     処理の直後に \bxjs....final が呼ばれるようにする。
   2686 \def\bxjs@warnoldfontcmd@kick@final{%
        \g@addto@macro\clearpage{\bxjs@warnoldfontcmd@final}}
   2688 \AtEndDocument{\bxjs@warnoldfontcmd@kick@final}
\mc フォントファミリを変更します。
\gt 2689 \jsc@DeclareOldFontCommand{\mc}{\normalfont\mcfamily}{\mathmc}
\label{lem:command} $$ \arrowvert $$ 2690 \sc@DeclareOldFontCommand{\gt}{\operatorname{lnormalfont\gtfamily}}_{\mbox{mathgt}} $$
   2691 \jsc@DeclareOldFontCommand{\rm}{\normalfont\rmfamily}{\mathrm}
\tt 2693 \jsc@DeclareOldFontCommand{\tt}{\normalfont\ttfamily}{\mathtt}
\bf ボールドシリーズにします。通常のミーディアムシリーズに戻すコマンドは \mdseries
     です。
   \it フォントシェイプを変えるコマンドです。斜体とスモールキャップスは数式中では何もしま
\sl せん(警告メッセージを出力します)。通常のアップライト体に戻すコマンドは \upshape
\sc です。
   2695 \verb|\jsc@DeclareOldFontCommand{\it}{\normalfont\itshape}{\mbox{\mbox{$\setminus$}}} 
   2696 \jsc@DeclareOldFontCommand{\sl}{\normalfont\slshape}{\@nomath\sl}
   2697 \jsc@DeclareOldFontCommand{\sc}{\normalfont\scshape}{\@nomath\sc}
\cal 数式モード以外では何もしません(警告を出します)。
```

\mit

 $2698 \end{*{\cal}{\cal}{\cal}{\cal}} $$ 2699 \end{*{\cal}{\cal}{\cal}} $$ 2699 \end{*{\cal}{\cal}} $$ ($\cal){\cal} $$ (\c

10 相互参照

10.1 目次の類

\section コマンドは .toc ファイルに次のような行を出力します。

\contentsline{section}{タイトル}{ページ}

たとえば\section に見出し番号が付く場合,上の「タイトル」は

\numberline{番号}{見出し}

となります。この「番号」は \thesection コマンドで生成された見出し番号です。 figure 環境の \caption コマンドは .lof ファイルに次のような行を出力します。

\contentsline{figure}{\numberline{番号}{キャプション}{ページ}

この「番号」は \thefigure コマンドで生成された図番号です。 table 環境も同様です。

\contentsline{...} は \l0... というコマンドを実行するので, あらかじめ \l0chapter, \l0section, \l0figure などを定義しておかなければなりません。これらの多くは \0dottedtocline コマンドを使って定義します。これは

\@dottedtocline{レベル}{インデント}{幅}{タイトル}{ページ}

という書式です。

レベル この値が tocdepth 以下のときだけ出力されます。\chapter はレベル 0, \section はレベル 1, 等々です。

インデント 左側の字下げ量です。

幅 「タイトル」に \numberline コマンドが含まれる場合, 節番号が入る箱の幅です。

\@pnumwidth ページ番号の入る箱の幅です。

\Otocrmarg 右マージンです。\Otocrmarg \geq \Opnumwidth とします。

\@dotsep 点の間隔です(単位 mu)。

\c@tocdepth 目次ページに出力する見出しレベルです。元は article で 3, その他で 2 でしたが,ここでは一つずつ減らしています。

2700 \newcommand\@pnumwidth{1.55em}

2701 \newcommand\@tocrmarg{2.55em}

2702 \newcommand\@dotsep{4.5}

2703 %<!book&!report>\setcounter{tocdepth}{2}

2704 %<book|report>\setcounter{tocdepth}{1}

■目次

2746

\nobreak

```
\tableofcontents 目次を生成します。
  \jsc@tocl@width [2013-12-30] \prechaptername などから見積もった目次のラベルの長さです。(by ts)
                                                2705 \newdimen\jsc@tocl@width
                                                2706 \mbox{ }\mbox{newcommand{\tableofcontents}{\%}
                                                2707 %<*book|report>
                                                2708
                                                                   \settowidth\jsc@tocl@width{\headfont\prechaptername\postchaptername}%
                                                                   \settowidth\@tempdima{\headfont\appendixname}%
                                                2709
                                                                  \ifdim\jsc@tocl@width<\@tempdima \setlength\jsc@tocl@width{\@tempdima}\fi
                                                2710
                                                2711
                                                                  \label{limiting} $$ \left( \frac{1}{jsC} \cdot \frac{1}{jsC} \right) = 2 \cdot \frac{1}{jsC} 
                                                2712
                                                                  \if@twocolumn
                                                                        \@restonecoltrue\onecolumn
                                                2713
                                                2714
                                                                        \@restonecolfalse
                                                2715
                                                2716
                                                2717
                                                                  \chapter*{\contentsname}%
                                                                \@mkboth{\contentsname}{}%
                                                2719 %</book|report>
                                                2720 %<*!book&!report>
                                                                  \settowidth\jsc@tocl@width{\headfont\presectionname\postsectionname}%
                                                                   \settowidth\@tempdima{\headfont\appendixname}%
                                                                \ifdim\jsc@tocl@width<\@tempdima\relax\setlength\jsc@tocl@width{\@tempdima}\fi
                                                2723
                                                                \ifdim\jsc@tocl@width<2\jsZw \divide\jsc@tocl@width by 2 \advance\jsc@tocl@width 1\jsZw\fi
                                                2724
                                                2725
                                                                  \section*{\contentsname}%
                                                                \@mkboth{\contentsname}{\contentsname}%
                                                2726
                                                2727 %</!book&!report>
                                                2728 \@starttoc{toc}%
                                                2729 % <book | report > \if@restonecol\twocolumn\fi
                                                2730 }
                           \1@part 部の目次です。
                                                2731 \newcommand*{\l@part}[2]{%
                                                                  \ifnum \c@tocdepth >-2\relax
                                                2733 %<!book&!report>
                                                                                                                         \addpenalty\@secpenalty
                                                2734 %<book|report>
                                                                                                                   \addpenalty{-\@highpenalty}%
                                                                         \addvspace{2.25em \@plus\p@?}%
                                                2735
                                                2736
                                                                         \begingroup
                                                                               \parindent \z@
                                                2737
                                                2738 %
                                                                               \@pnumwidth should be \@tocrmarg
                                                2739 %
                                                                               \rightskip \@pnumwidth
                                                2740
                                                                               \rightskip \@tocrmarg
                                                                               \parfillskip -\rightskip
                                                2741
                                                                               {\leavevmode
                                                2742
                                                                                     \large \headfont
                                                2743
                                                                                      \setlength\@lnumwidth{4\jsZw}%
                                                2744
                                                                                     #1\hfil \hb@xt@\@pnumwidth{\hss #2}}\par
                                                2745
```

```
\global\@nobreaktrue
         2747 %<book|report>
         2748 %<book|report>
                               \everypar{\global\@nobreakfalse\everypar{}}%
         2749
                 \endgroup
         2750
               \fi}
\lochapter 章の目次です。\@lnumwidth を 4.683zw に増やしました。
             [2013-12-30] \@lnumwidth を \jsc@tocl@width から決めるようにしてみました。(by
           ts)
         2751 %<*book|report>
         2752 \newcommand*{\l@chapter}[2]{%
               \ifnum \c@tocdepth >\m@ne
                 \addpenalty{-\@highpenalty}%
         2754
                 \addvspace{1.0em \@plus\p@?}
         2755
                 \vskip 1.0em \@plus\p@ % book.cls では↑がこうなっている
         2756 %
         2757
                 \begingroup
                   \parindent\z@
         2758
                   \rightskip\@pnumwidth
         2759 %
         2760
                   \rightskip\@tocrmarg
                   \parfillskip-\rightskip
         2761
         2762
                   \leavevmode\headfont
         2763 %
                   \% \in \mathbb{1}_{0.5}
         2764
                   \setlength\@lnumwidth{\jsc@tocl@width}\advance\@lnumwidth 2.683\jsZw
         2765
                   \advance\leftskip\@lnumwidth \hskip-\leftskip
         2766
                   #1\nobreak\hfil\nobreak\hbox to\@pnumwidth{\hss#2}\par
                   \penalty\@highpenalty
         2767
         2768
                 \endgroup
         2769
               fi
         2770 %</book|report>
\l0section 節の目次です。
         2771 %<*!book&!report>
         2772 \newcommand*{\l@section}[2]{%
         2773
               \ifnum \c@tocdepth >\z@
                 \addpenalty{\@secpenalty}%
         2774
         2775
                 \addvspace{1.0em \@plus\p@?}%
                 \begingroup
         2776
         2777
                   \parindent\z@
                   \rightskip\@pnumwidth
         2778 %
                   \rightskip\@tocrmarg
         2779
                   \parfillskip-\rightskip
         2780
                   \leavevmode\headfont
         2781
                   % \setlength\@lnumwidth{4\jsZw}% 元 1.5em [2003-03-02]
         2782 %
                   \verb|\cline{Clnumwidth{\jsc@tocl@width}\advance\@lnumwidth{\2\jsZw.}|}
         2783
         2784
                   \advance\leftskip\@lnumwidth \hskip-\leftskip
         2785
                   #1\nobreak\hfil\nobreak\hbox to\@pnumwidth{\hss#2}\par
         2786
                 \endgroup
               fi
         2788 %</!book&!report>
```

```
インデントと幅はそれぞれ 1.5em, 2.3em でしたが、1zw, 3.683zw に変えました。
               2789 % \cbook | report > % \newcommand * {\l@section} {\l@dottedtocline {1} {1\jsZw} {3.683\jsZw}}
                   [2013-12-30] 上のインデントは \jsc@tocl@width から決めるようにしました。(by ts)
                 さらに下位レベルの目次項目の体裁です。あまり使ったことがありませんので、要修正かも
  \1@subsection
                 しれません。
\1@subsubsection
                   [2013-12-30] ここも \jsc@tocl@width から決めるようにしてみました。(by ts)
   \1@paragraph
\verb|\label{loss} $$\loss $2790 \%<*!book\&!report>|
               2791 % \newcommand*{\l@subsection}
                                                   {\@dottedtocline{2}{1.5em}{2.3em}}
               2792 % \newcommand*{\l@subsubsection}{\@dottedtocline{3}{3.8em}{3.2em}}
               2793 % \newcommand*{\l@paragraph}
                                                   {\cline{4}{7.0em}{4.1em}}
               2794 % \newcommand*{\l@subparagraph} {\@dottedtocline{5}{10em}{5em}}
               2795 %
               2796 % \newcommand*{\l@subsection}
                                                   {\@dottedtocline{2}{1zw}{3zw}}
               2797 % \newcommand*{\l@subsubsection}{\@dottedtocline{3}{2\jsZw}{3\jsZw}}
                                                   {\@dottedtocline{4}{3\jsZw}{3\jsZw}}
               2798 % \newcommand*{\l@paragraph}
               2799 % \newcommand*{\l@subparagraph} {\@dottedtocline{5}{4\jsZw}{3\jsZw}}
               2800 %
               2801 \newcommand*{\l@subsection}{%
               2802
                             \@tempdima\jsc@tocl@width \advance\@tempdima -1\jsZw
                             \cline{2}{\cline{3\jsZw}}
               2803
               2804 \newcommand*{\l@subsubsection}{%
                             \@tempdima\jsc@tocl@width \advance\@tempdima 0\jsZw
               2805
                             \@dottedtocline{3}{\@tempdima}{4\jsZw}}
               2806
               2807 \newcommand*{\l@paragraph}{%
                             \@tempdima\jsc@tocl@width \advance\@tempdima 1\jsZw
               2808
                             \@dottedtocline{4}{\@tempdima}{5\jsZw}}
               2809
               2810 \newcommand*{\l@subparagraph}{%
                             \@tempdima\jsc@tocl@width \advance\@tempdima 2\jsZw
               2811
                             \@dottedtocline{5}{\@tempdima}{6\jsZw}}
               2813 %</!book&!report>
               2814 %<*book|report>
               2815 % \newcommand*{\l@subsection}
                                                   {\dot{cline}{2}{3.8em}{3.2em}}
               2816 % \newcommand*{\l@subsubsection}{\@dottedtocline{3}{7.0em}{4.1em}}
               2817 % \newcommand*{\l@paragraph}
                                                   {\@dottedtocline{4}{10em}{5em}}
               2818 % \newcommand*{\l0subparagraph} {\0dottedtocline{5}{12em}{6em}}
               2819 \newcommand*{\l@section}{%
                             \@tempdima\jsc@tocl@width \advance\@tempdima -1\jsZw
               2820
                             \cline{1}{\cline{3.683\jsZw}}
               2821
               2822 \newcommand*{\l@subsection}{%
               2823
                             \@tempdima\jsc@tocl@width \advance\@tempdima 2.683\jsZw
                             \cline{2}{\cline{2}}{\cline{3.5\jsZw}}
               2824
               2825 \newcommand*{\l@subsubsection}{%
               2826
                             \@tempdima\jsc@tocl@width \advance\@tempdima 6.183\jsZw
                             \cline{3}{\cline{3}}{\cline{3}}{\cline{3}}
               2827
               2828 \newcommand*{\l@paragraph}{%
                             \@tempdima\jsc@tocl@width \advance\@tempdima 10.683\jsZw
               2829
                             \@dottedtocline{4}{\@tempdima}{5.5\jsZw}}
               2830
```

```
2831 \newcommand*{\l@subparagraph}{%
                             2832
                                                        \@tempdima\jsc@tocl@width \advance\@tempdima 16.183\jsZw
                             2833
                                                        \cline{5}{\cline{5}}{\cline{5}}
                             2834 %</book|report>
       | \numberline 欧文版 LaTeX では \numberline{...} は幅 \@tempdima の箱に左詰めで出力する命令で
       \@lnumwidth すが,アスキー版では \@tempdima の代わりに \@lnumwidth という変数で幅を決めるよう
                                に再定義しています。後続文字が全角か半角かでスペースが変わらないように \hspace を
                                 入れておきました。
                             2835 \newdimen\end{0lnumwidth}
                             2836 \end{area} $$2836 \end{
\@dottedtocline IATFX 本体 (ltsect.dtx 参照) での定義と同じですが, \@tempdima を \@lnumwidth に
         \jsTocLine 変えています。
                                    これを変更可能にするため、\jsTocLineというマクロに切り出しました。例えば、仮想
                                 ボディの中央・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ に変更したい場合は
                                     \label{leaders \hbox {\hss}\hfill} $$\operatorname{\hsm} \hfill} $$
                                 とします。
                             2837 \def\jsTocLine{\leaders\hbox{%
                             2838 \ 

 \m0th \mkern \0dotsep mu\hbox{.}\mkern \0dotsep mu$}\hfill}
                             2839 \def\@dottedtocline#1#2#3#4#5{\ifnum #1>\c@tocdepth \else
                                       \vskip \z@ \@plus.2\p@?
                                       {\leftskip #2\relax \rightskip \@tocrmarg \parfillskip -\rightskip
                             2841
                                           \parindent #2\relax\@afterindenttrue
                             2842
                                          \interlinepenalty\@M
                             2843
                                          \leavevmode
                             2844
                             2845
                                          \@lnumwidth #3\relax
                                           \advance\leftskip \@lnumwidth \null\nobreak\hskip -\leftskip
                             2846
                             2847
                             2848
                                           \jsTocLine \nobreak\hb@xt@\@pnumwidth{%
                                                       \hfil\normalfont \normalcolor #5}\par}\fi}
                             2849
                                 ■図目次と表目次
 \listoffigures 図目次を出力します。
                             2850 \mbox{ }\mbox{listoffigures}{\%}
                             2851 %<*book|report>
                             2852 \if@twocolumn\@restonecoltrue\onecolumn
                             2853 \else\@restonecolfalse\fi
                                       \chapter*{\listfigurename}%
                             2855 \@mkboth{\listfigurename}{}%
                             2856 %</book|report>
                             2857 %<*!book&!report>
                             2858 \section*{\listfigurename}%
```

2859 \@mkboth{\listfigurename}{\listfigurename}%

```
2860 %</!book&!report>
            2861 \@starttoc{lof}%
            2862 % <book | report > \if@restonecol\twocolumn\fi
            2863 }
    \10figure 図目次の項目を出力します。
            \listoftables 表目次を出力します。
            2865 \newcommand{\listoftables}{%
            2866 %<*book|report>
            2867 \if@twocolumn\@restonecoltrue\onecolumn
            2868 \else\@restonecolfalse\fi
            2869 \chapter*{\listtablename}%
            2870 \mathbb{\{}\ \@mkboth{\listtablename}{}\%
            2871 %</book|report>
            2872 %<*!book&!report>
            2873 \section*{\listtablename}%
            \tt 2874 \ \Cmkboth{\listtablename}{\listtablename},
            2875 %</!book&!report>
            2876 \@starttoc{lot}%
            2877 % <book | report > \if@restonecol\twocolumn\fi
            2878 }
     \1@table 表目次は図目次と同じです。
            2879 \let\l@table\l@figure
             10.2 参考文献
    \bibindent オープンスタイルの参考文献で使うインデント幅です。元は 1.5em でした。
            2880 \newdimen\bibindent
            2881 \setlength\bibindent{2\jsZw}
thebibliography 参考文献リストを出力します。
               [2016-07-16] LATFX 2.09 で使われていたフォントコマンドの警告を, 文献スタイル (.bst)
              ではよく \bf がいまだに用いられることが多いため、thebibliography 環境内では例外的
              に出さないようにしました。
            2882 \newenvironment{thebibliography}[1]{%
                \@jsc@warnoldfontcmdexceptiontrue
                 \global\let\presectionname\relax
            2884
            2885 \global\let\postsectionname\relax
            2887 %<*kiyou>
            2888 \vspace{1.5\baselineskip}
            2889 \subsubsection*{\refname}\@mkboth{\refname}{\refname}%
```

2890 \vspace{0.5\baselineskip}

2891 %</kiyou>

```
2892 % <book | report > \chapter * {\bibname} \ \Qmkboth {\bibname} \ \} \ \
            2893 % book | report > \addcontentsline \toc \ \chapter \ \text{bibname} \ \%
                   \list{\@biblabel{\@arabic\c@enumiv}}%
                        {\settowidth\labelwidth{\@biblabel{#1}}%
            2895
            2896
                        \leftmargin\labelwidth
                        \advance\leftmargin\labelsep
            2897
                        \@openbib@code
            2898
            2899
                        \usecounter{enumiv}%
                        \let\p@enumiv\@empty
            2900
                        \renewcommand\theenumiv{\@arabic\c@enumiv}}%
            2901
            2902 %<kiyou>
                          \small
            2903
                   \sloppy
                   \clubpenalty4000
            2904
                   \@clubpenalty\clubpenalty
            2905
            2906
                   \widowpenalty4000%
            2907
                   \sfcode`\.\@m}
                  {\def\@noitemerr
            2908
            2909
                    {\@latex@warning{Empty `thebibliography' environment}}%
            2910
                   \endlist}
    \newblock \newblock はデフォルトでは小さなスペースを生成します。
            2911 \newcommand{\newblock}{\hskip .11em\@plus.33em\@minus.07em}
\@openbib@code \@openbib@code はデフォルトでは何もしません。この定義は openbib オプションによっ
              て変更されます。
            2912 \let\@openbib@code\@empty
   \@biblabel \bibitem[...] のラベルを作ります。ltbibl.dtx の定義の半角 [] を全角 [] に変え, 余
              分なスペースが入らないように \jsInhibitGlue ではさみました。とりあえずコメントア
              ウトしておきますので,必要に応じて生かしてください。
            2913 % \def\@biblabel#1{\jsInhibitGlue [#1] \jsInhibitGlue}
        \cite 文献の番号を出力する部分は ltbibl.dtx で定義されていますが, コンマとかっこを和文
       \@cite フォントにするには次のようにします。とりあえずコメントアウトしておきましたので、必
      \@citex 要に応じて生かしてください。かっこの前後に入るグルーを \jsInhibitGlue で取ってい
              ますので、オリジナル同様、Knuth~\cite{knu}」のように半角空白で囲んでください。
            2914 % \def\@citex[#1]#2{\leavevmode
                    \let\@citea\@empty
            2915 %
            2916 %
                    \@cite{\@for\@citeb:=#2\do
            2917 %
                      {\@citea\def\@citea{, \inhibitglue\penalty\@m\ }%
            2918 %
                      \edef\@citeb{\expandafter\@firstofone\@citeb\@empty}%
            2919 %
                      \ifOfilesw\immediate\write\Cauxout{\string\citation{\Cciteb}}\fi
            2920 %
                      \@ifundefined{b@\@citeb}{\mbox{\normalfont\bfseries ?}%
            2921 %
                        \G@refundefinedtrue
            2922 %
                        \@latex@warning
            2923 %
                          {Citation `\@citeb' on page \thepage \space undefined}}%
                        {\@cite@ofmt{\csname b@\@citeb\endcsname}}}}{#1}}
            2924 %
            2925 % \def\@cite#1#2{\jsInhibitGlue [{#1\if@tempswa , #2\fi}] \jsInhibitGlue}
```

引用番号を上ツキの 1) のようなスタイルにするには次のようにします。\cite の先頭に \unskip を付けて先行のスペース (~ も) を帳消しにしています。

```
2926 % \DeclareRobustCommand\cite{\unskip} 2927 % \Qifnextchar [{\Qtempswatrue\Qcitex}{\Qtempswafalse\Qcitex[]}} 2928 % \def\Qcite#1#2{^{\tilde{1}}} }} % , \jsInhibitGlue\ #2\fi}) }}$
```

10.3 索引

theindex $2\sim3$ 段組の索引を作成します。最後が偶数ページのときにマージンがずれる現象を直しました (Thanks: 藤村さん)。

```
2930 \newenvironment{theindex}{% 索引を3段組で出力する環境
        \if@twocolumn
2931
2932
          \onecolumn\@restonecolfalse
2933
        \else
2934
          \clearpage\@restonecoltrue
2935
2936
        \columnseprule.4pt \columnsep 2\jsZw
        \ifx\multicols\@undefined
2938 % < book | report >
                         \twocolumn[\@makeschapterhead{\indexname}%
                         \addcontentsline{toc}{chapter}{\indexname}]%
2939 % < book | report >
2940 %<!book&!report>
                           \def\presectionname{}\def\postsectionname{}%
                           \twocolumn[\section*{\indexname}]%
2941 %<!book&!report>
2942
2943
          \ifdim\textwidth<\fullwidth
            \setlength{\evensidemargin}{\oddsidemargin}
2944
2945
            \setlength{\textwidth}{\fullwidth}
2946
            \setlength{\linewidth}{\fullwidth}
2947 %<book|report>
                           \begin{multicols}{3}[\chapter*{\indexname}%
2948 % <book | report >
                           \addcontentsline{toc}{chapter}{\indexname}]%
2949 %<!book&!report>
                             \def\presectionname{}\def\postsectionname{}%
2950 %<!book&!report>
                             \begin{multicols}{3}[\section*{\indexname}]%
2951
          \else
2952 % <book | report >
                           \begin{multicols}{2}[\chapter*{\indexname}%
2953 %<book|report>
                           \addcontentsline{toc}{chapter}{\indexname}]%
2954 %<!book&!report>
                             \def\presectionname{}\def\postsectionname{}%
2955 %<!book&!report>
                             \begin{multicols}{2}[\section*{\indexname}]%
2956
          \fi
2957
        \fi
2958 % <book | report >
                       \@mkboth{\indexname}{}%
2959 %<!book&!report>
                         \@mkboth{\indexname}{\indexname}%
        \plainifnotempty % \thispagestyle{plain}
2960
2961
        \parindent\z@
        \parskip\z0 \plus .3\p0?\relax
2962
2963
        \let\item\@idxitem
2964
        \raggedright
        \footnotesize\narrowbaselines
2965
```

```
}{
2966
2967
        \ifx\multicols\@undefined
2968
          \if@restonecol\onecolumn\fi
        \else
2969
          \end{multicols}
2970
        \fi
2971
2972
        \clearpage
2973
     }
```

\@idxitem 索引項目の字下げ幅です。\@idxitem は \item の項目の字下げ幅です。

\subitem 2974 \newcommand{\@idxitem}{\par\hangindent 4\jsZw} % $\vec{\pi}$ 40pt \subsubitem \\2975 \newcommand{\subitem}{\@idxitem \hspace*{2\jsZw}} % $\vec{\pi}$ 20pt \\2976 \newcommand{\subsubitem}{\@idxitem \hspace*{3\jsZw}} % $\vec{\pi}$ 30pt

\indexspace 索引で先頭文字ごとのブロックの間に入るスペースです。

2977 \newcommand{\indexspace}{\par \vskip 10\p@? \@plus5\p@? \@minus3\p@?\relax}

\seename 索引の\see,\seealsoコマンドで出力されるものです。デフォルトはそれぞれ see, see also \alsoname という英語ですが,ここではとりあえず両方とも「 \rightarrow 」に変えました。 \Rightarrow (\$\Rightarrow\$) などでもいいでしょう。

2978 \newcommand\seename{\if@english see\else \rightarrow \fi} 2979 \newcommand\alsoname{\if@english see also\else \rightarrow \fi}

10.4 脚注

\footnote 和文の句読点・閉じかっこ類の直後で用いた際に余分なアキが入るのを防ぐため、 \footnotemark \inhibitglue を入れることにします。pI₄TEX の日付が 2016/09/03 より新しい場合は, このパッチが不要なのであてません。

パッチの必要性は「\pltx@foot@penalty が未定義か」で行う。\inhibitglue の代わりに \jsInhibitGlue を使う。

```
2980 \ifx\pltx@foot@penalty\@undefined
2981 \let\footnotes@ve=\footnote
2982 \def\footnote{\jsInhibitGlue\footnotes@ve}
2983 \let\footnotemarks@ve=\footnotemark
2984 \def\footnotemark{\jsInhibitGlue\footnotemarks@ve}
2985 \fi
```

\@makefnmark 脚注番号を付ける命令です。ここでは脚注番号の前に記号 * を付けています。「注 1」の形式にするには \textasteriskcentered を 注\kern0.1em にしてください。\@xfootnotenextと合わせて、もし脚注番号が空なら記号も出力しないようにしてあります。

[2002-04-09] インプリメントの仕方を変えたため消しました。

[2013-04-23] 新しい pTeX では脚注番号のまわりにスペースが入りすぎることを防ぐため、北川さんのパッチ [qa:57090] を取り込みました。

[2013-05-14] plcore.ltx に倣った形に書き直しました (Thanks: 北川さん)。

[2016-07-11] コミュニティ版 pIATeX の変更に追随しました (Thanks: 角藤さん)。pIATeX の日付が2016/04/17より新しい場合は、このパッチが不要なのであてません。

pTFX 依存のコードなので、minimal 和文ドライバ実装に移動。

\thefootnote 脚注番号に*印が付くようにしました。ただし、番号がゼロのときは*印も脚注番号も付 きません。

> [2003-08-15] \textasteriskcentered ではフォントによって下がりすぎるので変更しま した。

> [2016-10-08] TODO: 脚注番号が newtxtext や newpxtext の使用時におかしくなってし まいます。これらのパッケージは内部で \thefootnote を再定義していますので、気になる 場合はパッケージを読み込むときに defaultsups オプションを付けてください (qa:57284, qa:57287).

 $2986 \label{lower.5exhbox{*}\colored} 2986 \label{lower.5exhbox{*}\c$ 「注 1」の形式にするには次のようにしてください。

2987% \def\thefootnote{\ifnum\c@footnote>\z@ 注\kern0.1\jsZw\@arabic\c@footnote\fi}

\footnoterule 本文と脚注の間の罫線です。

2988 \renewcommand{\footnoterule}{%

\kern-2.6\p@? \kern-.4\p@ 2989

2990 \hrule width .4\columnwidth

2991 \kern 2.6\p@?}

\c@footnote 脚注番号は章ごとにリセットされます。

2992 %<book|report>\@addtoreset{footnote}{chapter}

\@footnotetext 脚注で \verb が使えるように改変してあります。Jeremy Gibbons, TeX and TUG NEWS, Vol. 2, No. 4 (1993), p. 9)

> [2016-08-25] コミュニティ版 pLATFX の「閉じ括弧類の直後に\footnotetext が続く場 合に改行が起きることがある問題に対処」と同等のコードを追加しました。

[2016-09-08] コミュニティ版 pIAT_EX のバグ修正に追随しました。

[2016-11-29] 古い pIATFX で使用された場合を考慮してコードを改良。

[2018-03-11] \next などいくつかの内部命令を \jsc@... 付きのユニークな名前にしま した。

2993 \long\def\@footnotetext{%

\insert\footins\bgroup 2994

2995\normalfont\footnotesize

2996 \interlinepenalty\interfootnotelinepenalty

\splittopskip\footnotesep 2997

\splitmaxdepth \dp\strutbox \floatingpenalty \@MM 2998

\hsize\columnwidth \@parboxrestore 2999

3000 \protected@edef\@currentlabel{%

```
3001
                                                            \csname p@footnote\endcsname\@thefnmark
3002
                                           }%
3003
                                           \color@begingroup
                                                       \@makefntext{%
3004
                                                                   \rule\z@\footnotesep\ignorespaces}%
3005
                                                       \futurelet\jsc@next\jsc@fo@t}
3006
3007 \end{jsc@fo@t{\ifcat\bgroup\noexpand\jsc@next\let\jsc@next\jsc@fo@t}}
                                                                                                                                                                                                     \else \let\jsc@next\jsc@f@t\fi \jsc@next}
3009 \def\jsc@f@@t{\bgroup\aftergroup\jsc@@foot\let\jsc@next}
3010 \det jsc@f@t#1{#1\jsc@@foot}
3011 \ \texttt{\gray} \ and \ \texttt{\gray} \ and
                               \ifx\pltx@foot@penalty\@undefined\else
3012
                                           \ifhmode\null\fi
3013
                                            \ifnum\pltx@foot@penalty=\z@\else
3014
3015
                                                       \penalty\pltx@foot@penalty
3016
                                                       \pltx@foot@penalty\z@
3017
                                           \fi
                                fi
3018
```

\@makefntext 実際に脚注を出力する命令です。**\@makefnmark** は脚注の番号を出力する命令です。ここでは脚注が左端から一定距離に来るようにしてあります。

```
3019 \newcommand \@makefntext[1] {\%
```

3020 \advance\leftskip 3\jsZw

3021 \parindent 1\jsZw

3022 \noindent

3023 \llap{\@makefnmark\hskip0.3\jsZw}#1}

\@xfootnotenext 最初の \footnotetext{...} は番号が付きません。著者の所属などを脚注の欄に書くとき に便利です。

すでに \footnote を使った後なら \footnotetext [0] {...} とすれば番号を付けない 脚注になります。ただし,この場合は脚注番号がリセットされてしまうので,工夫が必要です。

[2002-04-09] インプリメントの仕方を変えたため消しました。

```
3024 % \def\@xfootnotenext[#1]{%
3025 %
        \begingroup
3026 %
           \lim 1>\z0
             \csname c@\@mpfn\endcsname #1\relax
3027 %
             \unrestored@protected@xdef\@thefnmark{\thempfn}%
3028 %
3029 %
           \else
3030 %
             \unrestored@protected@xdef\@thefnmark{}%
3031 %
           \fi
3032 %
        \endgroup
3033 %
        \@footnotetext}
```

ここまでのコードは JS クラスを踏襲する。

11 段落の頭へのグルー挿入禁止

段落頭のかぎかっこなどを見かけ1字半下げから全角1字下げに直します。

\jsInhibitGlueAtParTop 「段落頭の括弧の空き補正」の処理を \jsInhibitGlueAtParTop という命令にして、これ を再定義可能にした。

3034 \let\jsInhibitGlueAtParTop\@empty

\everyparhook 全ての段落の冒頭で実行されるフック。これの初期値を先述の \jsInhibitGlueAtParTop とする。

- 3035 \def\everyparhook{\jsInhibitGlueAtParTop}
- 3036 \ifnum\bxjs@everyparhook=\bxjs@everyparhook@compat
- 3037 \g@addto@macro\bxjs@begin@document@hook{\everypar{\everyparhook}}
- 3038 \fi

[2016-07-18] \inhibitglue の発行対象を \inhibitxspcode が 2 に設定されているものすべてに拡大しました。

[2016-12-01] すぐ上の変更で $\ensuremath{^{\circ}}$ ($\ensuremath{^{\circ}}$ で) すぐ上の変更で $\ensuremath{^{\circ}}$ でした ($\ensuremath{^{\circ}}$ で) かったので,プレフィックスを付けて $\ensuremath{^{\circ}}$ ($\ensuremath{^{\circ}}$) にしました ($\ensuremath{^{\circ}}$ ($\ensuremath{^{\circ}}$)。

[2017-02-13] \jsc@tempa は実はテンポラリではなく「この処理専用のユニーク制御綴」である必要があります。間違って別の箇所で使う危険性が高いので、専用の命令 \jsc@ig@temp に置き換えました (Issue #54)。

次の $\$ (@inhibitglue は JS クラスでの $\$ jsInhibitGlueAtParTop の実装である。エンジンが (u)platex の場合はこれを採用する。

```
3039 \ifx j\jsEngine
```

 $3040 \def\dinhibitglue{%}$

3041 \futurelet\@let@token\@@inhibitglue}

 $3042 \setminus begingroup$

 $3043 \ \text{DEF=\gdef}$

 $3044 \verb|\let\CATCODE=\catcode|$

3045 \let\ENDGROUP=\endgroup

3046 \CATCODE`k=12

3047 \CATCODE`a=12

3048 \CATCODE`n=12

3049 \CATCODE`j=12

3050 \CATCODE\i=12

3051 \CATCODE`c=12

3052 \CATCODE h=12

3053 \CATCODE`r=12

 $3054 \CATCODE\t=12$

```
3055 \CATCODE`e=12
3056 \GDEF\KANJI@CHARACTER{kanji character }
3057 \ENDGROUP
3058 \def\@@inhibitglue{%}
                       \expandafter\expandafter\expandafter\jsc@inhibitglue\expandafter\meaning\expandafter\@let@tc
3059
3060 \verb|\expandafter\expandafter| when the control of the control
                       \def\jsc@ig@temp{#1}%
3061
3062
                       \ifx\jsc@ig@temp\@empty
                              3063
3064
                                      \inhibitglue
3065
                              \fi
                     \fi}
3066
3067 \fi
               ここからしばらく「(本物の) \everypar に追加した \everyparhook を保持する」ため
      のパッチ処理が続く。これは、everyparhook=compat の場合にのみ実行する。
3068 \ifnum\bxjs@everyparhook=\bxjs@everyparhook@compat
               これだけではいけないようです。あちこちに \everypar を初期化するコマンドが隠され
       ていました。
               まず、環境の直後の段落です。
              [2016-11-19] ltlists.dtx 2015/05/10 v1.0t の変更に追随して \clubpenalty のリセット
       を追加しました。
3069 \def\@doendpe{%
3070
                     \@endpetrue
3071
                       \def\par{%
                              \@restorepar\clubpenalty\@clubpenalty\everypar\ook}\par\@endpefalse}%
3072
3073
                      \everypar{{\setbox\z@\lastbox}\everypar{\everyparhook}\dendpefalse\everyparhook}}
              [2017-08-31] minipage 環境にも対策します。
3074 \ensuremath{\mbox{def}\mbox{\mbox{\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mb
3075
                      \@minipagetrue
                      \everypar{\@minipagefalse\everypar{\everyparhook}}%
3076
3077 }
              \item 命令の直後です。
3078 \ensuremath{\mbox{def}\ensuremath{\mbox{@item}[\#1]}} {\%}
3079
                       \if@noparitem
3080
                              \@donoparitem
3081
                      \else
                               \if@inlabel
3082
                                      \indent \par
3083
3084
                              \fi
                              \ifhmode
3085
                                      \unskip\unskip \par
3086
3087
                              \if@newlist
3088
```

```
\if@nobreak
3089
             \@nbitem
3090
3091
           \else
3092
             \addpenalty\@beginparpenalty
             \addvspace\@topsep
3093
             \addvspace{-\parskip}%
3094
3095
           \fi
         \else
3096
           \addpenalty\@itempenalty
3097
           \addvspace\itemsep
3098
3099
         \global\@inlabeltrue
3100
3101
      \fi
      \everypar{%
3102
3103
         \@minipagefalse
         \global\@newlistfalse
3104
3105
         \if@inlabel
           \global\@inlabelfalse
3106
           {\sc}^{\sc}
3107
            \ifvoid\z@
3108
3109
              \kern-\itemindent
            fi}%
3110
           \box\@labels
3111
           \perboldrel{penalty}z0
3112
         \fi
3113
3114
         \if@nobreak
           \@nobreakfalse
3115
3116
           \clubpenalty \@M
3117
           \clubpenalty \@clubpenalty
3118
3119
           \everypar{\everyparhook}%
3120
         \fi
         \everyparhook}%
3121
3122
       \if@noitemarg
         \@noitemargfalse
3123
         \if@nmbrlist
3124
           \refstepcounter\@listctr
3125
         \fi
3126
3127
      \fi
      \label{makelabel} $$\ \sigma^{0tempboxa{\mathbb{Z}}}_{makelabel{\#1}}%$
3128
       \global\setbox\@labels\hbox{%
3129
         \unhbox\@labels
3130
         \hskip \itemindent
3131
         \hskip -\labelwidth
3132
3133
         \hskip -\labelsep
3134
         \ifdim \wd\@tempboxa >\labelwidth
3135
           \box\@tempboxa
3136
           \hbox to\labelwidth {\unhbox\@tempboxa}%
3137
```

```
\hskip \labelsep}%
3139
    \ignorespaces}
   二つ挿入した \everyparhook のうち後者が \section 類の直後に 2回, 前者が 3回目以
 降に実行されます。
3141 \def\@afterheading{%
     \@nobreaktrue
3142
3143
     \everypar{%
3144
       \if@nobreak
3145
         \@nobreakfalse
         \clubpenalty \@M
3146
3147
         \if@afterindent \else
           {\setbox\z@\lastbox}%
3148
```

「\everyparhook 用のパッチ処理」はここまで。

\clubpenalty \@clubpenalty

\everypar{\everyparhook}%

\fi\everyparhook}}

3154 \fi

3149

3150

3151

3152

3153

\fi

\fi \else

3138

\@gnewline についてはちょっと複雑な心境です。もともとの pIATEX 2_{ε} は段落の頭にグルーが入る方で統一されていました。しかし \\ の直後にはグルーが入らず,不統一でした。そこで \\ の直後にもグルーを入れるように直していただいた経緯があります。しかし,ここでは逆にグルーを入れない方で統一したいので,また元に戻してしまいました。

しかし単に戻すだけでも駄目みたいなので、ここでも最後にグルーを消しておきます。

※luatexja を読みこんだ場合に lltjcore.sty によって上書きされるのを防ぐため遅延させる。

```
3155 \ifnum\bxjs@everyparhook=\bxjs@everyparhook@none\else
3156 \AtEndOfPackage{%
3157 \def\@gnewline #1{%
3158 \ifvmode
3159 \@nolnerr
3160 \else
3161 \unskip \reserved@e {\reserved@f#1}\nobreak \hfil \break \null
3162 \jsInhibitGlue \ignorespaces
3163 \fi}
3164 }
3165 \fi
```

12 いろいろなロゴ

IATeX 関連のロゴを作り直します。

[2016-07-14] ロゴの定義は jslogo パッケージに移転しました。後方互換のため, jsclasses ではデフォルトでこれを読み込みます。nojslogo オプションが指定されて いる場合は読み込みません。

BXJS クラスでも jslogo オプション指定の場合に jslogo パッケージを読み込むように した。ただし JS クラスと異なり、既定では読み込まない。

※ \小、\上小の制御綴は定義しない。

```
3166 \if@jslogo
      \IfFileExists{jslogo.sty}{%
3168
        \RequirePackage{jslogo}%
3169
3170
        \ClassWarningNoLine\bxjs@clsname
3171
         {The package 'jslogo' is not installed.\MessageBreak
          It is included in the recent release of \MessageBreak
3172
          the 'jsclasses' bundle}
3174 }
3175 \fi
```

amsmath との衝突の回避 13

\ProvidesFile

\ltx@ifnextchar amsmath パッケージでは行列中で \@ifnextchar を再定義していますが, これが LATFX の \ProvidesFile で悪さをする例が FTeX で報告されています。これを避けるための tDB さ んのフィックスを挿入しておきます。副作用がありましたらお知らせください。

> この現象については私の TeX 掲示板 4273~、16058~ で議論がありました。なお、AMS 関係のパッケージを読み込む際に psamsfonts オプションを与えても回避できます (Thanks: しっぽ愛好家さん)。

> [2016-11-19] 本家の ltclass.dtx 2004/01/28 v1.1g で修正されているのでコメントアウト しました。

```
3176 %\let\ltx@ifnextchar\@ifnextchar
3177 %\def\ProvidesFile#1{%
3178 % \begingroup
3179 %
         \catcode`\ 10 %
3180 %
         \ifnum \endlinechar<256 %
           \ifnum \endlinechar>\m@ne
3181 %
3182 %
             \catcode\endlinechar 10 %
           \fi
3183 %
         \fi
3184 %
3185 %
         \@makeother\/%
```

```
3186 % \@makeother\&%
```

3187 % \ltx@ifnextchar[{\@providesfile{#1}}{\@providesfile{#1}[]}}

14 初期設定

■いろいろな語

```
\prepartname
  \postpartname 3188 \newcommand{\prepartname}{\if@english Part~\else 第\fi}
\prechaptername ^{3189} \newcommand{\postpartname}{\if@english\else 部\fi}
              3190 \% chook report > \newcommand { \prechaptername } { \if @english Chapter ~ \else 第 \fi }
\postchaptername _{3191} %\chook|report>\newcommand{\postchaptername}{\if@english\else 章\fi}
\presectionname 3192 \newcommand{\presectionname}{}% 第
\postsectionname ^{3193} \newcommand{\postsectionname}{}% 節
  \contentsname
\listfigurename 3194 \newcommand{\contentsname}{\if@english Contents\else 目次\fi}
 3196 \newcommand{\listtablename}{\if@english List of Tables\else 表目次\fi}
       \refname
       \bibname 3197 \newcommand{\refname}{\if@english References\else 参考文献\fi}
     \indexname 3198 \newcommand{\bibname}{\if@english Bibliography\else 参考文献\fi}
              3199 \newcommand{\indexname}{\if@english Index\else 索引\fi}
    \figurename
     3201 %<jspf>\newcommand{\figurename}{Fig.~}
              3202 %<!jspf>\newcommand{\tablename}{\if@english Table~\else 表\fi}
              3203 \% \text{jspf} \rightarrow \text{mewcommand} \text{Table~}
  \appendixname
  \abstractname 3204 % \newcommand{\appendixname}{\if@english Appendix~\else 付録\fi}
              3205 \newcommand{\appendixname}{\if@english \else 付録\fi}
              3206 %<!book>\newcommand{\abstractname}{\if@english Abstract\else 概要\fi}
```

■今日の日付 I♣TEX で処理した日付を出力します。jarticle などと違って、標準を西暦にし、余分な空白が入らないように改良しました。和暦にするには \和暦 と書いてください。

環境変数 SOURCE_DATE_EPOCH / FORCE_SOURCE_DATE が設定されている場合は"今日"が過去・未来の日付になる可能性がある。BXJS クラスでは、和暦の扱いは bxwareki パッケージに任せる。

※ 2.0 版より、完全に bxwareki に任せる。

^{3207 \@}onlypreamble\bxjs@decl@Seireki@cmds

```
3208 \ensuremath{\,\backslash\,} 0tempswafalse
                      3209 \if p\jsEngine \@tempswatrue \fi
                      3210 \if n\jsEngine \@tempswatrue \fi
                      3211 \bxjs@cond\if@tempswa\fi{%
                      3212 % 欧文 8bitTeX の場合
                      3213 \newif\ifjsSeireki \jsSeirekitrue
                      3214 \def\bxjs@decl@Seireki@cmds{%
                           \def\西暦{\jsSeirekitrue}%
                           \def\和暦{\jsSeirekifalse\bxjs@wareki@used}}
                      3216
                      3217 \def\Seireki{\jsSeirekitrue}
                      3218 \def\Wareki{\jsSeirekifalse\bxjs@wareki@used}
                      3219 \def\bxjs@if@use@seireki{\bxjs@cond\ifjsSeireki\fi}
                      3220 \def\bxjs@iai{\noexpand~}
                      3221 }{%
                      3222 \newif\if 西暦 \西暦 true
                      3223 \def\bxjs@decl@Seireki@cmds{%
                           \def\西暦{\西暦 true}%
                            \def\和暦{\西暦 false\bxjs@wareki@used}}
                      3226 \def\Seireki{\西暦 true}
                      3227 \def\Wareki{\西暦 false\bxjs@wareki@used}
                      3228 \def\bxjs@if@use@seireki{\bxjs@cond\if 西暦\fi}
                      3230 }
                      3231 \bxjs@decl@Seireki@cmds
                      3232 \let\bxjs@unxp\@firstofone \let\bxjs@onxp\@firstofone
                      3233 \bxjs@test@engine\unexpanded{%
                           \let\bxjs@unxp\unexpanded \def\bxjs@onxp{\unexpanded\expandafter}}
\ifbxjs@bxwareki@avail bxwareki パッケージが使用できるか。
                      3235 \newif\ifbxjs@bxwareki@avail
                      3236 \IfFileExists{bxwareki.sty}{%
                      3237
                            \RequirePackage{bxwareki}[]%
                            \bxjs@bxwareki@availtrue}{}
    \bxjs@wareki@used 和暦が非対応の場合に警告を出す。
                      3239 \ifbxjs@bxwareki@avail \let\bxjs@wareki@used\@empty
                      3240 \else
                      3241
                           \bxjs@robust@def\bxjs@wareki@used{%
                              \global\let\bxjs@wareki@used\@empty
                      3242
                      3243
                              \ClassWarning\bxjs@clsname
                               {Wareki mode is not supported, since\MessageBreak
                      3244
                      3245
                                'bxwareki' is unavailable, found}}
                            \g@addto@macro\bxjs@begin@document@hook{%
                      3246
                      3247
                              \let\bxjs@wareki@used\@empty}
                      3248 \fi
              \jayear 和暦における年の表記(元号 + 年数)。
```

\heisei 年数を表す整数レジスタで、元号が「平成」である場合にのみ定義される。

```
3249 \ifbxjs@bxwareki@avail
      3250
            \let\jayear\warekiyear
            \def\bxjs@tmpa{H}\ifx\bxjs@tmpa\warekigengoinitial
              \newcount\heisei \heisei=\value{warekiyear}
      3252
      3253
       bxwareki が使えない場合は西暦表示にする。
      3254 \else
            \edef\jayear{\the\year \bxjs@iai}
      3255
      3256 \fi
\today 英語、西暦、和暦で場合分けをする。
      3257 \left| bxjs@next\right| 
      3258 \ifbxjs@bxwareki@avail \ifx\warekigengo\@empty\else
            \def\bxjs@next{\bxjs@onxp{\warekitoday}}
      3260 \fi\fi
      3261 \edef\bxjs@today{%
            \if@english
      3262
      3263
              \ifcase\month\or
      3264
                January\or February\or March\or April\or May\or June\or
                July\or August\or September\or October\or November\or December\fi
      3265
                \space\number\day, \number\year
      3266
      3267
            \else
              \ifx\bxjs@next\relax \expandafter\@firstoftwo
      3268
              \else \noexpand\bxjs@if@use@seireki
      3269
              \fi {%
      3270
                \number\year\bxjs@iai\bxjs@unxp{年}%
      3271
      3272
                \bxjs@iai\number\month\bxjs@iai\bxjs@unxp{月}%
                \bxjs@iai\number\day\bxjs@iai\bxjs@unxp{∃}%
      3273
      3274
              }{\bxjs@next}%
            \fi}
      3275
      3276 \let\today\bxjs@today
```

texjporg 版の日本語用 Babel 定義ファイル(japanese.ldf)が読み込まれた場合に影響を受けないようにする。

```
3277 \g@addto@macro\bxjs@begin@document@hook{%
3278 \ifx\bbl@jpn@maybekansuji\@undefined\else
3279 \bxjs@decl@Seireki@cmds
3280 \g@addto@macro\datejapanese{%
3281 \let\today\bxjs@today}%
3282 \fi}
```

■ハイフネーション例外 T_{EX} のハイフネーションルールの補足です(ペンディング: eng-lish)

```
■ページ設定 ページ設定の初期化です。
```

```
3284 %<slide>\pagestyle{empty}%
3285 %<article|report>\pagestyle{plain}%
3286 \mbox{\sc \%}\ \pagestyle{headings}\%
3287 \pagenumbering{arabic}
3288 \setminus if@twocolumn
3289 \twocolumn
3290
      \sloppy
3291
     \flushbottom
3292 \else
     \onecolumn
3293
3294 \raggedbottom
3295 \fi
3296 %<*slide>
3297 \renewcommand\familydefault{\sfdefault}
3298 \raggedright
3299 %</slide>
```

■BXJS 独自の追加処理 彎

フックを実行する。

3300 \bxjs@pre@jadriver@hook

和文ドライバのファイルを読み込む。

 $3301 \verb|\input{bxjsja-\bxjs@jadriver.def}|$

おしまい。

3302 %</cls>

以上です。

付録 A 和文ドライバの仕様 湾

次の命令が BXJS クラス本体と和文ドライバの連携のために用意されている。このうち、 ★印を付けたものは"書込"が許されるものである。

• \jsDocClass [文字トークンの let] 文書クラスの種類を示し、次のいずれかと一致 する (\if で判定可能)。

\jsArticle bxjsarticle クラス

\jsBook bxjsbook クラス

\jsReport bxjsreport クラス

\jsSlide bxjsslide クラス

- \jsEngine [文字トークンの let] 使用されているエンジンの種別。(\if で判定 可能)。
 - p pdfT_FX (DVI モードも含む)
 - 1 Lua T_{FX} (")
 - x X7TFX
 - j pT_FX または upT_FX
 - n 以上の何れでもない
- \ifjsWithupTeX [スイッチ] 使用されているエンジンが upTpX であるか。
- \ifjsWitheTeX [スイッチ] 使用されているエンジンが ε -TeX 拡張であるか。
- \ifjsInPdfMode [スイッチ] 使用されているエンジンが (pdfT_EX・LuaT_EX の) PDF モードであるか。
- \jsUnusualPtSize [整数定数を表す文字列のマクロ] 基底フォントサイズが 10pt、 11pt、12pt のいずれでもない場合の \@ptsize の値。(\@ptsize 自体があまり有用でないと思われる。)
- \jsScale [実数を表す文字列のマクロ] 和文フォントサイズの要求サイズに対する スケール。クラスオプション scale で指定される。(既定値は 0.924715。)
- \jsJaFont [マクロ] 和文フォント設定を表す文字列。クラスオプション jafont で指定された値。
- \jsJaParam [マクロ] 和文モジュールに渡すパラメタを表す文字列。この値が何を表すかは決まってなくて、各々の和文モジュールが独自に解釈する。クラスオプション japaram で指定された値。
- \jsInhibitGlue [マクロ] \inhibitglue という命令が定義されていればそれを 実行し、そうでなければ何もしない。JS クラスで \inhibitglue を用いている箇所 は全て \jsInhibitGlue に置き換えられている。従って、\inhibitglue は未定義 でも動作するが、その実装がある場合は BXJS クラスはそれを活用する。
- \jsInhibitGlueAtParTop [マクロ] ★ 段落先頭におけるカギ括弧の位置調整を行うマクロ。全ての段落先頭で呼び出される。
- \jsZw [内部寸法値] 「現在の全角幅」を表す変数。JS クラスで zw 単位で設定されている長さパラメタはこの変数を単位として設定されている。この変数の値は実際に

用いられる「和文フォント」のメトリックに基づくのではなく、機械的に \jsScale \times (フォントサイズ) であると定められている(フォントサイズ変更の度に再設定される)。従って、「和文コンポーネント」はこの設定と辻褄が合うように和文フォントサイズを調整する必要がある。ほとんどの場合、和文フォントを NFSS で規定する際に \jsScale の値をスケール値として与えれば上手くいく。

- \jsFontSizeChanged [マクロ] フォントサイズが変更された時に必ず呼び出されるマクロ。
- \jsResetDimen [マクロ]★ 上記 \jsFontSizeChanged の中で呼び出される、ユーザ (和文モジュール) 用のフック。フォントサイズに依存するパラメタをここで設定することができる。既定の定義は空。

以下で標準で用意されている和文ドライバの実装を示す。

3303 %<*drv>

付録 B 和文ドライバ: minimal 🕾

jadriver の指定が無い場合に適用されるドライバ。また、standard ドライバはまずこのドライバファイルを読み込んでいる。

このドライバでは、各エンジンについての必要最低限の処理だけを行っている。日本語処理のためのパッケージ(xeCJK や $LuaT_EX$ -ja 等)を自分で読み込んで適切な設定を行うという使用状況を想定している。

ただし、 $(u)pT_EX$ エンジンについては例外で、和文処理機構の選択の余地がないため、このドライバにおいて、「JS クラスと同等の指定」を完成させるためのコードを記述する。

B.1 補助マクロ

3304 %<*minimal>

3305 %% このファイルは日本語文字を含みます

\DeclareJaTextFontCommand 和文書体のための、「余計なこと」をしない \DeclareTextFontCommand。

3306 \def\DeclareJaTextFontCommand#1#2{%

3307 \DeclareRobustCommand#1[1]{%

3308 \relax

3309 \ifmmode \expandafter\nfss@text \fi

3310 {#2##1}}%

3311 }

\DeclareJaMathFontCommand 和文数式フォントが無効な場合に、それをエミュレートするもの。

 $3312 \verb|\def| DeclareJaMathFontCommand#1#2{%}|$

3314 \relax

3315 \ifmmode\else \non@alpherr{#1\space}\fi

 $\tt 3316 \qquad \tt \family\fa$

3317 \fontseries{m}\fontshape{n}\selectfont\relax

3318 #2##1}%

```
3319 }%
                 3320 }
\bxjs@if@sf@default \familydefault の定義が "\sfdefault" である場合に引数のコードを実行する。
                 3321 \long\def\bxjs@@CSsfdefault{\sfdefault}%
                 3322 \@onlypreamble\bxjs@if@sf@default
                 3323 \def\bxjs@if@sf@default#1{%
                      \ifx\familydefault\bxjs@@CSsfdefault#1\fi
                      \g@addto@macro\bxjs@begin@document@hook{%
                 3325
                        \ifx\familydefault\bxjs@@CSsfdefault#1\fi}%
                 3326
                 3327 }
   \jsInverseScale \jsScale の逆数。
                  ※\CS=\jsInverseScale\CS は \bxjs@invscale\CS\jsScale よりも精度が劣るが処理
                 3328 \@tempdima\p@ \bxjs@invscale\@tempdima\jsScale
                 3329 \edef\jsInverseScale{\strip@pt\@tempdima}
    \jsLetHeadChar \jsLetHeadChar\CS{(トークン列)}: トークン列の先頭の文字を抽出し、\CS をその文
                  字トークン (に展開されるマクロ) として定義する。
                  ※先頭にあるのが制御綴やグループである場合は \CS は \relax に等置される。
                  ※文字トークンは"\the-文字列"のカテゴリコードをもつ。
                  ※非 Unicode エンジンの場合は文字列が UTF-8 で符号化されていると見なし、先頭が高位
                  バイトの場合は1文字分のバイト列(のトークン列)を抽出する。この場合は元のカテゴリ
                  コードが保持される。
                 3330 \def\jsLetHeadChar#1#2{%
                     \begingroup
                 3331
                 3332
                        \escapechar=`\\ %
                        \let\bxjs@tmpa={% brace-match-hack
                 3333
                        \bxjs@let@hchar@exp#2}%
                 3334
                 3335
                      \endgroup
                      \let#1\bxjs@g@tmpa}
                 3336
                 3337 \def\bxjs@let@hchar@exp{%
                      \futurelet\@let@token\bxjs@let@hchar@exp@a}
                 3338
                 3339 \def\bxjs@let@hchar@exp@a{%
                      \bxjs@cond\ifcat\noexpand\@let@token\bgroup\fi{% 波括弧
                 3340
                        \bxjs@let@hchar@out\let\relax
                 3341
                     }{\bxjs@cond\ifcat\noexpand\@let@token\@sptoken\fi{% 空白
                        \bxjs@let@hchar@out\let\space%
                 3343
                     }{\bxjs@cond\if\noexpand\@let@token\@backslashchar\fi{% バックスラッシュ
                 3344
                        \bxjs@let@hchar@out\let\@backslashchar
                 3345
                      }{\bxjs@let@hchar@exp@b}}}}
                 3346
                 3347 \def\bxjs@let@hchar@exp@b#1{%
                      \expandafter\bxjs@let@hchar@exp@c\string#1?\@nil#1}
                 3349 \def\bxjs@let@hchar@exp@c#1#2\@nil{%
                 3350 %\message{<#1#2>}%
```

3351 \bxjs@cond\if#1\@backslashchar\fi{% 制御綴

```
3352
        \bxjs@cond\expandafter\ifx\noexpand\@let@token\@let@token\fi{%
3353
          \bxjs@let@hchar@out\let\relax
3354
        }{%else
          \expandafter\bxjs@let@hchar@exp
3355
3356
        }%
3357
      }{%else
        \bxjs@let@hchar@chr#1%
3358
3359
3360 \def\bxjs@let@hchar@chr#1{%
      \bxjs@let@hchar@out\def{{#1}}}
3362 \def\bxjs@let@hchar@out#1#2{%
      \global#1\bxjs@g@tmpa#2\relax
3363
      \toks@\bgroup}% skip to right brace
 UTF-8 のバイト列を扱うコード。
3365 \chardef\bxjs@let@hchar@csta=128
3366 \chardef\bxjs@let@hchar@cstb=192
3367 \chardef\bxjs@let@hchar@cstc=224
3368 \chardef\bxjs@let@hchar@cstd=240
3369 \chardef\bxjs@let@hchar@cste=248
3370 \verb|\let\bxjs@let@hchar@chr@ue@a\bxjs@let@hchar@chr\\
3371 \def\bxjs@let@hchar@chr@ue#1{%
      \@tempcnta=`#1\relax
3373 %\message{\the\@tempcnta}%
      \bxjs@cond\ifnum\@tempcnta<\bxjs@let@hchar@csta\fi{%
        \bxjs@let@hchar@chr@ue@a#1%
3375
3376
      }{\bxjs@cond\ifnum\@tempcnta<\bxjs@let@hchar@cstb\fi{%
3377
        \bxjs@let@hchar@out\let\relax
      }{\bxjs@cond\ifnum\@tempcnta<\bxjs@let@hchar@cstc\fi{%
3378
3379
        \bxjs@let@hchar@chr@ue@b
     }{\bxjs@cond\ifnum\@tempcnta<\bxjs@let@hchar@cstd\fi{%
3380
        \bxjs@let@hchar@chr@ue@c
3381
      }{\bxjs@cond\ifnum\@tempcnta<\bxjs@let@hchar@cste\fi{%
        \bxjs@let@hchar@chr@ue@d
3383
3384
      }{%else
        \bxjs@let@hchar@out\let\relax
3385
     }}}}}
3386
3387 \def\bxjs@let@hchar@chr@ue@a#1{%
      \bxjs@let@hchar@out\def{{#1}}}
3389 \def\bxjs@let@hchar@chr@ue@b#1#2{%
      \bxjs@let@hchar@out\def{{#1#2}}}
3391 \def\bxjs@let@hchar@chr@ue@c#1#2#3{%
      \bxjs@let@hchar@out\def{{#1#2#3}}}
3393 \def\bxjs@let@hchar@chr@ue@d#1#2#3#4{%
      \bxjs@let@hchar@out\\def{{#1#2#3#4}}}
```

B.2 (u)pTFX 用の設定

3395 \ifx j\jsEngine

基本的に、JS クラスのコードの中で、「和文コンポーネントの管轄」として BXJS クラス で除外されている部分に相当するが、若干の変更が加えられている。

■補助マクロ \jsLetHeadChar を和文文字トークンに対応させる。

```
3396 \def\bxjs@let@hchar@chr@pp#1#2{%
3397 \expandafter\bxjs@let@hchar@chr@pp@a\meaning#2\relax#1#2}
3398 \def\bxjs@let@hchar@chr@pp@a#1#2\relax#3#4{%
3399 %\message{(\meaning#3:\meaning#4)}%
3400 \bxjs@cond\if#1k\fi{%
3401 \bxjs@let@hchar@out\def{{#4}}%
3402 }{%else
3403 \bxjs@let@hchar@chr@ue#3#4%
3404 }}
3404 }}
```

■エンジン依存の定義 最初にエンジン(pT_EX か upT_EX か)に依存する定義を行う。 \ifjsWithupTeX は BXJS において定義されているスイッチで、エンジンが upT_EX であるかを表す。

\jsc@JYn および \jsc@JTn は標準の和文横書きおよび縦書き用エンコーディングを表す。

```
3406 \edgf\sc@JYn{\ifjsWithupTeX JY2\else JY1\fi} \\ 3407 \edgf\sc@JTn{\ifjsWithupTeX JT2\else JT1\fi} \\ 3408 \edgf\sc@pfx@{\ifjsWithupTeX u\fi}
```

\bxjs@declarefontshape は標準の和文フォント宣言である。後で \bxjs@scale を求めるため一旦マクロにしておく。\bxjs@sizereference は全角幅を測定する時に参照するフォント。

まず upT_{EX} の場合の定義を示す。 JS クラスの $\operatorname{uplatex}$ オプション指定時の定義と同じである。

```
3409 \@onlypreamble\bxjs@declarefontshape
3410 \ifjsWithupTeX
3411 \def\bxjs@declarefontshape{%
3412 \DeclareFontShape{JY2}{mc}{m}{n}{<->s*[\bxjs@scale]upjpnrm-h}{}%
3413 \DeclareFontShape{JY2}{gt}{m}{n}{<->s*[\bxjs@scale]upjpngt-h}{}%
3414 \DeclareFontShape{JT2}{mc}{m}{n}{<->s*[\bxjs@scale]upjpnrm-v}{}%
3415 \DeclareFontShape{JT2}{gt}{m}{n}{<->s*[\bxjs@scale]upjpngt-v}{}%
3416 }
3417 \def\bxjs@sizereference{upjisr-h}
```

 pT_{EX} の場合の定義を示す。JS クラスのフォント種別オプション非指定時の定義と同じである。

```
3423 \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}}} {$1$} {$m}{n}{<->s*[\bxjs@scale]tgoth10}{}\%
3424 }
3425 \def\bxjs@sizereference{jis}
3426 \fi
   既に使用されている標準和文フォント定義がもしあれば取り消す。
3427 \def\bxjs@next#1/#2/#3/#4/#5\relax{%
3428 \ \def\bxjs@tmpb{#5}}
3429 \ifjsWithpTeXng \def\bxjs@tmpb{10}%
3430 \ensuremath{\setminus} else
3431 \expandafter\expandafter\bxjs@next
3432 \expandafter\string\the\jfont\relax
3433 \fi
3434 \@for\bxjs@tmpa:={\jsc@JYn/mc/m/n,\jsc@JYn/gt/m/n,%
3435
                   \jsc@JTn/mc/m/n,\jsc@JTn/gt/m/n}\do
      {\expandafter\let\csname\bxjs@tmpa/10\endcsname=\@undefined
3436
3437
       \expandafter\let\csname\bxjs@tmpa/\bxjs@tmpb\endcsname=\@undefined}
```

■和文フォントスケールの補正 実は、 pT_EX の標準的な和文フォント(JFM のこと、例えば jis)では、指定された \jsScale(この値を s とする)をそのまま使って定義すると期待通りの大きさにならない。これらの JFM では 1 zw の大きさが指定されたサイズではなく既にスケール(この値を f とする;jis では 0.962216 倍)が掛けられた値になっているからである。そのため、ここでは s/f を求めてその値をマクロ \bxjs@scale に保存する。

```
3438 \begingroup
3439 % 参照用フォント (\bxjs@sizereference) の全角空白の幅を取得
     \font\bxjs@tmpa=\bxjs@sizereference\space at 10pt
     3442 % 幅が丁度 10pt なら補正は不要
3443 \quad \text{ifdim}\ \text{wd}\ \text{z} = 10pt
3444
       \global\let\bxjs@scale\jsScale
     \else
3446 % (10*s)/(10*f) として計算、\bxjs@invscale は BXJS で定義
       \edef\bxjs@tmpa{\strip@pt\wd\z@}
3447
3448
       \@tempdima=10pt \@tempdima=\jsScale\@tempdima
       \bxjs@invscale\@tempdima\bxjs@tmpa
3449
       \xdef\bxjs@scale{\strip@pt\@tempdima}
3450
3451
     \fi
3452 \endgroup
3453 %\typeout{\string\bxjs@scale : \bxjs@scale}
```

■和文フォント関連定義 \bxjs@scale が決まったので先に保存した標準和文フォント宣言を実行する。

```
3454 \bxjs@declarefontshape
```

フォント代替の明示的定義。

```
3459 \ensuremath{\mbox{\mbox{$\sim$}}} {\mbox{\mbox{$\sim$}}} \ensuremath{\mbox{$\sim$}} \ensuremath{\mbox{$\sim$}} {\mbox{\mbox{$\sim$}}} \ensuremath{\mbox{$\sim$}} \ensuremath{\mbox{$\sim$}} {\mbox{\mbox{$\sim$}}} \ensuremath{\mbox{$\sim$}} \ensuremath{\mbox{$\sim$}} {\mbox{\mbox{$\sim$}}} \ensuremath{\mbox{$\sim$}} \ensurem
3460 \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}}} {\mbox{$1$}} it} <-> sub*gt/m/n} {\mbox{\mbox{$1$}}} it
3461 \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}{c-}ssub*gt/m/n}{}} and $$ $$ \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}{c-}ssub*gt/m/n}{}} $$
3462 \DeclareFontShape{\jsc@JYn}{gt}{bx}{it}{<->ssub*gt/m/n}{}
3465 \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}}} it} <-> sub*mc/bx/n} {\mbox{\mbox{$1$}}} it
3466 \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}} for $$\color{\mbox{\mbox{$1$}} for $$\color{\mbox{\mbox{$1$}}} for $$\color{\mbox{\mbox{\mbox{$1$}}} for $$\color{\mbox{\mbox{\mbox{$1$}}} for $$\color{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{$1$}}}} for $$\color{\mbox{\mbox{\mbox{$1$}}} for $$\color{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{$1$}}}} for $$\color{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{$1$}}}} for $$\color{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{
3467 \DeclareFontShape{\jsc@JYn}{gt}{b}{n}{<->ssub*gt/bx/n}{}
3468 \DeclareFontShape{\jsc@JYn}{gt}{b}{it}{<->ssub*gt/bx/n}{}
3469 \ensuremath{\mbox{\mbox{$>$}} \ensuremath{\mbox{$>$}} \ensuremath{\mbox
3470 \end{areFontShape} \hfill{\end{areFontShape} it} $$ (->ssub*mc/m/n) $$ (a) $$ (a) $$ (a) $$ (b) $$ (a) $$ (b) $$ (b) $$ (b) $$ (b) $$ (c) $$ (
3471 \ensuremath{\texttt{NoclareFontShape{\jsc0JTn}{mc}{m}{sl}{<->ssub*mc/m/n}{}}
3473 \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}}{m}{it}{<->ssub*gt/m/n}{}
3474 \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}{\mbox{$1$}{\mbox{$1$}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}}} \ensuremath{\mbox{$1$}{\mbox{$1$}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}} \ensuremath{\mbox{$1$}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}} \ensuremath{\mbox{$1$}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}} \ensuremath{\mbox{$1$}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1
3475 \DeclareFontShape{\jsc@JTn}{mc}{bx}{it}{<->ssub*gt/m/n}{}
3477 \ensuremath{\mbox{\sc 0JTn}{gt}{bx}{it}{<->ssub*gt/m/n}{}}
3479 \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}} n} {\ensuremath{\mbox{\mbox{\mbox{$1$}}}} n} {\ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}}} n} {\ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}}} n} {\ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}}} n} {\ensuremath{\mbox{$1$}}} {\ensuremath{\mbox{$1$}}} n {\ensuremath{\mbox{$1$}}} {\ensuremath{\mbox{$1$}}} n {\ensuremath{\m
3481 \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}} sl}{<->ssub*mc/bx/n}{}
3482 \ensuremath{\mbox{\sc 0JTn}{gt}{b}{n}{<->ssub*gt/bx/n}{}
3483 \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}}} {\color=0.05} \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}}} {\color=0.05} \ensuremath{\mbox{$1$}} {\color=0.05} \ensuremath
3484 \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}}{c}} $$ \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}}{c}} $$ \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}}{c}} $$
                         欧文総称フォント命令で和文フォントが連動するように修正する。その他の和文フォント
          関係の定義を行う。
            ※ 2020-02-02 の NFSS の改修に対する jsclasses の対策を取り入れた。
3485 \ifx\@rmfamilyhook\@undefined % old
3486 \DeclareRobustCommand\rmfamily
                                        {\not@math@alphabet\rmfamily\mathrm
                                               \romanfamily\rmdefault\kanjifamily\mcdefault\selectfont}
3488
3489 \DeclareRobustCommand\sffamily
                                        {\not@math@alphabet\sffamily\mathsf
3490
                                               \romanfamily\sfdefault\kanjifamily\gtdefault\selectfont}
3491
3492 \DeclareRobustCommand\ttfamily
                                        {\not@math@alphabet\ttfamily\mathtt
3493
                                               \romanfamily\ttdefault\kanjifamily\gtdefault\selectfont}
3494
3495 \g@addto@macro\bxjs@begin@document@hook{%
                                       \ifx\mweights@init\@undefined\else % mweights.sty is loaded
3496
3497
                                                    % my definitions above should have been overwritten, recover it!
3498
                                                    % \selectfont is executed twice but I don't care about speed...
                                                     \expandafter\g@addto@macro\csname rmfamily \endcsname
3499
                                                                  {\kanjifamily\mcdefault\selectfont}%
3500
                                                     \expandafter\g@addto@macro\csname sffamily \endcsname
3501
                                                                 {\kanjifamily\gtdefault\selectfont}%
3502
```

```
\expandafter\g@addto@macro\csname ttfamily \endcsname
3503
3504
         {\kanjifamily\gtdefault\selectfont}%
3505
     \fi}
                                % 2020-02-02
3506 \else
3507 \g@addto@macro\@rmfamilyhook
     {\prepare@family@series@update@kanji{mc}\mcdefault}
3509 \verb|\g@addto@macro\\| @sffamilyhook
     {\prepare@family@series@update@kanji{gt}\gtdefault}
3511 \g@addto@macro\\@ttfamilyhook
     {\prepare@family@series@update@kanji{gt}\gtdefault}
3513 \fi
3514 \ifx\DeclareFixJFMCJKTextFontCommand\@undefined
3515 \DeclareJaTextFontCommand{\textmc}{\mcfamily}
3516 \DeclareJaTextFontCommand{\textgt}{\gtfamily}
3517 \fi
3518 \bxjs@if@sf@default{%
3519 \renewcommand\kanjifamilydefault{\gtdefault}}
   念のため。
3520 \setminus selectfont
   \bxjs@parse@qh の処理は pTrX 系では不要になるので無効化する(つまり
 \jsSetQHLength は \setlength と等価になる)。
3521 \def\bxjs@parse@qh#1{\let\bxjs@tmpb\relax}
3522 \let\bxjs@parse@qh@a\@undefined
3523 \let\bxjs@parse@qh@b\@undefined
 ■パラメタの設定
3524 \prebreakpenalty\jis"2147=10000
3525 \postbreakpenalty\jis"2148=10000
3526 \prebreakpenalty\jis"2149=10000
3527 \inhibitxspcode`!=1
3528 \in \mp 2
3529 \xspcode \ += 3
3530 \xspcode \\=3
   "80~"FF の範囲の \spcode を 3 に変更。
3531 \@tempcnta="80 \@whilenum\@tempcnta<"100 \do{%
     \xspcode\@tempcnta=3\advance\@tempcnta\@ne}
   \jsInhibitGlueAtParTop の定義。「JS クラスでの定義」を利用する。
3533 \let\jsInhibitGlueAtParTop\@inhibitglue
   \jsResetDimen は空のままでよい。
 ■組方向依存の処理 組方向判定の if-トークン(\if?dir)は pT<sub>F</sub>X 以外では未定義である
 ため、そのまま if 文に入れることができない。これを回避するため部分的に!をエスケープ
 文字に使う。
3534 \begingroup
3535 \catcode \!=0
```

```
\bxjs@ptex@dir 現在の組方向: t=縦、y=横、?=その他。
                                   3536 \gdef\bxjs@ptex@dir{%
                                   3537
                                                 !iftdir t%
                                   3538
                                                 !else!ifydir y%
                                                 !else ?%
                                   3539
                                                !fi!fi}
                                   3540
                                            新版の pT<sub>F</sub>X で脚注番号の周囲の空きが過大になる現象への対処。
                                       ※現在のpIATFX カーネルでは対処が既に行われている。ここでは、\@makefnmark の定義
                                        が古いものであった場合に、新しいものに置き換える。
                                   3541% 古い \@makefnmark の定義
                                   3542 \long\def\bxjs@tmpa{\hbox{%}}
                                                  !ifydir \@textsuperscript{\normalfont\@thefnmark}%
                                                   !else\hbox{\yoko\@textsuperscript{\normalfont\@thefnmark}}!fi}}
                                   3545 \ifx\@makefnmark\bxjs@tmpa
                                   3546 \long\gdef\@makefnmark{%
                                                  ! ifydir \hbox{\hbox{\dtextsuperscript{\normalfont\dthefnmark}} \hbox{} % $$ $ \color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\colo
                                   3548
                                                  !else\hbox{\yoko\@textsuperscript{\normalfont\@thefnmark}}!fi}
                                   3549 \fi
                                   3550 \endgroup
                                                     pdfT<sub>E</sub>X 用の処理
                                   3551 \else\ifx p\jsEngine
                                   3553 \@onlypreamble\bxjs@cjk@loaded
                                   3554 \def\bxjs@cjk@loaded{%}
                                                 \def\@footnotemark{%
                                   3555
                                                       \leavevmode
                                   3556
                                                       \ifhmode
                                   3557
                                                            \edef\@x@sf{\the\spacefactor}%
                                   3558
                                                            \ifdim\lastkern>\z@\ifdim\lastkern<5sp\relax
                                   3559
                                                                   \unkern\unkern
                                   3560
                                   3561
                                                                   \ifdim\lastskip>\z@ \unskip \fi
                                                            \fi\fi
                                   3562
                                                            \nobreak
                                   3563
                                   3564
                                                       \fi
                                   3565
                                                       \@makefnmark
                                   3566
                                                       \ifhmode \spacefactor\@x@sf \fi
                                   3567
                                                       \relax}%
                                                  \let\bxjs@cjk@loaded\relax
                                   3568
                                   3569 }
                                   3570 \g@addto@macro\bxjs@begin@document@hook{%
                                   3571
                                                  \@ifpackageloaded{CJK}{%
                                   3572
                                                       \bxjs@cjk@loaded
                                               }{}%
                                   3573
```

3574 }

B.4 X_{TE}X 用の処理

```
3575 \else\ifx x\jsEngine
                       \bxjs@let@hchar@chr について、「BMP 外の文字の文字トークンに対して \string を
                     適用するとサロゲートペアに分解される」という問題に対する応急措置を施す。
                    3576 \def\bxjs@let@hchar@chr#1{%
                         \@tempcnta`#1\relax \divide\@tempcnta"800\relax
                    3577
                         \bxjs@cond\ifnum\@tempcnta=27 \fi{%
                    3578
                           \bxjs@let@hchar@chr@xe
                    3579
                         }{\bxjs@let@hchar@out\def{{#1}}}}
                    3580
                    3581 \def\bxjs@let@hchar@chr@xe#1{%
                         \lccode`0=`#1\relax
                    3582
                    3583
                         \lowercase{\bxjs@let@hchar@out\def{{0}}}}
 \bxjs@do@precisetext precisetext オプションの処理。
                    3584 \@onlypreamble\bxjs@do@precisetext
                    3585 \ifx\XeTeXgenerateactualtext\@undefined\else
                         \def\bxjs@do@precisetext{%
                    3587
                           \XeTeXgenerateactualtext=\@ne}
                    3588 \fi
\bxjs@do@simplejasetup simplejasetup オプションの処理。
                    3589 \@onlypreamble\bxjs@do@simplejasetup
                    3590 \def\bxjs@do@simplejasetup{%
                         \ifnum\XeTeXinterchartokenstate>\z@
                         3592
                           \jsSimpleJaSetup
                    3593
                           \ClassInfo\bxjs@clsname
                            {'\string\jsSimpleJaSetup' is applied\@gobble}%
                    3595
                    3596
                         \fi\fi}
     \jsSimpleJaSetup 日本語出力用の超簡易的な設定。
                    3597 \newcommand*{\jsSimpleJaSetup}{%
                         \XeTeXlinebreaklocale "ja"\relax
                         \XeTeXlinebreakskip=Opt plus 1pt minus 0.1pt\relax
                         \XeTeXlinebreakpenalty=0\relax}
                    3600
                           後処理(エンジン共通)
                      B.5
                    3601 \fi\fi\fi
                       simplejasetup オプションの処理。
                    3602 \verb|\ifx\bxjs@do@simplejasetup\@undefined\else|
                         \g@addto@macro\bxjs@begin@document@hook{%
                    3603
                    3604
                           \ifbxjs@simplejasetup
```

precisetext オプションの処理。

3605

3606 3607 \fi \fi}

\bxjs@do@simplejasetup

```
3608 \ifbxjs@precisetext
3609 \ifx\bxjs@do@precisetext\@undefined
3610 \ClassWarning\bxjs@clsname
3611 {The current engine does not support the\MessageBreak
3612 'precise-text' option\@gobble}
3613 \else
3614 \bxjs@do@precisetext
3615 \fi
3616 \fi
```

■段落頭でのグルー挿入禁止 本体開始時において \everyparhook を検査して、"結局何もしない" ことになっている場合は、副作用を完全に無くすために \everyparhook を空にする。

```
3617 \g@addto@macro\bxjs@begin@document@hook{%
3618 \ifx\jsInhibitGlueAtParTop\@empty
3619 \def\bxjs@tmpa{\jsInhibitGlueAtParTop}%
3620 \ifx\everyparhook\bxjs@tmpa
3621 \let\everyparhook\@empty
3622 \fi
3623 \fi}
```

everyparhook=modern の場合の、\everyparhook の有効化の実装。

- ※本体開始時ではなく最初から有効化していることに注意。
- $3624 \verb|\ifnum\bxjs@everyparhook=\bxjs@everyparhook@modern|$

まず \everypar を "乗っ取る" 処理を行う。

- 3626 \newtoks\everypar
- 3627 \everypar\bxjs@everypar

そして本物の \everypar では、最後で常に \everyparhook が実行されるようにする。

3628 \bxjs@everypar{\the\expandafter\everypar\everyparhook}% 3629 \fi

- ■fancyhdr 対策 fancyhdr オプションの値が true であり、かつ fancyhdr が使用された場合に以下の対策を行う。
 - デフォルトの書式設定に含まれる"二文字フォント命令"を除去する。
 - bxjsbook において、ヘッダ・フッタの横幅を \fullwidth に変える。

 $3630 \ \ ifbxjs@fancyhdr$

\bxjs@adjust@fancyhdr fancyhdr の初期設定に関する改変の処理。fancyhdr 読込完了と \pagestyle{fancy} 実行の間で実行されるべき。

3631 \@onlypreamble\bxjs@adjust@fancyhdr

3632 \def\bxjs@adjust@fancyhdr{%

ヘッダ・フッタの要素の書式について、それが既定のままであれば、"二文字フォント命令" を除去したものに置き換える。

```
\def\bxjs@tmpa{\fancyplain{}{\sl\rightmark}\strut}%
                                                              3633
                                                                                 \def\bxjs@tmpb{\fancyplain{}{\rightmark}\strut}%
                                                              3634
                                                                                 \ifx\f@ncyelh\bxjs@tmpa \global\let\f@ncyelh\bxjs@tmpb \fi
                                                              3635
                                                                                 \ifx\f@ncyerh\bxjs@tmpa \global\let\f@ncyerh\bxjs@tmpb \fi
                                                              3636
                                                                                 \ifx\f@ncyolh\bxjs@tmpa \global\let\f@ncyolh\bxjs@tmpb \fi
                                                              3637
                                                                                 \ifx\f@ncyorh\bxjs@tmpa \global\let\f@ncyorh\bxjs@tmpb \fi
                                                              3638
                                                                                 \def\bxjs@tmpa{\fancyplain{}{\sl\leftmark}\strut}%
                                                              3639
                                                                                 \def\bxjs@tmpb{\fancyplain{}{\leftmark}\strut}%
                                                              3640
                                                              3641
                                                                                 \ifx\f@ncyelh\bxjs@tmpa \global\let\f@ncyelh\bxjs@tmpb \fi
                                                              3642
                                                                                 \ifx\f@ncyerh\bxjs@tmpa \global\let\f@ncyerh\bxjs@tmpb \fi
                                                                                 \ifx\f@ncyolh\bxjs@tmpa \global\let\f@ncyolh\bxjs@tmpb \fi
                                                              3643
                                                              3644
                                                                                 \ifx\f@ncyorh\bxjs@tmpa \global\let\f@ncyorh\bxjs@tmpb \fi
                                                                                 \def\bxjs@tmpa{\rm\thepage\strut}%
                                                              3645
                                                              3646
                                                                                 \def\bxjs@tmpb{\thepage\strut}%
                                                                                 \ifx\f@ncyecf\bxjs@tmpa \global\let\f@ncyecf\bxjs@tmpb \fi
                                                              3647
                                                                                 \label{lettfcncyocfbxjs@tmpb} $$ \left( \frac{1}{2} \right) = \frac{1}{2} \left( \frac{1}{2} \right) \left( \frac{1}{2} \right)
                                                              3648
                                                                   \fullwidth が(定義済で)\textwidth よりも大きい場合、ヘッダ・フッタの横幅を
                                                                   \fullwidth に合わせる。
                                                                                 \ifx\fullwidth\@undefined\else \ifdim\textwidth<\fullwidth
                                                              3649
                                                              3650
                                                                                       \setlength{\@tempdima}{\fullwidth-\textwidth}%
                                                                                       3651
                                                                                      }\bxjs@tmpa
                                                              3652
                                                                                \fi\fi
                                                              3653
                                                              3654
                                                                                 \PackageInfo\bxjs@clsname
                                                              3655
                                                                                    {Patch to fancyhdr is applied\@gobble}}
\bxjs@pagestyle@hook \pagestyle へのフックの本体。
                                                              3656 \def\bxjs@pagestyle@hook{%}
                                                              3657
                                                                                \@ifpackageloaded{fancyhdr}{%
                                                                                       \bxjs@adjust@fancyhdr
                                                              3658
                                                              3659
                                                                                       \global\let\bxjs@adjust@fancyhdr\relax
                                                                              }{}}
                                                              3660
                                                                          \pagestyle にフックを入れ込む。
                                                              3661 \let\bxjs@org@pagestyle\pagestyle
                                                              3662 \def\pagestyle{%
                                                                                \bxjs@pagestyle@hook \bxjs@org@pagestyle}
                                                                          begin-document フック。
                                                                   ※これ以降に fancyhdr が読み込まれることはあり得ない。
                                                              3664 \g@addto@macro\bxjs@begin@document@hook{%
                                                                                 \bxjs@pagestyle@hook
                                                              3665
                                                                                 \global\let\bxjs@pagestyle@hook\relax}
                                                                    ■和文空白命令
```

※和文なので \sl は無い方がよいはず。

3667 \ifbxjs@jaspace@cmd

```
\jaenspace 半角幅の水平空き。
             \def\jaenspace{\hskip.5\jsZw\relax}
\jathinspace 和欧文間空白を入れるユーザ命令。
           ※ minimal ではダミー定義。
         3669 \def\jathinspace{\hskip\z@skip}
       \_ 全角空白文字 1 つからなる名前の制御綴。\zwspace と等価になる。
         3670 \def\ {\zwspace}
   \jaspace jlreq クラスと互換の命令。
         3671
              \DeclareRobustCommand*{\jaspace}[1]{%
                \expandafter\ifx\csname bxjs@jaspace@@#1\endcsname\relax
         3672
         3673
                 \ClassError\bxjs@clsname
                  {Unknown jaspace: #1}{\@eha}%
         3674
               \else
         3675
                 \csname bxjs@jaspace@@#1\endcsname
         3676
         3677
              \def\bxjs@jaspace@@zenkaku{\hskip 1\jsZw\relax}
         3678
              3679
              3681 \fi
            終わり。
         3682 \fi
            以上で終わり。
         3683 %</minimal>
```

付録 C 和文ドライバ: standard 🕸

標準のドライバ。

- \rmfamily/\sffamily/\ttfamily での和文ファミリ連動
- \mcfamily/\gtfamily
- \textmc/\textgt
- \zw
- \jQ/\jH
- \trueQ/\trueH/\ascQ
- \setkanjiskip/\getkanjiskip
- \setxkanjiskip/\getxkanjiskip
- \autospacing/\noautospacing
- \autoxspacing/\noautoxspacing

■和文フォント指定の扱い

C.1 準備

```
まず minimal ドライバを読み込む。
                   3684 %<*standard>
                   3685 %% このファイルは日本語文字を含みます
                   3686 \input{bxjsja-minimal.def}
                      simplejasetup は standard では無効になる。
                   3687 \bxjs@simplejasetupfalse
                    C.2 和文ドライバパラメタ
                      japaram の値を key-value リストとして解釈する。keyval のファミリは bxjsStd とする。
  \ifbxjs@jp@jismmiv 2004JIS 字形を優先させるか。
                   3688 \newif\ifbxjs@jp@jismmiv
                      jis2004 オプションの処理。
                   3689 \verb|\bxjs@cslet{bxjs@kv@jis2004@true}\bxjs@jp@jismmivtrue|\\
                   3690 \bxjs@cslet{bxjs@kv@jis2004@false}\bxjs@jp@jismmivfalse
                   3691 \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}} fis2004} [true] {\%} \\
                   3692 \bxjs@set@keyval{jis2004}{#1}{}}
    \ifbxjs@jp@units 和文用単位(zw、zh、(true)Q、(true)H)を使えるようにするか。
                   3693 \newif\ifbxjs@jp@units
                      units オプションの処理。
                   3694 \let\bxjs@kv@units@true\bxjs@jp@unitstrue
                   3695 \let\bxjs@kv@units@false\bxjs@jp@unitsfalse
                   3696 \define@key{bxjsStd}{units}[true]{%
                   3697 \bxjs@set@keyval{units}{#1}{}}
       \bxjs@jp@font フォントパッケージの追加オプション。
                   3698 \let\bxjs@jp@font\@empty
                      font オプションの処理。
                   3699 \define@key{bxjsStd}{font}{%
                   3700 \edef\bxjs@jp@font{#1}}
\ifbxjs@jp@strong@cmd \strong 命令を補填するか。
```

 $3704 \end{true} {\tt true} {\tt$

3701 \newif\ifbxjs@jp@strong@cmd \bxjs@jp@strong@cmdtrue

3702 \let\bxjs@kv@strongcmd@true\bxjs@jp@strong@cmdtrue 3703 \let\bxjs@kv@strongcmd@false\bxjs@jp@strong@cmdfalse

strong-cmd オプションの処理。

```
実際の japaram の値を適用する。
3705 \def\bxjs@next#1{\bxjs@safe@setkeys{bxjsStd}{#1}}
3706 \expandafter\bxjs@next\expandafter{\jsJaParam}
 C.3 共通処理 (1)
 ■jis2004 パラメタ jis2004 パラメタが有効の場合は、グローバルオプションに jis2004
 を追加する。
 ※otf や luatexja-preset 等のパッケージがこのオプションを利用する。
3707 \ifbxjs@jp@jismmiv
    \g@addto@macro\@classoptionslist{,jis2004}
3709 % \@ifpackagewith 判定への対策
3710 \PassOptionsToPackage{jis2004}{otf}
3711 \fi
 ■和文用単位のサポート エンジンが (u)pTFX の場合は units を無効にする。
3712 \if j\jsEngine
3713 \bxjs@jp@unitsfalse
3714\fi
   units パラメタが有効の場合は、bxcalc パッケージの \usepTeXunits 命令を実行して
 和文用単位を有効化する。
3715 \ifbxjs@jp@units
3716
    \IfFileExists{bxcalc.sty}{%
       \RequirePackage{bxcalc}[2018/01/28]%v1.0a
3717
       \ifx\usepTeXunits\@undefined
3718
3719
         \PackageWarningNoLine\bxjs@clsname
          {Cannot support pTeX units (zw etc.), since\MessageBreak
3720
           the package 'bxcalc' is too old}%
3721
         \bxjs@jp@unitsfalse
3722
3723
       \else \usepTeXunits
3724
       \fi
    }{%else
3725
3726
       \PackageWarningNoLine\bxjs@clsname
        {Cannot support pTeX units (zw etc.), since\MessageBreak
3727
         the package 'bxcalc' is unavailable}%
3728
3729
       \bxjs@jp@unitsfalse
3730 }
3731 \fi
   bxcalc で和文用単位をサポートした場合は、\bxjs@parse@qh の処理は不要になるので
 無効化する。
3732 \ifbxjs@jp@units
3733 \def\bxjs@parse@qh#1{\let\bxjs@tmpb\relax}
3734 \verb|\let\bxjs@parse@qh@a\cundefined|
3735 \let\bxjs@parse@qh@b\@undefined
```

3736 \fi

\bxjs@let@lenexpr \bxjs@let@lenexpr\CS{〈長さ式〉}: 長さ式に bxcalc の展開を適用した結果のトークン列を \CS に代入する。

3737 \ifbxjs@jp@units

3738 \def\bxjs@let@lenexpr#1#2{%

3739 \edef#1{#2}%

3740 \expandafter\CUXParseExpr\expandafter#1\expandafter{#1}}

3741 \else

3742 \def\bxjs@let@lenexpr{\edef}

3743 \fi

■\strong 命令の補填

\strong fontspec で提供される \strong 命令と strongenv 環境を全てのエンジンで使えるよう strongenv にする。

※

 $3744 \ \texttt{ifbxjs@jp@strong@cmd\jsAtEndOfClass} \{\% \}$

3745 \ifx\strong\@undefined\ifx\strongenv\@undefined

3746 \DeclareRobustCommand{\strongenv}{\bxjs@strong@font}%

 $\tt 3747 \qquad \tt \DeclareTextFontCommand\{\strong\}\{\strongenv\}\%$

fontspec と互換の \strongfontdeclare 命令も提供する。ただし、BXJS での \strong は多段階には対応しないので、引数のコンマ区切りリストのうちの先頭の項目だけが意味をもつ。既定の設定は \bfseries (太字) である。

※\strongfontdeclare は試験的機能とする。

 $\label{lem:condition} $$3748 $$ \end{condition} $$

3749 \bxjs@strong@font@declare@a#1,\@nil}}%

3750 \def\bxjs@strong@font@declare@a#1,#2\@nil{\def\bxjs@strong@font{#1}}%

3751 \def\bxjs@strong@font{\bfseries}%

3752 \fi\fi

3753}\fi

3754 \ifjsWitheTeX

使える場合は、「\dimexpr 外部寸法表記\relax」の形式(これは内部値なので単位として 使える)で各命令定義する。

 \j Q \j Q と \j H はともに $0.25\,\mathrm{mm}$ に等しい。

\jH3755 \@tempdima=0.25mm

 $3756 \qquad \verb|\protected| edef | JQ{\dimexpr\the | Otempdima| relax}|$

 $3757 \ \left(jH \right) Q$

\trueQ \trueQ と \trueH はともに 0.25 true mm に等しい。

\trueH3758 \ifjsc@mag

3759 \@tempdimb=\jsBaseFontSize\relax

3760 \edef\bxjs@tmpa{\strip@pt\@tempdimb}%

```
\@tempdima=2.5mm
             3762
                    \bxjs@invscale\@tempdima\bxjs@tmpa
             3763
                    \protected\edef\trueQ{\dimexpr\the\@tempdima\relax}
                    \@tempdima=10pt
             3764
                    \bxjs@invscale\@tempdima\bxjs@tmpa
             3765
                    \protected\edef\bxjs@truept{\dimexpr\the\@tempdima\relax}
             3766
                  \else \let\trueQ\jQ \let\bxjs@truept\p@
             3767
             3768
                  \let\trueH\trueQ
             3769
        \ascQ \ascQ は \trueQ を和文スケール値で割った値。 例えば、\fontsize {12\ascQ} {16\trueH}
       \ascpt とすると、和文が12Qになる。
                同様に、\ascpt は truept を和文スケールで割った値。
                  \@tempdima\trueQ \bxjs@invscale\@tempdima\jsScale
             3770
                  \protected\edef\ascQ{\dimexpr\the\@tempdima\relax}
             3771
                  \@tempdima\bxjs@truept \bxjs@invscale\@tempdima\jsScale
                  \protected\edef\ascpt{\dimexpr\the\@tempdima\relax}
             3773
             3774\fi
   \jafontsize \jafontsize{⟨フォントサイズ⟩}{⟨行送り⟩}: 和文フォント規準で、すなわち、1 zw が ⟨
               フォントサイズ) に等しくなるようにフォントサイズを指定する。この命令の引数では、Q/H
              の単位が使用できる。
             3775 \def\jafontsize#1#2{%
             3776
                 \begingroup
             3777
                    \bxjs@jafontsize@a{#1}%
                    \@tempdimb\jsInverseScale\@tempdima
             3778
             3779
                    \bxjs@jafontsize@a{#2}%
                    \xdef\bxjs@g@tmpa{%
             3780
                      3781
                  \endgroup\bxjs@g@tmpa}
             3782
             3783 \def\bxjs@jafontsize@a#1{%
                  \bxjs@parse@qh{#1}%
                  \ifx\bxjs@tmpb\relax \def\bxjs@tmpb{#1}\fi
             3785
             3786
                  \@defaultunits\@tempdima\bxjs@tmpb pt\relax\@nnil}
                続いて、和文間空白・和欧文間空白関連の命令を実装する。(エンジン依存のコード。)
\bxjs@kanjiskip 和文間空白の量を表すテキスト。
             3787 \def\bxjs@kanjiskip{0pt}
 \setkanjiskip 和文間空白の量を設定する。
             3788 \newcommand*\setkanjiskip[1]{%
                  \bxjs@let@lenexpr\bxjs@kanjiskip{#1}%
             3790
                  \bxjs@reset@kanjiskip}
 \getkanjiskip 和文間空白の量を表すテキストに展開する。
             3791 \newcommand*\getkanjiskip{%
                 \bxjs@kanjiskip}
             3792
```

3761

```
\ifbxjs@kanjiskip@enabled 和文間空白の挿入が有効か。ただし pTFX では自身の \(no)autospacing での制御を用い
                                                            るのでこの変数は常に真とする。
                                                       3793 \newif\ifbxjs@kanjiskip@enabled \bxjs@kanjiskip@enabledtrue
        \bxjs@enable@kanjiskip 和文間空白の挿入を有効/無効にする。(pTFX 以外)
      \verb|\bxjs@disable@kanjiskip| 3794 \verb|\bxjs@robust@def\bxjs@enable@kanjiskip| {\% }
                                                                    \bxjs@kanjiskip@enabledtrue
                                                       3795
                                                                    \bxjs@reset@kanjiskip}
                                                       3797 \bxjs@robust@def\bxjs@disable@kanjiskip{%
                                                       3798
                                                                    \bxjs@kanjiskip@enabledfalse
                                                       3799
                                                                    \bxjs@reset@kanjiskip}
          \bxjs@reset@kanjiskip 現在の和文間空白の設定を実際にエンジンに反映させる。
                                                       3800 \bxjs@robust@def\bxjs@reset@kanjiskip{%
                                                                    \ifbxjs@kanjiskip@enabled
                                                       3801
                                                                        \setlength{\@tempskipa}{\bxjs@kanjiskip}%
                                                       3802
                                                                   \else \@tempskipa\z@
                                                       3803
                                                       3804
                                                                    \bxjs@apply@kanjiskip}
                                                       3805
                     \bxjs@xkanjiskip 和欧文間空白について同様のものを用意する。
                         \setxkanjiskip 3806 \def\bxjs@xkanjiskip{0pt}
                         \verb|\getxkanjiskip| 3807 \verb|\newcommand*\setxkanjiskip| [1] {% }
                                                                    \bxjs@let@lenexpr\bxjs@xkanjiskip{#1}%
\ifbxjs@xkanjiskip@enabled _{3809}
                                                                    \bxjs@reset@xkanjiskip}
      \bxjs@enable@xkanjiskip3810 \newcommand*\getxkanjiskip{%
                                                                    \bxjs@xkanjiskip}
    \verb|\bxjs@disable@xkanjiskip||^{3811}
                                                       3812 \newif\ifbxjs@xkanjiskip@enabled \bxjs@xkanjiskip@enabledtrue
        \verb|\bxjs@reset@xkanjiskip| 3813 \verb|\bxjs@robust@def\bxjs@enable@xkanjiskip{% | line | 
                                                                    \bxjs@xkanjiskip@enabledtrue
                                                       3814
                                                       3815
                                                                    \bxjs@reset@xkanjiskip}
                                                       3816 \bxjs@robust@def\bxjs@disable@xkanjiskip{%
                                                                    \bxjs@xkanjiskip@enabledfalse
                                                       3817
                                                                    \bxjs@reset@xkanjiskip}
                                                       3819 \bxjs@robust@def\bxjs@reset@xkanjiskip{%
                                                                    \ifbxjs@xkanjiskip@enabled
                                                       3820
                                                                        \setlength{\Otempskipa}{\bxjsOxkanjiskip}%
                                                       3821
                                                                   \else \@tempskipa\z@
                                                       3822
                                                       3823
                                                                    \bxjs@apply@xkanjiskip}
                                                       3824
                                                               \jsResetDimen を用いて、フォントサイズが変更された時に空白の量が追随するように
                                                           する。
                                                       3825 \g@addto@macro\jsResetDimen{%
                                                                    \bxjs@reset@kanjiskip
                                                                    \bxjs@reset@xkanjiskip}
```

3828 \let\bxjs@apply@kanjiskip\relax 3829 \let\bxjs@apply@xkanjiskip\relax

■和文フォント指定の扱い standard 和文ドライバでは \jsJaFont の値を和文フォントの "プリセット" の指定として用いる。プリセットの値は、 T_{EX} Live の kanji-configupdmap コマンドで使う "ファミリ"と同じにすることを想定する。特別な値として、autoは kanji-config-updmap で現在指定されているファミリを表す。

\bxjs@adjust@jafont \jsJaFont に入っている和文フォント設定の値を"調整"して、その結果を\bxjs@tmpa に返す。#1 が f の場合は"非埋込 (noEmbed)"の設定が禁止される。この禁止の場合も含 め、何か異常がある場合は \bxjs@tmpa は空になる。

```
3830 \@onlypreamble\bxjs@adjust@jafont
3831 \def\bxjs@adjust@jafont#1{%
      \ifx\jsJaFont\bxjs@@auto
3832
3833
        \bxjs@get@kanjiEmbed
3834
        \ifx\bxjs@kanjiEmbed\relax
3835
          \let\bxjs@tmpa\@empty
        \else
3836
          \let\bxjs@tmpa\bxjs@kanjiEmbed
3837
        \fi
3838
      \else
3839
        \let\bxjs@tmpa\jsJaFont
3840
      \fi
3841
3842
      \if f#1\ifx\bxjs@tmpa\bxjs@@noEmbed
        \ClassWarningNoLine\bxjs@clsname
3843
3844
         {Option 'jafont=noEmbed' is ignored, because it is\MessageBreak
          not available on the current situation}%
3845
        \let\bxjs@tmpa\@empty
3846
3847
      \fi\fi
3848 }
3849 \def\bxjs@@auto{auto}
3850 \def\bxjs@@noEmbed{noEmbed}
```

\bxjs@kanjiEmbed 現在の updmap の kanjiEmbed パラメタの値。\bxjs@get@kanjiEmbed により実際の設定値が取得されてここに設定される。

3851 \let\bxjs@kanjiEmbed\relax

\bxjs@get@kanjiEmbed 現在の updmap の kanjiEmbed パラメタの値を取得する。

```
3852 \@onlypreamble\bxjs@get@kanjiEmbed
3853 \def\bxjs@get@kanjiEmbed{%
     \begingroup\setbox\z@=\hbox{%
3854
3855
       \global\let\bxjs@g@tmpa\relax
3856
       \endlinechar\m@ne
       3857
       \catcode32=10 \catcode12=10 %form-feed
3858
3859
       \let\bxjs@tmpa\@empty
       \openin\@inputcheck="|kpsewhich updmap.cfg"\relax
3860
       \ifeof\@inputcheck\else
3861
         \read\@inputcheck to\bxjs@tmpa
3862
3863
         \closein\@inputcheck
```

```
3865
                                   \ifx\bxjs@tmpa\@empty\else
                           3866
                                     \openin\@inputcheck="\bxjs@tmpa"\relax
                                     \@tempswatrue
                           3867
                                     \loop\if@tempswa
                           3868
                                       \read\@inputcheck to\bxjs@tmpa
                           3869
                                       \expandafter\bxjs@get@ke@a\bxjs@tmpa\@nil kanjiEmbed \@nil\@nnil
                           3870
                           3871
                                       \ifx\bxjs@tmpb\relax\else
                                         \global\let\bxjs@g@tmpa\bxjs@tmpb
                           3872
                                         \@tempswafalse
                           3873
                                       \fi
                           3874
                                       \expandafter\bxjs@get@ke@b\bxjs@tmpa\@nil jaEmbed \@nil\@nnil
                           3875
                                       \ifx\bxjs@tmpb\relax\else
                           3876
                                         \global\let\bxjs@g@tmpa\bxjs@tmpb
                           3877
                           3878
                                         \@tempswafalse
                           3879
                                       \ifeof\@inputcheck \@tempswafalse \fi
                           3880
                           3881
                                     \repeat
                           3882
                                   \fi
                                 }\endgroup
                           3883
                           3884
                                 \let\bxjs@kanjiEmbed\bxjs@g@tmpa
                           3885 }
                           3886 \@onlypreamble\bxjs@get@ke@a
                           3887 \def\bxjs@get@ke@a#1kanjiEmbed #2\@nil#3\@nnil{%
                                 \fine $1$\def\bxjs@tmpb{#2}%
                           3888
                                 \else \let\bxjs@tmpb\relax
                                 \fi}
                           3890
                           3891 \@onlypreamble\bxjs@get@ke@b
                           3892 \def\bxjs@get@ke@b#1jaEmbed #2\@nil#3\@nnil{%
                                 \footnotemark \ifx$#1$\def\bxjs@tmpb{#2}%
                           3893
                                 \else \let\bxjs@tmpb\relax
                           3894
                           3895
                                 fi
                            jafont パラメタ値内の() を解決する。\bxjs@resolve@jafont@paren\CS で、\CS の内
\bxjs@resolve@jafont@paren
                            容中の (...) を \bxjs@jafont@paren{...} に置き換える。
                           3896 \@onlypreamble\bxjs@resolve@jafont@paren
                           3897 \def\bxjs@resolve@jafont@paren#1{%
                                 \def\bxjs@tmpb{\let#1}%
                           3898
                                 \expandafter\bxjs@resolve@jafont@paren@a#1\@nil()\@nil\relax}
                           3900 \@onlypreamble\bxjs@resolve@jafont@paren@a
                           3901 \def\bxjs@resolve@jafont@paren@a#1(#2)#3\@nil#4\relax{%
                           3902
                                 \ifx\relax#4\relax \bxjs@tmpb\jsJaFont
                           3903
                                 \else
                           3904
                                   \edef\bxjs@tmpa{#1\bxjs@jafont@paren{#2}#3}%
                                   \bxjs@tmpb\bxjs@tmpa
                           3905
                           3906
```

\fi

3864

■和文として出力 「欧文扱い」となっている文字を和文として出力するための機能。

```
3907 \newcommand*\jachar[1]{%
                               \begingroup
                            \jsLetHeadChar で先頭の"文字"を拾ってそれを \bxjs@jachar に渡す。
                                  \jsLetHeadChar\bxjs@tmpa{#1}%
                          3909
                          3910
                                  \ifx\bxjs@tmpa\relax
                          3911
                                    \ClassWarningNoLine\bxjs@clsname
                          3912
                                      {Illegal argument given to \string\jachar}%
                          3913
                                  \else
                          3914
                                    \expandafter\bxjs@jachar\expandafter{\bxjs@tmpa}%
                          3915
                                  \fi
                          3916
                                \endgroup}
                            \jsJaChar を \jachar と等価にする。
                          3917 \left| \text{let} \right| 
                            下請けの \bxjs@jachar の実装はエンジンにより異なる。
                          3918 \let\bxjs@jachar\@firstofone
                            ■hyperref 対策 出力ページサイズに館する処理は geometry パッケージが行うので、
                            hyperref 側の処理は無効にしておく。
                          3919 \PassOptionsToPackage{setpagesize=false}{hyperref}
 \bxjs@fix@hyperref@unicode hyperref の unicode オプションの値を固定する。
                          3920 \@onlypreamble\bxjs@fix@hyperref@unicode
                          3921 \def\bxjs@fix@hyperref@unicode#1{%
                                \PassOptionsToPackage{bxjs/hook=#1}{hyperref}%
                          3922
                                \@namedef{KV@Hyp@bxjs/hook}##1{%
                          3923
                                  \KV@Hyp@unicode{##1}%
                          3924
                                  \def\KV@Hyp@unicode####1{%
                          3925
                                    \expandafter\ifx\csname if##1\expandafter\endcsname
                          3926
                                       \csname if####1\endcsname\else
                          3927
                          3928
                                      \ClassWarningNoLine\bxjs@clsname
                          3929
                                      {Blcoked hyperref option 'unicode=####1'}%
                          3930
                                    \fi
                                  }%
                          3932
                                }%
                          3933 }
    \jsCheckHyperrefUnicode 「hyperref の unicode オプションの値を検証する」ための本体開始時のフック。
                          3934 \@onlypreamble\jsCheckHyperrefUnicode
                          3935 \let\jsCheckHyperrefUnicode\@empty
                          3936 \g@addto@macro\bxjs@begin@document@hook{\jsCheckHyperrefUnicode}
\bxjs@check@hyperref@unicode hyperref の unicode オプションの値を本体開始時に検証する。
                          3937 \@onlypreamble\bxjs@check@hyperref@unicode
                          3938 \def\bxjs@check@hyperref@unicode#1{%
                                \g@addto@macro\jsCheckHyperrefUnicode{%
```

\jachar \jachar{(文字)}: 和文文字として出力する。

```
\@tempswafalse
                                                 3940
                                                 3941
                                                                     \begingroup
                                                 3942
                                                                          \expandafter\ifx\csname ifHy@unicode\endcsname\relax
                                                                               \aftergroup\@tempswatrue \fi
                                                 3943
                                                                          \expandafter\ifx\csname ifHy@unicode\expandafter\endcsname
                                                 3944
                                                                                    \csname if#1\endcsname
                                                 3945
                                                                               \aftergroup\@tempswatrue \fi
                                                 3946
                                                 3947
                                                                     \endgroup
                                                                     \if@tempswa\else
                                                 3948
                                                                          \ClassError\bxjs@clsname
                                                 3949
                                                                            {The value of hyperref 'unicode' key is not suitable\MessageBreak
                                                 3950
                                                                               for the present engine (must be #1)}%
                                                 3951
                                                                            {\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\en
                                                 3952
                                                                     \fi}}
                                                 3953
\bxjs@urgent@special DVI のなるべく早い位置に special を出力する。
                                                 3954 \@onlypreamble\bxjs@urgent@special
                                                 3955 \@onlypreamble\bxjs@urgent@special@a
                                                     LATEX カーネルの新フック管理が導入済かを調べる。未導入の古い版である場合。
                                                 3956 \ifbxjs@old@hook@system
                                                 3957 \def\bxjs@urgent@special#1{%
                                                                \AtBeginDvi{\special{#1}}%
                                                 3958
                                                                 \g@addto@macro\bxjs@begin@document@hook{%
                                                 3959
                                                                     \@ifpackageloaded{atbegshi}{%
                                                 3960
                                                                          \begingroup
                                                 3961
                                                                               \t \sum_{s=0}^{toks}z@{\special{#1}}%
                                                 3962
                                                 3963
                                                                               \toks\tw@\expandafter{\AtBegShi@HookFirst}%
                                                                               \xdef\AtBegShi@HookFirst{\the\toks@\the\toks\tw@}%
                                                 3964
                                                 3965
                                                                          \endgroup
                                                                     }{}%
                                                 3966
                                                 3967
                                                               }%
                                                 3968 }
                                                     導入済の場合。
                                                      ※自分が先行する必要がある対象のパッケージを適宜追加する。
                                                      ※pxjahyper パッケージの処理と合わせる。
                                                 3969 \else
                                                 3970
                                                                \def\bxjs@urgent@special#1{%
                                                                     \bxjs@urgent@special@a
                                                 3971
                                                                     \AddToHook{shipout/firstpage}[pxjahyper/enc]{\special{#1}}}
                                                 3972
                                                                \def\bxjs@urgent@special@a{%
                                                 3973
                                                                     \DeclareHookRule{shipout/firstpage}{pxjahyper/enc}{<}{hyperref}%
                                                 3974
                                                                     \global\let\bxjs@urgent@special@a\relax}
                                                 3975
                                                 3976 \fi
```

C.4 pT_FX 用設定

3977 \if j\jsEngine

■共通命令の実装

 $4012 \fi$

```
3978 \def\bxjs@apply@kanjiskip{%
      \kanjiskip\@tempskipa}
3980 \def\bxjs@apply@xkanjiskip{%
      \xkanjiskip\@tempskipa}
    \jaJaChar のサブマクロ。
3982 \def\bxjs@jachar#1{%
     \bxjs@jachar@a#1....\@nil}
3984 \ensuremath{\mbox{def}\mbox{bxjs@jachar@a#1#2#3#4#5}\mbox{@nil}{\%}
  引数が単一トークンなら和文文字トークンが得られたと見なしてそれをそのまま出力する。
      \ifx.#2#1%
  引数が複数トークンの場合は、UTF-8 のバイト列であると見なし、そのスカラー値を
 \@tempcnta に代入する。
      \left( x, \#3 \right)
3986
3987
        \ensuremath{\verb|Ctempcnta|^{\#1} <caption> \ensuremath{\verb|Multiply|| @tempcnta| 64}}
        \advance\@tempcnta`#2 \advance\@tempcnta-"3080
3988
3989
        \bxjs@jachar@b
      \left\langle \text{else}\right\rangle .#4\%
3990
        \@tempcnta`#1 \multiply\@tempcnta64
3991
        \advance\@tempcnta`#2 \multiply\@tempcnta64
3992
        \advance\@tempcnta`#3 \advance\@tempcnta-"E2080
3993
        \bxjs@jachar@b
3994
      \else
3995
3996
        \@tempcnta`#1 \multiply\@tempcnta64
3997
        \advance\@tempcnta`#2 \multiply\@tempcnta64
        \advance\@tempcnta`#3 \multiply\@tempcnta64
3998
        \advance\@tempcnta`#4 \advance\@tempcnta-"3C82080
3999
4000
        \bxjs@jachar@b
4001
      \fi\fi\fi}
 符号値が \@tempcnta の和文文字を出力する処理。
4002 \ \text{ifjsWithupTeX}
4003
      \def\bxjs@jachar@b{\kchar\@tempcnta}
4004 \ensuremath{\setminus} else
      \def\bxjs@jachar@b{%
4005
        \ifx\bxUInt\@undefined\else
4006
4007
          \bxUInt{\@tempcnta}%
4008
        \fi}
4009 \fi
    和欧文間空白の命令 \jathinspace の実装。
4010 \ifbxjs@jaspace@cmd
4011 \def\jathinspace{\hskip\xkanjiskip}
```

■jis2004 パラメタ pxchfon と pxbabel では 2004JIS を指定するオプションの名が prefer2004jis である。

```
4013 \ifbxjs@jp@jismmiv

4014 \PassOptionsToPackage{prefer2004jis}{pxchfon}

4015 \PassOptionsToPackage{prefer2004jis}{pxbabel}

4016 \fi
```

■和文フォント指定の扱い pTeX は既定で kanji-config-updmap の設定に従うため、 \jsJaFont が auto の場合は何もする必要がない。無指定でも auto でもない場合は、 \jsJaFont をオプションにして pxchfon パッケージを読み込む。ここで、和文ドライバパラメタ font が指定されいる場合は、その値を pxchfon のオプションに追加する。

```
4017 \let\bxjs@jafont@paren\@firstofone
4018 \let\bxjs@tmpa\jsJaFont
4019 \ifx\bxjs@tmpa\bxjs@@auto
     \let\bxjs@tmpa\@empty
4021 \else\ifx\bxjs@tmpa\bxjs@@noEmbed
     \def\bxjs@tmpa{noembed}
4023 \fi\fi
4024 \verb|\bxjs@resolve@jafont@paren\bxjs@tmpa|
4025 \edef\bxjs@tmpa{\bxjs@catopt\bxjs@tmpa\bxjs@jp@font}
4026 \ifx\bxjs@tmpa\empty\else
4027
      \edef\bxjs@next{%
        \noexpand\RequirePackage[\bxjs@tmpa]{pxchfon}[2010/05/12]% v0.5
     }\bxjs@next
4029
4030 \fi
```

■otf パッケージ対策 インストールされている otf パッケージが scale オプションに対応している場合は scale=(\jsScale の値) を事前に otf に渡す。

※scale 対応は 1.7b6 版 [2013/11/17] から。

※ otf.sty の中に「\RequirePackage{keyval}」の行が存在するかにより判定している。 (もっといい方法はないのか……。)

```
4031 \begingroup
      \global\let\bxjs@g@tmpa\relax
4032
4033
      \catcode`\|=0 \catcode`\\=12
      |def|bxjs@tmpdo#1|@nil{%
4034
        |bxjs@tmpdo@a#1|@nil\RequirePackage|@nnil}%
4035
     |def|bxjs@tmpdo@a#1\RequirePackage#2|@nnil{%
4036
4037
        |ifx$#1$|bxjs@tmpdo@b#2|@nil keyval|@nnil |fi}%
4038
     |catcode`|\=0 \catcode`\|=12
      \def\bxjs@tmpdo@b#1keyval#2\@nnil{%
4039
        ifx$#2$\epsilon
4040
4041
          \xdef\bxjs@g@tmpa{%
            \noexpand\PassOptionsToPackage{scale=\jsScale}{otf}}%
4042
        \fi}
4043
4044 \Offirstofone{%
      \catcode10=12 \endlinechar\m@ne
```

```
4046
4047
     \openin\@inputcheck=otf.sty\relax
     \@tempswatrue
4048
     \loop\if@tempswa
4049
      \ifeof\@inputcheck \@tempswafalse \fi
4050
      \if@tempswa
4051
        \read\@inputcheck to\bxjs@next
4052
4053
        \expandafter\bxjs@tmpdo\bxjs@next\@nil
      \fi
4054
4055
     \repeat
     \closein\@inputcheck
4056
4057 \endgroup}
4058 \bxjs@g@tmpa
 ■hyperref 対策 unicode にしてはいけない。
4059 \ifbxjs@hyperref@enc
4060 \bxjs@check@hyperref@unicode{false}
4061 \fi
   tounicode special 命令を出力する。
4062 \if \ifx\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@dvipdfmx T%
4063
       \else\ifjsWithpTeXng T\else F\fi\fi T%
     \ifnum\jis"2121="A1A1 %euc
4064
4065
      \bxjs@urgent@special{pdf:tounicode EUC-UCS2}
     4066
      \bxjs@urgent@special{pdf:tounicode 90ms-RKSJ-UCS2}
4067
     \else\ifnum\jis"2121="3000 %uptex
4068
      \ifbxjs@bigcode
4069
        \bxjs@urgent@special{pdf:tounicode UTF8-UTF16}
4070
        \PassOptionsToPackage{bigcode}{pxjahyper}
4071
4072
        \bxjs@urgent@special{pdf:tounicode UTF8-UCS2}
4073
4074
      \fi
     \fi\fi\fi
4075
4076
     \let\bxToUnicodeSpecialDone=t
4077 \fi
 ■和文数式ファミリ 和文数式ファミリは既定で有効とする。 すなわち enable jfam=false
 以外の場合は @enablejfam を真にする。
4078 \ifx f\bxjs@enablejfam\else
4079 \@enablejfamtrue
4080 \fi
   実際に和文用の数式ファミリの設定を行う。
4081 \if@enablejfam
     4082
     \DeclareSymbolFontAlphabet{\mathmc}{mincho}
     4084
4085
     \jfam\symmincho
```

```
4086 \DeclareMathAlphabet{\mathgt}{\jsc@JYn}{gt}{m}{n}
4087 \g@addto@macro\bxjs@begin@document@hook{%
4088 \ifx\reDeclareMathAlphabet\@undefined\else
4089 \reDeclareMathAlphabet{\mathrm}{\@mathrm}{\@mathgt}%
4090 \reDeclareMathAlphabet{\mathbf}{\@mathbf}{\@mathgt}%
4091 \reDeclareMathAlphabet{\mathsf}{\@mathsf}{\@mathgt}%
4092 \fi}
4093 \fi
```

C.5 pdfTFX 用設定: CJK + bxcjkjatype

4094 \else\if p\jsEngine

- ■bxcjkjatype パッケージの読込 \jsJaFont が指定されている場合は、その値を bxcjkjatype のオプション(プリセット指定)に渡す。(auto ならば \bxjs@get@kanjiEmbed を実行する。) スケール値 (\jsScale) の反映は bxcjkjatype の側で行われる。
- ※ Pandoc モードでは autotilde を指定しない。

```
4095 \bxjs@adjust@jafont{f}
```

- 4096 \let\bxjs@jafont@paren\@firstofone
- 4097 \bxjs@resolve@jafont@paren\bxjs@tmpa
- 4098 \edef\bxjs@tmpa{\bxjs@catopt\bxjs@tmpa\bxjs@jp@font}
- 4099 \edef\bxjs@tmpa{\bxjs@catopt\bxjs@tmpa{whole}}
- $4100 \label{limits} $$4100 \def\bxjs@tmpb{pandoc}\ifx\bxjs@tmpb\bxjs@jadriver\else$ $$$
- 4101 \edef\bxjs@tmpa{\bxjs@catopt\bxjs@tmpa{autotilde}}
- 4102 \fi
- 4103 \edef\bxjs@next{%
- 4104 \noexpand\RequirePackage[\bxjs@tmpa]{bxcjkjatype}[2013/10/15]% v0.2c
- 4105 }\bxjs@next
- 4106 \bxjs@cjk@loaded
 - ■hyperref 対策 bxcjkjatype 使用時は unicode にするべき。
 - ※取りあえず固定はしない。
- 4108 \PassOptionsToPackage{unicode}{hyperref}
- 4109 \fi

\hypersetup 命令で(CJK* 環境に入れなくても)日本語文字を含む文書情報を設定できるようにするための細工。

- ※ bxcjkjatype を whole 付きで使っていることが前提。
- ※パッケージオプションでの指定に対応するのは、「アクティブな高位バイトトークンがその場で展開されてしまう」ため困難である。
- $4110 \verb|\difx\bxcjkjatypeHyperrefPatchDone\\\\ @undefined$
- 4111 \begingroup
- 4112 \CJK@input{UTF8.bdg}
- 4113 \endgroup
- 4114 \g@addto@macro\pdfstringdefPreHook{%

```
\@nameuse{CJK@UTF8Binding}%
4116 }
4117 \fi
          ~ が和欧文間空白である場合は PDF 文字列中で空白文字でなく空に展開させる。
4118 \ifx\bxcjkjatypeHyperrefPatchDone\@undefined
4119 \g@addto@macro\pdfstringdefPreHook{%
4120
             \ifx~\bxjs@@CJKtilde
                     \let\bxjs@org@LetUnexpandableSpace\HyPsd@LetUnexpandableSpace
4121
                     \verb|\label{thyPsd@LetUnexpandableSpace|} bxjs@LetUnexpandableSpace||
4122
4123
                     \let~\@empty
4124
4125 }
4126 \def\bxjs@@CJKtilde{\CJKecglue\ignorespaces}
4127 \def\bxjs@@tildecmd{~}
4128 \def\bxjs@LetUnexpandableSpace#1{%
               \def\bxjs@tmpa{#1}\ifx\bxjs@tmpa\bxjs@@tildecmd\else
                     \bxjs@org@LetUnexpandableSpace#1%
4130
4131
             \fi}
4132 \fi
     ■共涌命令の実装
4133 \newskip\jsKanjiSkip
4134 \newskip\jsXKanjiSkip
4135 \ifx\CJKecglue\Qundefined
             \def\CJKtilde{\CJK@global\def~{\CJKecglue\ignorespaces}}
4137 \fi
4138 \let\autospacing\bxjs@enable@kanjiskip
4139 \let\noautospacing\bxjs@disable@kanjiskip
4140 \protected\def\bxjs@CJKglue{\hskip\jsKanjiSkip}
4141 \def\bxjs@apply@kanjiskip{%
4142 \jsKanjiSkip\@tempskipa
             \let\CJKglue\bxjs@CJKglue}
4144 \let\autoxspacing\bxjs@enable@xkanjiskip
4145 \verb|\label{lef}| 145 \verb|\lab
4146 \protected\def\bxjs@CJKecglue{\hskip\jsXKanjiSkip}
4147 \def\bxjs@apply@xkanjiskip{%
                \jsXKanjiSkip\@tempskipa
                \let\CJKecglue\bxjs@CJKecglue}
          \jachar のサブマクロの実装。
4150 \def\bxjs@jachar#1{%}
4151 \CJKforced{#1}}
          和欧文間空白の命令 \jathinspace の実装。
4152 \ifbxjs@jaspace@cmd
4153 \protected\def\jathinspace{\CJKecglue}
4154 \fi
```

■和文数式ファミリ CJK パッケージは(恐らく)数式文字として CJK 文字をサポートしていない。従って @enablejfam は常に偽になる。

```
4155 \ifx t\bxjs@enablejfam
4156 \ClassWarningNoLine\bxjs@clsname
4157 {You cannot use 'enablejfam=true', since the\MessageBreak
4158 CJK package does not support Japanese math}
4159 \fi
```

C.6 X¬TFX 用設定: xeCJK + zxjatype

4160 \else\if x\jsEngine

- ■zxjatype パッケージの読込 スケール値(\jsScale)の反映は zxjatype の側で行われる。
- 4161 \RequirePackage{zxjatype}
- 4162 \PassOptionsToPackage{no-math}{fontspec}%!
- 4163 \PassOptionsToPackage{xetex}{graphicx}%!
- 4164 \PassOptionsToPackage{xetex}{graphics}%!
- $4165 \ifx\zxJaFamilyName\Qundefined$
- 4166 \ClassError\bxjs@clsname
- 4167 {xeCJK or zxjatype is too old}\@ehc
- 4168 \fi
 - ■和文フォント定義 \jsJaFont が指定された場合は、その値をオプションとして zxjafont を読み込む。非指定の場合は原ノ味フォントを使用する。
 - ※ 2.0 版より既定を IPAex から原ノ味に変更。
- $4169 \verb|\bxjs@adjust@jafont{f}|$
- $4170 \verb|\let\bxjs@jafont@paren\@gobble|$
- $4171 \verb|\bxjs@resolve@jafont@paren\bxjs@tmpa|$
- $4172 \verb|\edef\bxjs@tmpa{\bxjs@catopt\bxjs@tmpa\bxjs@jp@font}|$
- $4173 \verb|\ifx\bxjs@tmpa\@empty|$
- 4174 \setCJKmainfont[BoldFont=HaranoAjiGothic-Medium.otf]{HaranoAjiMincho-Regular.otf}
- 4175 \setCJKsansfont[BoldFont=HaranoAjiGothic-Medium.otf] {HaranoAjiGothic-Medium.otf}
- $4176 \ensuremath{\setminus} else$
- 4177 \edef\bxjs@next{%
- 4178 \noexpand\RequirePackage[\bxjs@tmpa]{zxjafont}[2013/01/28]% v0.2a
- 4179 }\bxjs@next
- $4180 \fi$
 - ■hyperref 対策 unicode オプションの指定に関する話。

 $X_{\Xi}T_{\Xi}X$ の場合は、xdvipdfmx が $UTF-8 \rightarrow UTF-16$ の変換を行う機能を持っているため、本来は special 命令の文字列の文字コード変換は不要である。ところが、sperref での方針としては、sET $_{\Xi}X$ の場合にもパッケージ側で文字コード変換を行う方が望ましいと考えている。実際、sunicode を無効にしていると警告が出て強制的に有効化される。一方で、過去 sET $_{\Xi}X$ ET $_{\Xi}X$

と見なしていて警告が発生する。

これを踏まえて、ここでは、「 $X_{\Xi}T_{E}X$ のバージョンが 0.99992 以上の場合に unicode を 既定で有効にする」ことにする。

※取りあえず固定はしない。

```
4181 \ifnum\strcmp{\the\XeTeXversion\XeTeXrevision}{0.99992}>\m@ne
4182 \ifbxjs@hyperref@enc
4183 \PassOptionsToPackage{unicode}{hyperref}
4184 \fi
4185 \fi
```

■段落頭でのグルー挿入禁止 どうやら、zxjatype の \inhibitglue の実装が極めて杜撰なため、1.0 版での実装では全く期待通りの動作をしていないし、そもそも(少なくとも現状の)xeCJK では、段落頭での \inhibitglue は実行しないほうが JS クラスの出力に近いものが得られるらしい。

従って、\jsInhibitGlueAtParTop は結局何もしないことにする。 強制改行直後のグルー禁止処理、のような怪しげな何か。

```
4186 \AtEndOfPackage{%
4187 \def\@gnewline #1{%
4188 \ifvmode \@nolnerr
4189 \else
4190 \unskip \reserved@e {\reserved@f#1}\nobreak \hfil \break \null
4191 \nobreak \hskip-1sp\hskip1sp\relax
4192 \ignorespaces
4193 \fi}
4194 }
```

■共通命令の実装

```
4195 \newskip\jsKanjiSkip
4196 \newskip\jsXKanjiSkip
4197 \ifx\CJKecglue\@undefined
     \def\CJKtilde{\CJK@global\def~{\CJKecglue\ignorespaces}}
4199 \fi
4200 \let\autospacing\bxjs@enable@kanjiskip
4201 \let\noautospacing\bxjs@disable@kanjiskip
4202 \protected\def\bxjs@CJKglue{\hskip\jsKanjiSkip}
4203 \def\bxjs@apply@kanjiskip{%
4204
     \jsKanjiSkip\@tempskipa
      \xeCJKsetup{CJKglue={\bxjs@CJKglue}}}
4206 \let\autoxspacing\bxjs@enable@xkanjiskip
4207 \let\noautoxspacing\bxjs@disable@xkanjiskip
4208 \protected\def\bxjs@CJKecglue{\hskip\jsXKanjiSkip}
4209 \def\bxjs@apply@xkanjiskip{%}
     \jsXKanjiSkip\@tempskipa
     \xeCJKsetup{CJKecglue={\bxjs@CJKecglue}}}
```

\mcfamily、\gtfamily は本来は zxjatype の方で定義すべきであろうが、現状は暫定的

```
にここで定義する。
```

```
4212 \ifx\mcfamily\@undefined
```

- 4213 \protected\def\mcfamily{\CJKfamily{\CJKrmdefault}}
- 4214 \protected\def\gtfamily{\CJKfamily{\CJKsfdefault}}

4215 \fi

\jachar のサブマクロの実装。

- 4216 \def\bxjs@jachar#1{%
- 4217 \xeCJKDeclareCharClass{CJK}{`#1}\relax
- 4218 #1}

\jathinspace の実装。

- 4219 \ifbxjs@jaspace@cmd
- 4220 \protected\def\jathinspace{\CJKecglue}
- 4221 \fi
 - ■和文数式ファミリ 和文数式ファミリは既定で無効とする。すなわち enablejfam=true の場合にのみ @enablejfam を真にする。
- 4222 \ifx t\bxjs@enablejfam
- 4223 \@enablejfamtrue
- 4224\fi

実際に和文用の数式ファミリの設定を行う。

- ※ FIXME: 要検討。
- 4225 \if@enablejfam
- 4226 \xeCJKsetup{CJKmath=true}
- 4227\fi

C.7 LuaT_FX 用設定: LuaT_FX-ja

 $4228 \le if 1\$

■LuaT_EX-ja パッケージの読込 luatexja とともに luatexja-fontspec パッケージを読み込む。

luatexja は自前の \zw (これは実際の現在和文フォントに基づく値を返す) を定義するので、\zw の定義を消しておく。なお、レイアウト定義の「全角幅」は「規定」に基づく \jsZw であることに注意が必要。

- % 1.0b 版から「graphics パッケージに pdftex オプションを渡す」処理を行っていたが、 1.4 版で廃止された。
- $4229 \text{let}zw\$ Qundefined
- 4230 \RequirePackage{luatexja}
- 4231 \edef\bxjs@next{%
- 4232 \noexpand\RequirePackage[scale=\jsScale]{luatexja-fontspec}[2015/08/26]%
- 4233 }\bxjs@next

フォント代替の明示的定義。

- 4234 \DeclareFontShape{JY3}{mc}{m}{it}{<->ssub*mc/m/n}{}

```
4236 \ensuremath{\mbox{\mbox{$\sim$}}} \{mc} \{m\} \{sc} {\ensuremath{\mbox{\mbox{$\sim$}}}} mc/m/n} \{\}
4237 \DeclareFontShape{JY3}{gt}{m}{it}{<->ssub*gt/m/n}{}
4238 \ensuremath{\mbox{\sc hape{JY3}{gt}{m}{sl}{<->ssub*gt/m/n}{{l}}} \\
4239 \DeclareFontShape{JY3}{mc}{bx}{it}{<->ssub*gt/m/n}{}
4240 \DeclareFontShape{JY3}{mc}{bx}{sl}{<->ssub*gt/m/n}{}
4241 \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}}} for $$\{jt}{\ensuremath{\mbox{$1$}}} for $$\{it}{\ensuremath{\mbox{$1$}}} for $$\ensuremath{\mbox{$1$}} for $$\ensuremat
4243 \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}}} \{mc} \{b\} \{n\} \{<-> ssub*mc/bx/n\} \{\} \}
4244 \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}}} \{mc} \{b\} \{it\} \{<->ssub*mc/bx/n\} \{\} \}
4245 \DeclareFontShape{JY3}{mc}{b}{s1}{<->ssub*mc/bx/n}{}
4246 \ensuremath{\mbox{\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{}\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox
4247 \DeclareFontShape{JY3}{gt}{b}{it}{<->ssub*gt/bx/n}{}
4248 \ensuremath{\mbox{\sc lareFontShape{JY3}{gt}{b}{sl}{<->ssub*gt/bx/n}{{}}} \\
4249 \ensuremath{\mbox{\mbox{$\sim$}}} \{mc} \{m\} \{it\} \{<->ssub*mc/m/n\} \{\}
4250 \ensuremath{\mbox{\sc N}} \{sl\} \{<-> ssub*mc/m/n\} \{\}
4251 \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}}} f(sc) (->ssub*mc/m/n) (-)
4252 \ensuremath{\mbox{\sc hape}} \{gt\} \{m\} \{it\} \{<-> ssub*gt/m/n\} \{\}
4253 \ensuremath{\mbox{\sc hape}} \{gt\}\{m\}\{sl\}\{\ensuremath{\mbox{\sc hape}}\} \ensuremath{\mbox{\sc hape}} \{m\}\{sl\}\{\ensuremath{\mbox{\sc hape}}\} \ensuremath{\mbox{\sc hape}} \{m\}\{sl\}\{m\}\{sl\}\{m\}\{sl\}\} \ensuremath{\mbox{\sc hape}} \{m\}\{sl\}\{m\}\{sl\}\{m\}\{sl\}\{m\}\{sl\}\{m\}\{sl\}\} \ensuremath{\mbox{\sc hape}} \{m\}\{sl\}\{m\}\{sl\}\{m\}\{sl\}\{m\}\{sl\}\{m\}\{sl\}\{m\}\{sl\}\{m\}\}\} \ensuremath{\mbox{\sc hape}} \{m\}\{sl\}\{m\}\{sl\}\{m\}\{sl\}\{m\}\{sl\}\{m\}\{sl\}\{m\}\{sl\}\{m\}\{sl\}\{m\}\{sl\}\{m\}\{sl\}\{m\}\{sl\}\{m\}\{sl\}\{m\}\{sl\}\{m\}\{sl\}\{m\}\{sl\}\{m\}\{sl\}\{m\}\{sl\}\{m\}\{sl\}\{m\}\{sl\}\{m\}\{sl\}\{m\}\{sl\}\{m\}\{sl\}\{m\}\{sl\}\{m\}\{sl\}\{m\}\{sl\}\{m\}\{sl\}\{m\}\{sl\}\{m\}\{sl\}\{m\}\{sl\}\{m\}\{sl\}\{m\}\{sl\}\{m\}\{sl\}\{m\}\{sl\}\{m\}\{sl\}\{m\}\{sl\}\{m\}\{sl\}\{m\}\{sl\}\{m\}\{sl\}\{m\}\{sl\}\{m\}\{sl\}\{m\}\{sl\}\{m\}\{sl\}\{m\}\{sl\}\{m\}\{sl\}\{m\}\{sl\}\{m\}\{sl\}\{m\}\{sl\}\{m\}\{sl\}\{m\}\{sl\}\{m\}\{sl\}\{m\}\{sl\}\{m\}\{sl\}\{m\}\{sl\}\{m\}\{sl\}\{m\}\{sl\}\{m\}\{sl\}\{m\}\{sl\}\{m\}\{sl\}\{m\}\{sl\}\{m\}\{sl\}\{m\}\{sl\}\{m\}\{sl\}\{m\}\{sl\}\{m\}\{sl\}\{m\}\{sl\}\{m\}\{sl\}\{m\}\{sl\}\{m\}\{sl\}\{m\}\{sl\}\{m\}\{sl\}\{m\}\{sl\}\{m\}\{sl\}\{m\}\{sl\}\{m\}\{sl\}\{m\}\{sl\}\{m\}\{sl\}\{m\}\{sl\}\{m\}\{sl\}\{m\}\{sl\}\{m\}\{sl\}\{m\}\{sl\}\{m\}\{sl\}\{m\}\{sl\}\{m\}\{sl\}\{m\}\{sl\}\{m\}\{sl\}\{m\}\{sl\}\{m\}\{sl\}\{m\}\{sl\}\{m\}\{sl\}\{m\}\{sl\}\{m\}\{sl\}\{m\}\{sl\}\{m\}\{sl\}\{m\}\{sl\}\{m\}\{sl\}\{m\}\{sl\}\{m\}\{sl\}\{m\}\{sl\}\{m\}\{sl\}\{m\}\{sl\}\{m\}\{sl\}\{m\}\{sl\}\{m\}\{sl\}\{m\}\{sl\}\{m\}\{sl\}\{m\}\{sl\}\{m\}\{sl\}\{m\}\{sl\}\{m\}\{sl\}\{m\}\{sl\}\{m\}\{sl\}\{m\}\{sl\}\{m\}\{sl\}\{m\}\{sl\}\{m\}\{sl\}\{m\}\{sl\}\{m\}\{sl\}\{m\}\{sl\}\{m\}\{sl\}\{m\}\{sl\}\{m\}\{sl\}\{m\}\{sl\}\{m\}\{sl\}\{m\}\{sl\}\{m\}\{s
4254 \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}}} for $$\{\bx\}$ it $$<->ssub*gt/m/n} $$
4255 \ensuremath{\mbox{\sl}{sl}{<->ssub*gt/m/n}{}} \label{localize}
4256 \ensuremath{\mbox{\sc hape}} \{JT3\} \{gt\} \{bx\} \{it\} \{<->ssub*gt/m/n\} \{\}
4258 \ensuremath{\mbox{\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{}\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox
4259 \ensuremath{\mbox{\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{}\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox
4260 \ensuremath{\mbox{\sc hape}} \{JT3\} \{mc\} \{b\} \{s1\} \{<->ssub*mc/bx/n\} \{\}\}
4261 \ensuremath{\mbox{\sc Ver}\mbox{\sc PontShape}{JT3}{gt}{b}{n}{<->ssub*gt/bx/n}{}
4262 \DeclareFontShape{JT3}{gt}{b}{it}{<->ssub*gt/bx/n}{}
4263 \ensuremath{\mbox{\sc hape}} \{JT3\} \{gt\} \{b\} \{s1\} \{<-> ssub*gt/bx/n\} \{\}
```

■和文フォント定義 \jsJaFont が指定された場合は、その値をオプションとして luatexja-preset を読み込む。非指定の場合は原ノ味フォントを指定する(luatexja-preset は読み込まない)。

```
※ 2.0 版より既定を IPAex から原ノ味に変更。
```

```
4264 \bxjs@adjust@jafont{t}
4265 \ifx\bxjs@tmpa\bxjs@@noEmbed
4266
     \def\bxjs@tmpa{noembed}
4267 \fi
4268 \let\bxjs@jafont@paren\@gobble
4269 \bxjs@resolve@jafont@paren\bxjs@tmpa
4270 \edef\bxjs@tmpa{\bxjs@catopt\bxjs@tmpa\bxjs@jp@font}
4271 \ifx\bxjs@tmpa\@empty
4272
      \defaultjfontfeatures{ Kerning=Off }
      \setmainjfont[BoldFont=HaranoAjiGothic-Medium.otf,JFM=ujis]{HaranoAjiMincho-
   Regular.otf}
4274 \setsansjfont[BoldFont=HaranoAjiGothic-Medium.otf,JFM=ujis]{HaranoAjiGothic-
   Medium.otf}
4275 \else
4276 \edef\bxjs@next{%
```

```
4277
                                                  \noexpand\RequirePackage[\bxjs@tmpa]{luatexja-preset}%
                                 4278
                                             }\bxjs@next
                                 4279 \fi
                                         欧文総称フォント命令で和文フォントが連動するように修正する。その他の和文フォント
                                     関係の定義を行う。
                                 4280 \ensuremath{\mbox{\sc 0.03/31}{\mbox{\sc 0.03/31}}{\mbox{\sc 0.03/31}}{\mbox{\s
                                 4281 \DeclareRobustCommand\rmfamily
                                 4282
                                              {\not@math@alphabet\rmfamily\mathrm
                                                \romanfamily\rmdefault\kanjifamily\mcdefault\selectfont}
                                 4283
                                 4284 \DeclareRobustCommand\sffamily
                                              {\not@math@alphabet\sffamily\mathsf
                                 4285
                                 4286
                                                \romanfamily\sfdefault\kanjifamily\gtdefault\selectfont}
                                 4287 \DeclareRobustCommand\ttfamily
                                              {\not@math@alphabet\ttfamily\mathtt
                                                \romanfamily\ttdefault\kanjifamily\gtdefault\selectfont}
                                 4289
                                 4290 }
                                 4291 \long\def\jttdefault{\gtdefault}
                                 4292 \unless\ifx\@ltj@match@familytrue\@undefined
                                              \@ltj@match@familytrue
                                 4294\fi
                                 4295 \g@addto@macro\bxjs@begin@document@hook{%
                                              \reDeclareMathAlphabet{\mathrm}{\mathrm}{\mathrm}{\mathmc}%
                                              \reDeclareMathAlphabet{\mathbf}{\mathbf}{\mathbf}{\mathbf}}
                                 4297
                                              \reDeclareMathAlphabet{\mathsf}{\mathsf}}\mathsf}}\
                                 4299 \bxjs@if@sf@default{%
                                             \renewcommand\kanjifamilydefault{\gtdefault}}
                                     ■和文パラメタの設定
                                 4301%次の3つは既定値の通り
                                 4302 %\ltjsetparameter{prebreakpenalty={`',10000}}
                                 4303 %\ltjsetparameter{postbreakpenalty={\ `,10000}}
                                 4304 %\ltjsetparameter{prebreakpenalty={`",10000}}
                                 4305 \ltjsetparameter{jaxspmode={`!,1}}
                                 4306 \ltjsetparameter{jaxspmode={`\opi,2}}
                                 4307 \ltjsetparameter{alxspmode={`+,3}}
                                 4308 \ltjsetparameter{alxspmode={`\%,3}}
                                     ■段落頭でのグルー挿入禁止 基本的に現状の ltjs* クラスの処理に合わせる。
                                     ※\jsInhibitGlueAtParTop は使わない。
\ltjfakeparbegin 現在の LuaTrX-ja で定義されているマクロで、段落中で段落冒頭用の処理を発動する。未
                                    定義である場合にに備えて同等のものを用意する。
                                 4309 \ifx\ltjfakeparbegin\@undefined
                                             \protected\def\ltjfakeparbegin{%
                                 4310
                                 4311
                                                  \ifhmode
                                                      \relax\directlua{%
                                 4312
                                                          luatexja.jfmglue.create_beginpar_node()}}
```

```
4314
        \fi}
4315 \fi
   ltjs* クラスの定義と同等になるようにパッチを当てる。
4316 \unless\ifnum\bxjs@everyparhook=\bxjs@everyparhook@none
4317 \begingroup
      \let\%\@percentchar \def\@#1{[[\detokenize{#1}]]}
4318
      \label{lem:condition} $$ \end{\mathbf {\everypar}} in $$ \end{\mathbf {\everypar}} in $$
4319
      \ifnum\bxjs@everyparhook=\bxjs@everyparhook@compat
4320
4321
        \@gobble\if\def\bxjs@tmpa{\@{\everypar{\everyparhook}\fi}}\fi
      \directlua{
4322
4323
        local function patchcmd(cs, code, from, to)
4324
          tex.sprint(code:gsub(from:gsub("\%W", "\%\%0"), "\%0"..to)
            :gsub("macro:", \@\gdef..cs, 1):gsub("->", "{", 1).."}")
4325
4326
        end
        patchcmd(\@\@xsect, [[\meaning\@xsect]],
4327
          \@{\hskip-\@tempskipa}, \@\ltjfakeparbegin)
4328
        patchcmd(\@\@item, [[\meaning\@item]],
4329
          \bxjs@tmpa, \@\ltjfakeparbegin)}
4330
4331 \endgroup
4332 \fi
 ■hyperref 対策 unicode にするべき。
 ※ 1.6c 版より、固定ではなく既定設定+検証に切り替えた。
4333 \ifbxjs@hyperref@enc
     \PassOptionsToPackage{unicode}{hyperref}
     \bxjs@check@hyperref@unicode{true}
4335
4336 \fi
 ■共通命令の実装
4337 \protected\def\autospacing{%
     \ltjsetparameter{autospacing=true}}
4339 \protected\def\noautospacing{%}
     \ltjsetparameter{autospacing=false}}
4341 \protected\def\autoxspacing{%
     \ltjsetparameter{autoxspacing=true}}
4343 \protected\def\noautoxspacing{%
     \ltjsetparameter{autoxspacing=false}}
4345 \def\bxjs@apply@kanjiskip{%
     \ltjsetparameter{kanjiskip={\@tempskipa}}}
4347 \def\bxjs@apply@xkanjiskip{%
     \ltjsetparameter{xkanjiskip={\@tempskipa}}}
   \jachar のサブマクロの実装。
4349 \def\bxjs@jachar#1{%
4350 \ltjjachar`#1\relax}
   \jathinspace の実装。
4351 \ifbxjs@jaspace@cmd
```

```
\protected\def\jathinspace{%
      4353
             \hskip\ltjgetparameter{xkanjiskip}\relax}
      4354 \fi
        ■和文数式ファミリ LuaTpX-ja では和文数式ファミリは常に有効で、既にこの時点で必要
       な設定は済んでいる。従って @enablejfam は常に真になる。
      4355 \ifx f\bxjs@enablejfam
           \ClassWarningNoLine\bxjs@clsname
            {You cannot use 'enablejfam=false', since the\MessageBreak
             LuaTeX-ja always provides Japanese math families}
      4358
      4359 \fi
       C.8 共通処理 (2)
      4360 \fi\fi\fi\fi
        ■共通命令の実装
\textmc minimal ドライバ実装中で定義した \DeclareJaTextFontCommand を利用する。
\textgt 4361 \ifx\DeclareFixJFMCJKTextFontCommand\@undefined
      4362 \DeclareJaTextFontCommand{\textmc}{\mcfamily}
      4363 \verb|\DeclareJaTextFontCommand{\textgt}{\defamily}|
      4364 \fi
\mathmc この時点で未定義である場合に限り、\DeclareJaMathFontCommand を利用したフォール
\mathgt バックの定義を行う。
      4365 \  \
          \DeclareJaMathFontCommand{\mathmc}{\mcfamily}
      4367 \DeclareJaMathFontCommand{\mathgt}{\gtfamily}
      4368 \fi
       ■和文空白命令
    \> 非数式中では \jathinspace と等価になるように再定義する。
       ※数式中では従来通り(\:と等価)。
      4369 \ifbxjs@jaspace@cmd
           \bxjs@protected\def\bxjs@choice@jathinspace{%
      4370
             \relax\ifmmode \mskip\medmuskip
      4371
             \else \jathinspace\ignorespaces
      4372
             \fi}
      4373
           \jsAtEndOfClass{%
      4374
             \ifjsWitheTeX \let\>\bxjs@choice@jathinspace
      4375
      4376
             \else \def\>{\protect\bxjs@choice@jathinspace}%
             fi
      4377
      4378 \fi
```

■和文・和欧文間空白の初期値

```
4379 \space{20} \spa
4380 \ifx\jsDocClass\jsSlide \setxkanjiskip{0.1em}
4381 \else \setxkanjiskip{0.25em plus 0.15em minus 0.06em}
4382 \fi
          以上で終わり。
4383 %</standard>
                                     和文ドライバ: modern 🖄
    付録 D
          モダーンな設定。
          standard ドライバの設定を引き継ぐ。
4384 %<*modern>
4385 \verb|\input{bxjsja-standard.def}|
    D.1 フォント設定
          T1 エンコーディングに変更する。
    ※以下のコードは \usepackage [T1] {fontenc} と同等。
4386 \in 1  x\jsEngine1\fi\if 1\jsEngine1\fi=\z0
4387 \def\encodingdefault{T1}%
4388 \left\{ input{t1enc.def} \right\}%
4389\ \verb|\fontencoding| encoding default \verb|\selectfont|
4390 \fi
          基本フォントを Latin Modern フォントファミリに変更する。
    ※以下は \usepackage [noamth] {1modern} と同じ。ユーザは後で 1modern を好きなオプ
     ションを付けて読み込むことができる。
4391 \ifnum0\if x\jsEngine1\fi\if 1\jsEngine1\fi=\z0
4392 \mbox{ } \mbox{renewcommand{\mbox{\lmr}}} \label{lmr}
4393 \renewcommand{\sfdefault}{lmss}
4394 \mbox{ }\mbox{lmtt}{1mtt}
4395 \fi
          大型演算子用の数式フォントの設定。
    ※amsfonts パッケージと同等にする。
4396 \DeclareFontShape{OMX}{cmex}{m}{n}{%
4397
              <-7.5>cmex7<7.5-8.5>cmex8%
```

D.2 fixltx2e 読込

 $4400 \ensuremath{ \mbox{def}\mbox{cmex@opt}\{10\}}$

4398

※fixltx2e 廃止前の IATFX カーネルの場合。

 $<8.5-9.5>cmex9<9.5->cmex10}{}%$

amsmath 読込時に上書きされるのを防ぐ。

4399 \expandafter\let\csname $OMX/cmex/m/n/10\endcsname\relax$

4401 \ifx\@IncludeInRelease\@undefined 4402 \RequirePackage{fixltx2e} 4403 \fi

D.3 和文カテゴリコード

和文カテゴリコード設定のための補助パッケージを読みこむ。 4404 \RequirePackage{bxjscjkcat}

D.4 完了

おしまい。

4405 %</modern>

付録 E 和文ドライバ: pandoc 🕾

「Pandoc モード」で使用される和文ドライバ。standard ドライバの機能を継承するが、「Pandoc の既定の latex テンプレート」が使われることを前提として、それと BXJS の設定を整合させるための措置を加えている。

E.1 準備

standard ドライバの設定を引き継ぐ。

4406 %<*pandoc>

4407 \input{bxjsja-standard.def}

bxjspandoc パッケージを読み込む。

 $4408 \RequirePackage{bxjspandoc}$

\bxjs@endpreamble@hook etoolbox の \AtEndPreamble で実行される BXJS クラス用のフック。

 $% \epsilon - T_{EX}$ 以外では無効になる。(将来 pandoc の外に出す可能性あり。)

 $4409 \verb|\conlypreamble\bxjs@endpreamble@hook|$

4410 \let\bxjs@endpreamble@hook\@empty

 $4411 \fi$ sWitheTeX

4412 \RequirePackage{etoolbox}[2010/08/21]% v2.0

4413 \AtEndPreamble{\bxjs@endpreamble@hook}

4414 **\fi**

E.2 和文ドライバパラメタ

keyval のファミリは bxjsPan とする。

\ifbxjs@jp@fix@strong 重要要素を補正するか。

 $4415 \verb|\newif\ifbxjs@jp@fix@strong \bxjs@jp@fix@strongtrue|\\$

```
fix-strong オプションの処理。
                  4416 \let\bxjs@kv@fixstrong@true\bxjs@jp@fix@strongtrue
                  4417 \let\bxjs@kv@fixstrong@false\bxjs@jp@fix@strongfalse
                  4418 \define@key{bxjsPan}{fix-strong}[true]{%
                       \bxjs@set@keyval{fixstrong}{#1}{}}
\ifbxjs@jp@fix@code インラインコード要素を補正するか。
                  4420 \newif\ifbxjs@jp@fix@code \bxjs@jp@fix@codetrue
                     fix-code オプションの処理。
                  4421 \let\bxjs@kv@fixcode@true\bxjs@jp@fix@codetrue
                  4422 \let\bxjs@kv@fixcode@false\bxjs@jp@fix@codefalse
                  4423 \define@key{bxjsPan}{fix-code}[true]{%
                       \bxjs@set@keyval{fixcode}{#1}{}}
   \bxjs@jp@strong 重要要素に適用される書体変更の種類。
                  4425 \chardef\bxjs@jp@strong=0
                     strong オプションの処理。
                  4426 \def\bxjs@kv@strong@bold{\chardef\bxjs@jp@strong=0 }
                  4427 \def\bxjs@kv@strong@sans{\chardef\bxjs@jp@strong=1 }
                  4428 \def\bxjs@kv@strong@boldsans{\chardef\bxjs@jp@strong=2 }
                  4429 \define@key{bxjsPan}{strong}{%
                  4430 \bxjs@set@keyval{strong}{#1}{}}
                     実際の japaram の値を適用する。
                  4431 \def\bxjs@next#1{\bxjs@safe@setkeys{bxjsPan}{#1}}
```

4432 \expandafter\bxjs@next\expandafter{\jsJaParam}

E.3 dupload システム

パッケージが重複して読み込まれたときに"option clash"の検査をスキップする。この時に何らかのコードを実行させることができる。

\bxjs@set@dupload@proc

\bxjs@set@dupload@proc{ $\langle ファイル名\rangle$ }{ $\langle 定義本体\rangle$ } 特定のファイルの読込が \@filewithoptions で指示されて、しかもそのファイルが読込済である場合に、オプション重複検査をスキップして、代わりに $\langle 定義本体\rangle$ のコードを実行する。このコード中で #1 は渡されたオプション列のテキストに置換される。

```
4433 \@onlypreamble\bxjs@set@dupload@proc
4434 \def\bxjs@set@dupload@proc#1{%
```

 $4435 \qquad \texttt{\expandafter\bxjs@set@dupload@proc@a\csname\ bxjs@dlp/\#1\endcsname}\} \\$

 $4436 \verb|\donlypreamble\bxjs@set@dupload@proc@a|$

 $4437 \verb|\def\bxjs@set@dupload@proc@a#1{%}|$

4438 \@onlypreamble#1\def#1##1}

4439 \def\bxjs@unset@dupload@proc#1{%

4440 \expandafter\let\csname bxjs@dlp/#1\endcsname\@undefined}

\@if@ptions \@if@ptions の再定義。

```
4441 \@onlypreamble\bxjs@org@if@ptions
4442 \let\bxjs@org@if@ptions\@if@ptions
4443 \@onlypreamble\bxjs@org@reset@ptions
4444 \let\bxjs@org@reset@ptions\relax
4445 \def\@if@ptions#1#2#3{%
     \let\bxjs@next\@secondoftwo
4446
      \def\bxjs@tmpa{#1}\def\bxjs@tmpb{\@currext}%
4447
4448
      \ifx\bxjs@tmpa\bxjs@tmpb
        \expandafter\ifx\csname bxjs@dlp/#2.#1\endcsname\relax\else
4449
          \let\bxjs@next\@firstoftwo \fi
4450
4451
4452
      \bxjs@next\bxjs@do@dupload@proc\bxjs@org@if@ptions{#1}{#2}{#3}}
4453 \g@addto@macro\bxjs@begin@document@hook{%
      \let\@if@ptions\bxjs@org@if@ptions}
4455 \@onlypreamble\bxjs@do@dupload@proc
4456 \def\bxjs@do@dupload@proc#1#2#3{%
      \ifx\bxjs@org@reset@ptions\relax
4457
        \let\bxjs@org@reset@ptions\@reset@ptions
4458
4459
      \bxjs@csletcs{bxjs@next}{bxjs@dlp/#2.#1}%
4460
4461
      \def\@reset@ptions{%
        \let\@reset@ptions\bxjs@org@reset@ptions
4462
4463
        \@reset@ptions
        \bxjs@next{#3}}%
4464
     \@firstoftwo}
4465
```

E.4 lang 変数

lang=ja という言語指定が行われると、Pandoc はこれに対応していないため不完全な Babel や Polyglossia の設定を出力してしまう。これを防ぐための対策を行う。

\bxjs@polyglossia@options Polyglossia のオプション列のテキスト。"実際には読み込まれていない"場合は \relax になる。

 $4466 \verb|\let\bxjs@polyglossia@options\relax|$

\bxjs@babel@options Babel のオプション列のテキスト。"実際には読み込まれていない"場合は \relax になる。
4467 \let\bxjs@babel@options\relax

- ■Polyglossia について つまり X_HT_EX・LuaT_EX の場合。
- ※この場合 etoolbox が使用可能になっている。
- 4468 \ifnum0\if x\jsEngine1\fi\if 1\jsEngine1\fi>0

パッケージの読込を検知するため読込済のマークを付けて dupload の処理を仕込む。

- 4469 \pandocSkipLoadPackage{polyglossia}
- 4470 \bxjs@set@dupload@proc{polyglossia.sty}{%
- 4471 \bxjs@unset@dupload@proc{polyglossia.sty}%
- 4472 \ClassWarning\bxjs@clsname

```
4473 {Package polyglossia is required}%
```

4474 \def\bxjs@polyglossia@options{#1}%

polyglossia の読込が指示された場合、直後に \setmainlanguage が実行されることを 想定して、フック用の \setmainlanguage を定義する。

※先に \setmainlanguage 以外が実行された場合はエラーになる。

4475 \newcommand*\setmainlanguage[2][]{%

もし、言語名が空の \setmainlanguage{} が実行された場合は、lang=ja が指定されたと見なす。

```
4476 \ifblank{##2}{%

4477 \ClassWarning\bxjs@clsname

4478 {Main language is invalid, thus the fallback\MessageBreak

4479 definitions will be employed}%

4480 \bxjs@pandoc@polyglossia@ja
```

言語名が非空ならば、本来の polyglossia の処理を実行する。

```
}{%else
4481
          \ClassWarning\bxjs@clsname
4482
           {Main language is valid (##2),\MessageBreak
4483
            thus polyglossia will be loaded}%
4484
          \csundef{ver@polyglossia.sty}%
4485
4486
          \edef\bxjs@next{%
             \noexpand\RequirePackage[\bxjs@polyglossia@options]{polyglossia}[]%
4487
4488
          }\bxjs@next
          \setmainlanguage[##1]{##2}%
4489
4490
        }}}
```

プレアンブルで polyglossia の読込が指示されなかった場合、Polyglossia と連携する パッケージの誤動作を防ぐため、読込済マークを外す。

```
4491 \g@addto@macro\bxjs@endpreamble@hook{%

4492 \ifx\bxjs@polyglossia@options\relax

4493 \csundef{ver@polyglossia.sty}%

4494 \fi}
```

\bxjs@pandoc@polyglossia@ja Pandoc 側で lang=ja が指定されていた場合の処理。この場合は Polyglossia の処理を無効化するためにダミーの定義を行う。その時点でダミーの \setotherlanguage(s) を定義する。

```
4495 \@onlypreamble\bxjs@pandoc@polyglossia@ja
4496 \def\bxjs@pandoc@polyglossia@ja{%
      \renewcommand*\setmainlanguage[2][]{}%
      \newcommand*\setotherlanguage[2][]{%
4498
        \left\{ \#2\right\} 
4499
4500
           \cslet{##2}\@empty \cslet{end##2}\@empty
           \cslet{text##2}\@firstofone}}%
4501
      \newcommand*\setotherlanguages[2][]{%
4502
        \ensuremath{\texttt{Qfor\bxjs@tmpa:={\##2}\do{\%}}
4503
           \setotherlangauge{\bxjs@tmpa}}}%
4504
```

Polyglossiaの読込済マークは外れるようにしておく。

4505 \let\bxjs@polyglossia@options\relax}%

4506 \fi

■Babel について X¬T¬X 以外の場合。

※ Pandoc 2.6 版において、LuaT_EX で用いられる多言語パッケージが Polyglossia から Babel に変更された。

4507 \if x\jsEngine\else

パッケージの読込を検知するため読込済のマークを付けて dupload の処理を仕込む。

- $4508 \verb|\pandocSkipLoadPackage{babel}|$
- 4509 \bxjs@set@dupload@proc{babel.sty}{%
- 4510 \bxjs@unset@dupload@proc{babel.sty}%
- 4511 \ClassWarning\bxjs@clsname
- 4512 {Package babel is required}%

パッケージオプションに言語名が空の main= があるかを調べる。ある場合は lang=ja 対策 を実行する。

※\bxjs@babel@options には main= を除いたオプション列を格納する。

- 4513 \@tempswafalse \let\bxjs@babel@options\@empty
- 4514 \def\bxjs@tmpb{main=}%
- 4515 \@for\bxjs@tmpa:=#1\do{%
- 4516 \ifx\bxjs@tmpa\bxjs@tmpb \@tempswatrue
- 4517 \else \edef\bxjs@babel@options{\bxjs@babel@options,\bxjs@tmpa}%
- 4518 \fi}%
- 4519 \if@tempswa
- 4520 \ClassWarning\bxjs@clsname
- 4521 {Main language is invalid, so fallback\MessageBreak
- 4522 definitions will be employed}%
- 4523 \bxjs@pandoc@polyglossia@ja

ない場合は、本来の babel の処理を実行する。

- 4524 \else
- 4525 \ClassWarning\bxjs@clsname
- 4526 {Main language is valid, \MessageBreak
- 4527 thus babel will be loaded}%
- 4528 \expandafter\let\csname ver@babel.sty\endcsname\@undefined
- 4529 \RequirePackage[#1]{babel}[]%
- 4530 \fi}

プレアンブルで babel の読込が指示されなかった場合、読込済マークを外す。

- $4531 \verb|\g@addto@macro\bxjs@endpreamble@hook{%}|$
- $\begin{tabular}{ll} 4533 & \end{tabular} $$ \end{tabular} ever@babel.sty\end{tabular} ever@babel.sty\end{tabular$
- 4534 \fi}

\bxjs@pandoc@babel@ja Pandoc 側で lang=ja が指定されていた場合の処理。

4535 \@onlypreamble\bxjs@pandoc@babel@ja

```
4536 \def\bxjs@pandoc@babel@ja{%
4537
      \expandafter\let\csname ver@babel.sty\endcsname\@undefined
      \edef\bxjs@next{%
4538
       \noexpand\RequirePackage[\bxjs@babel@options,english]{babel}[]%
4539
4540
     }\bxjs@next
     \if j\jsEngine
4541
       \RequirePackage[main=japanese]{pxbabel}[]%
4542
4543
       \RequirePackage{bxorigcapt}[]%
4544
4545
   lang 対策はこれで終わり。
4546 \fi
```

E.5 geometry 変数

```
geometry を"再度読み込んだ"場合に、そのパラメタで \setpagelayout* が呼ばれるようにする。
4547 \bxjs@set@dupload@proc{geometry.sty}{%
4548 \setpagelayout*{#1}}
```

E.6 CJKmainfont 変数

LuaTeX (+ LuaTeX-ja) の場合に CJKmainfont 変数が指定された場合は \setmainjfont の指定にまわす。

```
4549 \if 1\jsEngine
4550 \pandocSkipLoadPackage{xeCJK}
4551 \providecommand*{\setCJKmainfont}{\setmainjfont}
4552 \fi
```

E.7 Option clash 対策

```
xeCJK パッケージについて。
※xeCJK はクラス内で既に読み込まれているので、space は(意図通りに)無効になる。
※ v2.8~v2.9.2 の間。

4553 \if x\jsEngine
4554 \expandafter\g@addto@macro\csname opt@xeCJK.sty\endcsname{%
4555 ,space}
```

E.8 paragraph のマーク

BXJS クラスでは \paragraph の見出しの前に \jsParagraphMark で指定したマークが付加され、既定ではこれは "■" である。しかし、この規定は \paragraph が本来のレイア

ウトを保っている、すなわち「行内見出しである」「節番号が付かない」ことが前提になっていると考えられる。Pandoc はこの規定を変更することがある(特に既定で \paragraph を別行見出しに再定義する)ため、変更された場合は \jsParagraphMark の既定値を空にする。

Pandoc がプレアンブルで行う再定義の結果を調べるため、begin-document フックを利用する。

- 4557 \g@addto@macro\bxjs@begin@document@hook{%
- 4558 \@tempswafalse

まず、マーク変更が必要かを調べる。\oldparagraph という制御綴が定義済の場合、Pandocが \paragraph の様式を変更したということなので、マーク変更が必要である。

- 4559 \ifx\oldparagraph\@undefined\else
- 4560 \@tempswatrue
- 4561 \fi

\paragraph が番号付きの場合は、マーク変更が必要である。

- 4562 \ifnum\c@secnumdepth>3
- 4563 \@tempswatrue
- 4564 \fi

「マーク変更が必要」である場合、\jsParagraphMark が既定値のままであれば空に変更する。

- $\tt 4565 \qquad \verb| \fCtempswa\ifx\jsParagraphMark\bxjsCorgCparagraphCmark | \\$
- 4566 \let\jsParagraphMark\@empty
- 4567 \fi\fi}

E.9 全角空白文字

- $4568 \times x\$ if numO\if x\jsEngine1\fi\if 1\jsEngine1\fi>\z0
- 4569 \catcode"3000=\active
- 4570 \begingroup \catcode`\!=7
- 4571 \protected\gdef!!!!3000{\zwspace}
- 4572 \endgroup
- $4573 \le ifx\DeclareUnicodeCharacter\Qundefined\else$
- 4574 \DeclareUnicodeCharacter{3000}{\bxjs@zsp@char}
- $4575 \qquad \texttt{\bxjs@protected\def\bxjs@zsp@char{\zwspace}}$
- 4576 \fi\fi

E.10 hyperref 対策

hyperref の unicode オプションの固定を行う。

- $4577 \if j\jsEngine$
- 4578 \bxjs@fix@hyperref@unicode{false}
- $4579 \ensuremath{\setminus} else$
- 4580 \bxjs@fix@hyperref@unicode{true}
- 4581 \fi

E.11 Pandoc 要素に対する和文用の補正

4582 \ifbxjs@jp@fix@strong\ifbxjs@jp@strong@cmd

■重要要素 重要 (Strong) 要素に対する IATEX 出力は \textbf となるが、代わりに \strong を使いたいため、\textbf を書き換えてしまう (うわぁ)。

```
\let\orgtextbf\textbf
4583
      \DeclareRobustCommand\bxjstextbf[1]{%
4584
        \begingroup
4585
4586
          \let\textbf\orgtextbf
          \strong{#1}%
4587
4588
        \endgroup}%
4589
      \g@addto@macro\bxjs@begin@document@hook{%
4590
        \let\textbf\bxjstextbf}
4591 \fi\fi
   \strong の書体を設定する。
4592 \verb|\jsAtEndOfClass{%}|
4593
     \ifx\strongfontdeclare\@undefined\else
        \ifcase\bxjs@jp@strong
4594
4595
        \or \strongfontdeclare{\sffamily}%
        \or \strongfontdeclare{\sffamily\bfseries}%
        \fi
4597
4598
     \fi}
 ■インラインコード要素 インラインコード (Code) 要素に対する IATFX 出力は \texttt
 となる。\texttt の両端に欧文ゴーストが入るようにする。
4599 \ifbxjs@jp@fix@code
     \chardef\bxjs@eghost@c=23
     \ifx j\jsEngine \xspcode\bxjs@eghost@c=3
4601
      \else\ifx 1\jsEngine \ltjsetparameter{alxspmode={\bxjs@eghost@c,3}}
4603
     \else\ifx x\jsEngine %no-op
4604
     \else \let\bxjs@eghost@c\@undefined
4605
     \fi\fi\fi
     \ifx\bxjs@eghost@c\@undefined\else
4606
        \font\bxjs@eghost@f=ec-lmr10 at 1.23456pt
4607
        \def\bxjs@pan@eghost{\bgroup\bxjs@eghost@f\bxjs@eghost@c\egroup}
4608
        \let\orgtexttt\texttt
4609
        \DeclareRobustCommand\bxjstexttt[1]{%
4610
          \ifmmode \nfss@text{\ttfamily #1}%
4611
4612
          \else
            \ifvmode \leavevmode \fi
4613
            \bxjs@pan@eghost\null
4614
4615
            \begingroup \ttfamily #1\endgroup
            \null\bxjs@pan@eghost
4616
4617
          \fi}
        \g@addto@macro\bxjs@begin@document@hook{%
4618
          \let\texttt\bxjstexttt}
4619
```

さらに \verb の外側にも欧文ゴーストが入るようにする。 ※bxjaghost の実装を参考にした。

```
4620 \qquad \texttt{\expandafter\def\expandafter\werb\expandafter} \\ \\
```

4621 \expandafter\bxjs@pan@eghost\verb}

4623 \fi

4624 **\fi**

E.12 完了

おしまい。

4625 %</pandoc>

和文ドライバ実装はここまで。

4626 %</drv>

付録 F 補助パッケージ一覧 🕸

BXJS クラスの機能を実現するために用意されたものだが、他のクラスの文書で読み込んで利用することもできる。

• bxjscompat: ムニャムニャムニャ。

• bxjscjkcat: modern ドライバ用の和文カテゴリを適用する。

• bxjspandoc: Pandoc 用のナニカ。

4627 %<*anc>

付録 G 補助パッケージ: bxjscompat 🚳

ムニャムニャムニャ……。

G.1 準備

4628 %<*compat>

 $4629 \verb|\def\bxac@pkgname{bxjscompat}|$

\bxjx@engine エンジンの種別。

4630 \let\bxac@engine=n

4631 \def\bxac@do#1#2{%

4632 \edef\bxac@tmpa{\string#1}%

4633 \edef\bxac@tmpb{\meaning#1}%

4634 \ifx\bxac@tmpa\bxac@tmpb #2\fi}

 $4635 \verb|\bxac@do\XeTeXversion{\let\bxac@engine=x}|$

 $4636 \verb|\bxac@do\luatexversion{\let\bxac@engine=1}|$

\bxac@delayed@if@bxjs もし BXJS クラスの読込中でこのパッケージが読み込まれているならば、BXJS のクラスの

```
\let\bxac@delayed@if@bxjs\@firstofone
                         4639 \else \let\bxac@delayed@if@bxjs\jsAtEndOfClass
                         4640 \fi
\ImposeOldLuaTeXBehavior ムニャムニャ。
\verb|\RevokeOldLuaTeXBehavior| 4641 \verb|\newif \leq 0 in @old@behavior| \\
                         4642 \let\ImposeOldLuaTeXBehavior\relax
                         4643 \let\RevokeOldLuaTeXBehavior\relax
                           G.2 X<sub>TF</sub>X 部分
                         4644 \ifx x\bxac@engine
                             XFTFX 文字クラスのムニャムニャ。
                         4645 \verb|\conlypreamble\bxac@adjust@charclass|
                         4646 \bxac@delayed@if@bxjs{%
                               \@ifpackageloaded{xeCJK}{}{%else
                         4647
                                  \ifx\xe@alloc@intercharclass\@undefined\else
                         4648
                         4649
                                      \ifnum\xe@alloc@intercharclass=\z@
                         4650
                                    \PackageInfo\bxac@pkgname
                                      {Setting up interchar class for CJK...\@gobble}%
                         4651
                         4652
                                    \InputIfFileExists{load-unicode-xetex-classes.tex}{%
                                      \xe@alloc@intercharclass=3
                         4653
                         4654
                                    }{%else
                                      \PackageWarning\bxac@pkgname
                         4655
                         4656
                                        {Cannot find file 'load-unicode-xetex-classes.tex'%
                                         \@gobble}%
                         4657
                                    }%
                         4658
                         4659
                                  \ifnum\XeTeXcharclass"3041=\z0
                         4660
                                    \PackageInfo\bxac@pkgname
                         4661
                                      {Adjusting interchar class for CJK...\@gobble}%
                         4662
                                    \@for\bxac@x:={%
                         4663
                                      3041,3043,3045,3047,3049,3063,3083,3085,3087,308E,%
                         4664
                         4665
                                      3095,3096,30A1,30A3,30A5,30A7,30A9,30C3,30E3,30E5,%
                                      30E7,30EE,30F5,30F6,30FC,31F0,31F1,31F2,31F3,31F4,%
                         4666
                                      31F5,31F6,31F7,31F8,31F9,31FA,31FB,31FC,31FD,31FE,%
                         4667
                                      31FF%
                         4668
                                    }\do{\XeTeXcharclass"\bxac@x=\@ne}%
                         4669
                         4670
                                 \fi
                         4671
                               }%
                         4672 }
                           以上。
                         4673 \fi
```

終わりまで実行を遅延する。

4637 \ifx\jsAtEndOfClass\@undefined

G.3 LuaT_EX 部分

```
4674 \ifx 1\bxac@engine
                                                                                                ムニャムニャ。
                                                                                  4675 \unless\ifnum\luatexversion<80 \ifnum\luatexversion<85
                                                                                                     \chardef\pdftexversion=200
                                                                                  4677
                                                                                                      \def\pdftexrevision{0}
                                                                                   4678 \let\pdftexbanner\luatexbanner
                                                                                  4679 \fi\fi
\ImposeOldLuaTeXBehavior ムニャムニャ。
\verb|\RevokeOldLuaTeXBehavior| 4680 \verb|\begingroup\expandafter\expandafter\expandafter| expandafter \verb|\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter| expandafter \verb|\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandaft
                                                                                  4681 \exp \text{andafter} \ output mode \endcsname \relax \else
                                                                                  4682 \ensuremath{\mbox{def\bxac@ob@list{\%}}}
                                                                                                      \do{\let}\pdfoutput{\outputmode}%
                                                                                  4683
                                                                                  4684
                                                                                                       \do{\let}\pdfpagewidth{\pagewidth}%
                                                                                                       \do{\let}\pdfpageheight{\pageheight}%
                                                                                  4685
                                                                                                       \do{\protected\edef}\pdfhorigin{{\pdfvariable horigin}}%
                                                                                  4686
                                                                                                       \do{\protected\edef}\pdfvorigin{{\pdfvariable vorigin}}}
                                                                                  4688 \ensuremath{\mbox{\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{}\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox
                                                                                                       \expandafter\bxac@ob@do@a\csname bxac@\string#2\endcsname{#1}#2}
                                                                                   4690 \def\bxac@ob@do@a#1#2#3#4{\endgroup
                                                                                                      \ifbxac@in@old@behavior \let#1#3\relax #2#3#4\relax
                                                                                  4691
                                                                                                      \else \let#3#1\relax \let#1\@undefined
                                                                                                      \fi}
                                                                                  4693
                                                                                  4694 \protected\def\ImposeOldLuaTeXBehavior{%
                                                                                                      \unless\ifbxac@in@old@behavior
                                                                                                              \bxac@in@old@behaviortrue
                                                                                  4696
                                                                                  4697
                                                                                                              \let\do\bxac@ob@do \bxac@ob@list
                                                                                  4698
                                                                                  4699 \protected\def\RevokeOldLuaTeXBehavior{%
                                                                                                      \ifbxac@in@old@behavior
                                                                                                              \bxac@in@old@behaviorfalse
                                                                                  4701
                                                                                                              \let\do\bxac@ob@do \bxac@ob@list
                                                                                                    \fi}
                                                                                  4703
                                                                                  4704 \fi
                                                                                               漢字および完成形ハングルのカテゴリコードのムニャムニャ。
                                                                                  4705
                                                                                                      \ifnum\luatexversion>64 \directlua{
                                                                                  4706
                                                                                                              local function range(cs, ce, cc, ff)
                                                                                  4707
                                                                                                                     if ff or not tex.getcatcode(cs) == cc then
                                                                                                                           local setcc = tex.setcatcode
                                                                                  4708
                                                                                  4709
                                                                                                                           for c = cs, ce do setcc(c, cc) end
                                                                                  4710
                                                                                                                     end
                                                                                  4711
                                                                                                              end
                                                                                                              range(0x3400, 0x4DB5, 11, false)
                                                                                  4712
                                                                                  4713
                                                                                                              range(0x4DB5, 0x4DBF, 11, true)
                                                                                                             range(0x4E00, 0x9FCC, 11, false)
                                                                                  4714
                                                                                                              range(0x9FCD, 0x9FFF, 11, true)
                                                                                  4715
                                                                                                              range(0xAC00, 0xD7A3, 11, false)
                                                                                  4716
                                                                                  4717
                                                                                                              range(0x20000, 0x2A6D6, 11, false)
```

```
range(0x2A6D7, 0x2A6FF, 11, true)
4718
        range(0x2A700, 0x2B734, 11, false)
4719
4720
        range(0x2B735, 0x2B73F, 11, true)
        range(0x2B740, 0x2B81D, 11, false)
4721
        range(0x2B81E, 0x2B81F, 11, true)
4722
        range(0x2B820, 0x2CEA1, 11, false)
4723
        range(0x2CEA2, 0x2FFFD, 11, true)
4724
4725
   以上。
4726 \fi
```

G.4 完了

おしまい。

4727 %</compat>

付録 H 補助パッケージ:bxjscjkcat 🕾

modern ドライバ用の和文カテゴリを適用する。

H.1 準備

```
4728 %<*cjkcat>
            4729 \def\bxjx@pkgname{bxjscjkcat}
            4730 \newcount\bxjx@cnta
            4731 \@onlypreamble\bxjx@tmpdo
            4732 \@onlypreamble\bxjx@tmpdo@a
            4733 \@onlypreamble\bxjx@tmpdo@b
\bxjx@engine エンジンの種別。
            4734 \let\bxjx@engine=n
            4735 \def\bxjx@tmpdo#1#2{%
                  \edef\bxjx@tmpa{\string#1}%
                  \edef\bxjx@tmpb{\meaning#1}%
                  \ifx\bxjx@tmpa\bxjx@tmpb #2\fi}
            4739 \bxjx@tmpdo\kanjiskip{\let\bxjx@engine=j}
            4740 \bxjx@tmpdo\enablecjktoken{\let\bxjx@engine=u}
            4741 \bxjx@tmpdo\XeTeXversion{\let\bxjx@engine=x}
            4742 \bxjx@tmpdo\pdftexversion{\let\bxjx@engine=p}
            4743 \bxjx@tmpdo\luatexversion{\let\bxjx@engine=1}
```

それぞれのエンジンで、前提となる日本語処理パッケージが実際に読み込まれているかを 検査する。

```
4747
         \PackageError\bxjx@pkgname
4748
          {Package '#2' must be loaded}%
          {Package loading is aborted.\MessageBreak\@ehc}%
4749
         \endinput}
4750
4751
4752 \bxjx@tmpdo{p}{bxcjkjatype}
4754 \bxjx@tmpdo{1}{luatexja}
   古い LATFX の場合、\TextOrMath は fixltx2e パッケージで提供される。
4755 \ifx\TextOrMath\@undefined
4756 \RequirePackage{fixltx2e}
4757 \fi
```

H.2 和文カテゴリコードの設定

upIATEX の場合、和文カテゴリコードの設定を LuaTeX-ja と(ほぼ)等価なものに変更する。

```
※ LuaT<sub>F</sub>X-ja との相違点: A830、A960、1B000。
4758 \if u\bxjx@engine
4759 \@for\bxjx@tmpa:={%
4760 0080,0100,0180,0250,02B0,0300,0500,0530,0590,0600,%
4761 0700,0750,0780,0700,0800,0840,0860,08A0,0900,0980,%
4762 OAOO, OA80, OBOO, OB80, OCOO, OC80, ODOO, OD80, OEOO, OE80, %
4763 OFOO, 1000, 10A0, 1200, 1380, 13A0, 1400, 1680, 16A0, 1700, %
4764 1720, 1740, 1760, 1780, 1800, 18B0, 1900, 1950, 1980, 19E0, %
4765 1A00, 1A20, 1AB0, 1B00, 1B80, 1BC0, 1C00, 1C50, 1C80, 1CC0, %
4766 1CD0, 1D00, 1D80, 1DC0, 1E00, 1F00, 2440, 27C0, 27F0, 2800, %
4767 2A00,2C00,2C60,2C80,2D00,2D30,2D80,2DE0,2E00,4DC0,%
4768 A4D0, A500, A640, A6A0, A700, A720, A800, A830, A840, A880, %
4769 A8EO, A900, A930, A980, A9EO, AA00, AA60, AA80, AAEO, AB00, %
4770 AB30, AB70, ABC0, D800, DB80, DC00, E000, FB00, FB50, FE00, %
4771 FE70, FFF0, %
4772 10000,10080,10100,10140,10190,101D0,10280,102A0,%
4773 102E0, 10300, 10330, 10350, 10380, 103A0, 10400, 10450, %
4774 10480,104B0,10500,10530,10600,10800,10840,10860,%
4775 10880,108E0,10900,10920,10980,109A0,10A00,10A60,%
4776 10A80,10AC0,10B00,10B40,10B60,10B80,10C00,10C80,%
4777 10E60,11000,11080,110D0,11100,11150,11180,111E0,%
4778 11200,11280,112B0,11300,11400,11480,11580,11600,%
4779 11660,11680,11700,118A0,11A00,11A50,11AC0,11C00,%
4780 11C70,11D00,12000,12400,12480,13000,14400,16800,%
4781 16A40,16AD0,16B00,16F00,1BC00,1BCA0,1D000,1D100,%
4782 1D200,1D300,1D360,1D400,1D800,1E000,1E800,1E900,%
4783 1EE00,1F000,1F030,1F0A0,1F300,1F600,1F650,1F680,%
4784 1F700,1F780,1F800,1F900,E0000,E0100,F0000,100000,%
4785 00C0%
4786 }\do{%
```

```
4787 \@tempcnta="\bxjx@tmpa\relax
4788 \@tempcntb\@tempcnta \advance\@tempcntb\m@ne
4789 \chardef\bxjx@tmpb\kcatcode\@tempcntb
4790 \kcatcode\@tempcnta=15 \kcatcode\@tempcntb\bxjx@tmpb}
4791 \fi
```

H.3 ギリシャ・キリル文字の扱い

 $4816 \do{03A8}{LGR}{\text{textPsi}}{\text{Psi}}$

 $4817 \do{03A9}{LGR}{\text{cmega}}{\Omega}$

 $4818 \do{03B1}{LGR}{\text{lextalpha}}{\do{03B2}{LGR}{\text{textbeta}}{\text{beta}}}{}$

 $4820 \do{03B3}{LGR}{\text{xtgamma}}{\text{gamma}}%$

「特定 CJK 曖昧文字」について、和文・欧文扱いを制御できるようにする。ここで「特定 CJK 曖昧文字」とは以下に該当する文字の集合を指す:

- Unicode と JIS X 0213 に共通して含まれるギリシャ文字・キリル文字。
- Latin-1 の上位部分と JIS X 0208 に共通して含まれる文字 (LuaT_EX-ja の定める "範囲 8")。

\bxjx@grkcyr@list 「特定 CJK 曖昧文字」に関する情報をもつ \do-リスト。各項目の形式は以下の通り: \do{\Unicode 符号値\}{\対象 fontenc\}}{\(テキスト LICR\)}{\(数式 LICR\)} ※数式で使わない文字は \(数式 LICR\) を空にする。

```
4792 \verb|\conlypreamble\bxjx@grkcyr@list|
4793 \def\bxjx@grkcyr@list{%
                                                                                                                                          % GR. C. L. ALPHA
4794 \do{0391}{LGR}{\text{L}}{A}%
4795 \do{0392}{LGR}{\text{LCR}}{\text{ExtBeta}}{B}
                                                                                                                                          % GR. C. L. BETA
4796 \do{0393}{LGR}{\text{camma}}{\text{camma}}
                                                                                                                                          % GR. C. L. GAMMA
4797 \do{0394}{LGR}{\text{\colored}} \do{0394}{LGR}{\text{\colored}} \do{0394}{\text{\colored}} \do{0
                                                                                                                                          % GR. C. L. DELTA
                                                                                                                                         % GR. C. L. EPSILON
4798 \do{0395}{LGR}{\text{cxtEpsilon}{E}}%
4799 \do{0396}{LGR}{\text{LGR}}{\text{Z}}%
                                                                                                                                        % GR. C. L. ZETA
4800 \do{0397}{LGR}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{}
                                                                                                                                         % GR. C. L. ETA
4801 \do{0398}{LGR}{\text{Theta}}
                                                                                                                                          % GR. C. L. THETA
4802 \do{0399}{LGR}{\text{textIota}{I}}%
                                                                                                                                          % GR. C. L. IOTA
4803 \do{039A}{LGR}{\text{xtKappa}}{K}%
                                                                                                                                          % GR. C. L. KAPPA
4804 \do{039B}{LGR}{\text{Lambda}}{\lambda}
                                                                                                                                          % GR. C. L. LAMDA
                                                                                                                                          % GR. C. L. MU
4805 \do{039C}{LGR}{\text{L} mu}{M}
                                                                                                                                          % GR. C. L. NU
4806 \do{039D}{LGR}{\text{N}}%
                                                                                                                                          % GR. C. L. XI
4807 \do{039E}{LGR}{\text{xtXi}}{Xi}%
4808 \do{039F}{LGR}{\text{cmicron}}{0}\%
                                                                                                                                          % GR. C. L. OMICRON
4809 \do{03A0}{LGR}{\text{textPi}}{Pi}%
                                                                                                                                          % GR. C. L. PI
                                                                                                                                          % GR. C. L. RHO
4810 \do{03A1}{LGR}{\text{textRho}}{P}%
                                                                                                                                         % GR. C. L. SIGMA
4811 \do{03A3}{LGR}{\text{xtSigma}}%
4812 \do{03A4}{LGR}{\text{textTau}}{T}%
                                                                                                                                          % GR. C. L. TAU
4813 \do{03A5}{LGR}{\text{\colored}} \ % GR. C. L. UPSILON
4814 \do{03A6}{LGR}{\text{hi}}%
                                                                                                                                          % GR. C. L. PHI
                                                                                                                                          % GR. C. L. CHI
4815 \do{03A7}{LGR}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{
```

% GR. C. L. PSI

% GR. C. L. OMEGA % GR. S. L. ALPHA

% GR. S. L. BETA % GR. S. L. GAMMA

```
4821 \do{03B4}{LGR}{\text{textdelta}}{\delta}%
                                                                                                        % GR. S. L. DELTA
4822 \do{03B5}{LGR}{\text{\conj}{\conj}}
                                                                                                        % GR. S. L. EPSILON
4823 \do{03B6}{LGR}{\text{\colored}} \do{03B6}{LGR}{\text{\colored}}
                                                                                                        % GR. S. L. ZETA
4824 \do{03B7}{LGR}{\text{c}}{\text{c}}%
                                                                                                        % GR. S. L. ETA
4825 \do{03B8}{LGR}{\text{texttheta}}{\text{theta}}
                                                                                                        % GR. S. L. THETA
                                                                                                        % GR. S. L. IOTA
4826 \do{03B9}{LGR}{\text{textiota}}{\iota}
                                                                                                        % GR. S. L. KAPPA
4827 \do{03BA}{LGR}{\text{kappa}}%
4828 \do{03BB}{LGR}{\text{lambda}}{\text{lambda}}{\text{lambda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{moda}}{\text{
                                                                                                        % GR. S. L. LAMDA
                                                                                                        % GR. S. L. MU
4829 \do{03BC}{LGR}{\text{mu}}%
                                                                                                        % GR. S. L. NU
4830 \do{03BD}{LGR}{\text{nu}}%
4831 \do{03BE}{LGR}{\text{xi}}%
                                                                                                        % GR. S. L. XI
4832 \do{03BF}{LGR}{\text{textomicron}}{0}%
                                                                                                        % GR. S. L. OMICRON
                                                                                                        % GR. S. L. PI
4833 \do{03C0}{LGR}{\text{textpi}}{\pi}
4834 \do{03C1}{LGR}{\text{textrho}}{\n}
                                                                                                        % GR. S. L. RHO
4835 \do{03C2}{LGR}{\textvarsigma}{\varsigma}% % GR. S. L. FINAL SIGMA
4836 \do{03C3}{LGR}{\text{xtsigma}}{\text{sigma}}
                                                                                                        % GR. S. L. SIGMA
4837 \do{03C4}{LGR}{\text{texttau}}{\text{tau}}%
                                                                                                        % GR. S. L. TAU
4838 \do{03C5}{LGR}{\textupsilon}{\upsilon}%
                                                                                                        % GR. S. L. UPSILON
4839 \do{03C6}{LGR}{\text{textphi}}{\phi}
                                                                                                        % GR. S. L. PHI
4840 \do{03C7}{LGR}{\text{chi}}%
                                                                                                        % GR. S. L. CHI
4841 \do{03C8}{LGR}{\text{textpsi}}{\psi}%
                                                                                                        % GR. S. L. PSI
                                                                                                        % GR. S. L. OMEGA
4842 \do{03C9}{LGR}{\text{cmega}}{\text{cmega}}%
4843 \do{0401}{T2A}{\CYRYO}{}%
                                                                                                        % CY. C. L. IO
                                                                                                        % CY. C. L. A
4844 \do{0410}{T2A}{\CYRA}{}%
                                                                                                        % CY. C. L. BE
4845 \do{0411}{T2A}{\CYRB}{}%
4846 \do{0412}{T2A}{\CYRV}{}%
                                                                                                        % CY. C. L. VE
                                                                                                        % CY. C. L. GHE
4847 \do{0413}{T2A}{\CYRG}{}%
4848 \do{0414}{T2A}{\CYRD}{}%
                                                                                                        % CY. C. L. DE
4849 \do{0415}{T2A}{\CYRE}{}%
                                                                                                        % CY. C. L. IE
                                                                                                        % CY. C. L. ZHE
4850 \do{0416}{T2A}{\CYRZH}{}%
                                                                                                        % CY. C. L. ZE
4851 \do{0417}{T2A}{\CYRZ}{}%
4852 \do{0418}{T2A}{\CYRI}{}%
                                                                                                        % CY. C. L. I
4853 \do{0419}{T2A}{\CYRISHRT}{}%
                                                                                                        % CY. C. L. SHORT I
4854 \do{041A}{T2A}{\CYRK}{}%
                                                                                                        % CY. C. L. KA
                                                                                                        % CY. C. L. EL
4855 \do{041B}{T2A}{\CYRL}{}%
                                                                                                        % CY. C. L. EM
4856 \do{041C}{T2A}{\CYRM}{}%
                                                                                                        % CY. C. L. EN
4857 \do{041D}{T2A}{\CYRN}{}%
                                                                                                        % CY. C. L. O
4858 \do{041E}{T2A}{\CYRO}{}%
4859 \do{041F}{T2A}{\CYRP}{}%
                                                                                                        % CY. C. L. PE
                                                                                                        % CY. C. L. ER
4860 \do{0420}{T2A}{\CYRR}{}%
4861 \do{0421}{T2A}{\CYRS}{}%
                                                                                                        % CY. C. L. ES
4862 \do{0422}{T2A}{\CYRT}{}%
                                                                                                        % CY. C. L. TE
                                                                                                        % CY. C. L. U
4863 \do{0423}{T2A}{\CYRU}{}%
4864 \do{0424}{T2A}{\CYRF}{}%
                                                                                                        % CY. C. L. EF
4865 \do{0425}{T2A}{\CYRH}{}%
                                                                                                        % CY. C. L. HA
4866 \do{0426}{T2A}{\CYRC}{}%
                                                                                                        % CY. C. L. TSE
4867 \do{0427}{T2A}{\CYRCH}{}%
                                                                                                        % CY. C. L. CHE
4868 \do{0428}{T2A}{\CYRSH}{}%
                                                                                                        % CY. C. L. SHA
                                                                                                        % CY. C. L. SHCHA
4869 \do{0429}{T2A}{\CYRSHCH}{}%
```

```
% CY. C. L. HARD SIGN
4870 \do{042A}{T2A}{\CYRHRDSN}{}%
4871 \do{042B}{T2A}{\CYRERY}{}%
                                                % CY. C. L. YERU
4872 \do{042C}{T2A}{\CYRSFTSN}{}%
                                                % CY. C. L. SOFT SIGN
4873 \do{042D}{T2A}{\CYREREV}{}%
                                                % CY. C. L. E
                                                % CY. C. L. YU
4874 \do{042E}{T2A}{\CYRYU}{}%
                                                % CY. C. L. YA
4875 \do{042F}{T2A}{\CYRYA}{}%
                                                % CY. S. L. A
4876 \do{0430}{T2A}{\cyra}{}%
4877 \do{0431}{T2A}{\cyrb}{}%
                                                % CY. S. L. BE
                                                % CY. S. L. VE
4878 \do{0432}{T2A}{\cyrv}{}%
                                                % CY. S. L. GHE
4879 \do{0433}{T2A}{\cyrg}{}%
                                                % CY. S. L. DE
4880 \do{0434}{T2A}{\cyrd}{}%
                                                % CY. S. L. IE
4881 \do{0435}{T2A}{\cyre}{}%
                                                % CY. S. L. ZHE
4882 \do{0436}{T2A}{\cyrzh}{}%
                                                % CY. S. L. ZE
4883 \do{0437}{T2A}{\cyrz}{}%
4884 \do{0438}{T2A}{\cyri}{}%
                                                % CY. S. L. I
4885 \do{0439}{T2A}{\cyrishrt}{}%
                                                % CY. S. L. SHORT I
                                                % CY. S. L. KA
4886 \do{043A}{T2A}{\cyrk}{}%
                                                % CY. S. L. EL
4887 \do{043B}{T2A}{\cyrl}{}%
4888 \do{043C}{T2A}{\cyrm}{}%
                                                % CY. S. L. EM
                                                % CY. S. L. EN
4889 \do{043D}{T2A}{\cyrn}{}%
4890 \do{043E}{T2A}{\cyro}{}%
                                                % CY. S. L. O
                                                % CY. S. L. PE
4891 \do{043F}{T2A}{\cyrp}{}%
4892 \do{0440}{T2A}{\cyrr}{}%
                                                % CY. S. L. ER
                                                % CY. S. L. ES
4893 \do{0441}{T2A}{\cyrs}{}%
                                                % CY. S. L. TE
4894 \do{0442}{T2A}{\cyrt}{}%
                                                % CY. S. L. U
4895 \do{0443}{T2A}{\cyru}{}%
                                                % CY. S. L. EF
4896 \do{0444}{T2A}{\cyrf}{}%
4897 \do{0445}{T2A}{\cyrh}{}%
                                                % CY. S. L. HA
4898 \do{0446}{T2A}{\cyrc}{}%
                                                % CY. S. L. TSE
                                                % CY. S. L. CHE
4899 \do{0447}{T2A}{\cyrch}{}%
                                                % CY. S. L. SHA
4900 \do{0448}{T2A}{\cyrsh}{}%
4901 \do{0449}{T2A}{\cyrshch}{}%
                                                % CY. S. L. SHCHA
                                                % CY. S. L. HARD SIGN
4902 \do{044A}{T2A}{\cyrhrdsn}{}%
4903 \do{044B}{T2A}{\cyrery}{}%
                                                % CY. S. L. YERU
                                                % CY. S. L. SOFT SIGN
4904 \do{044C}{T2A}{\cyrsftsn}{}\%
4905 \do{044D}{T2A}{\cyrerev}{}%
                                                % CY. S. L. E
                                                % CY. S. L. YU
4906 \do{044E}{T2A}{\cyryu}{}%
                                                % CY. S. L. YA
4907 \do{044F}{T2A}{\cyrya}{}%
                                                % CY. S. L. IO
4908 \do{0451}{T2A}{\cyryo}{}%
4909 \do{00A7}{TS1}{\textsction}{\textsction}% SECTION SYMBOL  
4910 \do{00A8}{TS1}{\text{textasciidieresis}}%
                                                 % DIAERESIS
4911 \do{00B0}{TS1}{\textdegree}{\mathdegree}% % DEGREE SIGN
4912 \do{00B1}{TS1}{\text{textpm}}{\pm}%
                                                % PLUS-MINUS SIGN
4913 \do{00B4}{TS1}{\text{textasciiacute}}
                                                % ACUTE ACCENT
4914 \do{00B6}{TS1}{\text{xtparagraph}}{\text{mathparagraph}}{\text{PILCROW SIGN}}
4915 \do{00D7}{TS1}{\text{texttimes}}{\text{times}}
                                                % MULTIPLICATION SIGN
4916 \do{00F7}{TS1}{\text{textdiv}}{\text{div}}%
                                                % DIVISION SIGN
4917 }
```

\mathdegree 面倒なので補っておく。

4918 \providecommand*{\mathdegree}{{}^{\circ}}

\ifbxjx@gcc@cjk 〔スイッチ〕「特定 CJK 曖昧文字」を和文扱いにするか。

4919 \newif\ifbxjx@gcc@cjk

\greekasCJK 〔公開命令〕「特定 CJK 曖昧文字」を和文扱いにする。

4920 \newcommand*\greekasCJK{%

4921 \bxjx@gcc@cjktrue}

\nogreekasCJK 〔公開命令〕「特定 CJK 曖昧文字」を欧文扱いにする。

4922 \newcommand*\nogreekasCJK{%

4923 \bxjx@gcc@cjkfalse}

\bxjx@fake@grk \bxjx@fake@grk{⟨出力文字⟩}{⟨基準文字⟩}: ラテン文字で代用される数式ギリシャ文字の出力を行う。⟨基準文字⟩ (mathchardef の制御綴)の数式クラスと数式ファミリを引き継いで、⟨出力文字⟩ (ASCII 文字トークン)の文字コードの数式文字を出力する。例えば、\Piの意味が \mathchar"7005 である場合、\bxjx@fake@grk{B}{\Pi} は \mathchar"7042を実行する。

※フォントパッケージ使用時の再定義を考慮して、〈基準文字〉が mathchardef であるかを 検査し、そうでない場合はフォールバックとして単に〈出力文字〉を実行する。

4924 \def\bxjx@tmpdo#1\relax{%

4925 \def\bxjx@fake@grk##1##2{%

 $\label{eq:condition} $$ \expandafter\bxjx@fake@grk@a\meaning##2#1\@nil{##1}{##2}}% $$$

4927 \def\bxjx@fake@grk@a##1#1##2\@nil##3##4{%

4928 \ifx\\##1\\%

4929 \bxjx@cnta##4\divide\bxjx@cnta\@cclvi

4930 \multiply\bxjx@cnta\@cclvi \advance\bxjx@cnta`##3\relax

4931 \mathchar\bxjx@cnta

4932 \else ##3\fi}

4933 }\expandafter\bxjx@tmpdo\string\mathchar\relax

■pdfT_FX・upT_FX の場合

4934 \ifnum0\if p\bxjx@engine1\fi\if u\bxjx@engine1\fi>0

• \[bxjx@KC/〈符号値〉]: その文字が「特定曖昧 CJK 文字」に該当する場合に定義済になる。

まず inputenc を読み込んで入力エンコーディングを utf8 に変更する。

※「既定 UTF-8 化」後の LATEX においても、必ず「inputenc が明示的に読み込まれた」 状態になる。

 $4935 \ensuremath{\mbox{\tt 0ifpackageloaded{inputenc}{{\tt flse}}}$

4936 \RequirePackage[utf8]{inputenc}}

 $4937 \def\bxjx@tmpa{utf8}$

 $4938 \verb|\ifx\bxjx@tmpa\inputencdoingname|$

4939 \PackageWarningNoLine\bxjx@pkgname

```
4940
     {Input encoding changed to utf8}%
4941
    \inputencoding{utf8}%
4942 \fi
   する。
4943 \if u\bxjx@engine
4944 \kcatcode"0370=15
4945 \kcatcode"0400=15
4946 \kcatcode"0500=15
4947 \fi
 各文字について \DeclareUnicodeCharacter を実行する。
4948 \def\bxjx@tmpdo#1{%
4949
    \@tempcnta="#1\relax
    \expandafter\bxjx@tmpdo@a\csname bxjx@KC/\the\@tempcnta\endcsname{#1}}
4951 \def\bxjx@tmpdo@a#1#2#3#4#5{%
 引数 = \[bxjx@KC/\(符号值\)]{\(符号值\)}{\(fontenc\)}{\(LICR\)}{\(数式 LICR\)}
   "数式中の動作"を決定する。(数式 LICR) が空(数式非対応) なら警告を出す。
    \ifx\\#5\\%
      \def\bxjx@tmpa{\@inmathwarn#4}%
4953
 〈数式 LICR〉 が英字である場合は \bxjx@fake@grk で出力する。大文字なら \Pi、小文字
 なら \pi を基準文字にする。
    \else\ifcat A\noexpand#5%
4954
4955
      \edef\bxjx@tmpa{\noexpand\bxjx@fake@grk{#5}%
       \label{limin} $$ \prod uccode^#5=^#5\neq Pi\leq noexpand\pii}i}
4956
 それ以外は〈数式 LICR〉をそのまま実行する。
    \else \def\bxjx@tmpa{#5}%
4957
4958
    \fi\fi
    \def\bxjx@tmpb{\bxjx@tmpdo@b{#1}{#2}{#3}{#4}}%
4959
    \expandafter\bxjx@tmpb\expandafter{\bxjx@tmpa}}
 以降はエンジン種別で分岐する。upTFX の場合。
4961 \if u\bxjx@engine
4962 \def\bxjx@tmpdo@b#1#2#3#4#5{%
 引数 = \[bxjx@KC/〈符号値〉]{〈符号値〉}{〈fontenc〉}{〈LICR〉}{〈数式中の動作〉}
   当該の Unicode 文字の動作は「テキストでは (LICR)、数式では (数式中の動作)」となる。
 LICR は現在エンコーディングで有効な定義がある場合はそれが実行されるはずである。(つ
 まり、現在が LGR である場合はギリシャ文字は常に欧文扱いになる。) それ以外の場合は
 LICR を \bxjx@ja@or@not に帰着させる。この際に、和文用の定義として当該の kchardef
 を使用し、その制御綴として \[bxjx@KC/...] を流用している。
    \kchardef#1=\@tempcnta
```

\DeclareUnicodeCharacter{#2}{\TextOrMath{#4}{#5}}}

4965

pdfTFX の場合も処理はほとんど同じ。ただし、和文用の定義として \UTF{(符号値)}を使う (\UTF は bxcjkjatype の命令)。\[bxjx@KC/...] は使わないが定義済にする必要がある。

- 4966 \else\if p\bxjx@engine
- $4967 \def\bxjx@tmpdo@b#1#2#3#4#5{%}$
- 4968 \mathchardef#1=\@tempcnta
- \DeclareTextCommandDefault{#4}{\bxjx@ja@or@not{\UTF{#2}}{#3}{#4}}% 4969
- 4970 \DeclareUnicodeCharacter{#2}{\TextOrMath{#4}{#5}}}
- 4971 \fi\fi

以上の処理を「特定 CJK 曖昧文字」の各々に適用する。

4972 \let\do\bxjx@tmpdo \bxjx@grkcyr@list

\bxjx@DeclareUnicodeCharacter \bxjx@DeclareUnicodeCharacter を改変して、「特定 CJK 曖昧文字」の場合に再定義を 抑止したもの。

- 4973 \@onlypreamble\bxjx@org@DeclareUnicodeCharacter
- 4974 \let\bxjx@org@DeclareUnicodeCharacter\DeclareUnicodeCharacter
- $4975 \verb|\colored]{Conlypreamble\bxjx@DeclareUnicodeCharacter}$
- 4976 \def\bxjx@DeclareUnicodeCharacter#1#2{%
- \count@="#1\relax 4977
- \expandafter\ifx\csname bxjx@KC/\the\count@\endcsname\relax 4978
- \bxjx@org@DeclareUnicodeCharacter{#1}{#2}% 4979
- 4980 \else
- 4981 \wlog{\space\space skipped defining Unicode char U+#1}%
- 4982 \fi}

\bxjx@ja@or@not \bxjx@ja@or@not{(和文用定義)}{(対象 fontenc)}{(LICR)}: \[no]greekasCJK の状態 に応じて和文または欧文で文字を出力する。

4983 \def\bxjx@ja@or@not#1#2#3{%

\greekasCJK の場合は、無条件に 〈和文用定義〉 を実行する。

4984 \ifbxjx@gcc@cjk #1%

\nogreekasCJK の場合は、対象のエンコーディングに変更して LICR を実行するが、その エンコーディングが未定義の場合は(フォールバックとして)和文用定義を使う。

- \else\expandafter\ifx\csname T@#2\endcsname\relax #1%
- \else \UseTextSymbol{#2}{#3}% 4986
- 4987 \fi\fi}

\DeclareFontEncoding@ \DeclareFontEncoding@ にパッチを当てて、\DeclareFontEncoding の実行中だけ改変 後の \DeclareUnicodeCharacter が使われるようにする。

- 4988 \begingroup
- 4989 \toks@\expandafter{\DeclareFontEncoding@{#1}{#2}{#3}}
- $4990 \t {\ensuremath{\tt def}\tt noexpand\ensuremath{\tt DeclareFontEncoding0\#1\#2\#$3{\%}}$
- \noexpand\bxjx@swap@DUC@cmd 4991
- 4992 \the\toks@
- \noexpand\bxjx@swap@DUC@cmd}} 4993
- 4994 \endgroup\next
- 4995 \def\bxjx@swap@DUC@cmd{%
- \let\bxjx@tmpa\DeclareUnicodeCharacter

```
\let\DeclareUnicodeCharacter\bxjx@DeclareUnicodeCharacter
4997
4998
             \let\bxjx@DeclareUnicodeCharacter\bxjx@tmpa
             \let\bxjx@tmpa\relax}
4999
        以上。
    ■X<sub>7</sub>T<sub>F</sub>X・LuaT<sub>F</sub>X の場合
5000 \else\ifnum0\if x\bxjx@engine1\fi\if 1\bxjx@engine1\fi>0
        各文字について、数式中の動作を定義する。
5001 \def\bxjx@tmpdo#1{%
             \bxjx@cnta="#1\relax
            \begingroup
5003
5004
                  \lccode`~=\bxjx@cnta
           \lowercase{\endgroup
5005
5006
                  \bxjx@tmpdo@a{~}}{#1}}
5007 \def\bxjx@tmpdo@a#1#2#3#4#5{%
    〈数式 LICR〉が空なら何もしない。空でない場合、upIATFX の場合と同じ方法で"数式中の
    動作"を決定し、当該の文字を math active にしてその動作を設定する。
            \ifx\\#5\\\let\bxjx@tmpa\relax
5008
5009
             \else\ifcat A\noexpand#5%
                  \edef\bxjx@tmpa{\noexpand\bxjx@fake@grk{#5}%
5010
5011
                       {\inv (\inv (\in
             \else \def\bxjx@tmpa{#5}%
            \fi\fi
5013
             \ifx\bxjx@tmpa\relax\else
5014
                  \mathcode\bxjx@cnta"8000 \let#1\bxjx@tmpa
5015
             \fi}
5016
    「Unicode な数式」の設定が行われているかを(簡易的に)検査して、そうでない場合にの
    み、以上の処理を「特定 CJK 曖昧文字」の各々に適用する。
5017 \mathchardef\bxjx@tmpa="119
5018 \ \lifx\bxjx@tmpa\pi \let\do\bxjx@tmpdo \bxjx@grkcyr@list \fi
        次に、テキストにおいて「特定 CJK 曖昧文字」の扱いが \[no]greekasCJK で切り替わる
    ようにする。
        LuaTFX の場合は、LuaTFX-ja の jacharrange の設定を変更する。
    ※ "範囲 2" がギリシャ・キリル文字、"範囲 8" が Latin-1 の記号。
5019 \if 1\bxjx@engine
5020
            \protected\def\greekasCJK{%
5021
                  \bxjx@gcc@cjktrue
                  \ltjsetparameter{jacharrange={+2, +8}}}
5022
```

XHTEX の場合、xeCJK は XHTEX の文字クラス定義を参照しているので、対象文字の文字クラスを変更する。

\protected\def\nogreekasCJK{%

\ltjsetparameter{jacharrange={-2, -8}}}

\bxjx@gcc@cjkfalse

5023 5024

5025 5026 \fi

```
5027 \if x\bxjx@engine
      \let\bxjx@gcc@cjk@list\@empty
5028
5029
      \def\do#1#2#3#4{%
        \edef\bxjx@gcc@cjk@list{\bxjx@gcc@cjk@list
5030
          \noexpand\XeTeXcharclass"#1\bxjx@cnta}}
5031
      \bxjx@grkcyr@list
5032
      \protected\def\greekasCJK{%
5033
5034
        \bxjx@gcc@cjktrue
        \bxjx@cnta=\@ne \bxjx@gcc@cjk@list}
5035
      \protected\def\nogreekasCJK{%
5036
        \bxjx@gcc@cjkfalse
5037
        \bxjx@cnta=\z@ \bxjx@gcc@cjk@list}
5038
5039 \fi
    以上。
5040 \fi\fi
```

H.4 初期設定

「特定 CJK 曖昧文字」を欧文扱いにする。

 $5041 \verb|\nogreekasCJK|$

H.5 完了

おしまい。 5042 %</cjkcat>

付録 I 補助パッケージ:bxjspandoc 🥞

%テンプレートの T_{EX} コードより前に読み込む必要があるため、専ら文書クラス内での読込に限られる。

I.1 準備

5043 %<*ancpandoc>
5044 %% このファイルは日本語文字を含みます.
5045 \def\bxjsp@pkgname{bxjscjkcat}
\bxjsp@engine エンジンの種別。
5046 \let\bxjsp@engine=n

5046 \let\bxjsp@engine=n 5047 \@onlypreamble\bxjsp@do 5048 \def\bxjsp@do#1#2{% 5049 \edef\bxjsp@tmpa{\string#1}%

```
5050 \edef\bxjsp@tmpb{\meaning#1}%

5051 \ifx\bxjsp@tmpa\bxjsp@tmpb #2\fi}

5052 \bxjsp@do\kanjiskip{\let\bxjsp@engine=j}

5053 \bxjsp@do\XeTeXversion{\let\bxjsp@engine=x}

5054 \bxjsp@do\pdftexversion{\let\bxjsp@engine=p}

5055 \bxjsp@do\luatexversion{\let\bxjsp@engine=1}
```

I.2 パッケージオプション

english オプションが指定されている場合、\ldots の調整を抑止する。

※つまり、「グローバルの english オプション」が指定されている場合も抑止の対象になる。BXJS クラスの英語モードを想定しているが、それ以外の場合でも、一般的な $I = T_E = T_E$

```
5056 \newif\ifbxjsp@english
5057 \DeclareOption{english}{\bxjsp@englishtrue}
オプション定義はおしまい。
5058 \ProcessOptions*
```

I.3 パッケージ読込の阻止

\pandocSkipLoadFile \pandocSkipLoadFile{⟨ファイル名⟩}: 特定のファイルを(\@filewithoptions の処理に関して)読込済であるとマークする。

```
5059 \@onlypreamble\pandocSkipLoadFile
5060 \newcommand*\pandocSkipLoadFile[1]{%
5061 \expandafter\bxjsp@skip@load@file@a\csname ver@#1\endcsname{#1}}
5062 \def\bxjsp@skip@load@file@a#1#2{%
5063 \ifx#1\relax
5064 \def#1{2001/01/01}%
5065 \PackageInfo\bxjsp@pkgname
5066 {File '#2' marked as loaded\@gobble}%
5067 \fi}
```

\pandocSkipLoadPackage \pandocSkipLoadPackage{⟨パッケージ名⟩}: \pandocSkipLoadFile の機能を用いて パッケージの読込を阻止する。

```
5068 \@onlypreamble\pandocSkipLoadPackage
5069 \newcommand*\pandocSkipLoadPackage[1]{%
5070 \pandocSkipLoadFile{#1.sty}}
```

I.4 fixltx2e パッケージ

テンプレートでは fixltx2e パッケージを読み込むが、最近(2015 年版以降)の \LaTeX ではこれで警告が出る。これを抑止する。

IATeX カーネルが新しい場合は fixltx2e を読込済にする。

5071 \ifx\@IncludeInRelease\@undefined\else 5072 \pandocSkipLoadPackage{fixltx2e} 5073 \fi

1.5 cmap パッケージ

エンジンが (u)pIATEX のときに cmap パッケージが読み込まれるのを阻止する。(実際は警告が出るだけで無害であるが。)

5074 \if j\bxjsp@engine $5075 \quad \parbox{$>$ 075$ \parbox{$>$ 076$ \fi}$

I.6 microtype パッケージ

警告が多すぎなので消す。

5077 \if j\bxjsp@engine \else 5078 \PassOptionsToPackage{verbose=silent}{microtype}

エンジンが $(u)pIAT_EX$ のときに microtype パッケージが読み込まれるのを阻止し、さらにテンプレートで使われている命令を通すためにダミーの定義を行う。

※昔は standard ドライバでこの処理を行っていたが、元来は Pandoc 用の処理なので、1.5 版で pandoc に移動。

5080 \if j\bxjsp@engine
5081 \pandocSkipLoadPackage{microtype}
5082 \newcommand*\UseMicrotypeSet[2][]{}

5083 \fi

5079 \fi

I.7 Unicode 文字変換対策

Pandoc で LATEX 形式に書き出す場合は、元データ中の一部の Unicode 文字を「LATEX の表記」に置き換える。その中には日本語文書で問題になるものが含まれる。

 $\cdots \rightarrow \texttt{\ ldots\{\}} \quad `\rightarrow` \quad '\rightarrow' \quad "\rightarrow` \quad "\rightarrow' \, '$

日本語 \LaTeX では「 \LaTeX の表記」は欧文扱い、Unicode 文字は和文扱いとして使い分ける 習慣があるので、このような置換が行われるのは好ましくない。

これらの置換のうち、後の 4 つは Pandoc の --no-tex-ligatures オプションを指定すれば抑止できるが、「…」の置換を抑止する機能はないようである。そこで、「\ldots を『…』に戻す」という処置を行う。

\pandocLdots Pandoc用の \ldots の実装。非数式である場合は代わりに … を実行する。

※以前は「Pandoc が必ず \ldots{} の形で書き出す」ことを利用して後続に {} があるかで「元が … であるか」を判断していた。ところが、Pandoc 2.7 版で {} を必ずしも付けなくなったため、1.9f 版で非数式の \ldots を全て … に戻す動作に変更した。

```
5084 \verb|\DeclareRobustCommand{\pandocLdots}{\cite{Model}} 
5085
      \relax\ifmmode \expandafter\bxjsp@org@ldots
5086
      \else \expandafter\bxjsp@ja@ellipsis
      \fi}
5087
5088 \def\bxjsp@ja@ellipsis{\...}
5089 \let\bxjsp@org@ldots\ldots
   \ldots の実装を置き換える。
 ※ Benglish オプション指定時は置き換えない。
5090 \AtBeginDocument{%
      \let\bxjsp@org@ldots\ldots
5091
      \ifbxjsp@english\else \let\ldots\pandocLdots \fi}
5092
```

\ldots の直後の文字が非英字の場合、Pandoc は「\ldots。」のように空白を入れずに並べて出力する。「Pandoc は非英字と見なすが $X_{\overline{q}}$ TeX · LuaTeX は英字と見なす(または将来その可能性がある)」文字で、特に日本語文書に現れるものについて、非英字扱いにしておく。

※ Pandoc は「Unicode 7.0 で GC が Letter」な文字を英字と判定している。

```
5093 \chardef\bxjsp@cc@other=12
5094 \@onlypreamble\bxjsp@makeother@range
5095 \def\bxjsp@makeother@range#1#2{%
      \@tempcnta"#1\relax \@tempcntb"#2\relax
5096
      \loop\ifnum\@tempcnta<\@tempcntb</pre>
5097
        \catcode\@tempcnta\bxjsp@cc@other
5098
        \advance\@tempcnta\@ne
5099
      \repeat}
5100
5101 \ifnum0\if x\bxjsp@engine1\fi\if 1\bxjsp@engine1\fi>0
      \catcode"1F23B=\bxjsp@cc@other
5102
5103
      \bxjsp@makeother@range{9FCD}{A000}
      \bxjsp@makeother@range{1B002}{1B170}
5104
      \bxjsp@makeother@range{2B820}{2EBF0}
5106 \fi
```

I.8 PandoLa モジュール

```
インストール済であれば読み込む。
```

```
5107 \IffileExists{bxpandola.sty}{%
5108 \RequirePackage{bxpandola}\relax
5109 \PackageInfo\bxjsp@pkgname
5110 {PandoLa module is loaded\@gobble}
5111 }{}
```

1.9 完了

おしまい。

5112 %</ancpandoc>

補助パッケージ実装はここまで。 **%</anc>**